

埼玉県立史跡の博物館紀要

第5号

Contents

「土器にみる縄文人の思考」を考える	鈴木敏昭
コラム1 「さきたま」の地名由来	
縄文時代の屋内調理と貯蔵穴	中村倉司
－埋甕炉そして埋甕とCピットの用途－	
埼玉古墳群の埴輪編年	城倉正祥
コラム2 埼玉古墳群の墓主	
緑泥片岩を用いた横穴式石室の構築	栗島義明
－緑泥片岩の来歴と石室構築技術について－	
平成21年度 埼玉古墳群周辺の確認調査報告	佐藤康二
鉄砲山古墳の中レーダ探査実験について	
佐藤源之・横田裕也・西口正純・末木啓介	
国宝金錯銘鉄剣の貸出と最新分析	野中 仁・田中英司
史跡整備と考古学II	
井上尚明	
コラム3 埼玉古墳群を支える地域	
板碑造立過程の検証	加藤光男

は じ め に

「さきたま」・「嵐山」の二つの「史跡の博物館」は、より質の高いサービスと効率的な運営を目指した再編整備によってスタートしてから、5年の歳月が過ぎました。

「さきたま」は埼玉古墳群、「嵐山」は菅谷館跡を擁する埼玉を代表する国指定史跡を背景にして、過去の実績も踏まえながら、新たな博物館づくりをめざして様々な事業を展開しております。

本年度も「さきたま史跡の博物館」においては企画展「祈りとまじないの考古学」、最新出土品展「地中からのメッセージ」、通史展「埼玉あの遺跡、この遺跡」などを開催し、企画展示室の活用と観覧に努力しております。更に、埼玉古墳群の保存整備、さきたま体験工房の運営や県民に対する体験学習事業・さきたま講座・史跡探訪などの事業を実施しています。

一方、嵐山史跡の博物館では企画展「中世の館と城」、巡回展「比企のタイムカプセル」、ロビー展「山口渡彫刻展」など、県指定文化財などの特別公開、及び歴史講座・野外歴史教室などの事業を実施しております。

本誌は、職員が日ごろの調査研究活動を踏まえ、自己研鑽を努めた成果を発表したものです。本誌が各地の博物館・図書館等で広く活用され、皆様が史跡や考古・歴史資料に関する理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査や執筆にあたり御協力いただいた方々に対し深く感謝を申し上げると共に、今後ともより一層の御支援と御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年3月

埼玉県立史跡の博物館長

鈴木 敏昭

埼玉県立史跡の博物館紀要

第 5 号

目 次

「土器にみる縄文人の思考」を考える	鈴木敏昭 (1)
コラム 1 「さきたま」の地名由来 (26)	
縄文時代の屋内調理と貯蔵穴	
—埋甕炉そして埋甕とCピットの用途—	中村倉司 (27)
埼玉古墳群の埴輪編年	城倉正祥 (57)
コラム 2 埼玉古墳群の墓主 (92)	
緑泥片岩を用いた横穴式石室の構築	
—緑泥片岩の来歴と石室構築技術について—	栗島義明 (93)
平成21年度 埼玉古墳群周辺の確認調査報告	佐藤康二 (115)
鉄砲山古墳の中レーダ探査実験について	
.....	佐藤源之・横田裕也・西口正純・末木啓介 (123)
国宝金錯銘鉄剣の貸出と最新分析	野中仁・田中英司 (131)
史跡整備と考古学II	井上尚明 (139)
コラム 3 埼玉古墳群を支える地域 (149)	
板碑造立過程の検証	加藤光男 (151)

「土器にみる縄文人の思考」を考える

鈴木 敏昭

はじめに

本稿では、縄文土器を作り使った人々を縄文人と呼ぶ。もちろん「縄文土器」も「縄文人」も我々の研究上の都合による仮称であり、概念である。しかし、実在した土器、実在した人々を前提にイメージ化された概念ではあるが、当時の人々に共有されていたイメージである保証は全くない。むしろ、こうした概念を使う以上、いかに彼らの思考に近づくことができているかが我々に問われていると考えるべきであろう。忸怩たる思いもあるが、自分なりの課題解決に向けた歩みの一端を披露し、識者の教示を得たいものと念願する。

また筆者は、「考古学は歴史学の一分野である」とする定義を、ひとまず棚上げすることにしている点も、ここでお断りしておきたい。もっぱらの関心事は生命体、わけても人間が生み出すものの構造に捕らわれているせいかも知れない。時間・空間を超越して語れるものを希求する研究は、ある意味「人間学」とでも称すべきなのだろうか、とも思う。しかし、考古学で扱える分野は実に狭い。かつて生きた人々の残滓を精力的にかき集めたとしても、それは当時の生活の何パーセントにも当たるまい。おそらくパーセントと表示すること自体不可能な程小さな数値になることは間違いないだろう。我々はそこから何を導き出すことが可能だと言うのだろうか。

I

我々の考古学は、とりあえず混沌とした残滓に秩序を与えることを選択した。そしてその秩序とは列島全域にわたる土器による編年網の作成であり、その網目の中にあらゆる文化細目をはめ込むことであった。より精緻な網の目が作れれば、より細かな生活と文化の変遷が語れると信じたのである。こうして当時の暮らしの一挙手一投足までが明らかにされるはずであった。

しかし、「とりあえず」出発した土器による編年研究は、「より精緻に」とのかけ声を背景に、終わりの見えない細分合戦に足を取られ始めた。細分に組みしない人間は「負け犬」とさえ陰口を叩かれながら……。

だが、細分合戦に使われている「土器型式」とはいったい何者なのだろうか。

もちろん、その出発の経緯、目的を考えれば、第一義的には年代学上の単位を意味するはずである。しかし、土器を製作・使用したのは当時の人間であるという、ある意味での「正しい」観点から、いつしか「土器型式の背後には人間（＝当時の人間）が存在する」という論理の飛躍が流布するとともに、集落論や人口論、移動論などのキー概念として大手を振るうに至っている。こうした現況には首を傾げざるを得ない。研究目的に沿った相応の概念、方法論の整備を願いたいものである。

そもそも現行の土器型式とは、現代の研究者が、実在する混沌とした土器群を、出土状況や製作上の癖、文様等、様々な特徴等で分析・分類し、〈編年〉をキーワードに秩序正しく概念化したものであり、すでに実在の土器群とは認識階層が異なったものである。土器型式の背後に存在している

のは現代の研究者にすぎない、という点を承知する必要があるのではないだろうか。

課題解決のための手段として概念が指定されるのだとすれば、編年網を作ろうという研究者の目的意識に基づく「土器型式」は、すぐれて現代的な産物と言える。そこには縄文人の思考に忖度する必然性は認められない。編年網を作るだけなら、必ずしも完形土器が必要なわけではなく、破片でも十分に役割を果たすことができるるのである。もちろん現実に実績をあげてもきている。

完形土器が要請されるのは、編年という目的のためではない。「完形」でなければならない研究目的があつてはじめて要請されるのである。本稿で語ろうとする、土器から縄文人の思考を読みとろうとする研究も、その一つに当たるだろう。

我々が、ここでなすべきことは、その時々の縄文人たちが、どのような思いで土器を作ったのか、彼らの思惟、宇宙観は果たして、彼らの製作物にどのように刻み込まれているのかを具体的に明らかにすることにあるのではないだろうか。時空を超えて不易なるもの、そして次々と変化を重ねる流行の本質とは……。我々の分析は何を明らかにするのだろうか。縄文人と現代人との接点を見いだすことができれば幸いである。

II—1

我々は縄文土器を前に、なぜこんな使いづらい形にしたのだろう、なぜこんなに文様を所狭しと執拗に施したのだろう、と戸惑うことがしばしばある。この戸惑いは、現実を合理的に解釈しようとする現代人の癖に起因する。素直に縄文人の思考を受け入れることが先ず必要となろう。縄文土器とは、縄文人により機能と象徴性が織り込まれた手作りの器である。我々はそこから彼らの思考の何たるかを知る努力をしなければなるまい。その努力は、彼らの社会、世界観の一部なりをきっと垣間見せてくれることになるはずなのだから。

そのためにも、先ず個々の縄文土器を偏見なしにそのまま受け入れることが大事な要件となる。そしてそこから、どのようにして立体物として仕立てあげられてきたのか、器面上へはどのような文様をどのように配置をしたのか、文様と文様の関係性はどうなっているのか等の詳細なパターン分析を経ることによって、個々の土器を貫く〈基本原理一分類・論理体系一世界観〉が必ずや見えてくるものと信じている。

その際、筆者は、器面上における文様配置の関係性を探るため、〈分帶〉〈分割〉を分析の基軸に据えてきた。

〈分帶〉とは、言うまでもなく、器面上の施文域を帯状に、口縁部から底部等へといく段かに輪切り状に分けることを意味する。いわゆる文様帶概念に近似するが、そこに系統論乃至文様発達史といった進化論的観点を含むことはせず、あくまでも分析概念として即物的に扱われるべきと考える。

〈分割〉についても〈分帶〉同様、器面の施文域を縦位にいくつかに分けることを意味し、分析概念以上の役割は持たせていない。ただし、この分割ラインが器面全体を統御しているか、一施文帯レベルにとどまっているのかは、施文原理上大きな意味を持つはずである。

ところで、分帶された施文帯にはいくつかの単位文様が1～数個繰り返し施文される（変形・変容もある）ことを原則としているが、こうした文様相互の〈関係性〉を理解するための道具の一つとして〈対称〉概念はとりわけ重要である。しかし、対称とは必ずしも左右対称のことだけを意味

するわけではない点にはここで注意を喚起しておきたい。対称性があるとは、ある形などが、ある操作をしても、その前と形などが変わらないことを言い、その操作には「鏡映（鏡面に映す）」「回転」「反転」「並進」などがある。さらにこれらが組み合わさった、より複雑な操作もあるが、本稿で触れる事はない。しかし、対称性をキーワードとした分析の先には、遙かではあるが「縄文人の思考」とも言うべき高峰への足掛かりが得られるのではないかとの期待がある。

II—2

上記の問題意識のもとに筆者は、関東地方出土の勝坂式から加曾利EIV式比定のいくつかの土器分析を試みたことがある（鈴木1983）。その結果、製作者の〈施文意識〉は、個々人というレベルにおさまるものではなく、明らかに彼らは、彼らの共有する施文原理に基づいて採択された文様を器面に配置（配列）していたのである。しかもそうした原理は、我々が認識する土器型式圏を遙かに超えて実践されていた可能性も窺うことができたのであった。

施文意識に係る具体的な内容は、次の三点に要約することができよう。

- ① 土器には、一定方向からの視線を意識して、全体的な文様の配置関係が決定されていた可能性があるが、このことは土器の正面観とも関係してこよう。
- ② 同一の単位文様は並進対称性を有するかのごとく土器面を一周するが、際限なく円環を巡ることは拒否されている。
- ③ 土器面の文様は複数単位に分割されているが、偶数単位の場合にあっては、相対する面の文様は意識的に違える傾向にある。

以上をさらにまとめれば、縄文中期人は、鏡映、回転、反転、並進などの対称操作に対しても必ずどこかで一部違える、つまり彼らは「対称性を破る」という施文上の基本原理に忠実に従っていたと言い得るのである。今や、対称性の破り方のパターンのいくつかは我々も習得することができている。しかし、個々の土器には、まだまだ二重、三重の重畠等によって隠されている施文パターンが多く存する。〈対称性の破れ〉という施文上の基本原理の発見は、縄文土器研究のほんの入り口に過ぎないかのようである。

先ず旧稿にしたがい中期土器から分析を進めたい。なお、出土遺跡名は図版に直接明記したので参照いただければ幸いである（以下同）。

事例1（第1図3）：4単位構成の土器。

胴上半部に区画された施文帶には、その中央部分に一条の隆帯が一周し、器面をほぼ等間隔に分割するかの如く、4つの半渦状文が配されている。1つは上向き、他の3つは下向きという具合である。仮に、例外なく4つとも全て下向きであれば、土器の中心軸に沿って4回回転軸という対称操作の土器ということになるはずであった。分かりやすく言えば、90度回転しても何ら変わらず、90度の整数倍回転させても区別できない〈対称性を有する〉土器になるはずであった、ということである。しかし、1ヶ所の変形は、明らかに回転対称の破れを外示する。記号で表せば〈a+a+a+a 1〉ということになろう。だがこの土器はさらに、相対する部分同士の対称性（180度の回転操作）をも破ることが目論まれていたのである。むしろ、こちらの方が本質かも知れない。つまり、この土器は2単位分割を原則とする土器なのであった。2個一対を1単位と見なせば、必然的に2単位分割の土器となる訳であるが、実際にはどこに分割軸があるのかについては即断し得ない。正

面觀と不可分の関係にあるはずであると想定しておく以外にない。しかしながら本例に限れば、2単位分割の軸がどこにあろうとも、相対する面は必ず非対称になるように計画的に施文配置されていましたと指摘することができる。記号化すれば $\langle (a+a)+(a+a_1) \rangle$ となる。こうした例が、おそらく最も単純な施文パターンであろう。そのためか、施文原理がより純粹なかたちで表れていたようである。

事例2（第1図2）：3単位構成の土器。

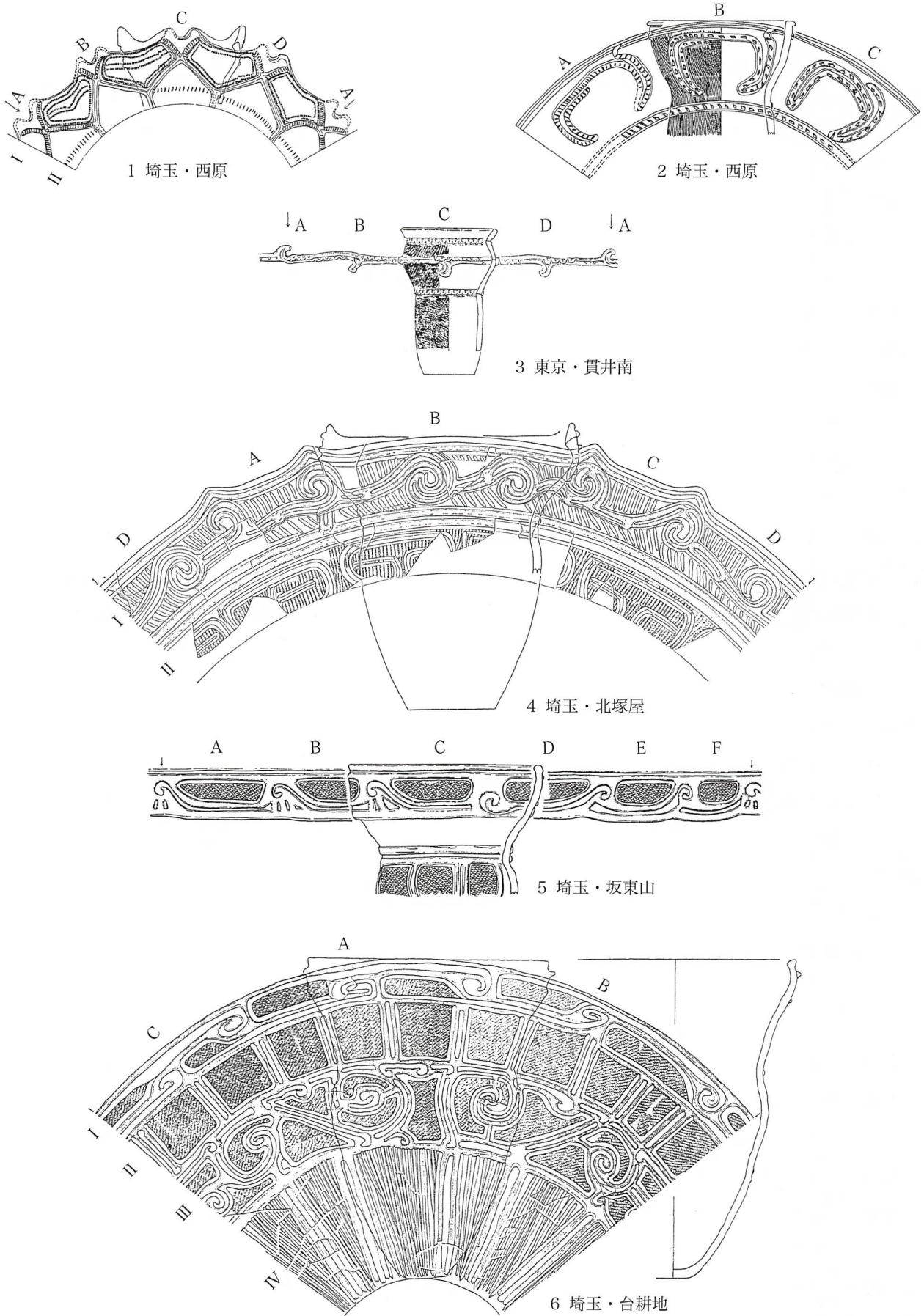
胴上半部に画された施文帶には、大柄な隆帯文がほぼ等間隔に3単位配される（A・B・Cと仮称）。この3つの単位文様は良く似ており、一見120度の整数倍回転できっちりと重なる土器かと見誤る程である。だが子細に観察するといくつかの〈破れ〉を見いだすことができる。先ず隆帯そのものに目をやれば、AとBはそれぞれが口唇部に連接し、文様の中央部分で終端を迎える。しかし、Cは口唇部に連接することもなく、終端も右方向に大きく延びている。記号化すると $\langle a+a+a_1 \rangle$ となる。さらに隆帶上への刺突に注目すると、Aのみが他のB・Cと異なっていることに気付く。記号化すると $\langle b_1+b+b \rangle$ 。つまり対称性を破る部分を1ヶ所ずつ二重にずらした結果、A、B、Cそれがすべて異なる文様と化したのである。記号化すると $\langle a\ b\ 1+a\ b+a\ 1\ b \rangle$ となる。こうした3分割された土器には、そもそも相対する面に対比すべき文様が来ることはない。しかしそうした中で、Bの存在は、A・Cそれぞれの文様要素を取り込んだ文様としての位置付けが可能であり、A対Cという非対称なものの対立を調停する役割を担っていたかのようである。おそらくBが正面として、この土器の施文原理を主導していたのである。

事例3（第1図1）：4単位の波状口縁を持つ土器。

波頂部をA～Dと仮称するとともに、波頂間の、隆帯で逆五角形に区画された部分をI施文帶、波頂下の正五角形の部分をII施文帶と仮称して説明の便を図りたい。先ず目につく部分としては、I施文帶ではA—C間の枠内には施文があり、C—A間には無いという非対称的なあり方であろう。 $\langle (a+a)+(a_1+a_1) \rangle$ 。しかも、II施文帶にも目を移せば、Bの縦ライン下に当たる枠内は無文、Dラインに当たる部分は施文あり、という逆転したあり方となっており注目されよう。大きくA—Cラインでの2分割が意図されていたことは確実であろう。しかし一方で、II施文帶のあり方にこだわれば、Bのライン下の枠内無文は回転対称を破る箇所としての位置づけがなされる（ $\langle b+b_1+b+b \rangle$ ）が、4単位の場合は二重に破る箇所を用意しない限り、相対する部分との違いを明示できなくなる。そのために用意された破れが、Aのライン下の隆帯への刻列だと考えられる（ $\langle c\ 1+c+c+c \rangle$ ）。II施文帶をまとめれば $\langle b\ c\ 1+b\ 1\ c+b\ c+b\ c \rangle$ となり、これで相対する面はすべて「平等」に異なることになった訳である。しかしこのことは、I施文帶における2分割ラインは固定化されているにも関わらず、II施文帶での分割ラインは自在であるということを意味するが、果たしてその理由は那辺にあるのだろうか。

事例4（第1図4）：2個一対の山形小突起を相対する位置に有する土器。

頸部により口縁部（I）と胴部（II）に文様帶が分帯される。I施文帶には隆帯による尾の伸びた渦文が相連接しながら器面を一周する。その際の渦文は山形小突起同様2個一対を原則に4単位



第1図 土器展開図（中期）

配されており、それぞれをA～Dと仮称する。口唇部の山形小突起は渦文のうちの渦巻き部上に配されるが、それは相対するAとCに限定し、B・Cに設けられることはない。しかし、AからCへと180度回転したとしても重なることはない。何故なら、小突起下の渦は左巻きを原則としているにも関わらず、Cの右手の渦は右巻きに変じているからである。同様に突起下以外は右巻きを原則としているが、Dの左手のみ左巻きになっている。さらに渦文上に付加される「隆起瘤」に注目すれば、渦巻き部ではCの左右両者にのみ存在し、一方、渦巻きから伸びる尾部上ではDの2ヶ所のみが省略となっていることに気付く。まさに対称性の破れが明示されているのであった。A・BとC・Dとの非対称性は明らかであろう。なお、Aの右手の渦巻き下に、頸部の隆帯へと連接する箇所が例外のように設けられているが、これも円環を断ち切る意味合いが隠されているのかも知れない。しかし、I施文帯で明らかとなった分割ラインが、II施文帯に影響を及ぼすことはないようだ。欠損部が多く確実なことは言えないが、器面に巡らされる単位文様が5単位という点は、I施文帯との整合性を欠いている一つの証拠であろう。ただしAの左手突起の縦ライン上に位置する部分のみ、文様を他の部分と違えているように見えるが、もしそうであれば、やはり回転対称を断ち切る部分がここにも存在していると言えるのかも知れない。

事例5（第1図5）：加曾利E式土器の最もポピュラーな器形と文様構成を有する土器。

口辺部の施文帯には縄文充填の橢円柱状文とそれを抱え込むように配された渦文とが組み合って、器面を6単位で経巡っている（A～Fと仮称）。しかし本例もこれまで見てきた土器同様、渦の巻き方に着目すると、A・B・Cの単位が抱える渦は左巻き、D・E・Fは右巻きとなっている。やはり器面の2分割を意図していたのである。そのための施文上のゆがみ（原則左巻きを右巻きに変更したために生じる必然的なゆがみ）はDとFが引き受けざるを得なかった。つまり、Dでは二つの渦文の尾部を連接することで方向チェンジをし、Fでは本来あるべき渦文の渦を省略することで元へと戻したのである。記号化すれば〈(a+a+a)+(a1+a2+a3)〉となるか。もちろん相対するAとD、BとE、CとFの関係は、それぞれが似て非なる文様となるよう計画的に構成されていたと言えよう。なお、口辺部の施文帯と胴部の施文帯との関わりについては不詳とせざるを得ないが、分割ラインを等しくしているように図からは読み取れない。東京・平山橋遺跡、同・西野遺跡、埼玉・金掘沢遺跡、同・ハケ遺跡C地区からも類似した施文構造の土器が出土している。

事例6（第1図6）：本例はI～IVに施文帯が分けられるが、相互の関係性が窺われる類。

I施文帯は、渦文と縄文充填柱状文とが交互に配置されているように見える。しかし、渦文の尾はそのまま柱状文を包み込んで一体化しているのである。しかも、上からの渦文（右巻き）、下からの渦文（左巻き）が、交互に二分の一ずつ譲り合いながら横位に配置されているのである。渦文だけを数えれば「6」、柱状文だけを数えても「6」と明示されるが、実態は、上からの渦文を基準としても、下からの渦文を基準としても、3回回転軸という対称操作の土器である、ということになる（上からの渦文を基準にA～Cと仮称）。120度回転で常に重なる文様ということである。したがってI施文帯には破れがない。だが相対する部分に対応すべき単位文様を配置することの叶わない3単位構成であるという事実は残る。記号では〈a+a+a〉となる。

ところが、III施文帯は明らかに2単位構成をとる。細部の相違はともかく、横位のS字状文と逆S字状文が、大きく「鏡映対称」の関係にあるように図からは読み取れよう。しかしこれは、あくまで紙という平面に描かれた展開図上での観察に過ぎない。土器という円環上に戻してみると、概ね180度の回転操作をする箇所に配置されている文様であるということになる。ただしこれらの文様が正しく重なることはなく、非対称の関係になる。横S字状文間の枠状部分にも、一方は充填縄文のみ、相対する面になるもう一方には渦文が付加されるという違いがあるが、大枠では**(b + b 1)**で良いであろう。

また、本例の施文の起点であるが、おそらくAの右の渦文直下ではないかと考えられる。II施文帯、III施文帯、そしてIV施文帯へと至る縦ラインが、ここのみ明確なのはそうした理由であろう。なお、II施文帯は10（3+3+4）単位に分割されている。IV施文帯は、隆帯垂下の起点が横S字状文とIII、IVを分帶する隆帯との接点であることから6本垂下が予測されるが、結果的には1本省略の5本垂下であった。ここでも対称性は破られていると見るべきなのだろうか。

いずれにしろ単位数は上から順に「3→10→2→5」となっているが、外示的にはI施文帯の3とIII施文帯の2が、本例の施文構造を端的に表していると見なせそうである。

II—3

筆者は、勝坂式及び加曾利E式土器の施文上の基本原理は〈対称性の破れ〉であると主張してきた。上記の事例分析からもそのことは首肯されるものと考えるが、果たしてそれだけなのだろうかとする疑念もまた脳裏を去らない。

「破る」とはどういうことなのだろうか。「破る」だけなのだろうか。回転対称を1ヶ所で破る（単位文様の反復施文による器面一周を拒否する）という行為が、同一施文帯内では場所をずらし、あるいは施文帯を違えるなどして、例えば、事例1、5の場合は1回、事例2の場合は2回、事例3、6の場合は3回、事例4の場合は4回実施されていたことが確認された。しかし、こうした「破る」行為は、事例の解説中でも注視したように、「器面の2分割」を肯定する範囲内で行われていた可能性が高い。しかも、分割された両者の関係は、明らかに非対称である。「二項対立」の関係にあると言い換ても良い。こうした関係は「器面の2分割」という上位レベルに止まらず、相対する位置に配置される単位文様相互の関係もまた、ことごとく非対称なのである。ただし同時に、「器面の2分割」という徹底した対立に対し、宥めるかのごとく回転対称性（1ヶ所で破るとはいえ）を維持するための操作が行われていることも承知しておく必要があろう。

だが問題は3単位の土器。3分割されているということは、相対する面には残りの2単位文様の中間部が来るということを意味する。相対する面との非対称性は本例では強調できない。しかし、別なかたちでの仕掛けがあった。例えば、事例2で確認したことではあるが、3単位文様のうちAとCには徹底した非対称文様として、相対する面としての役割を担わせる一方、Bには両者の文様要素を取り込むことで、A、Cの対立を融和させていたのである。対立と融和。一個体の土器には、その両者が織り込まれていたのである。事例6の、III施文帯の2分割構成に対する、I施文帯の二重の3単位回転対称という関係も同様の事例に属する。とりわけこのI施文帯は、II・IV施文帯が〈対称性の破れ〉を設けているにも関わらず、完全なる3回回転軸という対称要素を持つことで特筆される。

以上から我々は、反復を基調として単位文様を器面に横位配列しながら、対称性をもって円環が閉じられることを拒否する縄文中期人の心性、対称的な安定をあえて放棄し、不均衡を採択するという、彼らの社会や集団の暗黙の意思といったものを強く感受する。しかし、その意味するところを知ることは容易ではない。ある意味、考古学の領域を超えているのではないか、とも思う。

III—1

縄文中期の関東地方で普遍的に見られた土器の施文原理〈対称性の破れ〉は、その前後にも広がっている可能性がある。少し時空を超え、縄文土器全般を通覧してみることにしよう。

先ず、草創期から前期を……。しかし、早くも行き詰まってしまう。第一、展開図が少ない。中期を遡れば遡るほど完形土器の出土数が減ずるというのも一因ではあるが、多縄文や粘土紐等による煩雑な文様が多用される土器もまた、展開図作成には「手間暇かかる」という理由から、残念ながら、敬遠される傾向にある。土器は立体物である。全体が分かる実測図作成を是非お願いしたいものである。幸いにも展開写真を多数収めた『縄文土器大観1～4』（小林達雄編集・小川忠博撮影 1988～1989）が刊行されている。実測図ほど細部に渡った検証が可能というわけではないが、傾向把握には便利である。しばらくは、同書から窺える事実を抽出していきたい。なお、同書の展開写真を用いた説明の際、「1巻図版93番」であれば「1—93」と略記するので、原典参照いただければ幸いである。本稿での引用図版中でも同様の略記で統一している。

さて、草創期から早期、前期を対象とする『1巻』の頁を繰ると、なるほど縄文土器には、爪形文、縄文、撚糸文、押型文、貝殻文、竹管文などの様々な文様が多彩に器面装飾されているものだ、と改めて感心する。しかし、こうした多様な文様は、いずれも「施文原体の転写」に基づくものであるという点にも気付かなければなるまい。それには単純な押圧もあるうし、回転の場合もあるう。

ここでもう一つ確認しておきたいこととして、こうした転写は一度で完了してしまう場合は少なく、「反復施文」が原則であるという点である。反復施文とは「=対称（回転）」ということをも意味する。施文原体の発見・開発への執着も、縄文人の抱える性格の一端を示すが、反復施文という行為は「対称意識の醸成」にも一役買っていたように思える。視点は異なるが稻田孝司は、施文具の制約下にある文様を「施文具形態文様」と呼び、一方で、籠や棒状施文具により引かれる沈線のように施文具形態に制約されず、施文する者の意向が反映しやすい文様を「方位形態文様」と呼び区別した（稻田1972）。注目すべき着眼点であろう。

さて、〈対称性の破れ〉の確認に戻る。

草創期の土器群は、部分的に断ち切る箇所を設ける例がないわけではないが、隆線文、爪形文、円孔文、多縄文などの例を見ても、平口縁以下を分帶する意識は明らかだが、分割意識は殆ど確認されない。こうした傾向は、その後も撚糸文、押型文土器へと継続される。ただし押型文土器には、口縁の4ヶ所に縦瘤の垂下があるものが東京都で1例（1—59）、4単位波状口縁（A型波状）を有するものが関西を中心に数例（1—53・67・72・73）発見されている。単位数と分割意識を同義に捉える必要はないが、注目しておきたい。なお、波状口縁には、波頂部が山形状のものと丸みを帯びたものの二者に大別され、本稿では説明の便宜上、前者をA型波状、後者をB型波状と呼び分けていくこととする。

施文意識が大きく動くのは、施文具形態を主とする文様から脱しつつある貝殻沈線文系土器群に

なってからのことであった。沈線文の盛行と波状口縁の定着がきっかけとなり、山形波頂部を意識した単位文様が生み出されたのである。波状は4単位を主体とするが6単位例も見られる。しかしここで注目したいのは、文様が2個一対を原則にしている点である。4波状の土器であれば、二つの波状を一対として結び、2単位構成としているのである。第2図1-93例を参照いただければ一目瞭然であり、胴部の文様も含めて180度回転対称となっている。6波状の例(1-92)も同様であり、結果的に120度回転対称の3単位構成となっている。これらは言い換えれば反復施文の土器ということになろう。

しかし、北海道中野A遺跡例(1-89)は大柄な文様が器面一杯に4単位構成されているが、2個一対という連接文様にはなっていない。個別文様の一回の反復はあるが、2分割では同一文様の反復施文というわけにはいかない。しかも相対する波頂下にも同一文様は来ないという施文構造が採択されているのである。記号化すれば〈a+a+a1+a1〉となる。もちろん平面図化してでの2分割であれば、〈(a+a1)+(a1+a)〉となり、鏡面対称だと主張することは可能であるが、土器はあくまでも円筒状の立体物であることを考慮すれば、それはやはり詭弁というものであろう。さらにこの土器には、波底部に来る文様のうち1ヶ所のみ違えている点があることも付け加えておきたい。本例は〈対称性の破れ〉の初源に位置づけられるのかも知れない。青森県千歳遺跡からも1ヶ所のみ文様を違えた例が出土している。

このように〈対称性の破れ〉を秘めた土器群は、一時的ではあるが、北海道南部から関東地方まで広く分布し、まもなく姿を消す。また、北海道には道東部にかけて2単位を基本とする土器群が早期後半に広がりを示すが、この地域では以後も長期にわたり「2」への拘りが窺えるようである。波状口縁もB型波状が主である、という際立った特徴も指摘されよう。

一方、九州では早期後半の塞ノ神・平拵式として一括される土器群の中に、緩やかではあるが4単位波状口縁(A型波状の範疇であろう)の土器がある。平縁の土器とともに、第2図としてピックアップした大分県菅無田遺跡出土の2例(1-227・228)は、いずれも粘土紐の垂下で4単位に器面が分割されている。だが、ここで最も注意すべきは、分割された4単位が全て少しづつ文様を違えているという点である。しかも1-227例は1ヶ所のみ渦状の文様へと大きく違えている。この辺の施文意識が、九州方面でも特異な例なのか否かは、さらに検討を要するように思う。他の九州の土器群が「無単位性」というイメージに包まれている中で、強い印象を残す土器2例である。

関東では、条痕文系土器群に4~6単位波状(A型波状が主)の類が多くあるが、2波状を1単位とするような文様構成のものも目に付く。第2図には6波状で3単位施文の例を引いた(1-149)。〈a+a1+a2〉となろう。この例を含めて、野島式界隈の施文帯を幅広く設けた土器群には、反復施文にこだわる類は少なく、対称意識の希薄ささえ感じさせられるものがある。

しかし、波状部の存在が口辺部あるいは胴部の文様に至るまでその配置を律する、という施文の仕方にまで変化があったわけではない。だが縄という原体を横位に回転施文するという、しかも口縁部から低部にいたるまで何段にも渡って施文するという意志の貫徹は、必然的に縦分割よりも横位の分帯を優先することになったとしても不思議ではない。関山式土器は4単位のA型波状口縁を有するにも関わらず、口縁部の施文帯には、波状口縁の存在を無視したかのような配置例も散見される(1-284)。これも「横位優先の歪み」と見るべきであろう。波状部の数は単位数の表徴以外の何者でもないと宣言しているかのようである。

こうした傾向は、縦方位への施文意識の芽生えた諸磯a式期を挟むが、底流では諸磯b式土器にまで引き継がれる。途中、黒浜式期には2単位波状やB型波状の出現、諸磯b式期には爪形文系に限った大型2単位波状(B型波状)、そして内湾するA型波状の採択等が継起したが、横位優先の施文意識に大きな変更はなかったようである。

これは並行する北白川系、円筒下層式系、大木式系においても大同小異であり、波状口縁や瘤貼付という手段で「数」を表徴していたのである。

とりわけ円筒下層式の施文意識は頑なである。波状部はまさに単位数の明示に特化したかのようであり、波状部が口縁部施文帶の横位展開する文様を完全に支配下に置くことはなかった。しかも施文者は、己の意志の表出を禁じているかのごとく、破格の箇所を設けることも慎んでいる。粘土紐による自在な施文が可能となった円筒上層式もこうした「忍耐」を受け継ぐ。きっちりとした4単位を基礎に、破格の施文はしないとの徹底が窺える。そうした中で、1ヶ所に渦状の縄圧痕を添付した土器(1-715)などは、微笑ましい例外と言えるのかも知れない。

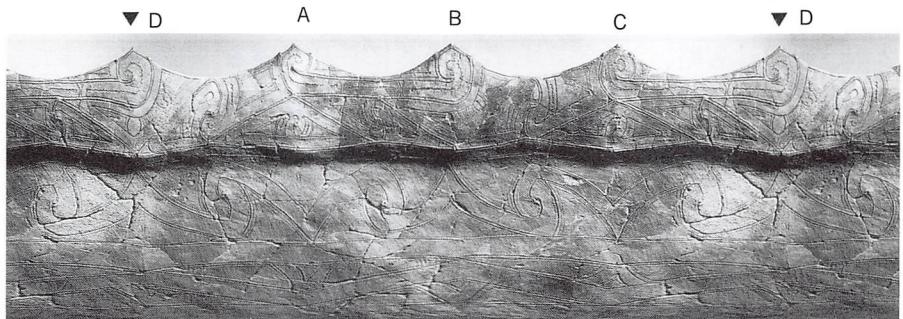
大木式系は同4式、同5式になると口縁部の施文帯幅を広げ、2乃至4単位の波状口縁を意識した縦位の単位文様の作出が見られるようになり、急激にイメージを転換する。しかし、それでも〈破れ〉をセットしない点は、円筒系の土器群と似ている。だが、大木6式になると施文構造はさらに大きく変わる。胴部が完全に施文部位として定着し、そこには波頂部を分割起点とした縦方位のモチーフが器面を巡るようになったのである。ただし、波頂部が4単位であるにも関わらず胴部は3単位のもの(1-479)、1ヶ所のみ施文を省略するもの(1-483)、対面する突起を違えるとともに胴部を5単位構成とするもの(1-495)なども散見されるようになり、諸磯c式、十三菩提式系(北陸の鍋屋町系を含む)の土器群との影響関係も気になるところである。〈対称性の破れ〉が確実に見えだしてきたようだ。

III—2

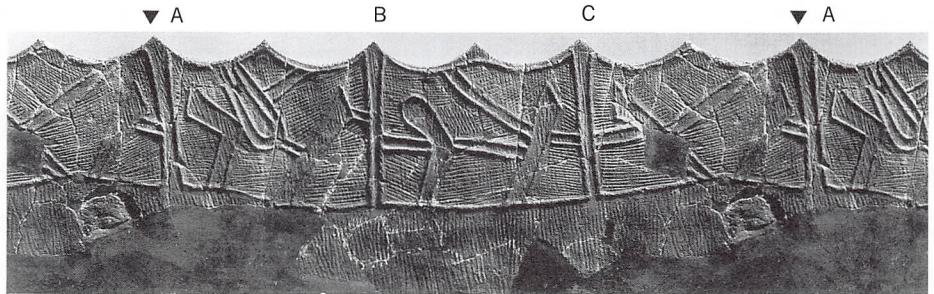
ここで諸磯b、c式の施文構造について少し触れる。

先ず、第2図に掲げた塚屋遺跡出土の諸磯b式土器(1-569)を見てみよう。内湾する4単位のA型波状口縁を持ち(便宜上、左から順にA、B、C、Dと呼ぶ)、各波頂部にはすべて瘤の貼付がある(1ヶ所のみ推定復元)。この瘤は、しばしば獸面と入れ替わる。主な施文帶は、内湾気味の口辺部(I施文帶)と胴部(II施文帶)にあり、横位方向への施文を原則とする浮線文様がほぼ器面全体に施される。しかしI施文帶は、一見すると、波状部を中心とした文様展開に見え、横位方向への施文が優先されているように見える。だが、展開写真を良く観察してみよう。口唇部直下から4条1単位の浮線が波状部に沿って、まさに「波状」に巡らされ、その下には同波状浮線文と対向するような波状浮線文が、さらにまたその下には上の波状浮線文と対向するように波状浮線文が器面を一周しているのである。単位文様は、こうした波状間の空白部への充填文様にすぎない。波状浮線によって分帶される部位を、上から仮にIa帶、Ib帶、Ic帶とすれば、単位文様の充填箇所は、波頂下のIa帶、Ic帶、波底下のIb帶に生じる。こうした意味では、波状部を中心に実にきっちりとした文様配置が実行されてきた土器だと言い得る。

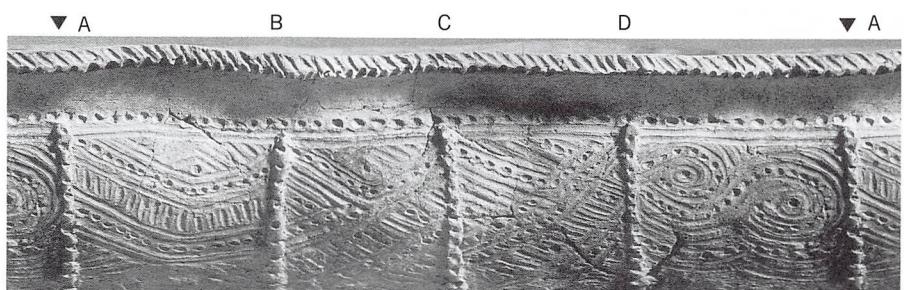
しかし、Ia帶の単位文様を見ると、AとC、BとDとでは充填文様が異なっている。つまり、二種文様の交互配置になっているのである。さらにIb帶ではD-A間のみを違える。これでI施



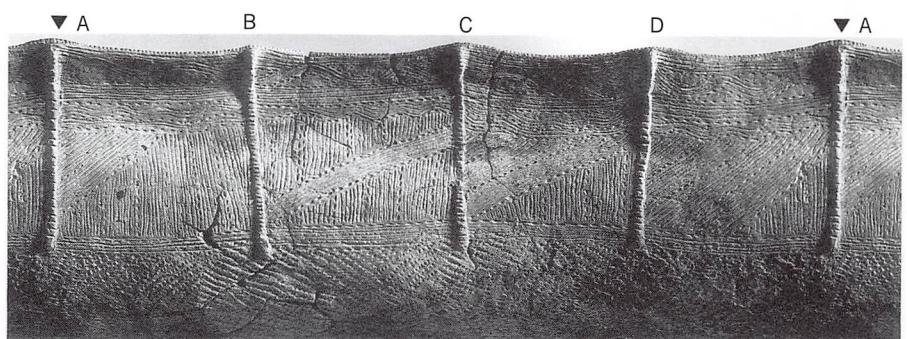
1-93 青森・田面木平



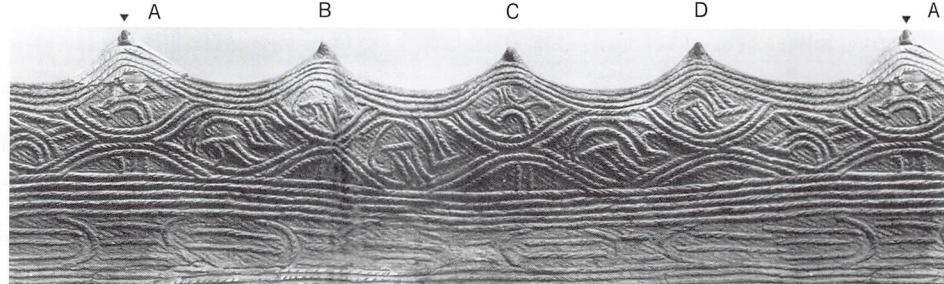
1-149 東京・堂ヶ谷戸



1-227 大分・菅無田



1-228 大分・菅無田



1-569 埼玉・塙屋

第2図 土器展開写真 (1)

文帯は、180度の回転対称があり得なくなったのである。I c 帯での浮線の本数も A・B が 3 本、C が 2 本、D では省略、とされ対称性が断ち切られているのである。また、II 施文帯においても、D から A にかけての部位で橢円枠状文の幅を 2 単位分に拡張している。ただし、もともと枠状文は波頂部間に配置する原則だった（A～C 間）ものが、C～A 間では崩されており、円環の断ち切りとばかりは言えず、二項対立の要素も否定できない。いずれにしろ、明確に〈対称性の破れ〉下にある土器だと言えよう。

今、塚屋の土器が、分割がしっかりとしているように見えながらも、横位方向への施文意識が優先している点についても指摘した。諸磯 b 式土器の分割意識の弱さは、波状や渦文の横への連接が基因にあると思われるが、この辺は北白川下層式系土器群の分割意識の高さとの大きな相違点ともなっている（鈴木1980）。

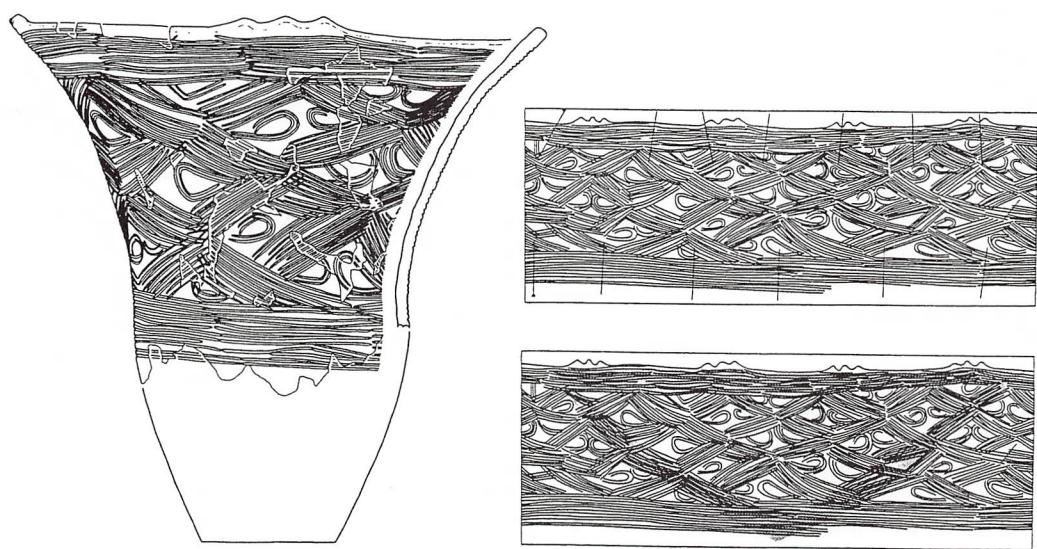
第3図1に掲げた茶屋遺跡出土の土器も、口縁部の4ヶ所に突起を配置し、しかも幅広の施文帯を持ちながらも、分割意識の希薄さを物語っている。つまり、「4」を明示しながらも、施文をする際の施文具の移動は一つの突起を起点にするのみで、それ以降は何ら突起の位置や数にこだわることがないのである。

ちなみに展開模式図（上）は施文具の移動単位を示し、同（下）は、施文上の歪みを示す。集合化した平行沈線による鋸歯状施文は、塚屋の波状文の重ね方同様、頂部同士が接するように4段にわたって構成される。そのため必然的に空白部は菱形状を呈する。しかし、きれいな菱形が形成されるのは網で囲った逆三角形の範囲に限られる。何故か。逆を言えば、残る正三角形の部分の菱形は乱れており、底辺部に向かうにつれて、歪みが大きくなっているのは何故か、ということでもある。

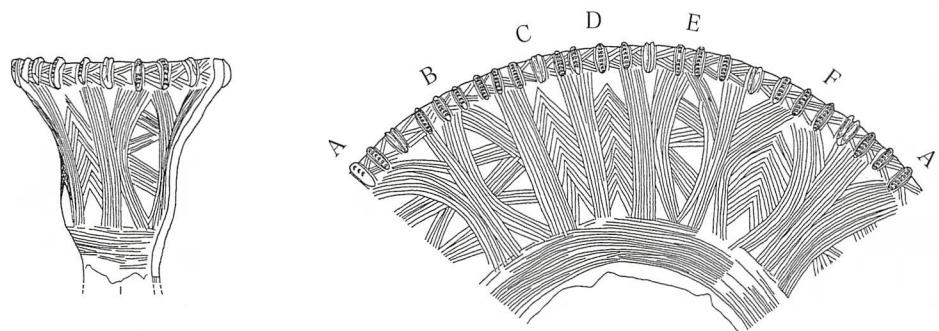
だが、理由は単純。円筒状とは異なり、朝顔状に開く器形の場合にしばしば起こる歪みにすぎない。つまり、幅広の施文帯においては、その上部から下部へと施文面積が縮小することは自明であり、同じ大きさの菱形を描き続ければ、下部ほど歪みが大きくなるということなのである。それを回避するための方策は、分割ラインを常に意識しながら下部の菱形面積を縮小させる以外にない。展開模式図に表れた「歪み」は、文様配置をきっちり決めずに、いきなり左→右へ、そして上→下へと連續的に描き続けた結果としての「歪み」なのであった。必ずしも非対称を意識的に企図したわけではないようだ。

結局、諸磯 b 式土器は、波状部や突起という分割意識にとって必要な部分をセットしながらも、分帶意識優先（横位への連続施文）から脱しきることはなかった。塚屋例も茶屋例もそうした一例にすぎない。一方で、浮島式土器も施文具の左→右への反復施文を基本としており、諸磯 b 式と類似した施文構造を有すると言い得る。

しかし同時に我々は、通常は潜在化しているはずの〈対称性の破れ〉が塚屋例で表面化していた事実を確認したばかりである。その意味するところについて語るすべを持ち合わせてはいないが、諸磯 b 式の末葉（b 3 式）になるとかなりの確率で〈対称性の破れ〉が表面化してくる。とりわけ胴部施文帯の単位文様の数が、口縁部の波状や突起で明示される「4」に支配されることなく、「3～5」であるという事実、しかもその単位文様も 1ヶ所のみ違える例、2 単位文様を一組としつつ相対する面とは同一にならないように配置する例等を容易に見出すことができる。こうした傾向は、さらに諸磯 c 式土器に継承される。



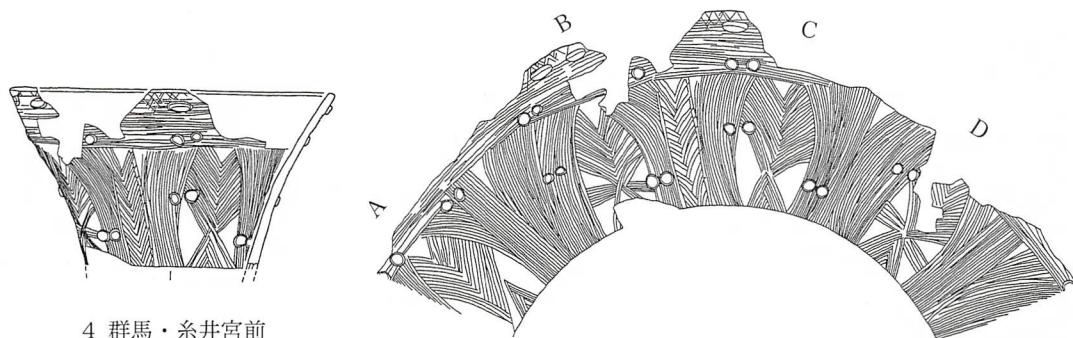
1 埼玉・茶屋



2 群馬・糸井宮前



3 群馬・糸井宮前



4 群馬・糸井宮前

第3図 土器展開図（前期）

第3図2を見ていただきたい。内湾気味の口縁部には縦瘤が連続的に貼付されるが、瘤上に刻みの付加されていない縦瘤が「5」ヶ所あり、その間には刻みのある瘤が、5・6・4・3・3個というように不定数が順次挟み込まれている。分割の明示としては杜撰と言わざるを得ない。また、この時期の胴部施文帯の幅は胴部全体に及ぶほど広くなり、縦分割を基本とするモチーフ展開が一般的になったにも関わらず、本例も当然のように胴部文様の縦分割と口縁部の縦瘤とが連動することはない。具体的には、縦瘤の「5」に対して、胴部は「6」分割。記号化すれば $\langle a + a + b + b + a + c \rangle$ となる。ただし c は a と b の両要素を併せ持つことから、 $(a + a)$ と $(b + b)$ という二項に対しての調停役が $(a + c)$ である、とする理解も不可能ではない。つまり $\langle (a + a) + (b + b) + (a + c) \rangle$ ということである。

一方で、第3図3のように、胴部文様の分割ラインが全く不詳の土器群も若干はある。口縁部の()状の隆帯を1単位と仮定すると、ここには推定7単位配されていることになり、単位の明示とは到底言えない。むしろ単位の明示は、ここで挙げたような貼付文系土器群(平縁が主)ではなく、同時期存在の結節浮線文系土器群(大波状縁が主)が担っていたというべきであろうか(鈴木2006)。あるいは器種ごとの表象性、器種相互の役割分担といった面への配慮も必要なのかも知れない。

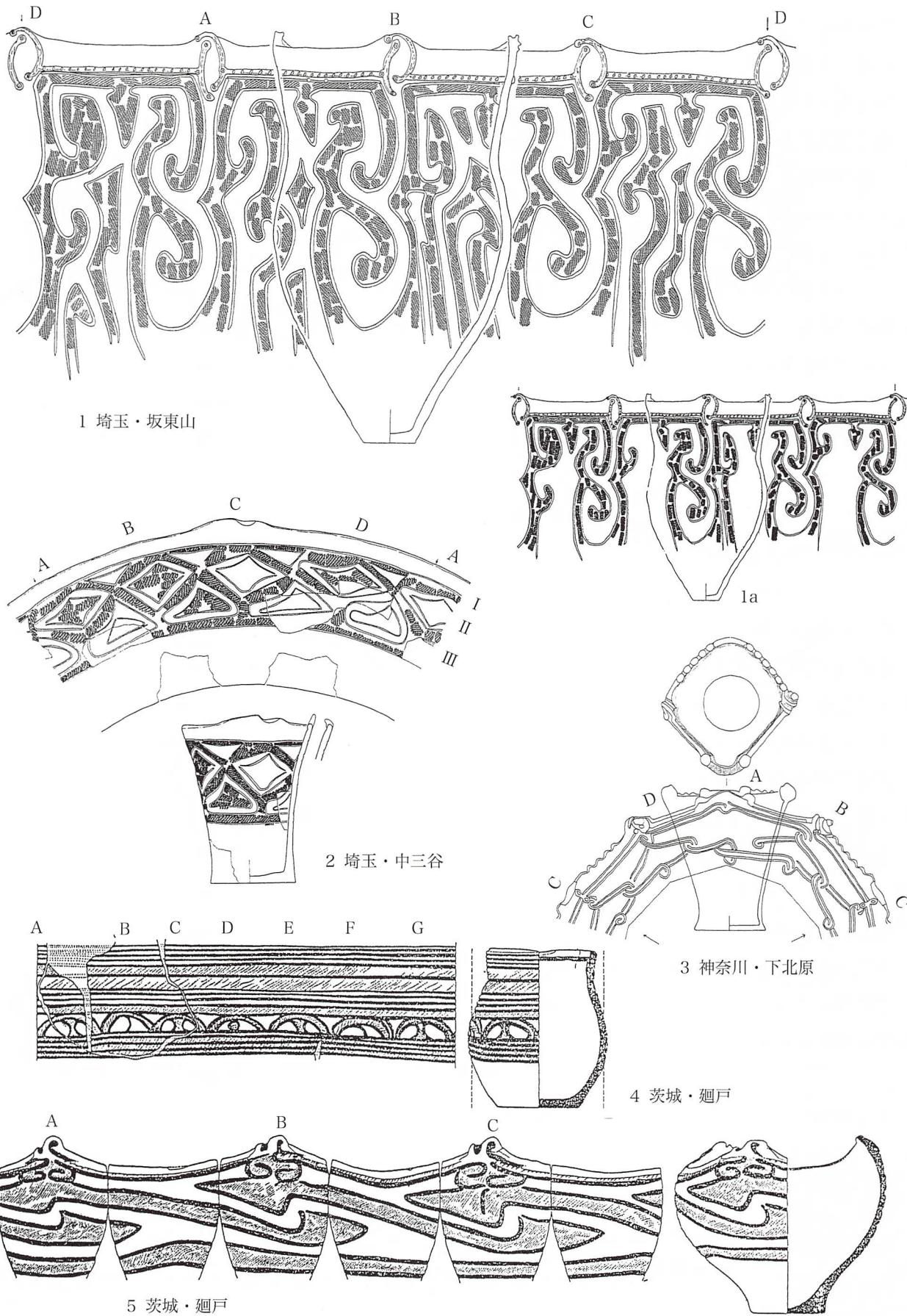
III—3

次に後期以降土器群の瞥見に入る。

第4図1は坂東山遺跡出土の称名寺式土器。口縁部には無文帯を置き、両端に円形刺突のある縦長弧状隆帯が縦位に若干入り組んで配され、その箇所のみが4ヶ所小突起化している。4ヶ所の入組縦長弧状隆帯は刻み目のある隆帯でそれぞれ連結される。隆帯下には縄文の充填された曲線的な文様が描かれるが、一筆書きのごとく連なる「主文様」と空間を埋める「従文様」とに分けることができる。仮に「従文様」を消去すると、実にシンプルな文様構成が見えてくる(第4図1a)。「従文様」の変形の自在さが、この種の土器を複雑に見せていたわけである。

さて、説明の便宜上、小突起箇所を順にA～Dとすると、相対する位置に当たるA小突起下とC小突起下の胴部文様は殆ど同一であることが分かる。ところが、B小突起下とD小突起下はモチーフの右側部分の変形がそれぞれ大きく、この土器を90度あるいは180度回転したとしても重なることはない。胴部施文帯を記号化すると $\langle a + a 1 + a + a 2 \rangle$ となる。しかし、もう一つ注目すべき点がある。それは入組縦長弧状隆帯と横位の刻み目隆帯との接点部分への円形刺突の有無である。すなわちAの両側とBの左側にはあり、CとDにはない、という相違点である。これにて対面する位置の対称性は完全に破られたのである。

第4図2は鴻巣市中三谷遺跡出土の深鉢であり、口唇部に1ヶ所、凹みのある小波状を設け、正面性を明示している。胴部文様は、縄文帯に挟まれた施文帯の中央に菱形文様を4単位横位に連接する。したがってその中間には、逆と正の三角形が必然的に生じる。この土器の施文上の特徴は、円環状に同一文様が繰り返されることを1ヶ所のみ破る点にある。まず正面に当たるCの位置のみ菱形内への縄文充填が省略される。逆三角形の部分ではA～B間の位置のみやはり縄文充填の省略がある。さらに正三角形部分では、欠損箇所が多く断定はできないが、おそらくD～A間のみ縄文が充填されなかったと思われる。言うなれば、正面であるCの背面に当たる、Aの菱形を挟むかのように省略部が設けられたのではないか。正面性の明示ということと裏腹の関係にあると考えられる。



第4図 土器展開図（後期）

正面性の明示という点では、次の神奈川県下北原遺跡出土例（第4図3）も中三谷例と施文構造がやや類似する。正面に対し両側縁の突起を違え、さらに背面には正面の突起に対し凹みという全くの対立文様が配されるのである。

第4図4・5は茨城県廻戸貝塚出土例。4は胴腹部にのみ幅の狭い施文帯があり、半弧状文様が7単位施されている。その内のF箇所のみ沈線が付加され「破れ」が設けられたかのように見える。弧状内の空白部には、さらに3種の文様が充填される。記号で示せば〈a+b+a+c+a+b+a〉となるが、詳細は不詳。5は3単位波状で、同一文様が繰り返されているかのように思われるが、Cにのみ縦沈線が1ヶ所付加されており、やはり円環の断ち切りが窺われる。

ところで第5図には、波頂部もしくは突起等を基軸に、明確な分割軸が形成されている展開写真を集めてみた。

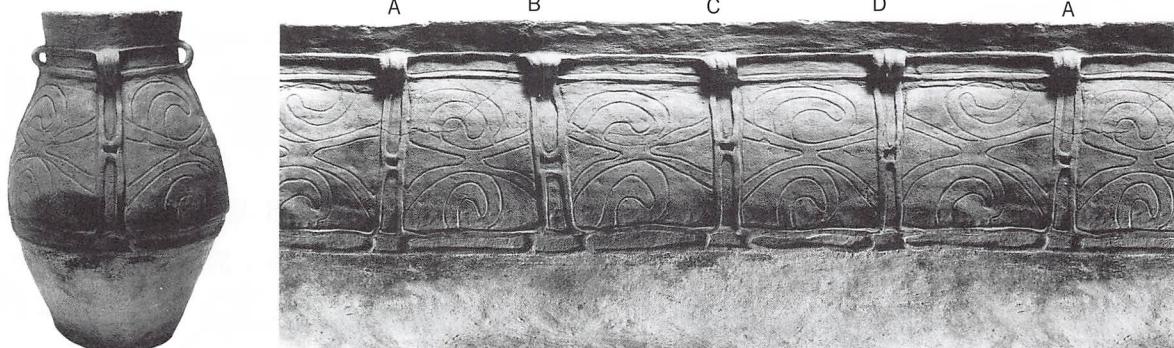
4-276は東京都小山遺跡出土の堀之内式土器であり、Y字状の隆線が波頂部の突起から胴下部の横位隆線まで垂下し、四角形の施文枠が4単位形成されている。枠内には渦巻や入り組み等を基調にしたモチーフが展開しているが、4単位すべてが異なる。しかし、A-B間とB-C間の渦文は下部隆線側からのみ立ち上がるという共通項があり、一方C-D間は上下隆線からの入組文、D-A間はどちらにも与しない単独入組文という相反する文様の組み合わせとなっている。突起の形態もAとC、BとDが類似しており、大きくはAとCのラインで2分割される土器なのだろう。〈(a+a1)+(a2+a3)〉。なお、A突起下のみ弧状文が3段であり、他の4段構成とは違いを見せていている。そうした意味ではここで円環を断ち切っていると言えよう。

他の3点の展開写真は、ほぼ同時期の土器。4-201は青森県葦窪遺跡出土例であり、口縁部小突起は6単位を明示するが、実態は3単位に施文枠が構成されている。しかし、枠内文様は3単位ともモチーフを違えるという特徴がある。しかも、C-E枠とE-A枠の文様は連結し、A-C枠のA側は縦沈線で完全に断ち切られる。一方、C側は無文部を設けて、やはり隣接文様と決別している。だが、見方によっては、沈線(A)、無文(C)、連結(E)と、縦枠線も3ヶ所すべて違っているということができる。〈a+(a1+a2)〉。4-211は青森県中市遺跡出土土器。実に単純な文様構成の土器であり、D-A間の枠内文様のみ1ヶ所施文が反対になっており、円環が断ち切られている。〈a+a+a+a1〉。4-345は福島県桑名邸遺跡出土の深鉢で小突起が3単位配される。小突起から垂下された隆線は胴腹部を巡る隆線と連結し、四角形の枠状施文部を形成する。しかし、この枠内はさらに沈線により縦に2分割される。ところがこの小枠は、四角形の下辺のみ2ヶ所省略する箇所があり、結果として3単位文様がすべて異なるという結果となっている。つまり〈(a+a)+(a+a1)+(a1+a)〉となるのである。しかし、小突起下の隆線がA・BはR字状に、Cのみ反転した冂字状になっている点を評価すると、前述した小枠の組み合わせを垂下降線が中心に来るようすらすことも考慮する必要があるかもしれない。そうであれば〈(a+a)+(a+a)+(a1+a1)〉となる。

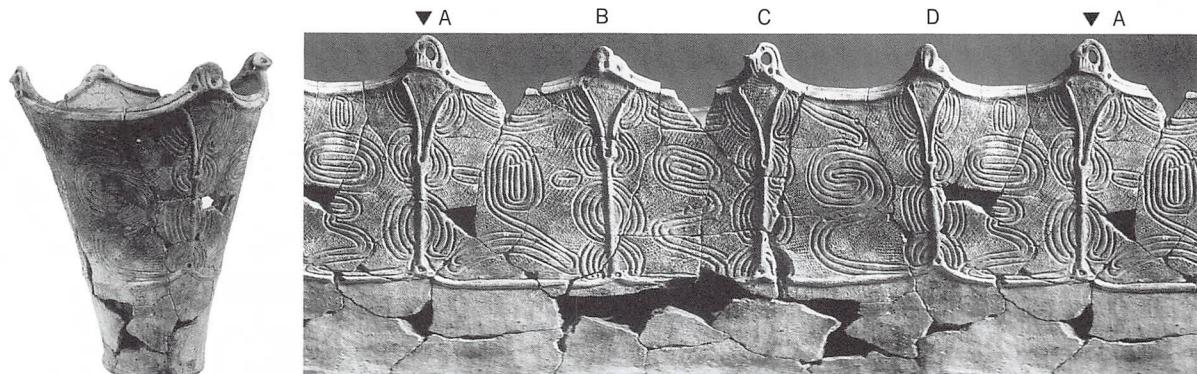
以上のように、ほんの一部ではあるが関東・東北の後期前葉土器の施文構造を見た。さらに多くの土器を分析すれば、今述べた傾向が本来的なのかどうかも検討の俎上に載せることができることと思われる。例えば、門前、南境、綱取系土器群の単位は概ね「4」をベースにしつつも「3」あるいは「6」も目立ち、しかも口縁部の小突起等が胴部文様の割り付けに当たり強い影響力を保持している点。しかも一特に綱取系に顕著なのだが一突起の1ヶ所のみ大型化することで正面性を主



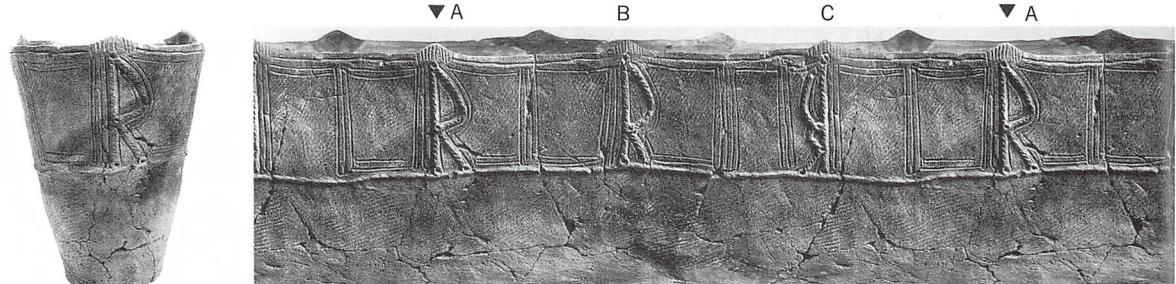
4-201 青森・垂窓



4-211 青森・中市



4-276 東京・小山



4-345 福島・桑名邸

第5図 土器展開写真 (2)

張しているにも関わらず、胴部文様は比較的回転対称性を損なわない、という事実も施文構造上重視されなければなるまい。一方で、越後方面の三十稻葉系土器群が「2」あるいは「4」単位性を保持し、比較的きっちりした回転対称を有する点にも興味をひかれる。あるいは文様レベルを超えて、施文上の意識基盤が関西方面と通底する要素があったのではないかとも考えられる。ちなみに、中津系土器群は「4」、「5」、稀に「7」単位を示すが、やはりきっちりとした回転対称を原則としていたらしい(特に古式段階)。ところが縁帶文系土器群に至ると、口縁部の小突起や胴部文様を施文帶ごとに確認すると、単位文様の反復施文による回転対称性を指摘できるが、施文帶同士を縦に貫く分割意識は弱くなる傾向にあるようだ。しかし関西方面では、それも一時的であり、次第にシンプルな施文及び3単位性の採用とともに、回転対称性はますます定着していったのである。一方で、九州においては、後期の早い段階の土器群(指宿式土器)に、円環構造を断ち切る意識の明確な土器が含まれており注目しておく必要があるだろう(4—560、第6図4—561など)。

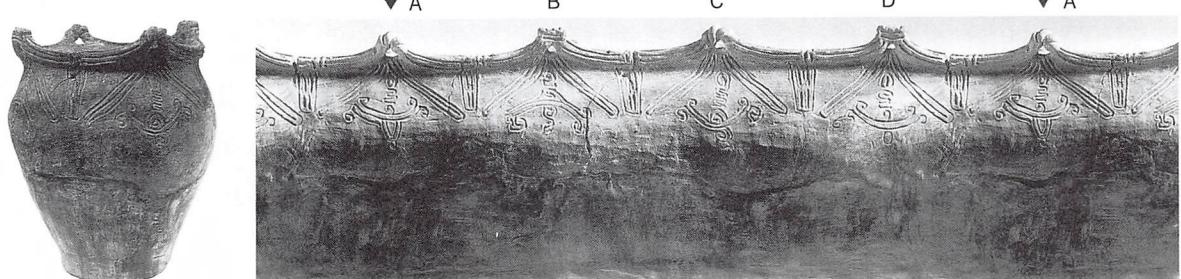
以上から、少なくとも後期前葉の北海道から九州までの太平洋側には一貫して〈対称性の破れ〉を施文上の基本原理とする土器群が見え隠れしていたと言い得るのではないだろうか。

しかしながら後期中葉以降は、ますます〈対称性の破れ〉は遠のいていく。こうした傾向は汎列島的であり、北海道から東北、関東、中部、北陸に広く分布する加曾利B式系土器群、さらには西日本をも含む後期後葉の土器群に至るまで、実に対称的(回転対称)な施文構造の土器群が卓越する。しかし、そうした中でも対称性を破ろうとする土器は必ずある。青森県ウルエ長根遺跡出土土器や秋田県藤株遺跡出土土器(4—403、第6図4—404)などが好例となろう。また、加曾利B1式で目立つ「3」単位波状、同B2式以降の「5」単位波状定着の意味するところは何だろうか。〈対称性の破れ〉の潜在化に反比例するかのごとく顕現してきた、割り切ることのできない「奇数」。少なくとも、それが当時の社会・集団が求めた「分割単位」だったのである。

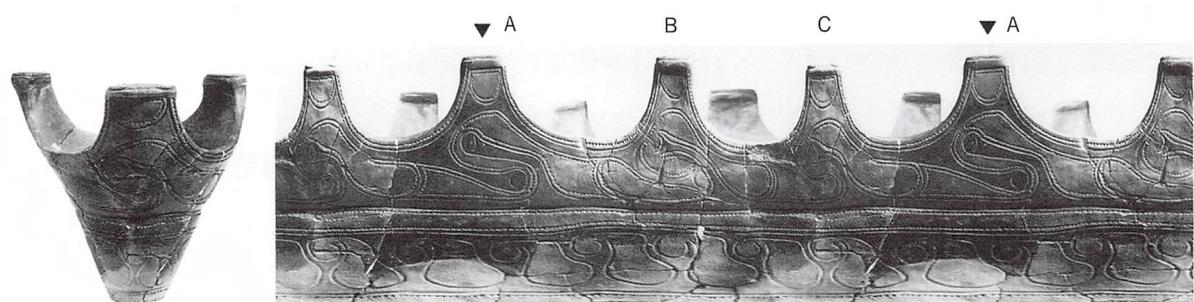
晩期になると、さらに〈対称性の破れ〉を器面装飾から窺うことは困難な状況になる。亀ヶ岡式系土器は、あたかも「空間恐怖」を特徴とするかのように、土器の表面を羊歯状文、雲形文、大腿骨文等々の連続文様で埋め尽くすケースが多い。しかし、施文帶内の施文の仕方は「点対称」を基本とした単位文様の横位連続施文であり(藤沼1981)、何単位で器面を一周するのかを即座に言い当てるのは難しい。そこには分割意識ではなく、「反復施文」のみが存在しているかのようである。口縁部にも小突起が連続的に見られるのみで、単位数を明示すべき波状や突起を設けることもなくなっている。むしろ、こうした社会や集団の内蔵する「数」は、1あるいは3、4ヶ所の突起を付す「壺」や「注口」へと移されたと理解すべきなのかも知れない。こうした傾向はしばらく続くが、亀ヶ岡式系の終末には注口土器は失われ、新たに台付浅鉢などに波状が設けられるようになるのである。

一方、西日本方面では凹線文系以降、西日本磨研系、黒色磨研系へと器面装飾はますます少なくなる。4単位波状深鉢の印象が卓越するばかりである。そして凸帶文系の土器群へと移行していくのである。

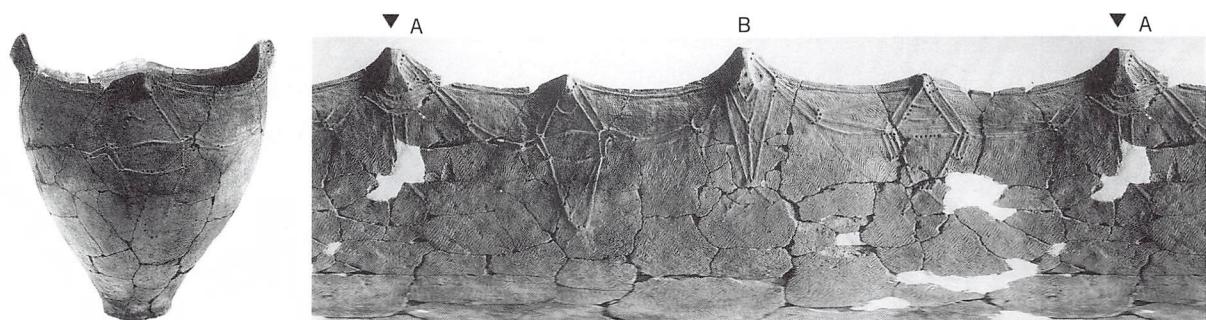
このように縄文時代終末には、〈対称性の破れ〉はほとんどの土器群からすでに消えていた。それは土器が、社会や集団の意志の描かれる場ではなくなったということを意味するのかも知れない。それはまた、縄文土器の有していた役割の一端が消失したことでもある。しかし我々は、注口や壺、あるいは台付浅鉢などといった、その時その時の花形である器種へと、その役割を転嫁す



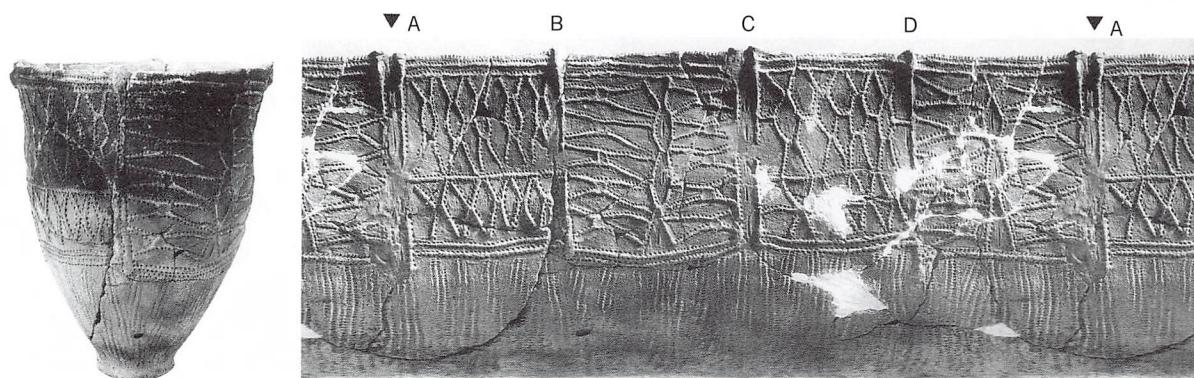
4-561 鹿児島・草野



4-404 秋田・藤株



4-1136 北海道・下田ノ沢



4-1151 北海道・町村農場

第6図 土器展開写真 (3)

る例も見てきた。ささやかな抵抗ではあったろう。しかし、それが当時の社会や集団にとっての「縄文土器の存在理由」なのであった。そうした意味では、続縄文系土器への〈対称性の破れ〉の承継（第6図4-1136、同図4-1151など）は、彼らの社会・集団への興味をも搔き立てられる。おそらく幣舞式系にも見られた2単位をベースにした施文構造がポイントになろう。早期後半においてすでに北海道東部は「2」に拘りのある地域であることを先述した。注目されてしかるべきであろう。

III—4

縄文土器瞥見の最後は、地元の安行式土器の施文構造について見ることにする。晚期安行式では東京都小豆沢貝塚出土土器が著名であるが、6単位の大突起とその間には小突起が配される。しかし、口縁部と胴部の施文帯には突起の位置とは無関係にそれぞれ5単位で単位文様が横位に連接している。安行式の施文構造を象徴的に暗示しているかのようである。

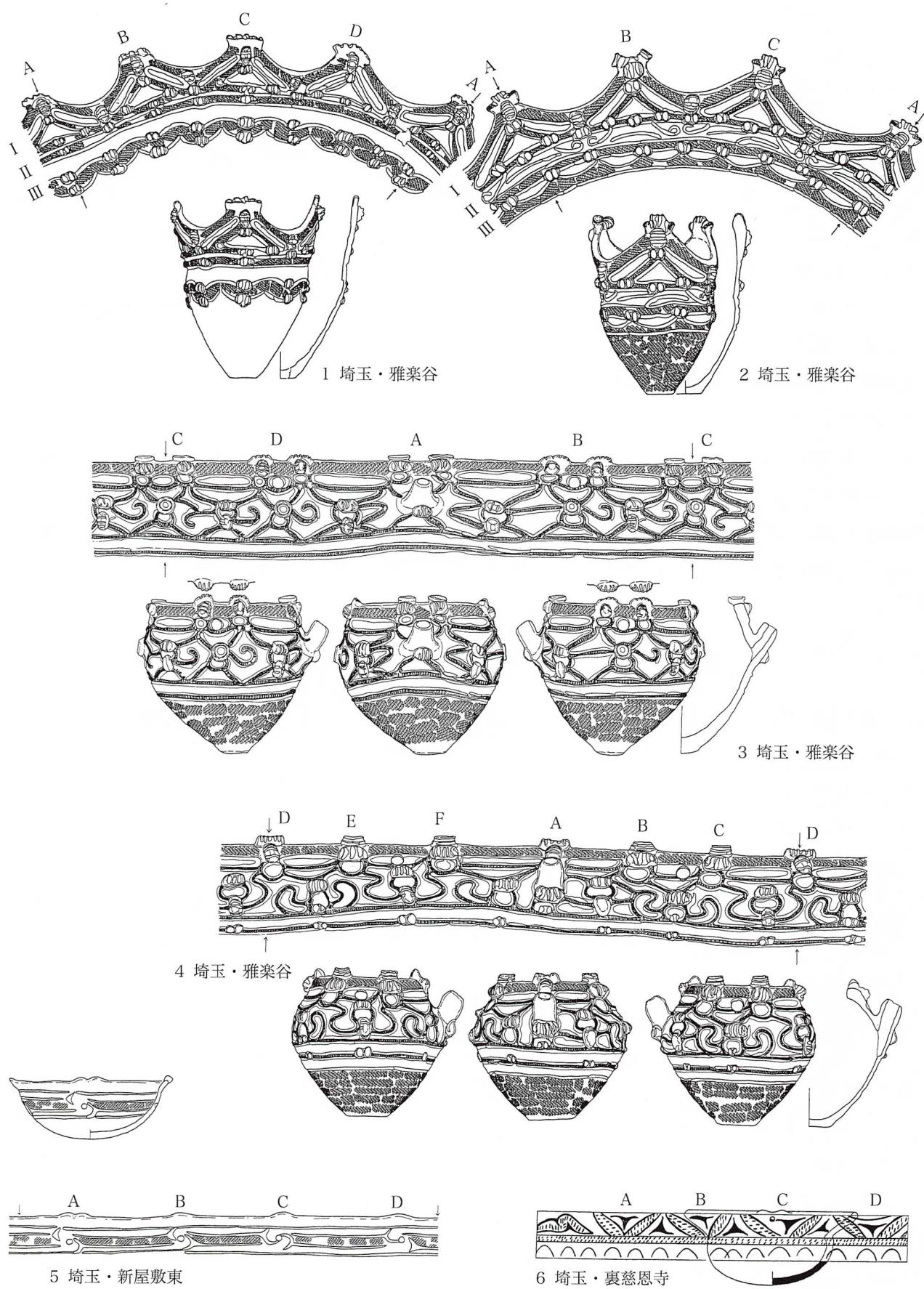
第7図には埼玉県内出土の土器を掲げた。そのうち、1・3は雅楽谷遺跡第5号土壙、2・4は同第26号土壙よりの出土例である。いずれも良く似ているが、前者はいずれも4単位、後者は3と6単位という違いも明示されている。

先ず、大波状縁深鉢である。便宜上、波頂部をA～D等と仮称し、施文帯を取り敢えずI～III帯に分ける。第7図1は4単位の大波状縁を有し、I・II施文帯は瘤の貼付を含めて密接に連携している。例えば、Aの縦ライン上にはきっちりと瘤が並ぶ。また波底部も同様に縦ラインが意識されている。ところが、こうした原則を破ろうとする箇所が複数見られるのである。I施文帯では、Dの縦瘤直下のいわゆる通称豚鼻が1個に変形されている。さらに言えば、Cの三角部では左の瘤には押圧がなく、Dの三角部の右の瘤は1個の押圧のみとなっている。I施文帯を記号化するとく(a+a)+(a1+a2)となろう。II施文帯の豚鼻の配列はさらに注目される。つまり、Dライン上のものが貼付を省略し、逆に、波底部のB-Cライン上にのみ加飾されているのである。こうしてこの土器は、円環を閉じることを四重にわたって破った結果、4波状部のすべてが少しづつ異なることになったのである。なお、III施文帯はI・IIとは無関係に入組弧状文が8単位で器面を巡っている。

第7図2は3単位の大波状縁を有するが、1に比べれば円環の破り方が単純であり、先ずI施文帯ではBの二頭状の波頂部と直下の横瘤が他とは異なり、II施文帯ではCの位置のみ沈線の形を違えている。つまり、この二重の破りで3波状はすべて異なるのである。III施文帯は、この土器もI・IIとは不干渉状態にあり、単位文様は7単位で器面を巡っている。波状や突起等で当該土器の単位数を明示しているにも関わらず、胴部文様の配列の無頓着ぶりは、先述した小豆沢貝塚出土例と酷似していると言えよう。

次は注口土器の例。実は、注ぎ口を持つ噶矢としては、草創期の新潟県室谷洞窟遺跡例をあげることができるが、その後は前期の関山式土器が著名。その後、中期末から後期になると小型化しつつ一気に増加する。この種の土器は、最初から注ぎ口が正面として作られている関係上、背面、側面もやはり意識的である。ある意味、擬人化されていると言えなくもないが、他の土器群同様、対称性を極力排除しようとする意識も、やはり見え隠れしており、注目しておく必要があるだろう。

第7図3は、口縁部に2個一対の瘤が4単位配される。しかし、注口部(A)とその背面の瘤(C)



第7図 土器展開図（晩期）

は横型であり、側面（BとD）は縦型の瘤という明確な違いが示されている。しかも正面Aのみを見れば、人体を見るがごとく左右対称（鏡映対称）である。だが、菱形上空間への施文文様を子細に見てみよう。A、B、C、D、それぞれがすべて異なっており、しかも相対する面も違えていることに気付かれることであろう。同様の施文構造は第7図4でも見られる。注口部（A）とその背面の瘤（D）のみが同一で、側面に来る4個の瘤（B、C、E、F）との違いは明白である。しかし、この注口土器の場合は第7図3の例とは異なり、注ぎ口は左右対称に施文されておらず、むしろB—C間及び対面のE—F間の方が左右対称に文様が施されているのである。だが対面文様及び隣接文様がすべて異なるのは第7図3と同様。おそらく第7図3と異なった印象があるとすれば、注ぎ口が文様中に調和を持って配置されていないという点かも知れない。

いずれにしろ、雅楽谷遺跡出土の大波状縁深鉢及び注口土器は5号土壙よりも26号土壙例は崩れた印象を受ける。

第7図5、6は浅鉢であり、どちらも口唇部に1ヶ所のみ2山突起を設けた例。第7図5は1山の小突起を他に3単位設け、施文帯へは小突起に合わせて玉抱き三叉文が配置されている。第7図6はやや変則であり、三叉文を持つ同一文様が4回繰り返された後の、やや広めの空間に入り組み文様が嵌め込まれ、5単位構成となっている。安行3b式、同3c式、あるいは姥山式系の大波状縁系の土器は5単位構成が多い点、さらに比較的破調を設けない点等を勘案すると、あるいは施文構造上の問題点の噴き出た箇所である、と考える余地があるのかも知れない。

IV

以上、〈対称性の破れ〉の存否について、各地、各時期の土器群を一通りチェックしてきた。しかし、覗き込む窓としては『縄文土器大観1～4』という編集者・撮影者の主觀が色濃く反映された出版物に依存せざるを得なかった、という限界も認めなければなるまい。まだまだ同書を咀嚼し切れたわけではないが、展開図の作成が未だに進展していない現状では、列島全域の縄文土器を閲覧できる唯一の書物として、さらに分析するための視点を開拓していきたいものと自戒している。

そうした中で、自身の宿題としていた「III期の範囲を確定する作業」（鈴木1983）について、概ね回答が得られたように思う。III期とは、言うまでもなく「〈対称性の破れ〉を施文原理とした時期」のことであり、あくまで理論上として指定しておいたものである。ちなみに、I期は〈対称的〉な施文原理を獲得する以前、II期はそれ以後、そしてIV期は〈対称的な破れ〉が潜在化してしまった時期、としたのであった。

すでに個別土器の解説過程で語ってきたことではあるが、〈対称性の破れ〉とは、たった「一つの破り方」を意味するわけではなく、次の2パターンが基底にある。

- ① 反復施文による器面一周の拒否
- ② 相対する面への同一文様の拒否

しかしながら、①のみ、②のみで〈対称性の破れ〉を実現している例は少なく、大半の土器は、施文帯の数や分割明示箇所の数とも連動あるいは無視という手段で様々な対称性を破っているのが実状である。意識して読み取ろうとしない限り、見過ごされてしまう例も多い。

また、単位文様の中には「鏡像」「反転」などといった手法を駆使して描かれるものもあり、施文者にとって「対称」は極めて日常的な存在であったことも理解しておくべきであろう。

こうして読み解いていく中で、次第に明らかになってきた点として、①も②も、その他の様々な手段も、すべてが「〈対称性の破れ〉の先を見据えている」という事実を挙げることができる。結果的には、ほとんどの土器が大きく二分割され、しかも非対称となるようにコントロールされていたらしのである。まさに「二項対立」の原理が浮かび上がってきたのであった。このことは偶数単位の土器に限定されるわけではない。たとえば奇数単位の場合でも、最終的には3単位に回帰するとともに、2単位は非対称の場合でも、必ず残りの1単位には他の2単位それぞれの文様要素を取り込んでおり、あたかも両者の調停役であったかのごとくである。非常に重要な1単位とみるべきであろう。〈対称性の破れ〉を施文原理として採択した社会・集団の意思をしっかりと受け止めるべき「1単位」であると評価しなければならない。

また、正面性の強調についても〈対称性の破れ〉に連動している可能性が高い。器種問題に複雑に絡む要素があり、本稿では指摘程度で避けてきた話題ではある。別稿が必要となろう。

さて、III期の範囲である。

『縄文土器大観』によれば、という限定つきではあるが、貝殻沈線文系土器群がその嚆矢を担っていたのではないかと考えられる。北海道中野A遺跡例を取り敢えず「初源」に位置づけた。しかし、それも一時的であった可能性はあるが、九州の早期後半、塞ノ神・平拵式として一括される土器群中にも見いだすことができた点は注目されて良いだろう。しかし、関東・中部で言えば、確実にく〈対称性の破れ〉が顕在化はじめたのは諸磯b 3式以降と考えられ、中期に至って、その施文原理は完璧に顕在化したのであった。

下限は、おそらく後期前葉、堀之内式期として良いであろう。確かにそれ以後も時折現出する。しかしそれは、潜在化してしまった〈対称性の破れ〉が何らかの切っ掛けで一時的に噴出したとみて良いのではないか。すでにIV期に入っていると見なすべきであろうと考える。こうした施文構造の変わり目に現れる3単位波状の土器、また5単位波状の土器の存在も注意されよう。また、安行式で確認した「破れ」も、やはり一時的とする評価が適當と思われる。

しかし、西日本方面は、北陸を時折巻き込みながらも、一貫して〈対称性の破れ〉に支配されたことはなかった。つまり、〈対称性の破れ〉とは東日本方面の縄文社会が採択した施文構造だった、と結論付けられるのである。

おわりに

縄文人の思考と現代人の思考がどのレベルで関わり合うのか混沌としている。我々には、互いに鏡像関係にある右手と左手がある。さらに言えば、外観レベルではあるが、人間は身体の中心断面を境にして、互いに鏡像関係にある部分が続いている。そして当然のように、我々は我々自身の反映として、あるいは延長として様々な道具を人間化してきた。我々の周囲を見回しても、実際に様々な左右対称なものに取り巻かれていることに気付かされる。おそらくそこに安心感や美意識なども内在しているのである。

しかし、一方で我々の日常生活には常に左右の違いが入り込む。右利きか、左利きか。右側通行か、左側通行か。なぜトラック競技や野球は左回りになっているのか。地球の自転の左回りと関係があるのでどうか、とか。卑近な例から、いくらでも導き出すことができる。外観とは別に、我々の内臓は非対称であり、右脳と左脳の働きも異なる。さらにミクロの世界に踏み込めば、人間を含

めた動物の対称性は崩れる。分子レベルでみれば、すべての生命世界は非対称であるという。こうした科学的事実で左右の違いを説明できるとは思わないが、環境や文化・制度も大きく関与している可能性は否定できない。

自然から文化への移行を実現した人類が、どのような社会や集団のあり方を選択してきたのだろうか。我々考古学を学ぶ者は、遺された僅かな物質文化の痕跡を元に、様々な分類体系や思考体系の存在を明らかにしなければならない。民俗学や文化人類学は、現在という同じ時間帯を共有する人々に関する記録を蓄積しつつ、その大きな成果として、「野生の思考」を明らかにした。現代社会を相対化する視点の登場は衝撃的でもあり、現代思想界への影響も小さくなかった（レヴィニストロース1972ほか）。しかし、我々の縄文時代は時間の隔たりが大きく、確実なつながりを模索するには、いくつもの閑門を潜り抜けなければならないという宿命があり、研究テーマもいきおい禁欲的にならざるを得なかったのである。ところが最近の認知考古学は、人類の思考能力はホモサピエンス・サピエンスの飛躍的進化以来、本質的な変化をとげていない。我々人類の「心」に係る基本的な仕組みは、数万年来変わっていないということを明らかにしつつあるらしい。時空を超えて共通する確実な分析方法が求められる時期に至ったということでもある（中沢2006）。本稿で見えてきた「対称」「非対称」あるいは「二項対立」が、今後どのように進展するのか、筆者自身にも予測がつかないが、楽しみではある。

なお、縄文土器には極めて抽象的ではあるが、蛇や蛙、みずちなどと称する類や想像上の動物、あるいは人体、さらには顔面、獣面、時には土偶などが描かれる一連の土器群の流れがある。これらは概ね中期勝坂期を中心とする。しかし一方で、後期末葉以降、男女の土偶を貼付するもの、男性と思われる顔面が描かれるもの等が現れる。「男」の存在が、社会・集団の意思として初めて土器に顕われ出したのである。これらは弥生初期の人面壺に連なる要素がある。明らかに描かれるものが違う中期と後・晚期。土器に対する思考の相違を窺わせる。これらは縄文土器の施文構造を解明するうえで欠かすことのできない土器群であることについては論を俟たない。小林達雄の言う「物語性文様」（小林1994）とどのように関わり合うのだろうか。この件についても宿題となった。稿を改めたい。

縄文土器の施文構造を明らかにしたいとの望みを抱いてからすでに30数年を経た。その間、谷井彪、嶋崎弘之、笹森健一、小林達雄、安孫子昭二氏等の諸論考から様々な刺激と指針を与えられた。感謝申し上げたい。なかなか咀嚼し切れているわけではないが、最近ではさらに、小杉康、桜井準也、石井匠の諸氏による意欲的な論考もみられるようになってきた。当時から見れば、まさに隔世の感という思いがする。

方法論や立論の立場等、様々な迫り方が予測されるが、いずれにしろ「破片では解明できない考古学＝縄文土器の施文構造」について多くの方々の論考が公表され、活発な議論が交わされることを念じて稿を閉じることとする。

なお、柿沼幹夫氏には文献面でお世話になった。多謝。

《引用・参考文献》

- 安孫子昭二他 1969 『多摩ニュータウン遺跡調査報告VII』 多摩ニュータウン遺跡調査会
安孫子昭二他 1975 『貫井南』 小金井市貫井南遺跡調査会

- 新屋雅明他 1992 『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集
- 石井 匠 2009 『縄文土器の文様構造—縄文人の神話的思考の解明に向けて—』未完成考古学叢書 7
- 稻田 孝司 1972 「縄文式土器文様発達史・素描(上)」考古学研究18—4
- 黒坂禎二他 1985 『北塙屋(II)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第48集
- 黒田 玲子 1992 『生命世界の非対称—自然はなぜアンバランスが好きか—』中公新書1097
- クロード・レヴィ=ストロース 1972 『構造人類学』みすず書房
- クロード・レヴィ=ストロース 1976 『野生の思考』みすず書房
- クロード・レヴィ=ストロース 1990 『やきもち焼きの土器つくり』みすず書房
- 小杉 康 2006 「土器造形の発達とカテゴリー操作」「心と形の考古学—認知考古学の冒険—」同成社
- 小杉 康 2007 「物語性文様—縄文中期の人獸土器論—」『縄文時代の考古学11』同成社
- 小林達雄・小川忠博編 1988~1989 『縄文土器大観1~4』小学館
- 小林 達雄 1994 『縄文土器の研究』小学館
- 斎藤 弘道 1996 「東関東の様相」「第9回縄文セミナー 後期中葉の諸様相」縄文セミナーの会
- 桜井 準也 2006 「土器の文様区画と認知構造—文様の割付と「うつわ」の認知の問題をめぐって—」『心と形の考古学—認知考古学の冒険—』同成社
- 桜井 準也 2008 「文様の割り付け」『縄文時代の考古学7』同成社
- 笹森健一他 1985 『貝塚山遺跡発掘調査報告書—第2地点—』富士見市遺跡調査会調査報告第24集
- 嶋崎弘之他 1979 『ハケ遺跡C地区』上福岡市ハケ遺跡調査会
- 嶋崎 弘之 2004 「縄文人の方位観」帝京大学山梨文化財研究所研究報告第12集
- 嶋崎 弘之 2010 『縄文人の思考』埼玉考古第45号
- 庄野靖寿・立木新一郎 1967 「岩槻市裏慈恩寺遺跡発掘調査報告」埼玉考古第5号
- 鈴木 公雄 1970 「後・晚期縄文式土器におけるDesign Systemについて」人類学雑誌78—1
- 鈴木 公雄 1982 「縄文波状縁土器の文様配置について」史学雑誌52—2
- 鈴木 敏昭 1979 「縄文土器研究の新視覚」埼玉考古第18号
- 鈴木 敏昭 1980 「諸磯b式土器の構造とその変遷」土曜考古第2号
- 鈴木 敏昭 1983 「縄文土器の施文構造に関する一考察—加曾利E式土器を媒介として—」信濃35—4
- 鈴木敏昭他 1983 『台耕地(I)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第27集
- 鈴木敏昭他 1984 『茶屋遺跡』白岡町埋蔵文化財調査報告書第2集
- 鈴木 敏昭 1987 「加曾利E II式土器における施文構造の変容について—埼玉県北西部を中心に—」『埼玉の考古学』新人物往来社
- 鈴木 敏昭 1989 「諸磯b式からc式への土器変遷」埼玉県立博物館紀要15
- 鈴木 敏昭 2006 「諸磯c式土器に関する一断想」『埼玉の考古学II』六一書房
- 鈴木保彦他 1977 『下北原遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告14
- 関根慎二他 1987 『糸井宮前遺跡II』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 高林 均他 1974 『平山橋遺跡』東京西線及び北八王子編電所遺跡調査会
- 谷井 彪他 1974 『坂東山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第2集
- 谷井 彪 1977 「勝坂式土器の文様構造について」埼玉考古第16号
- 谷井 彪 1979 「縄文土器の単位とその意味」古代文化31—2・3
- 友枝 啓泰 1974 「ペルー・モンターニャのピーロ族の土器」民族学研究39—2
- 友枝 啓泰 1975 「ペルー・モンターニャのピーロ族の文様」民族学研究40—1
- 中沢 新一 2004 『対称性人類学』講談社選書メチエ291
- 中沢 新一 2006 『芸術人類学』みすず書房
- 中島 宏他 1977 『金堀沢遺跡』入間市金堀沢遺跡調査会
- 橋本 勉他 1990 『雅楽谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第93集
- 藤沼 邦彦 1981 「東北地方」『縄文土器大成4』講談社
- 細田 勝他 1989 『中三谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第76集
- 宮崎朝雄他 1972 『加倉・西原・馬込・平林寺』埼玉県遺跡調査会報告第14集
- 横山悦枝他 1974 『北八王子西の遺跡』東京西線及び北八王子変電所遺跡調査会
- ロジェ・カイヨワ 1976 『反対称—右と左の弁証法—』思索社
- 渡辺 公三 2009 『戦うレヴィ=ストロース』平凡社新書498
- 山内 清男 1936 『日本考古学の秩序』ミネルヴァ1—4
- 山内 清男 1937 『縄紋土器型式の細別と大別』先史考古学1—1

「さきたま」の地名由来

埼玉古墳群の主は、「笠原氏」のようだ。『日本書紀』安閑天皇元年に勅発した武藏国造争乱記事には、「武藏国造笠原直使主與小杵相争国造」とある。武藏国造歴代の墓所が当古墳群であるとすればの話ではあるが……。そして、もう一つの根拠は、稻荷山古墳出土の鉄劍銘文による。これによれば、礎櫛の被葬者乎獲居の父が「加差披余(カサヒヨ or カサハヨ)」と記されており、笠原と加差披余が同一名称となる可能性を含んでいる。それでは、なぜ鉄劍や争乱記事に「前玉(サキタマ)」が登場しないのかということであるが、その答えは簡単で、未だその地名が成立していないからである。

「さきたま」の名称由来には、2つの説がある。先(前)多摩説と幸魂(さきみたま)説である。先(前)多摩説は、南から見れば「多摩」の先に存在するというものである。しかし多摩の先には多くの地域が存在しており、当地がその地として特定される理由はない。なあ、「さきたま」は「前玉」であり「先」とは、方向的に逆である。つまり、これは方便的な説と言わざるを得ない。それでは幸魂説は如何であろうか。幸魂とは、「幸福をもたらす神」ということであろうが、何を以ってこの地の名称にしたのであるのかその根拠が分からぬ。なあ、敏達天皇は575年に幸玉宮に遷宮している。これと当地の「埼玉」が関連するとは考えられないが、「さきたま」が当地独自のものでないことがわかる。

ところで「前玉」は、神亀3年(726)の山背国戸籍帳(正倉院文書)に「武藏国前玉郡」と見えるのが初見である。同じ頃、万葉集にも「前玉(佐吉多方:サキタマ)」の文字が見える。そして、10世紀になると「埼玉」の文字とともに「佐伊太末(サイタマ)」と記され・読まれたことが和妙類聚抄によってわかる。

前多摩説も幸魂説も根拠に乏しいように思える。つまり「前玉」の地は、行田市埼玉であり、そこには埼玉古墳群が存在する。「前玉」の名称は、この埼玉古墳群の存在に由来するものと考えたい。この地は、その後「前の(偉大な)魂が鎮められている場所」として認識されたのではないだろうか。そこからこの「前の魂(サキノタマ)」を「前玉(サキタマ)」として表現し、それが地名に転化したのではないだろうか。埼玉古墳群が展開していた頃の当地の地名をあえて推定すれば、それは「笠原」であったのであろう。鎮魂の社は、在地の前玉彦命と前玉姫命を祀る式内社前玉神社である。

(中村倉司)



縄文時代の屋内調理と貯蔵穴

— 埋甕炉そして埋甕とCピットの用途 —

中村倉司

はじめに

むかし昔、ある遺跡で特異な炉に出会った。縦方向に半裁した2個体の土器を巧みに配した橢円形の埋甕炉であった。土器は女が作った。炉も女が関わった施設なのであろう。重厚で見事な手の込んだ素晴らしいこの炉は、男が女のために造ったのだろうか。炉を自慢する男とそれを優しく眺める女の姿が目に浮かんできた。埋甕炉に愛着を感じた瞬間であった。

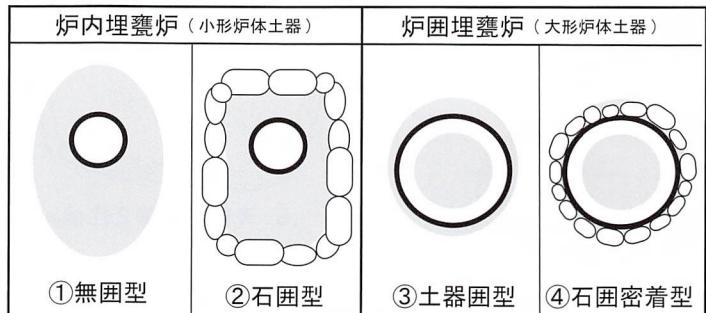
埋甕炉に思いを馳せる過程で、埋甕炉と埋甕には多くの共通点があることに気が付いた。形態的な特徴や出現時期、そしてその展開などである。従来、埋甕炉と埋甕の関連が論じられたことはなかった。何故ならば中期の埋甕は、入口部と目されるの南壁際にあるのに対し、前期のそれは炉に近接つまり住居跡の中ほどに設置されている。そのために時期を越えて埋甕が同一の俎上に載せられて、その関連性が追求されることはなかった。埋甕炉についても研究対象は、中期に限定されていた。

埋甕炉や埋甕が出現した前期初頭には、所謂Cピットも出現している。本稿では、これらの関連とその用途について考える。

1 埋甕炉

(1) 分類 (第1図)

埋甕炉は、主に炉体土器の大きさによって二者に大別される⁽¹⁾ (三上 1995)。一つは小形で炉内に取り込まれている炉内埋甕炉、他方は大形で炉を区画している炉囲埋甕炉⁽²⁾である。炉内埋甕炉は、炉の中央付近(中央型)とその周辺(偏在型)に埋設される二

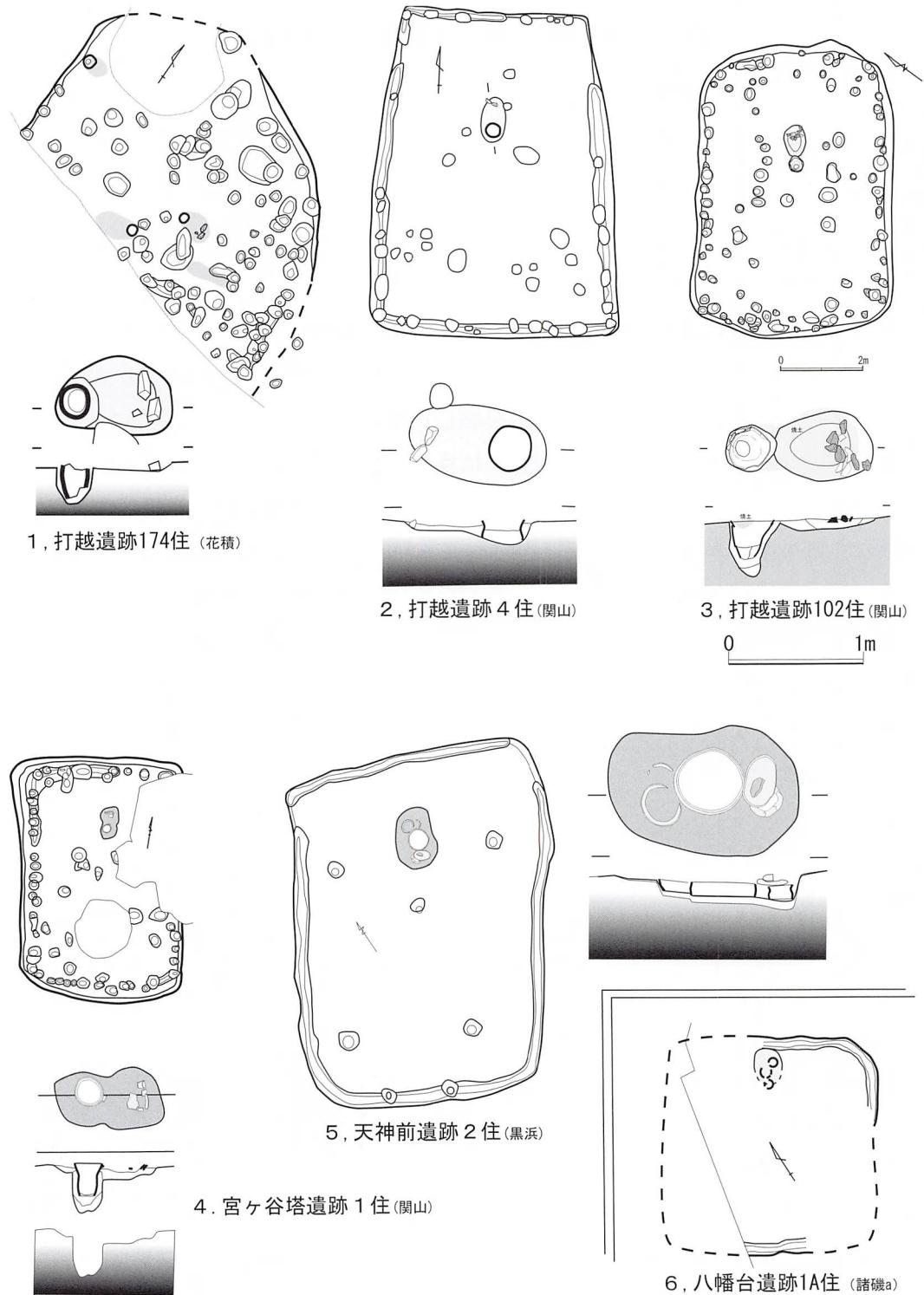


第1図 炉内埋甕炉と炉囲埋甕炉

者があるが、前期の炉内埋甕炉は偏在型に限定される。また、炉内埋甕炉の炉体土器は1基を基本とするが、複数埋設されるものもある。他方、炉囲埋甕炉は大形土器をそのまま利用したものと土器片を利用したものがいる。前者を単体円型、後者を土器片橢円型とする。

(2) 出現と展開

埋甕炉は、花積下層期に小形炉体土器を使用した炉内埋甕炉として出現する(第2図)。富士見市打越遺跡第174号住居跡例が最古の埋甕炉として捉えられるであろう。しかし、該期には打越遺跡第113・136・189住居跡例(荒井1978・83)のように炉と埋甕が近接したものや一部重複しているものがあり、埋甕炉と埋甕の識別が困難でもある。さらにこれらの炉や埋甕がそれぞれ複数存在しており、同時存在なのか否かの判断にも苦慮する。何れにしろ、該期の埋甕は、極めて炉を意識している。



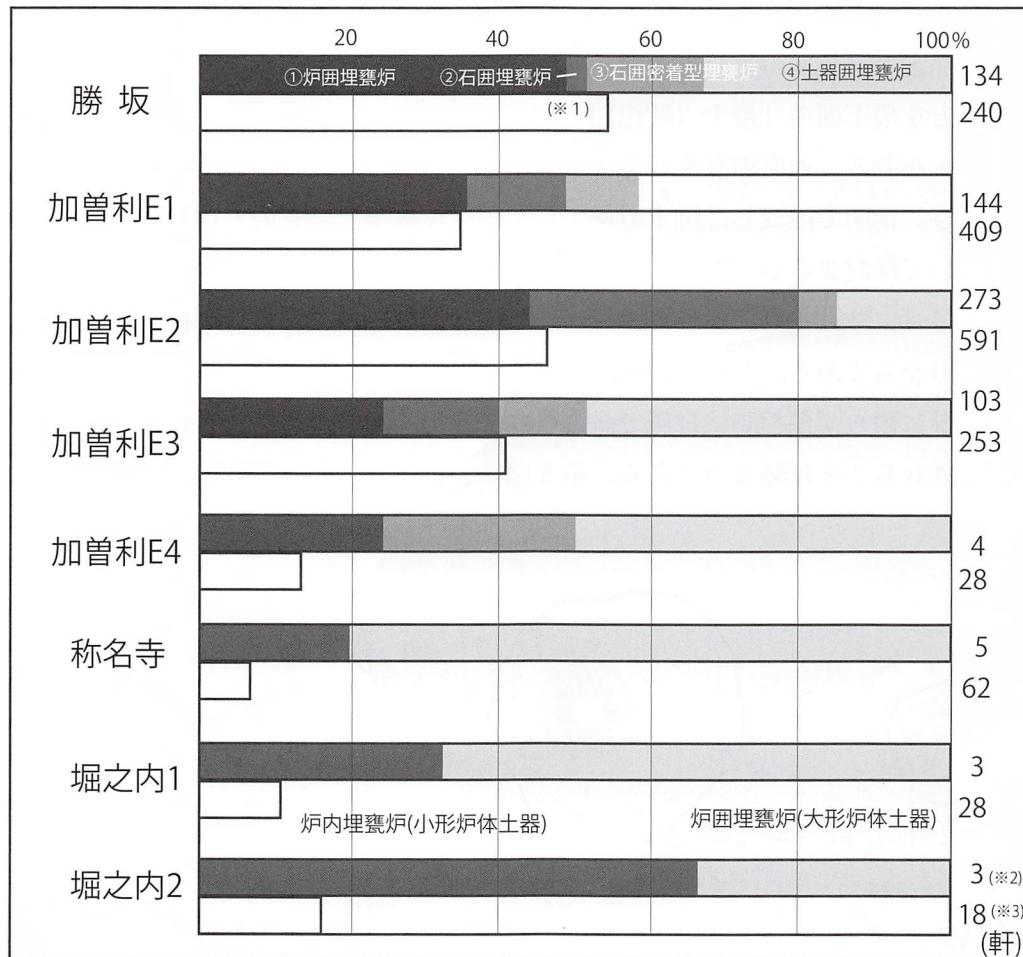
第2図 前期の埋甕炉

関山期には打越遺跡4住のように完成した埋甕炉も存在するが、同102住のように炉に接する埋甕も存在する。偏在型の炉内埋甕炉が主流であるが、深谷市宮西遺跡193住のように中央型も見られる。なお黒坂禎二是炉体土器について関山II期を「境にして完形土器が埋設されなくなる」(黒坂2005)と指摘している。

諸磯a期の小川町八幡台遺跡1A住では、3基の炉体土器が認められる(黒坂1999)。複数埋甕炉は、花積下層期にも存在していた。埋甕炉は、諸磯b期までには確実に存在するが、その後は勝坂

期まで類例に恵まれていない。

中期は、埋甕炉が盛行する。しかし勝坂期は地床炉が主体であり、埋甕炉が盛行するのは加曾利E I期になってからである。勝坂期から加曾利E I期までは、炉内埋甕炉（小形炉体土器）と炉囲埋甕炉（大形埋甕炉）は拮抗した数である。加曾利E II期では前者が8割を占めるが、加曾利E III期から加曾利E IV期には、後者が主体を占めるようになる（第3図）。



※1：グラフ下段は、炉体土器を有する住居跡の割合。※2：炉体土器を有する住居跡の数。※3：対象とした住居跡の総数。
※4：対象は埼玉県内、遺跡名は省略。

第3図 各種炉の変遷^(※4)

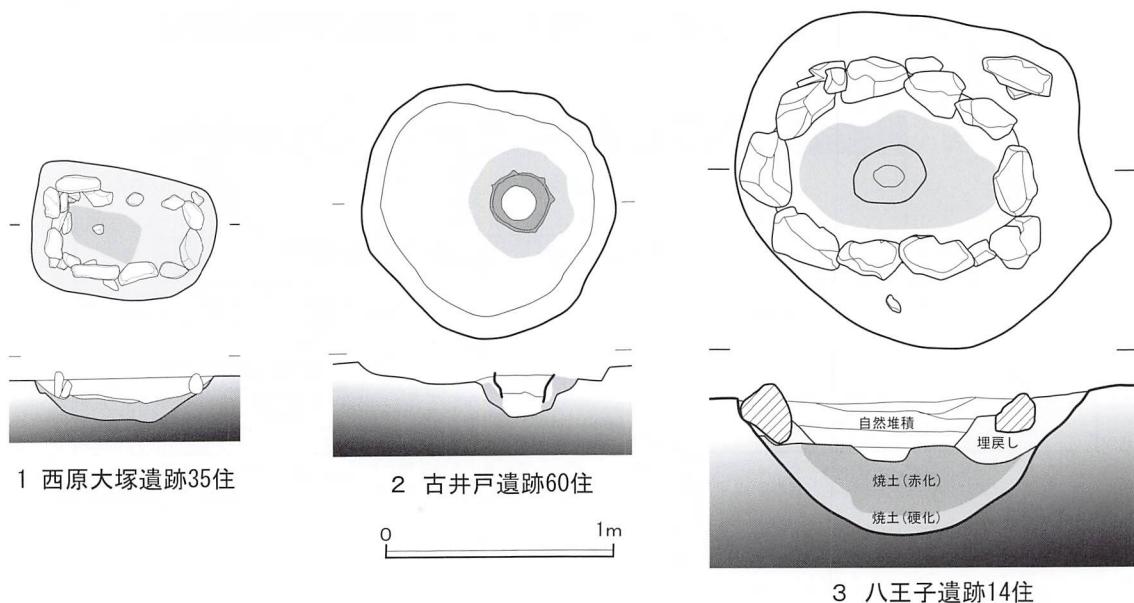
(3) 用途

炉体土器の用途を考える上で二つの重要なキーワードがある。焼土と灰である。まず、焼土について考える。三上徹也は、大形炉体土器と小形炉体土器の用途の違いを焼土の状態から類推した。氏によれば大形炉体土器内には焼土があり、小形炉体土器内にはそれが無いことから、前者はそこで焼成が行われ、後者はそれが行われていないと判断した。しかし実際には、大形・小形炉体土器にそのような焼土の在り方の相違はない。

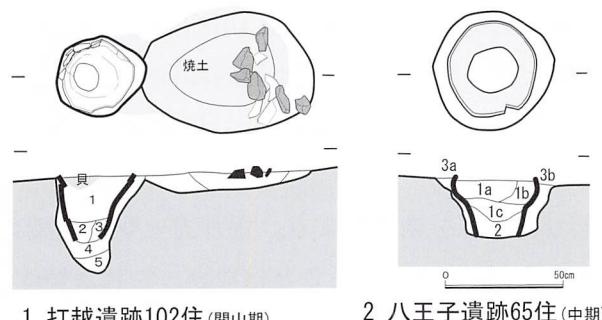
ここで炉体土器に関する焼土のあり方を見てみよう。掘り方と炉体土器の規模がほぼ同じの場合、それを取り上げた後に掘り方が焼土化していることはない。これは炉体土器内で燃焼行為が行われていないこと、乃至はそれが行われていたとしても土器外側の掘り方が赤化するほど激しいものではなかったことを意味している。一方、掘り方が炉体土器より大きい場合は、古井戸遺跡60住

例（第4図2）のようにその小形炉体土器の外側に焼土が認められる場合がある。あるいは石囲炉の石の下にも被熱痕跡や焼土が検出される例がある（第4図1・3）。このような場合、この炉は再構築したもので、これらの焼土はそれ以前の炉を使用していた時のものであるなどと説明されることが多いが、通常の煮炊きで赤化するほど被熱することはない。通常、炉には灰が充填されており、その上で煮炊きしても炉床が焼土化することはない。それに、屋内では焼土が生成するような強火では燃焼しないであろう。炉床に厚く存在する焼土や炉体土器の底部や掘り方に存在する焼土は、未だ屋根を架けない住居構築時に、炉を乾燥させる目的で空焚きした結果生じたものであろう。これらの焼土は、除湿効果を期待したものであろう。八王子遺跡14住例（第4図3）は、その場で燃焼が行われたことを最下面の「焼土（硬化）」の存在が証明している。その上の「焼土（赤化）」層は、最大厚さ30cmを計る。通常の煮炊きでは、どんなに激しく焼成してもこの深度まで赤化することはないと想定される。他所で焼成した焼土も使用して炉床を構築したものと理解したい。

次いで灰について検討するが、実はそれが検出されることはない。なぜなら「木灰の主成分である炭酸カリウムは水に溶けるし、炭酸カルシウムは酸に溶けるので骨粉と同様普通の場所では残らない」（今村1985）からである。しかし、炉内には灰が存在していたのである。そして、炉体土器の内部も大形・小形に限らず使用時には灰で満たされていた。そのため、炉体土器の内面に被熱痕跡が明確に確認されることは稀なのである。第5図は、炉体土器内が自然堆積と思われた前期と中

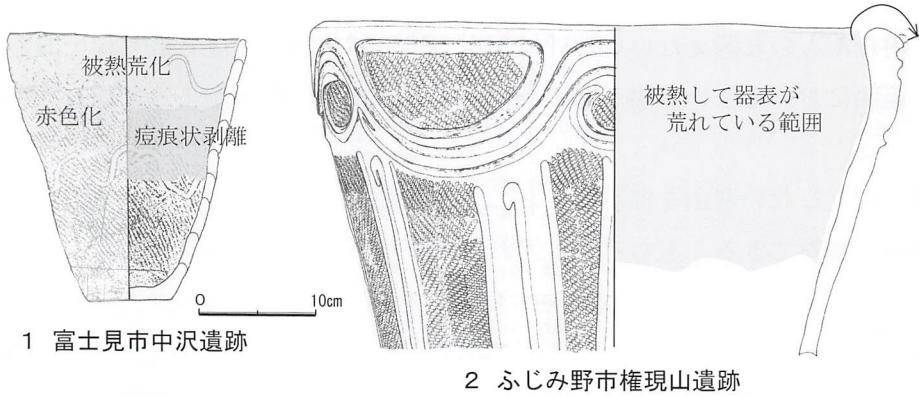


第4図 炉における焼土の在り方



第5図 埋甕炉の堆積土

期の例を示した。富士見市打越遺跡第102住例（第5図1）は、炉内埋甕炉ではないが、その周辺に焼土が及んでいることから埋甕炉と判断した。1層は自然堆積土、2～5層は、埋め戻されたものであろう。八王子遺跡65住例（第5図2）は、1層が自然堆積土、2・3層が埋め戻し土と判断した。つまり1層は灰が充填されており、それが消滅した後に流入したものと理解できる⁽³⁾。しかし、炉体土器の内部が被熱している例もある（第6図）。これは、灰の搔きだしによって、それが少ない状況で使用されたことがしばしばあったことを想定させる。



第6図 小形・大形炉体土器の被熱痕跡

炉体土器の使用方法について積極的な発言をしているのは、三上徹也である（三上1993・1995・1999・2006）。氏によれば炉体土器には、大形炉体土器と小形炉体土器があり、両者は用途が異なるという。一般的に大形炉体土器は炉を区画するための施設、所謂土器囲炉として捉えられている（炉区画説）。一方小形炉体土器は、煮沸土器を載せる施設（炉台説）と考えている。また、桐原健は種火を保存する施設、つまり種火保存説（桐原1965）を提唱した。

a 炉区画説（大形炉体土器）

大形炉体土器（大凡口径30cm以上）は、床面より数cm突出して埋置されており、炉を区画する意図で施設されたものと思われる。しかし、被熱範囲は炉体土器以外にも及んでおり、厳密に炉の区画を規定しているものではない⁽⁴⁾。

ところで、三上は大形炉体土器内には焼土が存在することから、この中で燃焼が行われたとした。しかし、この中に土器を設置すると燃料を入れるスペースが無くなり煮沸することは困難となる。そこで苦肉の策として煮沸する土器を吊して下から煮沸すと考えたようである。しかし、煮沸土器を吊すことと炉体土器の存在理由に必然的な関連はない。単なる地床炉でも良いのである⁽⁵⁾。

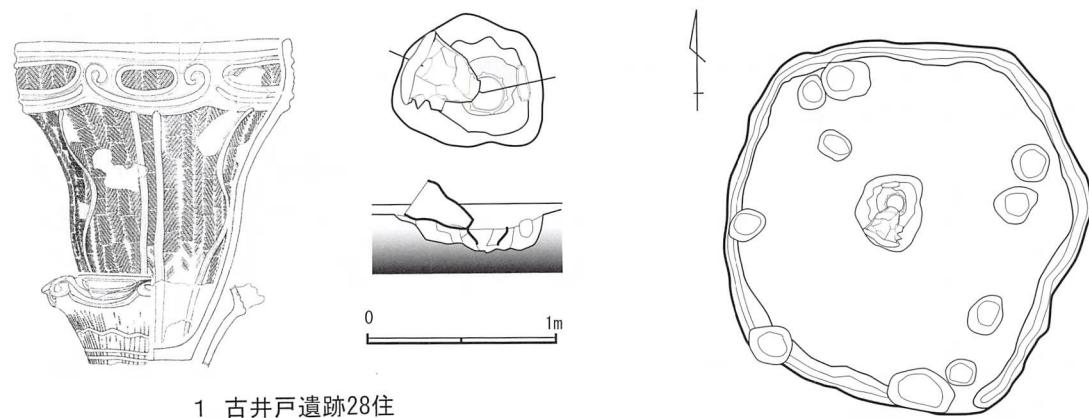
b 炉台説（小形炉体土器）

三上は、小形炉体土器を炉台と考えている。それは、炉体土器内に焼土がないこと、つまりそこでは焼成が行われなかつたとした⁽⁶⁾。そこから「据える」土器の存在を想定した。また、細田勝も宿東46住に埋設された小形炉体土器の説明において「この種の『炉体土器』に関しては、燃焼主体部を囲うという本来的な意味合いよりも、火にかけた煮沸具=土器の底部を安定させるための支脚の機能を想定するのがより自然ではあるまいか」（細田1998）とした。ここで言う炉台説とは、あくまで煮沸のために煮沸具を据え付けるための台という認識である。実際、東松山市岩の上遺跡6住（栗原1973）や本庄市古井戸28住（宮井1989）居跡では、小形炉体土器に大形深鉢が載せられた状態で出土している（第7図）。この二例から見る限り煮沸器は、炉体土器にすっぽりと嵌り込み、自立よ

りも遙かに安定して正立することができる。これは、小形炉体土器の使用状況である。しかし、土器の加熱部を炉体土器が覆う事から煮沸には不向きであることも事実である。

ところで、主炉に接して小形土器を埋設した施設が多々見られる（第8図）。さいたま市鴨谷遺跡30住例は、その1例である。伊奈町原遺跡6住例は、土器は埋設していないが焼土が存在している。富士見市中沢遺跡16住例は、礫に分割された炉の縁辺に土器が埋設されている。これらは、煮沸後の保温・安定設置のための炉体土器と思われる。なお、深谷市東光寺裏5住や伊奈町志久4住では、炉に近接して胴部を欠失した土器が置かれた状態で出土している。本例も煮沸された土器の置き台として使用したものと考えたい（第9図）。但し、炉体土器の口径と被煮沸土器の接する部位の径が適合する範囲においてという事が必須条件である。この範囲を超えると却って不安定になろう。

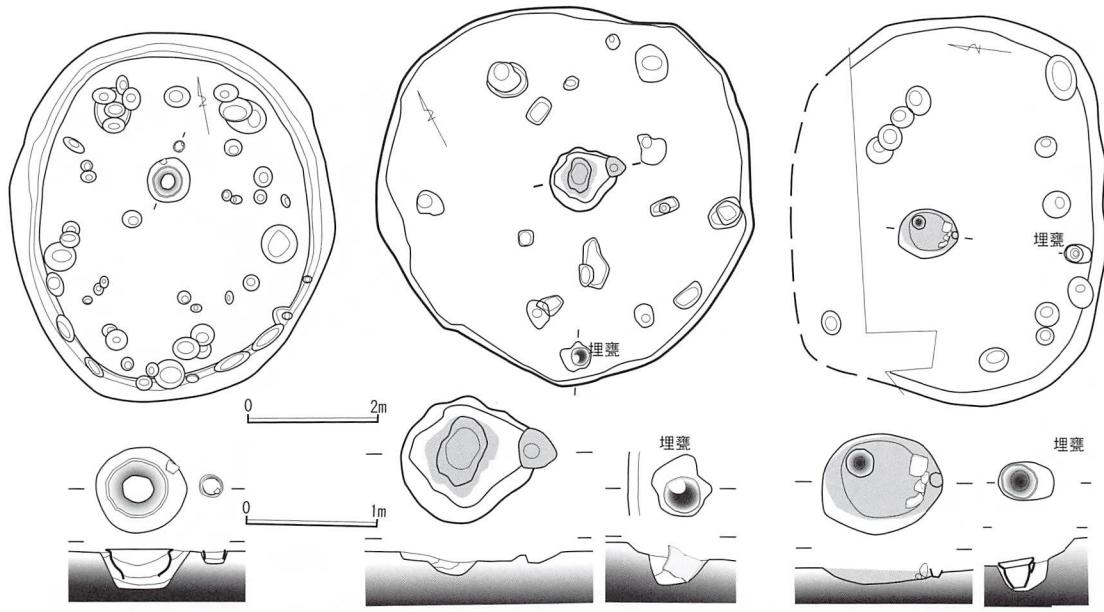
ここで炉台説が成立しない理由を提示しておこう。①炉台であるならば、炉体土器を倒立して設置する方が効率的に加熱できる。もちろん、割れ口が平坦であることが条件である。正立した炉体土器に据えると言うことは、被煮沸土器が入れ子状になる。つまり、被煮沸土器の底部は、炉体土器にすっぽり収まることになり、これでは直接加熱できない。②また毛呂山町まま上遺跡5c住例（金子2001）のように口縁部に突起のある炉体土器では、土器を安定して設置することができない（第10図）。③炉台であるならば、必要以上の器高を必要としない。また置けば済むのであり、埋め込む必要はない。④炉の縁辺に埋置された偏在型の小形炉体土器の存在は、一方向からのみの加熱であり煮沸効率は極めて悪い。⑤また、小川町八幡台1住（栗島1999）のように小形炉体土器を中心



1 古井戸遺跡28住



2 岩の上遺跡6住
第7図 炉台として使用した例

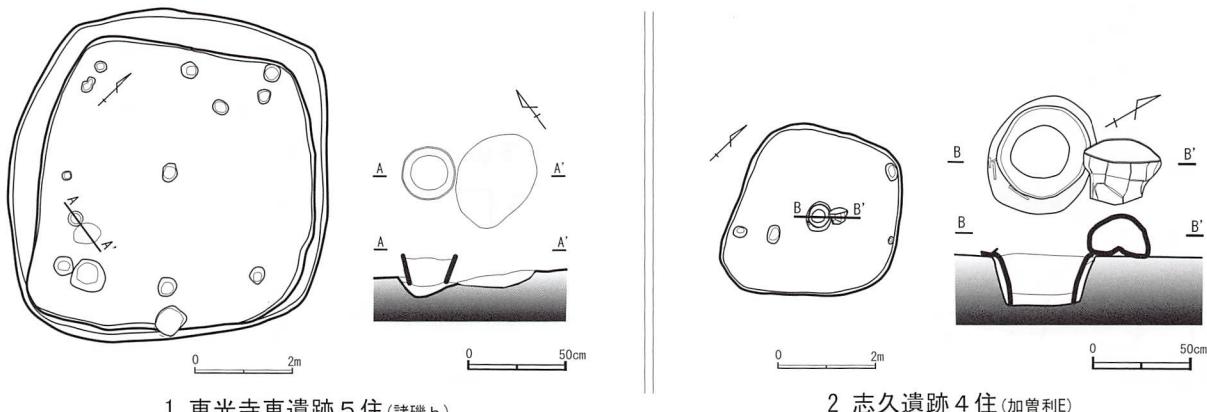


1 桐谷遺跡 30 住（加曾利 E）

2 原遺跡 6 住（加曾利 E）

3 中沢遺跡 16 住（?）

第8図 爐と付属炉体土器



1 東光寺東遺跡 5 住（諸磯 b）

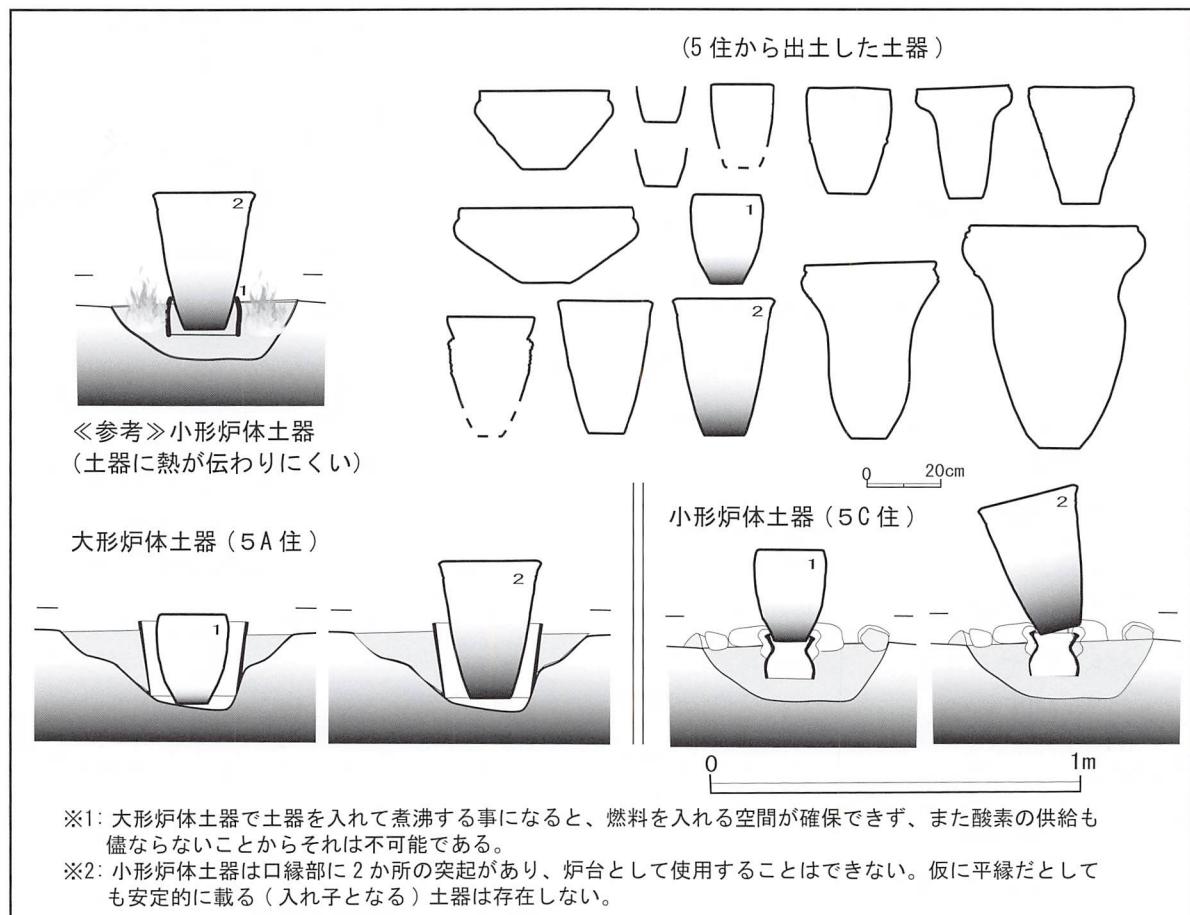
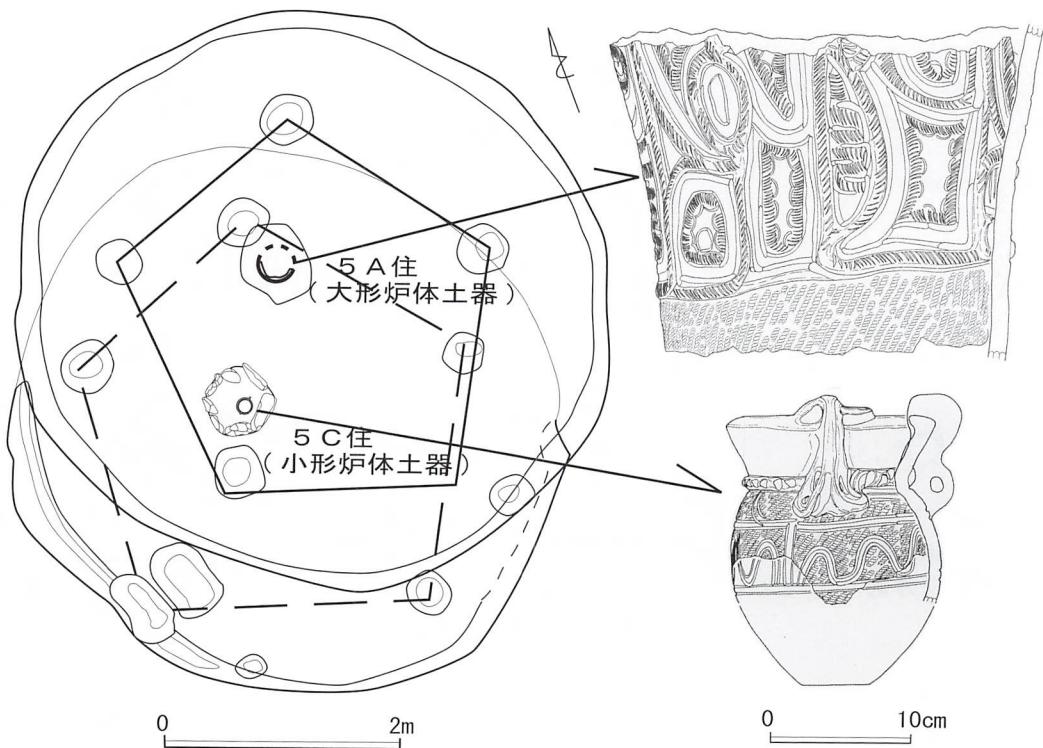
2 志久遺跡 4 住（加曾利 E）

第9図 爐と置き台

央に傾けて設置しているものも散見され、これでは炉台としては不都合である。⑥次いで中期の炉台（一般的に「器台」と称されることが多い）の存在である。炉台として特化した器種が存在する訳であるから、同一の用途に別種の炉体土器を炉台として使用するのは不自然である。炉体土器を炉台として使用するならば、伏せて底部を利用すれば事足りる。やはり炉体土器は“容器”としての意味があるのであろう。

c 種火保存説（小形炉体土器）

本説の提唱者は、桐原健であろうか。氏は「中期初頭八軒の住居址中、七軒までが深鉢土器を埋め込んで火壺とした埋甕炉で、残った一軒は規模の小さい石囲炉……。炉に使用されている深鉢形土器の口径は二十センチ程度……」（桐原1965）と記している。炉体土器を「火壺」と考えた根拠に民俗例を参照しているのでそれを紹介しておこう。「囲炉裏の一方から大きな薪を入れ、一方からそだ類を入れて交叉させて焚いているが、その交叉する下におき（火種）をいっている。この囲炉裏の中の火壺に相当するものが埋甕炉ではなかつたろうか」（桐原1965）とした。その後も「縄文時代中期に見られる埋甕の性格について」（桐原1967）に「火壺」の用例がみえる。この火壺が



第10図 まま上遺跡5住の埋甕炉の使用想定図

火種保存説の先駆けになった。本説は、その後多くの報告書で採用され、同様な説明がなされている⁽⁷⁾。

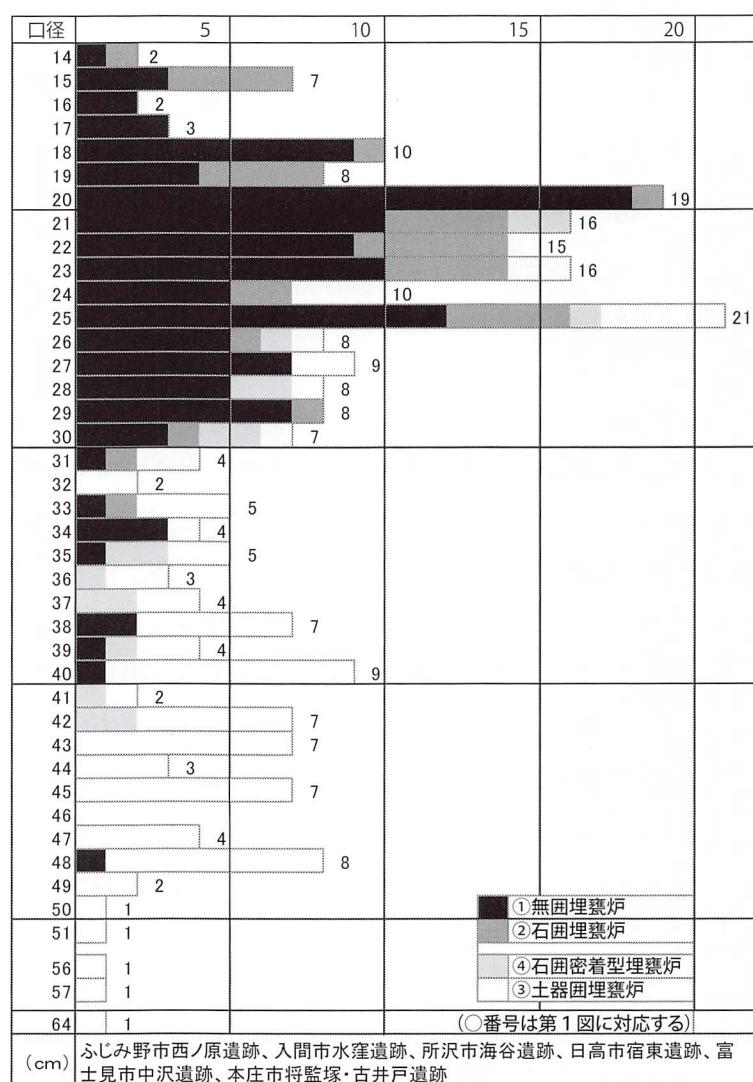
該期に発火は容易ではないとの仮定から種火保存を想定し、その役割を炉体土器に仮託したのである。それでは埋甕炉が存在しない場合、種火は保存できないのであろうか。否である。土器内に火種を保存する必然性は無いが、保存することは可能であり、それを否定するつもりはない。種火は、灰中の一定の深さに埋置しておけば翌朝まで消えることはない。しかし、その管理には技を必要とするようである。マッチなどの簡易な発火具が採用される以前では、火種の保存は主婦のたしなみであり、隣家にそれを借りに行くのは恥ずべき行為であったという（飯島1985）。

(4) まとめ

炉体土器には、大形と小形がありそれぞれ機能が相違すると捉えられていた。前者はa炉区画説、後者はb炉台説・c種火保存説である。しかし小形炉体土器（第11図①・②）と大形炉体土器（第11図③・④）は、感覚的で便宜的なものにすぎず、その法量推移は漸移的なものである（第11図）。つまり両者を明確に分類することはできない。

更に、上記の各説についても成立しないことは前述したとおりである。そこで本稿では、主に蒸焼調理に特化した施設であるとの説を提示したい。灰中に対象物を埋め、その上で行う燃焼や熾き火による熱を利用して調理する方法を本稿では広義に理解して蒸焼調理と称することにする⁽⁸⁾。

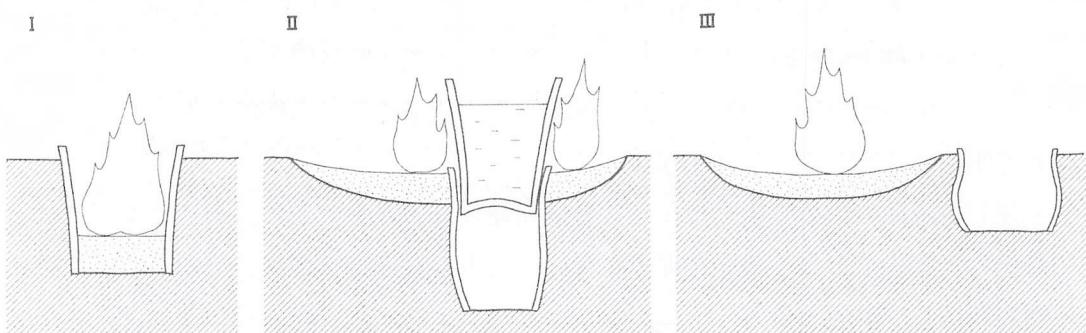
炉体土器は大形・小形とも一般的に内部はそれほど被熱していない。そして筒抜けのその炉底が被熱していることもない。それは、内部に灰が満たされていたからである。この灰で満たされた炉体土器内で、蒸し焼きが行われたのである。その対象は、木の実や芋類などの植物食料や肉類などであろう。蒸し焼きは、灰中に埋めその上で燃焼させれば可能な簡便な調理方法である。敢えて炉体土器を必要とするものではないが、その存在は調理対象物の位置が特定できるメリットがある⁽⁹⁾。それでも埋甕炉存在の第1の理由は、「流行」という時代の要請に基づくものと考えたい。炉体土器の主要な用途は、蒸焼調理と考えるが、種火保存や加温・保温用としての炉



第11図 炉体土器の口径分布

台としての可能性もあり、蒸焼調理施設に限定して考える必要はない。なお、複数の炉体土器を有する埋甕炉は、旧炉体土器が遺存したと報告される例があるが、同時存在・使用の可能性も考慮しなければならない。

ところで、横田光男は前期の炉と埋設土器の位置関係を以下のように分類し、その用途や使用方法について言及した（横田1984）。分類は「I、炉体 II、埋設土器が炉の堀り込みの中にある。 III、埋設土器が炉に隣接する。 IV、埋設土器が炉から離れている。または炉に無関係に存在する（IVは未図示）」（第12図）の4種である。そして、Iは埋設土器の「中で火を焚いたもの」、IIは器台、IIIは炉の付属施設と捉え火種壺としての用途を推定している。IVは中期の埋甕に続くものと捉えた。



第12図 炉と埋設土器使用推定復原図（横田1984）

2 埋 甕

(1) 分 類

埋甕は、埋設場所によって屋内と屋外に大別されるが本稿で扱うのは屋内埋甕に限定する。使用される土器の部位や埋設方向（正立・倒立）などは多様である。

(2) 出現と展開

埋甕は早期末には出現するのであろうか。小川町越場遺跡では、住居と認定されている訳ではないが1号竪穴状遺構（黒坂1999）で伏甕が検出されているが、現時点では富士見市打越遺跡73住などで見られるように花積下層式期に出現すると捉えておく。その後、前期には各期を通じて散見する。該期の埋甕は、埋甕を有するCピットや炉体土器とも区別しがたい。つまり埋甕は炉を意識した住居の中央付近にあり、壁際には設けられることはないが、やがて炉から離れて周辺に移動する傾向にある。また、複数埋甕も顕著に存在する（第13図）。

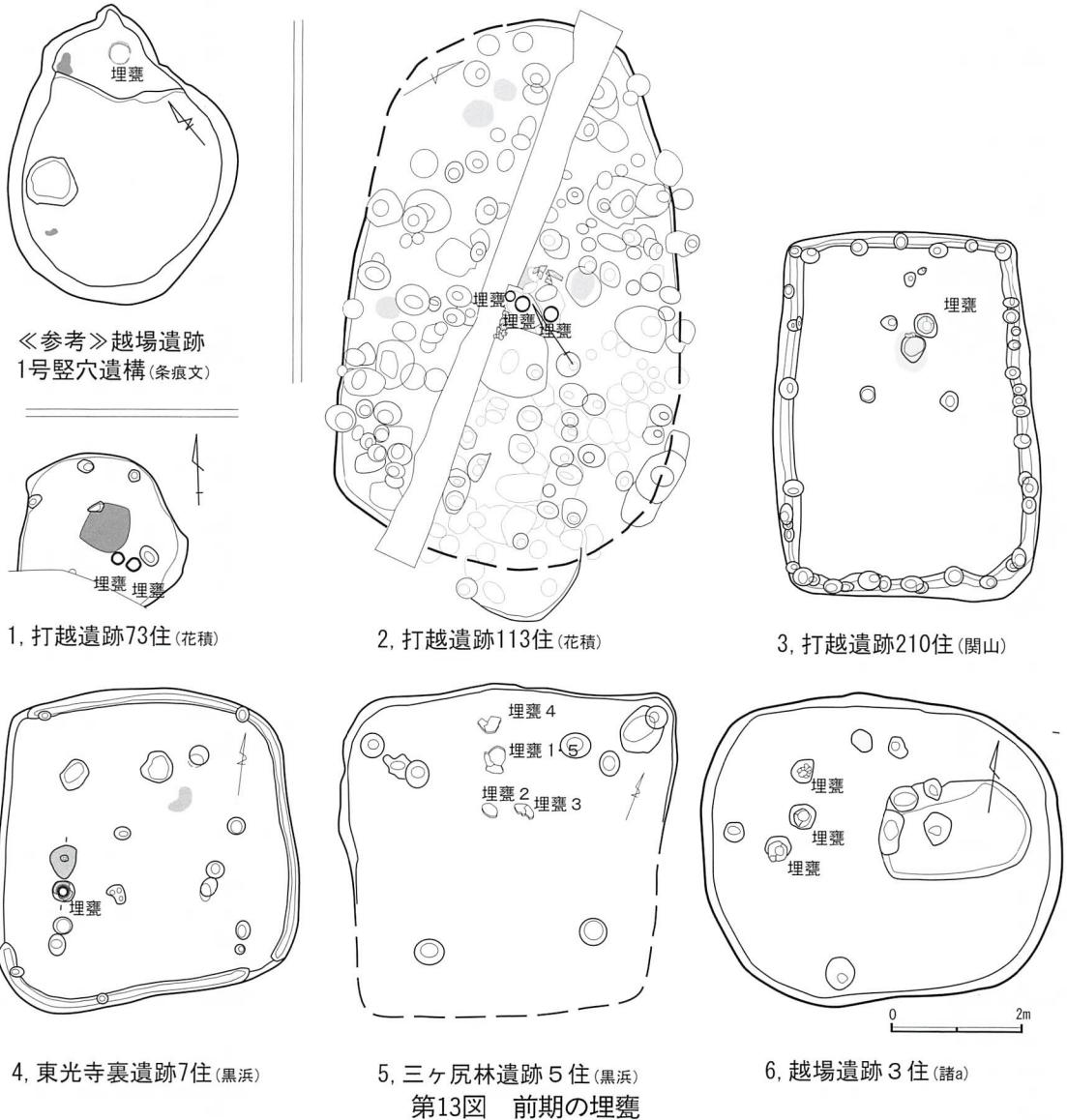
中期前半の状況は不明であるが勝坂期末には再び出現しその後盛行するが、後期堀之内期には消滅する。桐原健は、屋外埋甕が中期後半に屋内に取り込まれ、奥壁部埋甕・炉辺部埋甕を経て出入口部埋甕が成立すると考えた（桐原1983）。確かに中期では炉の正面、つまり多くの場合は南壁際に設置されることが多いが、厳密に言うならば、中央よりやや偏った壁に埋置されることが多い。

(3) 用 途

前期の埋甕については検討されることは無かったが、中期の埋甕には長い研究の歴史がある。第1表は、埋甕の用途に関する説をまとめたものである。なお各説は、それぞれ埋甕に対する概念が相違することをお断りしておきたい。

a 貯蔵施設説

埋甕は、その存在が認識された戦前の研究では、食料や生活資材の貯蔵施設と考えられた。大場磐雄は「住居址に附属する設備であって、床面の一隅またはやや離れた同一床面に、口を上にして甕形土器を埋め、時には扁平な石を以て蓋をした場合等であった。これは主に生活に関連した遺構で、食物等の貯蔵庫とでも解し得る場合が多く」(大場1955)としている。宮坂光昭も勝坂期には湿度を避け乾燥に適した食料は「鍔付有孔土器」、一定の温度と湿度を必要とするものは「立坑」に貯



氏名	発表年		用途				備考	文献
	西暦	和暦	貯蔵	骨壺	胎盤収納	他		
鳥居 龍藏	1924	大正13		甕棺				『諏訪市史』
八幡 一郎	1932	昭和7	貯蔵施設					「下総姥山ニ於ケル石器時代遺跡貝塚ト其ノ貝層下発見ノ住居址」『東京帝国大学理学部人類学教室』
後藤 守一	1932	昭和7	食物	小児甕棺?				「船田向石器時代住居址」『東京府史蹟保存物調査報告書』第10冊
谷川 磐雄	1933	昭和8	食物・その他				・食物・その他	「南伊豆高石器時代住居址の研究」 『考古学研究録第1号 石器時代の住居跡』
八幡 一郎	1940	昭和15	貯蔵施設	棺			・両説併記	「日本先史人の信仰の問題」『人類学先史学講座』

第1表 埋甕の用途に関する説の推移 (1)

氏名	発表年		用途				備考	文献
	西暦	和暦	貯蔵	骨壺	胎盤収納	他		
宮坂 英式	1950	昭和25	(否定)			呪術的なもの	・貯蔵施設説に疑問・呪術的効果を祈願する思惟の処置	「八ヶ岳西山麓与助尾根先史聚落の形成についての一考察（上）・（下）」『考古学雑誌』36-3・4
大場 磐雄	1955	昭和30	貯蔵施設	幼児甕棺			・両説併記・逆位埋甕のみ幼児埋葬・骨壺説は屋外埋甕から類推。	「主要縄文式竪穴の考察」『平出』朝日新聞社
宮坂 英式	1957	昭和32	○	○			・貯蔵施設説に疑問	『尖石』茅野市
宮坂 光昭	1965	昭和40	食料貯蔵庫				・正位は短期、逆位は長期の保存施設	「縄文中期勝坂と加曾利E期の差」『古代』第44号
渡辺 誠	1965	昭和40		幼児深鉢棺			・民族例を参照。	「縄文時代における原始農耕の展開と埋葬観念の変質」『山梨考古学論叢』
桐原 健	1965	昭和40	貯蔵用？			宗教的	・貯蔵用とも考えられるが、底部を欠いたものなどがあり、宗教的な遺構と考えられる。	「住居址内における火使用の問題」『井戸尻』
桐原 健	1967	昭和42		幼児・胎児埋葬	胎盤収納		・逆位は骨壺、他は胎盤収納、民族例も参照。	「縄文中期に見られる埋甕の性格について」『古代文化』18-3
渡辺 誠	1967	昭和42		深鉢棺			・前年千葉県殿平賀貝塚で骨と歯を検出・民族例参照	「縄文時代における原始農耕の展開と埋葬観念の変質」『山梨考古学論叢』
渡辺 誠	1968	昭和43		深鉢棺				「埋甕考」『信濃』第20巻第4号 信濃史学会
渡辺 誠	1968	昭和43		深鉢棺			・弥生・古墳時代の類似遺構に注目し、空間を埋めようとした。	「埋甕考（続）」『古代文化』20-7
水野 正好	1969	昭和44		幼児埋葬			・供犠的性格を有する。	「縄文時代集落復原への基礎的操作」『古代文化』21-3・4
藤森 栄一	1969	昭和44		小児甕棺	胎盤収納		・両者とも有り得るとした。	『縄文の世界』講談社
渡辺 誠	1970	昭和45		幼児甕棺			・殿平賀貝塚で幼児骨を検出。	「縄文時代における埋甕風習」『考古学ジャーナル』40 ニューサイエンス社
木下 忠	1970	昭和45			胎盤収納		・「感染呪術」で補強。	「戸口に胎盤を埋める呪術」『考古学ジャーナル』46 ニューサイエンス社
木下 忠	1973	昭和48			胎盤収納		・民俗例参照・弥生時代以降の竪穴住居跡の貯蔵穴も胎盤収納とした。	「埋甕といわゆる貯蔵穴について」『信濃』25-8 信濃史学会
長崎 元広	1973	昭和48		幼児埋葬			・入口部に存在するものに限定。	「八ヶ岳南麓の縄文中期集落における共同祭式のあり方とその意義（上・下）」『信濃』第25巻第4・5号 信濃史学会
猪越 公子	1973	昭和48						「縄文時代住居址埋甕について」『下総考古学』5
神村 透	1974	昭和49			精霊封じ込め		・伏甕に限定。	「埋甕と伏甕—そのちがい—」『長野県考古学会誌』19・20 長野県考古学会
高山 純	1974	昭和49			ネズミの落とし穴		・胎盤収納説を否定。	「周辺地域の産屋・竹ベラ・胎盤処理方法」『どるめん』3号
佐々木藤雄	1975	昭和50			祭祀？			「埋甕論ノート」『異貌』三 共同体研究会
佐藤 洋	1976	昭和51		幼児埋葬			・分布の在り方から通婚圏にまで言及。	「縄文時代の埋甕習俗」『物質文化』27 物質文化研究会
水野 正好	1978	昭和53			犠牲獸骨壺		・建築儀礼	「埋甕祭式の復原」『信濃』第30-4 信濃史学会
田中 信	1982	昭和57			火の浄化			「埋甕形態論」『土曜考古』第6号 土曜考古学会
桐原 健	1983	昭和58			思惟的なもの		・出入口部に設けられた思惟的な性格。	「埋甕」『縄文文化の研究』第9巻
金子 義樹	1984	昭和59		幼児甕棺			・魂を迎い入れること、更には生産に結びついた思惟的な行為。	「縄文時代における埋甕についての一試論」『神奈川考古』第19巻
川名 広文	1985	昭和60			境界標			「柄鏡形住居址の埋甕に見る象徴性」『土曜考古』第9号 土曜考古学会

第1表 埋甕の用途に関する説の推移（2）

蔵したと捉えた。しかし加曾利E期には前者は消滅し、後者のみが埋甕に受け継がれたと捉えた(宮坂1965)。

b 骨壺説

昭和30年、大場磐雄は、逆位埋甕を幼児甕棺と考えたが、これは屋外埋甕からの類推であった。昭和40年、渡辺誠は民族例などを参考にして幼児甕棺説を唱え、昭和42年には殿平賀貝塚（遺跡）検出の住居内土壙から幼児骨と歯を検出したことに意を強くして、幼児甕棺説を力説した。しかし本例は、土壙内の幼児骨を大形土器片で覆う後期のものであり、中期に盛行する通常の屋内埋甕とは全く相違するのである。そして、1973年に長崎元広が本説を主張した最後の人物となる。なお、千葉県権現原貝塚では「住居跡を被覆する貝層があり人骨の保存条件を充分に満たしている。にもかかわらず、（埋甕からは）骨片すら発見できていない」（渡辺1991）という。

c 胎盤収納説

昭和42年、桐原健は逆位埋甕を甕棺、他を民族例を参照にして胎盤収納説を唱えた（桐原1967）。胎盤収納説は、昭和45年以降、木下忠が本説首謀者となる。民俗・民族例を駆使して補強に努めた。胎盤の検出は不可能であるために、状況証拠から類推するしかない説である。近世の民俗例と縄文時代との時間的な間隙が大きいが、それを埋める作業も行われた。つまり、縄文時代以降（弥生・古墳・平安時代）の竪穴住居跡で「入口部」・「貯蔵穴」と捉えられていたものを、それに充当させたのである（木下1973）。しかし、所謂該期の「貯蔵穴」は、①覆土が自然堆積であり、空洞のまま使用していたこと。②縄文埋甕とは、比較にならない程規模が大きいこと。③埋甕が存在しないことなどから、縄文埋甕と近世以降の胎衣壺との間隙を埋める資料とは考えられない。更に、弥生時代の貯蔵穴とした入口部のピットは梯子穴の蓋然性が高く、また古墳時代の貯蔵穴はその名のとおりの用途として間違いないような状況を示す遺構が多出している。よって、これらの「貯蔵穴」を胎盤収納説とする説は成立しない。

土間に胎衣壺を埋めるのは実在した習俗であり、歴史資料にも紹介されている事実である。木下忠が紹介した元禄5（1692）年編纂の『女重宝記大成』には、胎衣を土間に埋める様子が描かれ、更に次のような記載がある。「下々の産には、胎衣を薦につつみ路道に捨つるを……」とある。これによれば、胎衣壺を土間に埋めるのは「上流階級」の習俗であり、庶民は特定の容器を使用することも無く、曲物やザルあるいは古布に包んで墓や忌み場に埋めたようである。縄文時代の習俗が近世の「上流階級」のみに伝承していたとは考え難い。近世の「上流階級」の習俗が、近代の庶民まで波及していったと考えるのが自然である。

なお平城京から和同開珎5枚が入った胞衣壺とされる蓋付きの壺が発見された。同様な例は美濃国分寺門付近からも2例確認されている。また近世では蓋付き腕形土器が胞衣壺として確認されている（渡辺2009）。これらの胞衣壺は、口径10数cm程度の蓋付きの壺や腕などの小形品であり、縄文埋甕より遙かに小さな容器である（野代2008）。

(4) まとめ

第1表によれば1960年代中頃までは貯蔵施設説、そして'70年代以降は幼児骨埋納説・胎盤収納説が主流となり、現在では胎盤収納説が定説化している⁽¹⁰⁾。しかし多くの研究者が埋甕に関する論考を発表し続けたが、定説を容認するものは少なく、新説が多出した。しかし、その何れの説も支持されていない⁽¹¹⁾。

ところで、貯蔵施設説が否定された理由は幾つか存在する。宮坂英式は、「貯蔵を目的とするならば出入りの繁し南側よりむしろ他の位置に選定せらるべき筈である」(宮坂1950)とした。桐原健は「炉石や立石が再使用された時にも手付かずであった埋甕には、何か忌避される物質が納められていた」と推定し⁽¹²⁾、更に食料の貯蔵法は「床面上に積みあげてあるか、炉上の火棚に置かれるか、戸外にピットを穿って貯えるか」であり、埋甕を利用することはその法量から見て「合点がいかない」と貯蔵説を否定した(桐原1967)。

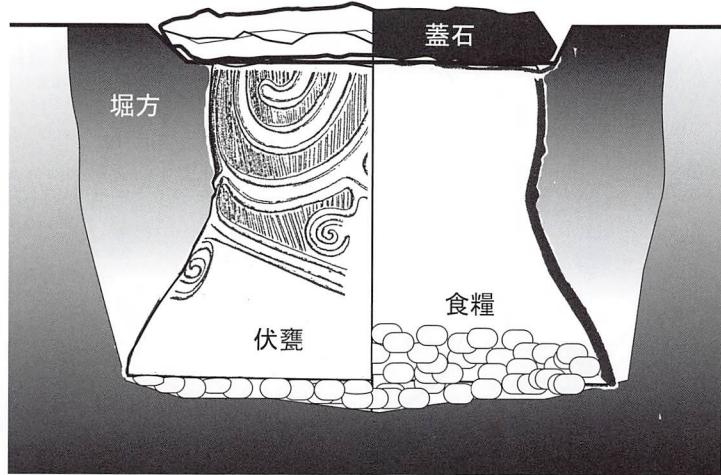
そして、1970年代前半に胎盤収納説・幼児骨埋納説は主流となった。特に、胎盤収納説は、桐原健や木下忠によって主張されて定説となった(桐原1967・木下1981)。胎盤収納説を肯定する論点の一つは、埋甕が入口部であることから踏まれることによってより強い再生を願うという民俗例からの援用にあるが、民俗例に見られる胎衣壺は、地中に埋められるものであり、容器が地上から見えることはない。しかし埋甕は、床面より突出して埋置されているのが通例である。蓋が存在するとなると、床面からの突出は更に高いことになる。このような状況で、埋甕を踏む事は適わない。また踏むことを意識して、胎衣壺を土で満たすならば可能であるが、埋甕の覆土は自然堆積であり、使用時には空洞であったのである。佐原眞も木下忠の民俗例を援用した状況証拠の羅列による推論に對して「百万の民俗例をもってしても（中略）組しがたい」(佐原1972)と検証方法に問題があるとした。井之口章次も胞衣を焼き物に入れて戸口に埋納するのは、多様な処理方法の一例であることを指摘している。つまり、中期の埋甕と胞衣壺との関連に疑義を呈されている(井之口1970)。それでも胎盤収納説は、定説化している。

縄文時代の出産風俗については知る由もないが「産小屋」が存在したことが予想される。「死」に関わる忌み・不淨の胞衣を「生」の住まいに埋置したのだろうか。しかも、床面から突出した目に触れる状態で埋置したのだろうか。民俗例では、通常の生活で実見できる状態で埋置した例は無いのではないだろうか。

胎盤収納説は長野県富士見町の唐渡宮遺跡出土のお産の情景を描いた土器、幼児骨埋葬説は「骨」の検出例がその根拠の一つになっている。しかし前者は完形品であり破損品を再利用する通常の埋甕とは相違するし、後者についても本稿で言う「埋甕」からの検出例は存在しないのである。これらの両説は、縄文人の出産や死への恐怖、乳児・幼児との惜別と再生願望⁽¹³⁾の情を推し量り、それに共感して流布・定着した説のように思える。更にまた、弥生時代の再葬墓・甕棺墓のように土器に遺骨・遺体を埋納する事実を、似て非なる縄文埋甕に投影させたと言えば言い過ぎであろうか。

もしこれが中期の埋甕と関連があるとすれば、その解釈に新たな視点を提供してくれるかも知れない。前期の埋甕は、中期のような南壁や入口部ではなく、炉に近接して存在している。つまり炉と埋甕は、一体化した施設として捉える事が可能である。埋甕炉とは、炉に取り込まれた埋甕である。

或いは、その逆で埋甕は、炉体土器が炉から独立して出現したのかも知れない。前期の富士見市打越遺跡102住の炉の状況は前述した(第5図)が、本炉は住居跡の奥壁側に設置されており、その奥側に数個の礫を枕石とし、手前には埋甕を配している。また埋甕は「炉とともに機能したもの」(小出1983)であり、両者が同時存在していたことがわかる。また、さいたま市深作東部遺跡10住では、炉に近接ないし縁辺にある埋甕が炉側に傾いている(黒坂1984)。これは、埋甕が炉を意識していることを示唆している。野村智も中期例ではあるが炉と近接する埋甕が「セット」であること



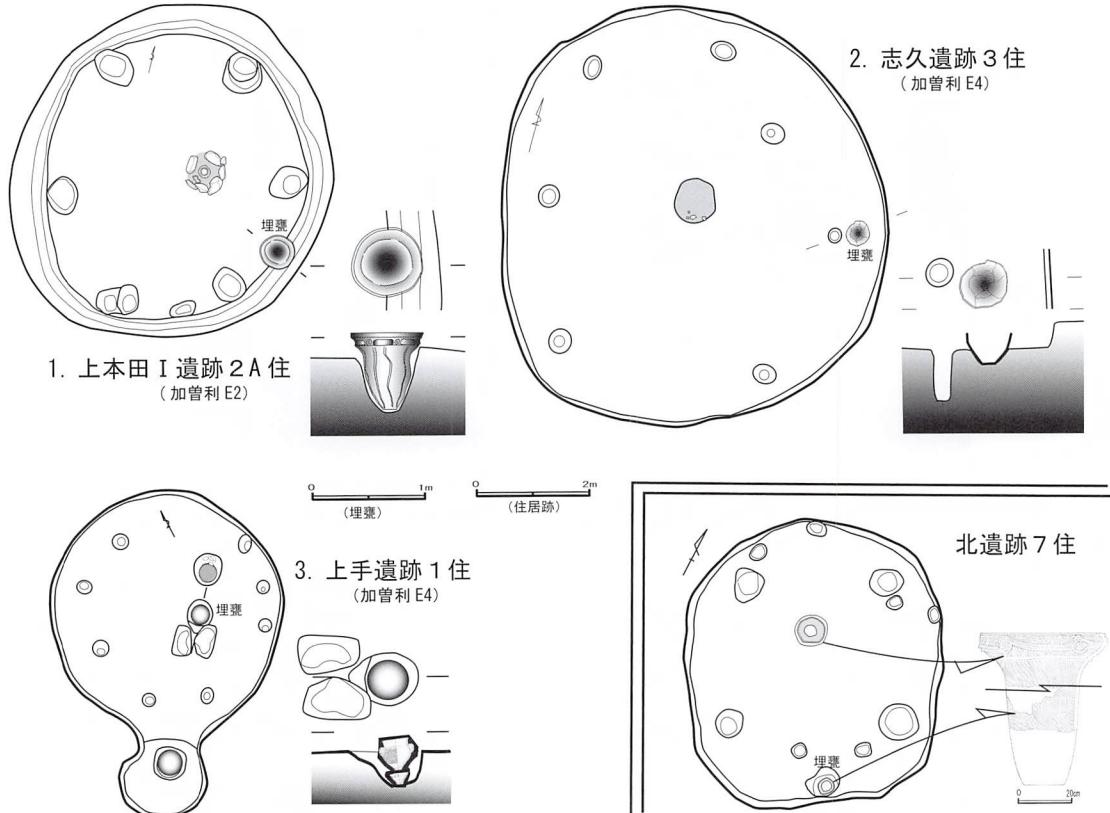
第14図 石蓋を持つ埋甕（佐藤1971より改変）

を指摘している（野村1992a）。更に後期柄鏡形住居跡例であるが、千葉県権現原遺跡では、柄鏡部の埋甕は斜めに埋納されており、「傾斜方向はすべて内側、中軸線方向で、ちょうど炉に向くかっこうとなる」（渡辺1991）という。第15図の柄鏡形住居の出入口部の土器も内側（炉側）に向いて埋設されている。

実際に東筑摩郡山形村洞遺跡2住の埋甕は空洞であったことを土屋長久の話として高林重水は紹介している（高林1971）。同様な例も多くあり、基本的に埋甕は、空洞の状態で使用され、更に通常は蓋が被せられていたのである。桐原健によれば、信州の中期例では「……正位埋甕にかかる施設として石蓋があるが、置かれる率は三割弱とけっこう多い。石蓋以外の付属施設としては（中略）植物質の炭化物で被われ」（桐原1983）ていたという。つまり、埋甕は、蓋を被せて使用していたことになる。石蓋例は、「長野県78例、神奈川県10例、群馬県6例」等と記され、埼玉県では未発見であるという（金子1984）。検出例の多寡は、礫採取が可能か否かの自然環境に規制されての結果であろう。なお、第14図は、茅野和田遺跡例（佐藤1971）から作図したものである。本遺跡を含む信州では、正立・倒立⁽¹⁴⁾を問わず石蓋を有する埋甕が顕著に認められる。石蓋を有する埋甕は、床面より若干深く埋められており、蓋石の上面が床面とほぼ等しくなるように設置されている。これは、Cピットに石皿を被せた状態と酷似する。

土器を利用した貯蔵も想定できる。貯蔵穴に比較して土器を自由に移動することができる利点がある。土器の倒立を防止するためには、伊奈町志久遺跡3住のように床面を少し掘り窪めたり（第15図2）、深谷市上本田I遺跡2A住のように土器をそのまま埋めることもあった（第15図1）。北本市上手遺跡1住例は、ピット内に石鏃などを入れた土器を納め石皿片で蓋をしている。更にその上に土器を納めている。このピットは炉に近接していることから、それに関わるものと想定される。この中の二つの土器は、常設されたものではなく移動可能なものであろう。何れにしろ使用できる土器が無ければ、それを利用して埋甕とした。埋甕の実態とは、そのようなものではないだろうか。

次いで、埋甕からの内容物の出土例を見てみたい。桐原健によれば、出入口部埋甕からは、石器・土器・骨片・炭化物の出土例があるという。更に、「炉辺部埋甕中に獸骨片の存することはつとに知



第15図 埋甕の設置状況

第16図 同一土器を利用した炉体土器と埋甕

られ……」(桐原1983) ているという。つまり、埋甕は、動物や植物の食料の地下貯蔵施設なのである⁽¹⁵⁾。前期の埋甕例ではあるが黒坂禎二は、小川町越場遺跡の埋甕(諸磯a)について「日常生活具あるいは食糧のストックなど頻繁な利用が考えられる」(黒坂1999)とした。

なお、北遺跡第7号住居跡(金子1986)では、同一個体の土器を炉体土器と埋甕に使用している(第16図)。これは、住居構築の時点での埋甕が必要な施設であったことを物語っている。これが直ちに骨壺・胎衣壺を否定するものではないが、本説を否定する状況証拠にはなり得るのではないだろうか。

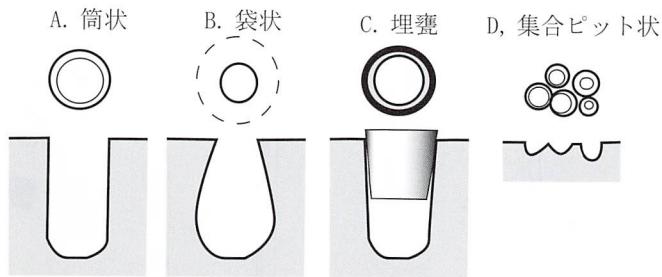
ところで、埋甕の埋設場所(住居跡中央か壁際など)・部位(口縁部や胴部など)・方法(正立か倒立など)・種類(器種や文様要素など)などに何らかの意図を読み取ろうとする見解が多いが、それには大きな意味を見出すことができない。

以上のことから埋甕は、主に食料を貯蔵・保管・保存するための施設であると結論する。

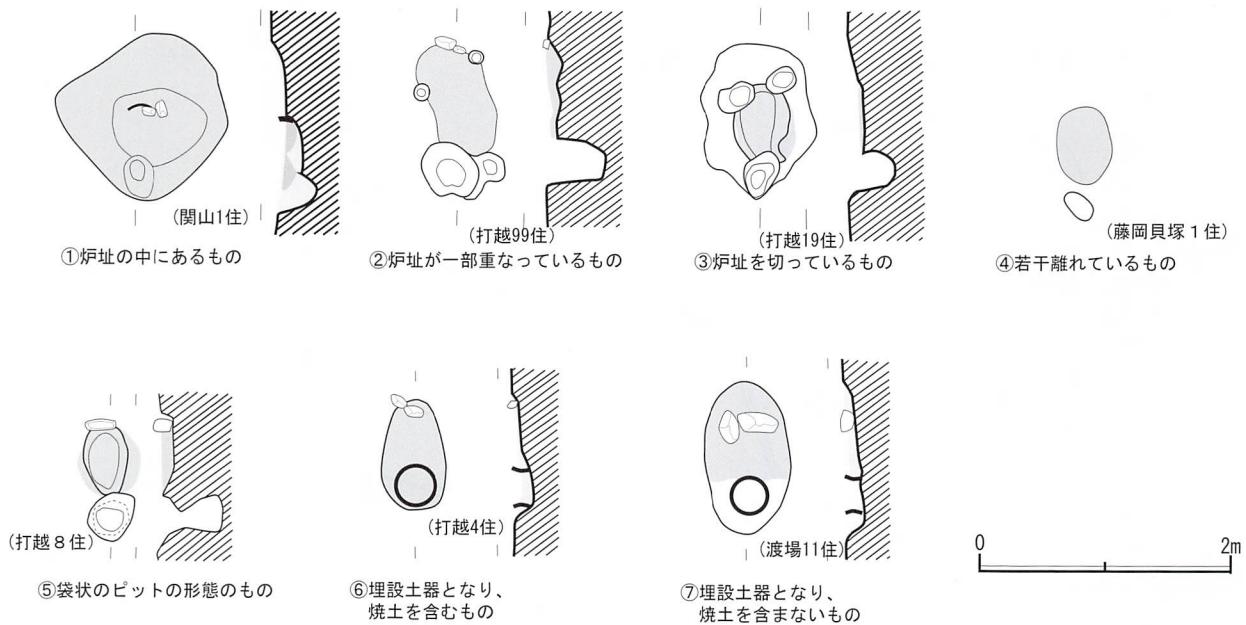
3 Cピット

(1) 分類

笠森健一は、縄文前期の住居復元を試みる作業の中で、炉と関わる特異なピットの存在に気付いた。所謂、Cピット⁽¹⁶⁾である。関山貝塚第1号住居跡の特徴の一つとして「炉址に重なってピットがある。これをCピットとする」(笠森1981a)としたのが初現である。そして、「形状については、埋甕、柱穴状、袋状、集合ピット状のもの、等々である」とした(第17図)(笠森1981b)。氏の分類によれば、あらゆる穴がCピットとなる可能性がある。また、関山期のCピットに限定した



第17図 Cピットの形状 (笹森1981 b を図化)

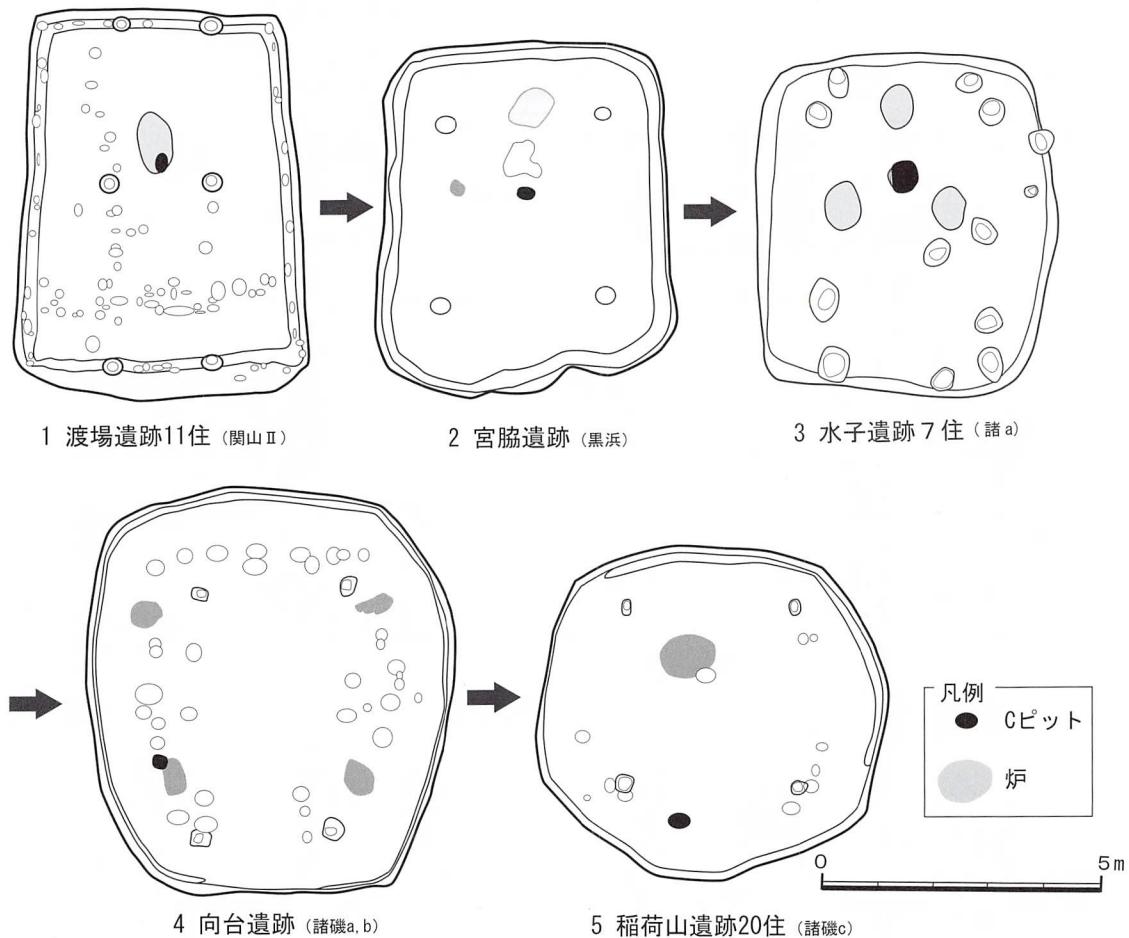


第18図 炉とCピット位置 (笹森1981 a)

ものであるが、炉との位置関係から次のように分類した。なお、これらは「炉址の下方に位置」していることで共通している。「①炉址の中にあるもの⁽¹⁷⁾ (関山1住・打越14住) ②炉址が一部重なっているもの (打越99住) ③炉址を切っているもの (打越1住、17住、11住、19住、88住) ④炉址と若干離れているもの (藤岡1住、上福岡M号住、打越7住) ⑤袋状のピットの形態のもの (打越8住、17住、3住(?)) ⑥埋設土器となり、焼土を含むもの (打越4住、長尾台1住(?)) ⑦埋設土器となり、焼土を含まないもの (渡場11住)」(笹森1981 b)と7種に分類した。第18図は、 笹森が示した資料を図化したものであるが、形と炉との位置関係の分類が混在しており、充分に整理されていない。炉と位置関係で見ると①・⑥・⑦は重複、②・③・⑤は一部重複という共通の要素でまとめることができる。但し、③は「切っている」としていることから、炉よりも新しいものであると捉えられる。つまりCピットと炉の位置関係は(1)重複、(2)一部重複、(3)近接の

	①重複	②一部重複	③近接	④その他
筒形ピット				
袋状ピット				
埋甕ピット				

第19図 Cピットの分類



第20図 Cピット位置の変遷

3種に集約することができる。また、ここでは、(4)その他として炉とは一定の距離を有することから無関係と思われるピットを想定しておきたい。なお、第17図の「D集合ピット状」は、一般的なピットとは相違するので対象外とする。それを整理したのが第19図であるが、重複型・一部重複型は炉と直接に関係するもの。近接・その他は間接的に関係するものと理解したい。よって、重複型・一部重複型は、前者と用途が相違することが考えられるのでCピットの概念からは外すべきであろう。

(2) 出現と展開

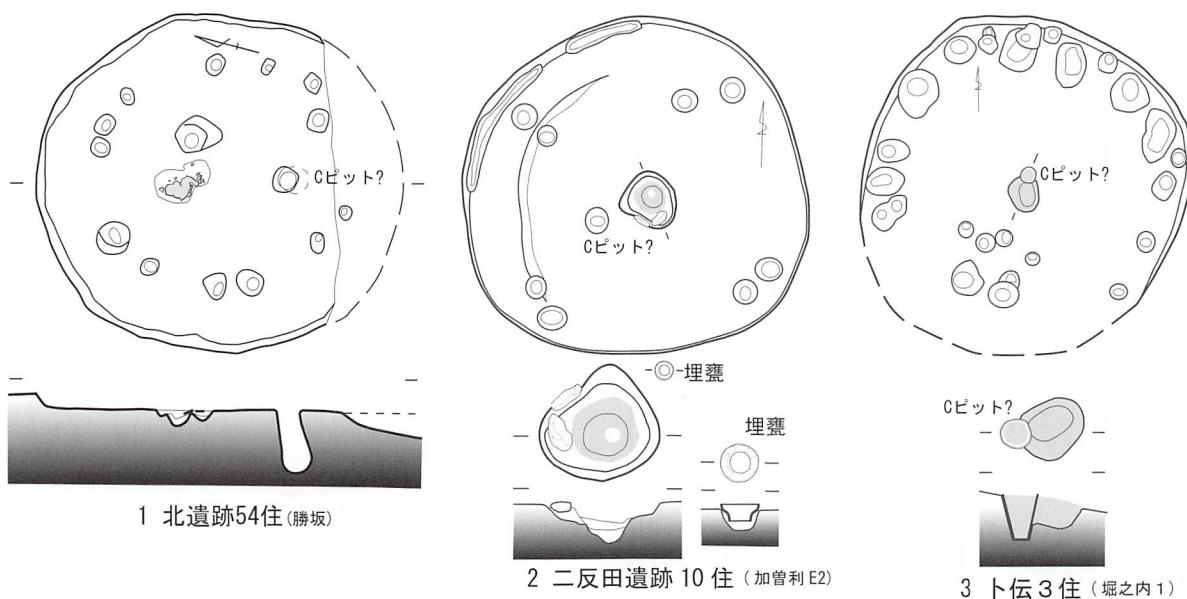
Cピットは、花積下層期に出現し、諸磯b期まで存続する。そして「武藏野台地をはじめ、大宮台地や多摩丘陵を含む西関東一帯に広がりをもっている」(川名2000)としている。展開については、以下、笠森の論述に沿って記す。

関山I期では、炉の手前（入口から見て）の前述したような場所に位置する。形態は、通常のピットの他に袋状や埋設土器を伴うものもある。同II期には、炉の奥に存在するものも出現する。黒浜期には、炉の手前や奥に存在する。手前のCピットは、炉との関係は保ちながらも、その距離はより離れ、結果的に住居跡の中央に位置するようになる。諸磯a期は、黒浜期と同様にCピットは、住居の中央に位置する。しかし、諸磯b期以降は中央炉の設置を契機として、その位置には認められなくなる（笠森1982・1987）という。また、早坂広人は、「炉辺ピットは、（黒浜）古段階まで炉より奥に有る事例が多く見られたが、黒浜中段階以降、炉との関係に加え住居の中心」という意

識が強くなったようだ」(早坂1995)と捉えた。

笹森は(諸磯期〈浮島III期〉では)「Cピットは住居中央から炉跡の移動に伴って、住居周辺部へと移動したのではないかと推定している。(中略)炉の移動に伴ないCピットも出入口部方向へ移動していることを意味していよう」(笹森1982)と考えた。そして、更に「中期における出入口部のピット、中期後半における『埋甕』に連なるものとして希望的推察をもっている」(笹森1982)とした。また、川名広文も「縄文前期の炉脇に設けられたC(中央)ピットといわれる袋状の小穴は中期の埋甕の前身やかもしれない」(川名2000)としている。笹森案を勘案してCピット位置の変遷を示したのが第20図である。このようにCピットは、前期末に向けて周辺部(壁際)に移動する傾向がある。

そして、中期以降にもCピットと同様なピットが存在する(第21図)。1北遺跡54住例は、袋状のCピット?が炉側に傾いている。2の二反田遺跡10住例は、建て替えが行われた住居である。炉辺のCピット?と壁外の埋甕が存在するが、共に貯蔵穴ではないだろうか。3のト伝遺跡3住は後期例であるが、炉の切り合う型のCピット?である。

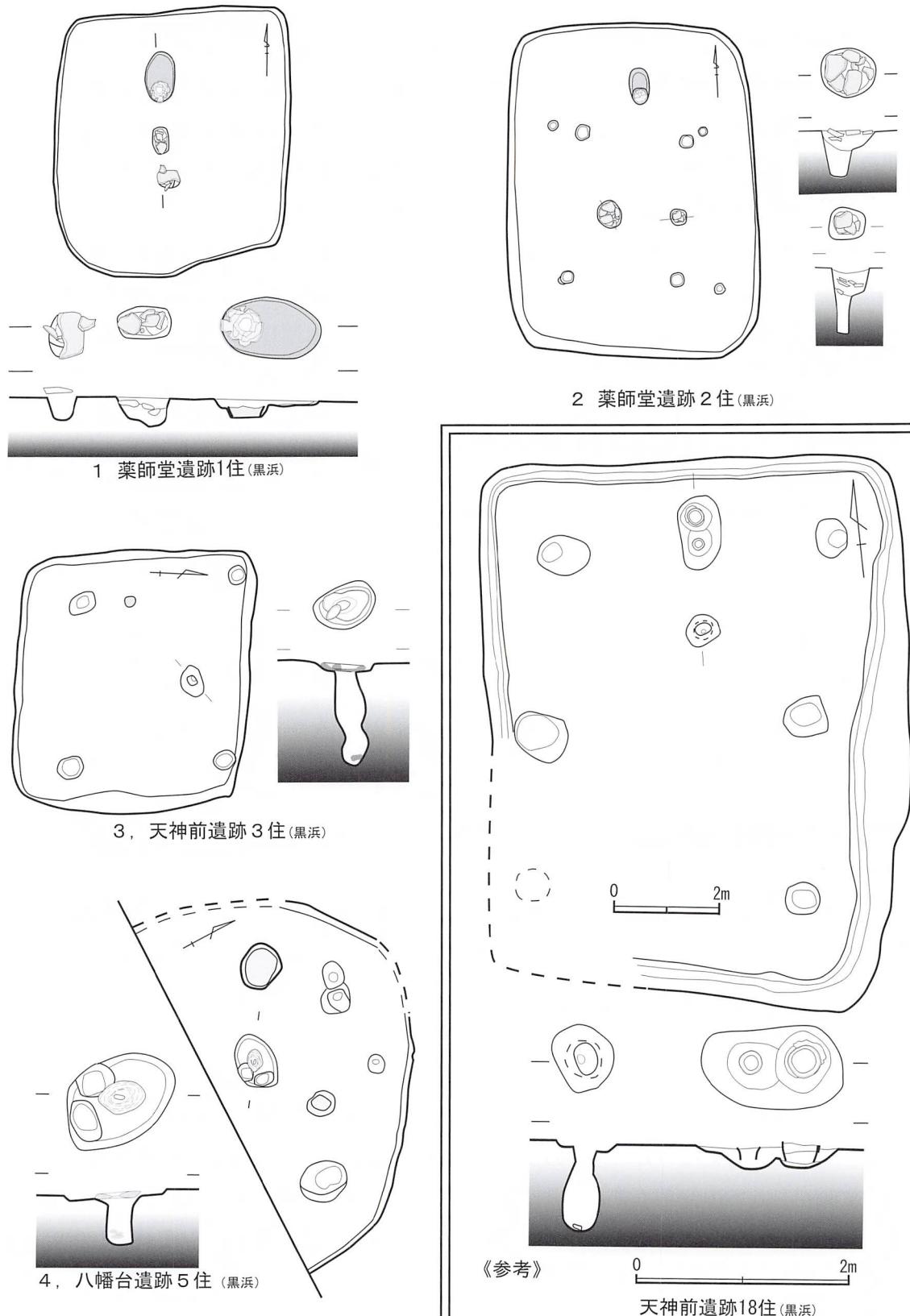


第21図 中・後期のCピット?

(3) 用途

笹森は、Cピットについて「6本主柱の住居や4本柱の住居、小円形無柱穴のタイプにも共通してあるため、柱穴とは考えない方がいいのではないか」(笹森1982)とした。その後も袋状を呈するもの、石皿で蓋をしたものがあることなどから柱穴ではないことは認識しつつもその用途については、「今なおはっきりしない」(笹森1987)としている。なお、根兵皇平は中心柱(根兵2009)、西脇対名夫は棟持柱(西脇2006)と捉えている。

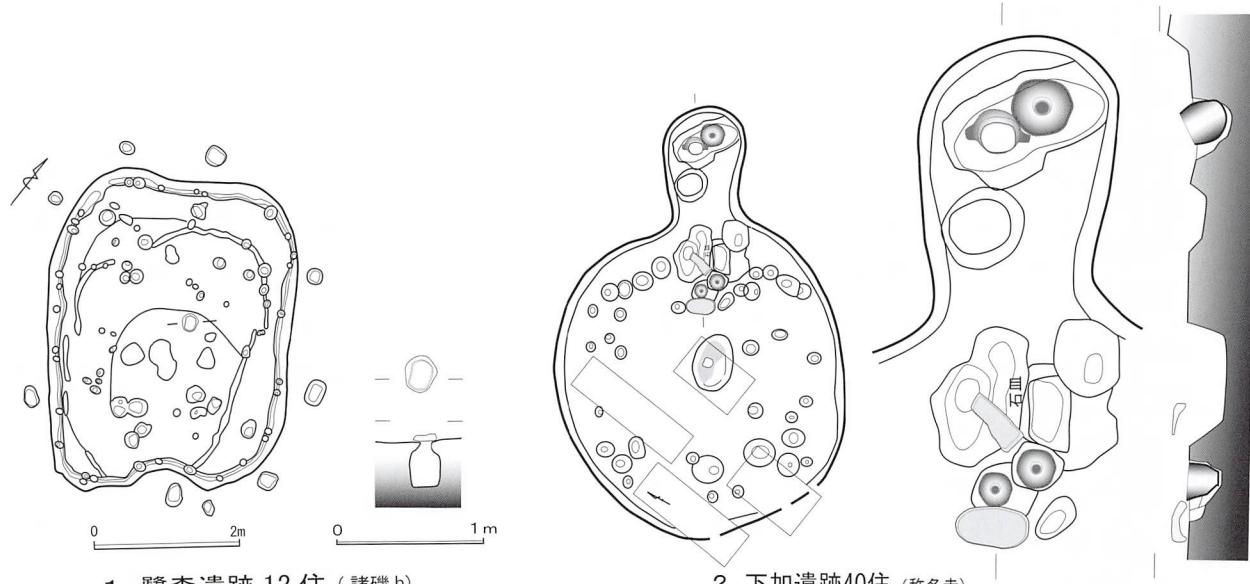
用途を考える上で気になる検出例がある。それはCピットの上に石皿を被せたものの存在である(第22・23図)。本例は、蓮田市天神前遺跡3住(田中1991)、小川町八幡台遺跡5住(黒坂1999)の黒浜期2例とふじみ野市鷺ノ森遺跡12住(笹森1987)の諸磯期の1例、下加遺跡40住(山形1992)の称明寺期の1例が管見に触れた。このうち天神前遺跡2⁽¹⁸⁾・3住例は、石皿に磨石が伴っている。更に天神前遺跡3・18住と八幡台遺跡5住の3例には、Cピット内に磨石を伴っている。また天神前遺跡22住では、石皿は存在しないがCピット内から磨石が出土している。



第22図 石皿を被せたCピット (1)

また、天神前遺跡3・18・20住と八幡台遺跡5住の4例のCピットでは、このピットの外周を一段掘り下げている。このうち3例には、石皿が設置されていた。つまり、石皿が蓋として使用されていた状況が読み取れる訳であるが、石皿が単独で蓋として機能していたのかは不明である。小鹿

野町薬師堂遺跡では、ピットを塞いだと思われる石皿などの平石が覆土上層から検出されている。恐らく、これは板材や編み物などの蓋の重石として使用していたものが落下したものであろう。屋外貯蔵穴においても礫が検出されることがあるが、これなども同様な理由であろう。石蓋は、貯蔵穴の温湿度を一定に保つ役割を果たすと共に、鼠による食害を防ぐのが目的であろう。また、Cピットの石皿と磨石の共伴は、内容物を想定させる。つまり、Cピットは堅果類・根茎類などの貯蔵穴であり、蓋として使用していた石皿はそれを製粉したような状況が存在したことを暗示している。



第23図 石皿を被せたCピット (2)

(4) まとめ

Cピットは、炉との位置関係やピットの型（筒形・袋状形・埋甕形）によって多様である（第17図）が、炉を意識しているということは共通している。しかし、全てが単一の用途とは考えられない。例えば重複型で筒形・埋甕形は蒸焼調理を意識したかも知れない。つまり、（埋甕）炉としての機能を想定したい。しかし他の型のピットは深く蒸し焼きには適さないことから、食料を対象にした保管庫的な貯蔵穴と考えておきたい。特に袋状を呈するピットの存在は、貯蔵穴としての用途を想像させる。

Cピットの所在の変遷については、関山期には炉に伴って住居跡中央に位置する。黒浜期になると炉は壁際へ移動するが、Cピットは住居跡中央に残る。しかし、やがて諸磯a・b期には壁際の炉につられてCピットも壁際に移動する。そして諸磯c期には、炉は中央に戻り、Cピットは壁際に留まる。この中央の炉と壁際のCピットとの位置関係が、中期の炉と埋甕の典型的なタイプの原型になるものと理解したい。なお笹森は「当初、関山期において炉と密接な位置にある。その後、炉が住居の奥壁等に偏在するようになると、Cピットは床面中央に位置するようになる。（中略）その後、炉が床面中央に位置するようになり、Cピットにとって変わる」（笹森1981b）とした。

4 まとめ

埋甕炉・埋甕・Cピットについて、検討を加えてきた。その結果、埋甕炉は特定の時期や住居に採用されたものであることから、普遍的で必要不可欠な施設ではないことになる。それでも大形炉

体土器は究極の「枕石炉」として威力を発揮したであろう。一方、小形炉体土器は蒸焼調理に伴う対象物の特定に便利は施設である。と共に調理対象物の加温・保温のための炉台として、あるいは種火保存にも使用された施設であると考える。そして埋甕とCピットは主に食料を対象にした貯蔵穴という結論に達した。この風土で堅穴住居を住まいとする限り、地下収納は時代を超えて必須の施設であった。

以下、この問題について更に言及しておきたい。

(1) 埋甕炉の用途

人類が最初に手に入れた調理方法は、焼くことであったが、やがて蒸すという調理方法（礫群）を獲得した。炉（灰）中に食材を埋置し、その上で火を焚くというアイデアは、容易に思い着いたと考える。礫群は、大量調理を目的とした調理法であるが、これは炉（灰）中での蒸し焼きの経験なくして発案されなかった調理方法であろう。なお、本稿で言う蒸焼調理とは、灰の中に芋を埋めて焼く所謂焼き芋のような調理も含むことをお断りしておきたい。土器を手に入れた縄文人は、煮炊きを主な調理手段としたが、蒸焼調理を放棄した訳ではない。その後も炉（灰）中では、いつも蒸焼調理が行われていたのである。撲糸文期の方形掘り込み炉は、住居面積に比して相対的に大きく、規模・形態とも特異である。方形掘り込み内は、灰が充填されていたと考えられている（今村 1985）。この有囲地床炉は、多量の蒸し焼きを意識したものかも知れない。

埋甕炉は、前期（花積下層期）から後期（堀之内II期）まで存続するが、炉（灰）中の蒸焼調理を意識した施設と考えたい。後晩期には埋甕炉が消滅するが、それに連動して炉は大きく・深くなる。これは蒸焼調理を炉体土器から深い地床炉に譲ったのである。

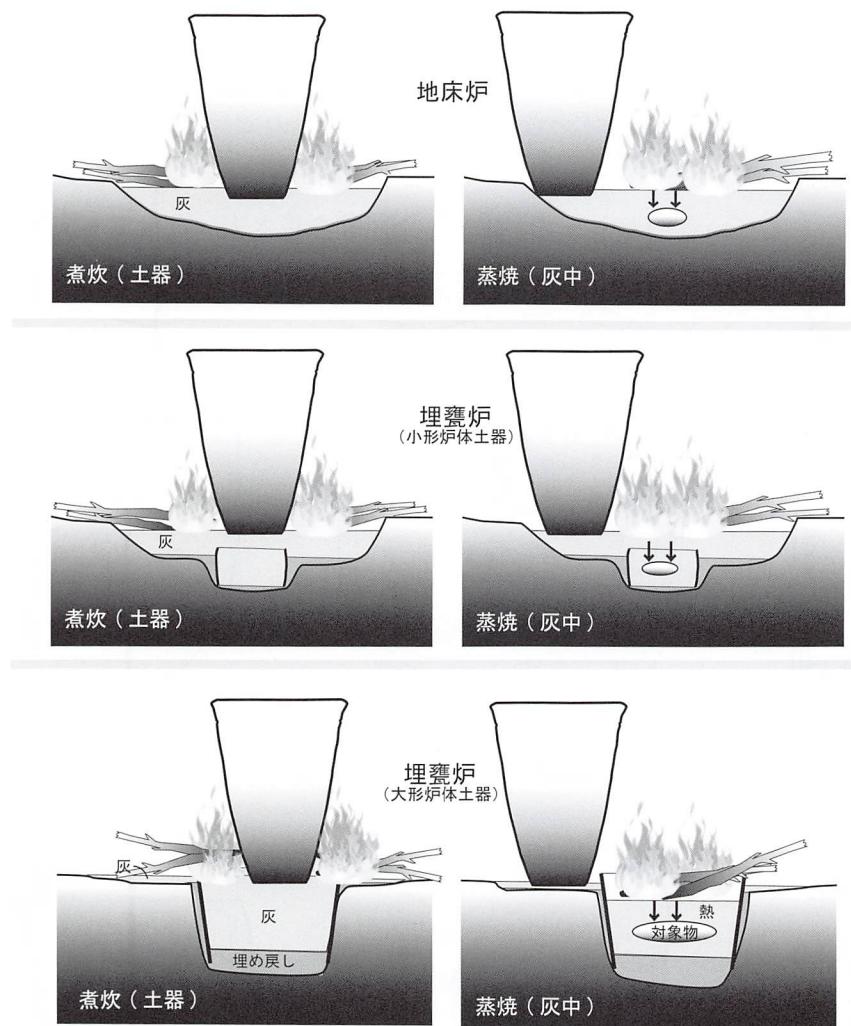
炉には、常に灰が存在する。灰は、蒸焼調理や種火の保存に不可欠の存在である。蒸焼調理の対象物や種火の保存には、これらを一定の深さに埋める必要があるからである。蒸焼調理の場合、対象物が浅過ぎれば焦げ、深過ぎれば必要以上に時間を要すると共に生蒸しの恐れが生じる。種火保存の場合、浅い位置に埋置すれば酸化が促進して灰化して消滅してしまう。一定以上の深さに埋置して、酸化の進行を抑える必要がある。上述の機能を果たす場合、炉は一定の深さが必要である。

埋甕炉、つまり炉体土器は、蒸焼調理に伴う対象物の位置特定に便利であるが……。そして種火の保存にも便利であるが何れも必須のものではない。さほど広くない炉内において対象食料や種火の探すのは容易である。敢えて炉体土器を埋設する必要はない。強いて用途を想定すれば、前述したとおり大形炉体土器は床面より突出して設置されることから、燃料の燃焼を容易にするための枕石的な役割が想定できる程度である。しかし、再三述べるとおり、炉体土器は調理にとって必須のものではなく、特定の時代のファッショニに過ぎない施設であると結論づけなければならないだろう（第24図）。

(2) Cピット・埋甕と屋内貯蔵穴

食料の確保は、最大の関心事である。そして安定した生活を維持するためには、その保存にも大きな注意が払われた。

食料保存には、その性質によって乾燥が適するもの（乾物保存）と湿度を必要とするもの（保湿保存）がある。また保存期間によっても、その方法が相違する。一般的に乾物保存は屋根裏、保湿保存は地下収納（土壙）が考えられる。保存食料が集落構成員を対象としてもであれば、乾物保存は堅穴住居の天井裏や高床倉庫（掘立柱建物など）、保湿保存は屋外貯蔵穴（プラスコ形土壙など）



第24図 炉体土器の使用方法

で行われたものと思われる。乾物保存は長期に適した保存方法であり、その対象は堅果類やそれらの澱粉などの植物食料⁽¹⁹⁾ や干し肉などが考えられる。一方、保湿保存は比較的短期保存に適した保存方法であり、その対象は堅果類や根茎類などの生物（生貯蔵）^{なまもの}が考えられる。なお、貯蔵の最大の問題は鼠害であり、その対策は必須である（橋口2006）。

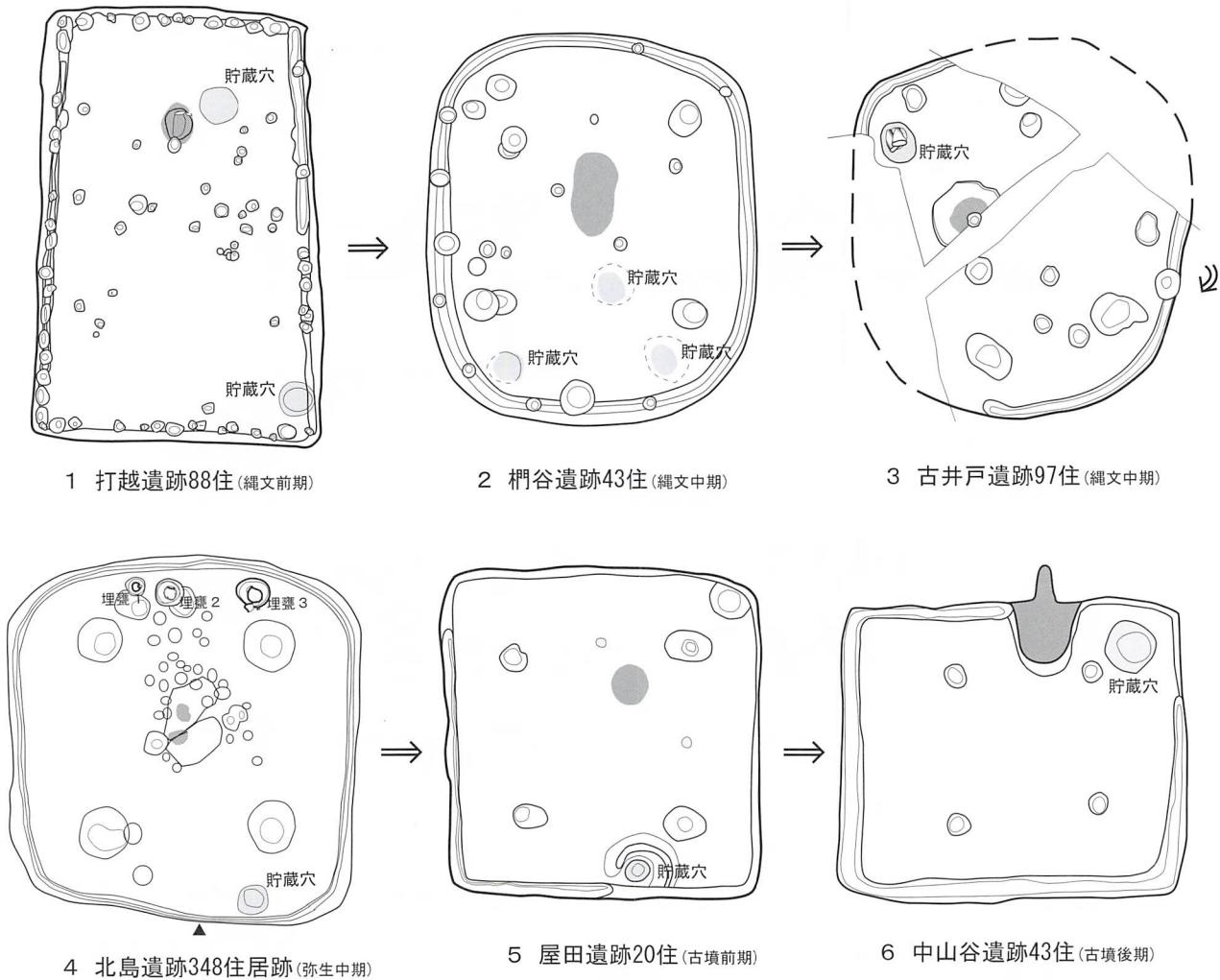
屋外貯蔵穴について、その存在に疑問の余地がない。屋外貯蔵穴は集落の全構成員を対象とした施設であり、日々の消費においてその都度取り出したとは考えられない。頻繁な開閉は、安定した貯蔵穴内の環境に悪影響を与える。よって屋外貯蔵穴からは、必要な量を一括して取り出し、そして消費に供されない食料は、一時的に屋内貯蔵穴に保存・保管されたこともあったと想定しておきたい。

a 屋内貯蔵穴

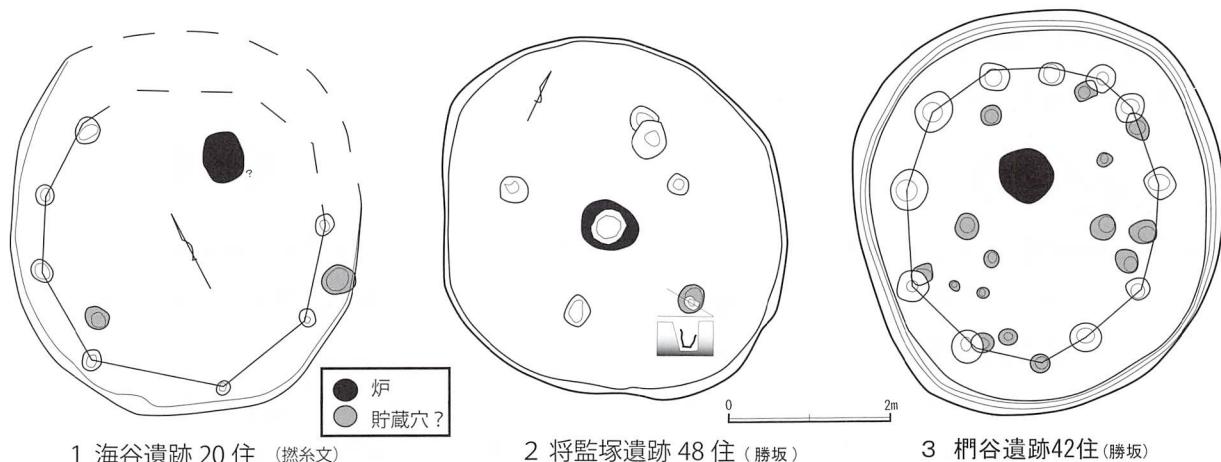
所謂「屋内貯蔵穴」は、各時代に存在する。第25図は、任意にその代表的な例を示したものである。打越遺跡88住（小出1983）では、壁際や炉に近接（第25図1）、柵谷遺跡43住（柳田2000）では袋状土壙が存在する（第25図2）。本庄市古井戸遺跡97住P4（宮井1989）があり2個体の完形土器を出土している（第25図3）。弥生時代・古墳時代前期では、炉に対する壁際に貯蔵穴が常備される傾向が強くなる。北島第348号住（吉田2003）では、入口壁際に貯蔵穴・奥壁に埋甕を配し、対象物の相違を暗示しているかのようである（第25図4）。竈の導入と共に、貯蔵穴は竈に近接し、それに

付随する施設となる(第25図6)。竈と貯蔵穴が一体化した現象は、縄文時代前期の炉とCピットが近接したのと共通の意図が読み取れる。

そして柱穴以外のピットの中にも、貯蔵穴となるものが存在するのではないかと考えた(第26図)。海谷遺跡20住例(中島2003)は、主柱穴以外のピットである(第26図1)。将監塚遺跡48住例(石塚1986)は、主柱穴と思われるピット内から土器が出土した。柱を抜き去った後でも土器を埋置する



第25図 貯蔵穴の変遷



第26図 貯蔵穴の可能性のあるピット

ことはできないので、当初よりピット内は空間として利用していたと想定したい(第26図2)。鴨谷遺跡42住例(柳田2005)は、柱穴以外・間隔の狭い柱穴・柱穴に接したピットにその可能性を想定したい(第26図3)。

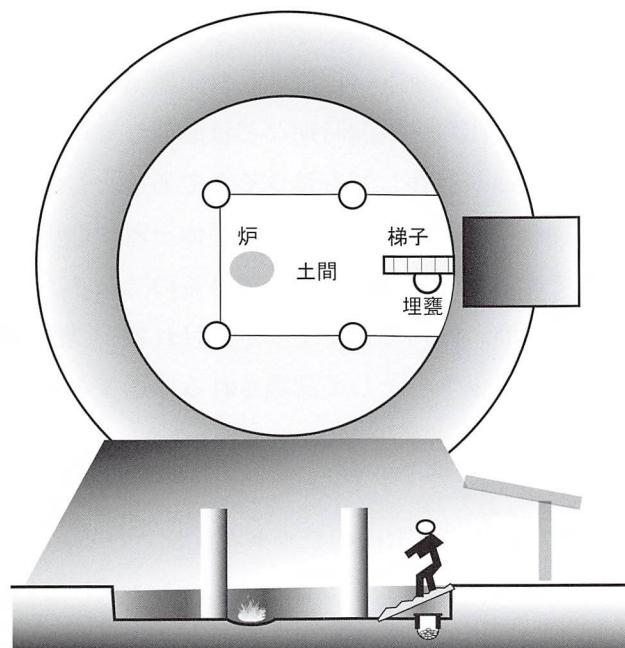
b 屋内貯蔵穴としてのCピットと埋甕

本稿では、Cピットや埋甕、さらには単なる土壙やピットも貯蔵穴となるものが存在すると考える。

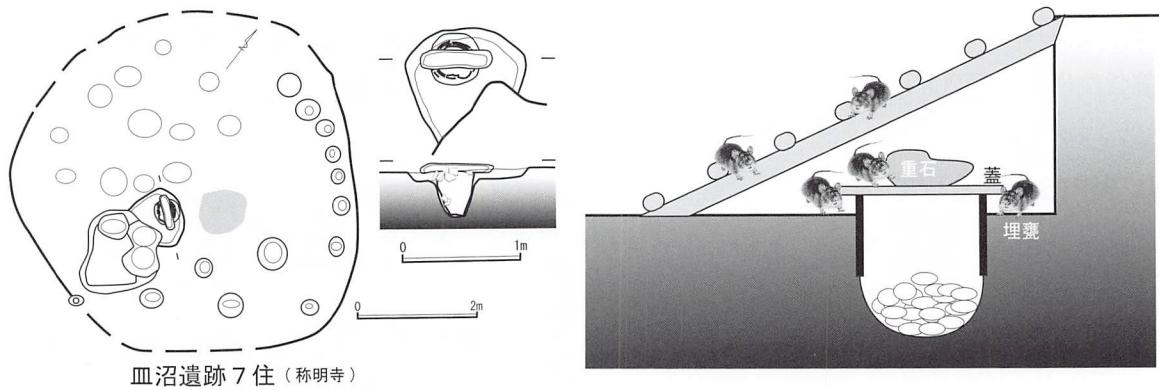
これらの屋内貯蔵穴は、屋外貯蔵穴から取り出した食料などを一時的に保存する時にも使用される施設である。地下貯蔵は、湿度・温度も一定であることから冷蔵庫・保存庫としての役割を担う。

前期では、調理との関係から炉に近接してCピットとして存在した。しかし、中期には、調理としての利便性よりも保存としての重要性が求められたために、炉熱の影響を受けない壁際に移動したのである。その場所は炉と対峙する壁際、つまり入口部付近が設定された。ここは食料の搬入に便利であること、そしてこの場所が土間でありしかも日々の生活に支障のない空間であることから選定されたのであろう。入口部は生活に支障をきたす場所のように思えるが、恐らくそれとは微妙にずれた位置に工夫して設定したのである(第27図)。実際に埋甕は、出入口と目される場所から僅かに偏在する例が多い。出入口部と貯蔵穴の一体化は、竈出現以前の竪穴住居の基本型である(第25図)。また埋甕は、炉側に傾いて設置されていることが多く、それとの関連が深いことを暗喩している。またCピットも富士見市打越3住例(小出1978)のように炉に向かって斜めに穿かれたものがあり、両者の類似性が指摘できる(第8図2・3)。

ところで貯蔵穴は、安定した一定の温湿度を求められることから蓋の存在は必須である。Cピットの周辺が一段掘りくぼめられているのは蓋の存在を予想させるし、実際に石皿で蓋をしている例があることは前述したとおりである。全てでは無いにしろ基本的に埋甕(貯蔵穴)には、用途に応じた多様な蓋は存在していたのであろう。把手を持つ土器や波状口縁などが埋甕に供されないのは、その傍証にならうか。



第27図 埋甕と出入口



第28図 埋甕と鼠

なお、全ての住居に埋甕は存在しないが、それは貯蔵穴が存在しないことを意味しない。単なる貯蔵穴であれば素堀のピットで充分に対応できるのである。埋甕は廃物利用であり、設置時に土器が入手できなければ単なるピットとして存在するしかない。貯蔵穴に土器を用いて埋甕とするのは、素堀のピットよりクリアリティーが高いからである。それは壁崩落の防止も意図されたであろうが、最大の理由は鼠侵入の阻止である(第28図)。恐らく素堀のピットであれば、床面を掘削して侵入が可能となってしまうであろう⁽²⁰⁾。白岡町皿沼遺跡(青木1983)は、埋甕上に棒状礫が渡されており、蓋の重しに利用された様子が想像される。

貯蔵穴は必須ではなく、「あれば便利」な施設なのである。しかし弥生時代以降、屋内貯蔵穴は常設される傾向にある。貯蔵穴は囲炉裏住居では入り口部壁際、竈住居では奥壁の竈脇に存在する。屋内貯蔵穴は、不可欠ではないが必要な施設なのである。

埋甕内に充満している土は、埋没の過程で生じたもので故意に土を入れたような状況は観察できない。つまり、空洞として機能しているのである。石器などの埋納例が希有であることを考えれば、やはり主に食料の貯蔵施設と考えることが素直な説ではないだろうか。

また、Cピットについても袋状を呈するものがあることから貯蔵穴の可能性が高いことは前述した。このCピットが中期の埋甕に移行したとすれば、これもまた貯蔵穴ということになろう。

(3) 炉体土器と埋甕は、廃物利用そのもの

炉に埋置された土器(炉体土器)とピットに埋置された土器(埋甕)の相違点は、その場所が異なるだけであり、土器の使用状態、出現・展開時期などは酷似している。炉体土器や埋甕が不可欠なものであるならば、専用の土製品が存在しても良さそうである。しかし、炉体土器や埋甕は全て転用品であり、廃物利用の産物なのである⁽²¹⁾。しかし、炉体土器や埋甕においても完形品ないしそれに近い土器が供給できるのであれば、それを使用しているのである。

つまり、炉にもピットにもその時、転用できる土器が無ければ、「埋甕炉」も「埋甕」も存在する事はなく、単なる「地床炉」や「ピット」として認識されるに過ぎないのである。

あとがき

竪穴住居跡を調査すると、柱穴以外にも沢山のピットが検出される。「この穴は何に使ったのですか」という質問を受けることが多い。「わかりません」と答え続けていたら、もう定年を迎えようとしている。何と無力な調査員なのであろうか。自戒の念が強い。土層を観察することは重要であるが、色も分層もまあどうでも良い。見極めなければならないのは、自然堆積か人為堆積かとい

う事である。前者ならば、その遺構は空いたまま使われたのであり、後者ならば埋めるために掘られたと言う事になる。しかし空いたまま使われた穴も、その役割が終了すれば埋め戻される。一概に堆積の違いで用途を想定することはできないが、それでもこの判断は最低限しなければならない。できうるならば、全ての穴を断ち割って土層を観察したい。

本稿を草するにあたり近江哲・金子直行・川嶋新平・栗島義明・黒坂禎二・笹森健一・末木啓介・鈴木徳雄・利根川章彦・中島宏の各氏には、多大のご教示を賜りました。厚くお礼申し上げます。

《註》

- (1) 大形炉体土器と小形炉体土器は、大きさ以外にも相違する特徴がある。それは炉体土器が埋置される深さである。前者は口縁部が床面より突出するのに対し、後者は床面より低い位置に設置される。つまり、大形炉体土器は区画、小形炉体土器は通常の炉機能を更に高めた施設として機能していたものと考えられる。
炉体土器は、口縁部の存在する筒抜けの土器を正立した状態で使用しているものが多い。しかし胴部や底部、あるいは倒立しているものもあることから使用部位は何でも良かったのである。
- (2) 大形炉体土器が床面より突出する事や石囲炉など存在するのは、薪材などを地面から浮かせる工夫である。それによって、酸素の供給を容易にし燃焼を効率的に行うことができる。所謂枕石炉は縄文時代早期より竈出現以前の住居跡に普遍的に見られるが、これも同様な意図で採用された炉型式であろう。
- (3) 炉体土器は、その内部に灰が充填されて使用されていた。しかし裏慈恩寺東遺跡1住（並木1978）では、土器囲埋甕炉の内側上位に別個体の土器片が貼り付けられるような状態で出土していることから、この土器片が落ちない部位まで埋められていたことがわかる。
- (4) 石囲炉は、明瞭に炉区画を意識したものであろう。なお、多重炉体土器（入れ子状炉体土器）や石囲密着型埋甕炉は、区画した土器を保護及び補強するための工夫である。
- (5) さいたま市下加遺跡（山形1992）例では、深さ40cmを計る大形炉体土器があるが、この中では酸素不足となり火を焚くことはできないであろう。前述のとおり、煮炊き時では、炉体土器内は灰が充填していたのである。
- (6) 小形炉体土器使用炉の場合、炉体土器の外側に焼土が認められる。これを炉体土器の外で焼成したためと三上氏は捉えている。しかし多くの報告書を見ると、この焼土は炉体土器を埋設する際に埋め戻されたように見える。
- (7) 三上徹也は「土器内部に焼土のない点は、ここに火種を入れた可能性を否定する」（三上1995）としたが、灰中に種火を保存する程度では焼土は生成されないだろう。
なお小林達雄は、屋内炉は火種を絶やさないためのものであり、日常の煮炊きは屋外で行うとしている（小林2007）。小林達雄は、その理由の一つにイヌイットの例を挙げている。環境の異なる人々の生活を参考にするこに意味があるのだろうか。賛同できない。
- (8) 蒸焼きとは、蒸気による調理を連想させ適当な名称ではないかも知れない。しかし、食材自身の水分を利用した調理であるので、灰中にくべて焼き芋をつくる調理も含めて敢えて「蒸焼調理」の名称を用いる事にする。
- (9) つまり、炉体土器は「入れ物」としての機能を果たしていたことになる。花積下層期や関山期などの初期の炉体土器のなかには、比較的完形品に近い土器を使用している。これは、容器としての役割が意識されているものと思われる。例えば、宮ヶ谷塔遺跡第1号住居跡（山形1982）が相当する。勿論、中期でも比較的完形に近いものを使用する例は存在する。ところで埋甕は、当初貯蔵説が有力であった。埋甕と類似する炉体土器にも容器としての用途を想定したい。
- (10) 埋甕が食料貯蔵説から骨壺・胎衣壺説に移行した'70年代に、「屋外貯蔵穴」は、逆に墓壙説が否定され食料貯蔵説が定説化した。願わくば、埋甕も同様な経緯を辿って欲しかった。
- (11) 定説化している胎盤収納説を主張していた桐原健も後に「思惟的な性格をもつ施設」として、具体的な用途を想定できずにいる（桐原1983）。
- (12) 埋甕が住居を放棄した後も手つかずの状態で撤去されないのは、埋甕そのものが再利用品であり、敢えてそ

れを再利用する必然性が無かつただけである。

- (13) 入口に存在する埋甕は、踏まれることによってより強く再生されることを願ったものだと言われている。しかし、入口部と想定される場所から左右にずれた位置に存在する例も多く、また床面より突出して埋置されており、踏みつけられる状態はない。
- (14) 埋甕の「正立・倒立」の差違に特別の意味を付与する考えがあるが、本稿では共に貯蔵穴と考える。倒立埋甕は、袋状土壙と同様に貯蔵量が増やせるほか、入口が小さいために内部の環境を一定に保ち易いメリットがある。なお、炉体土器でも将監塚遺跡J7住（石塚1976）では倒立して使用しており、「正立・倒立」に用途の違いはないものと考えたい。
- (15) 屋外の単独埋甕についても貯蔵施設と考えている。なお、主に東関東に多く存在する屋外のフラスコ状の大形貯蔵穴について注目すべき見解がある。関東地方西部では堅果類、東部では根茎類に対する依存度が高い。よって西部では貯蔵穴が少なく・打製石斧が多いのに対し、東部では貯蔵穴が多く・打製石斧は少ないと捉えた。そして、集石土坑を根茎類の調理施設である可能性を指摘した。
- (16) 笹森氏は、該期住居跡の上屋を復元・検討する過程において、「A」・「B」の記号を軸線として使用した。次いで特異なあり方をするピットに「C」を冠して「Cピット」と命名したものと思っていた。しかし、氏によるとこの「C」は、Centerの「C」であるという。なお、Cピットについては、前期の遺構という暗黙の了解がある。
- (17) 第18図②は「一部重なる」ものであるが、③のように「炉を切っている」と区別できない。
- (18) 天神前遺跡2住Cピット5は、埋甕を有するようであるが、同じく炉体土器を有する炉跡4に重複して存在しているために、埋甕を有するCピットなのか炉体土器なのか判断に苦慮する。なお、炉跡4には、炉体土器上に石皿と磨石が検出されている。
- (19) 栗島義明によれば、「トチの保存は煙で燻される屋根裏が最適であったそうで、数年どころか10年以上も前に収穫されたトチが保存されている例も珍しくなく、また「たとえばトチは外皮がむかれた状態、あるいはアケ抜きがされた粉の状態等々で貯蔵されていた可能性」も指摘している（栗島2010）。
- (20) 鼠が貯蔵穴に侵入し食料が食い荒らされることは何とも避けたい。しかし、オーバーハングした袋状ピットや這い上がる事が困難な埋甕ピットに鼠が落ち、脱出不可能な状態が起きたとしたら、これは縄文人にとっては貴重なプレゼントとなったのであろうか。
- (21) 故意に破壊した可能性もあるが、ここではそれは問わないことにする。なお、昼間孝次氏も埋甕炉の炉体土器について「廃物利用をはかった」（昼間1984）と指摘した。

《参考文献》

- あ 青木美代子 1983 『皿沼遺跡発掘調査報告書』白岡町文化財調査報告第1集 白岡町教育委員会
荒井 幹夫 1978 『打越遺跡』富士見市文化財報告第14集 富士見市教育委員会
荒井 幹夫 1983 『打越遺跡』富士見市文化財報告第26集 富士見市教育委員会
飯島 吉晴 1985 「家と火—カマド・イロリと火—」『歴史公論10 119』雄山閣
石塚 和則 1986 『将監塚—縄文時代—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
井之口章次 1970 「胞衣の始末」『西郊民俗』第五十四号 西郊民俗談話会
猪越 公子 1973 「縄文時代住居址埋甕について」『下総考古学』5 下総考古学会
今村 啓爾 1985 「縄文早期に竪穴住居址にみられる方形の掘り込みについて」『古代第80号』早稲田大学考古学会
大場 磐雄 1955 「主要縄文式竪穴の考察」『平出』朝日新聞社
か 柿沼 幹夫 1977 『前畠・島之上・出口・芝山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集 埼玉県教育委員会
金井 安子 1997 「縄文人の住まい—炉の処理をめぐって—」『青山考古』第14号 青山考古学会
金子 直行 1986 『北・八幡谷・相野谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第66集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
金子 直行 1990 『八木上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第91集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

- 金子 直行 2001 『まま上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第242集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 金子 直行 2005 『長瀬町中山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第313集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 金子 義樹 1984 「縄文時代における埋甕についての一試論—事例分析を中心に—」『神奈川考古』第19号 神奈川考古同人会
- 神村 透 1974 「埋甕と伏甕 一そのちがい—」『長野県考古学会誌19・20』長野県考古学会
- 川名 広文 2000 『上福岡市史 通史編上巻』上福岡市
- 木下 忠 1970 「戸口に胎盤を埋める呪術」『考古学ジャーナル42』ニューサイエンス社
- 木下 忠 1973 「埋甕といわゆる貯蔵穴について」『信濃25-8』信濃史学会
- 木下 忠 1981 『埋甕 一古代の出産習俗—』雄山閣
- 桐原 健 1965 「住居内における火使用の問題」『井戸尻』
- 桐原 健 1967 「縄文時代中期に見られる埋甕の性格について」『古代文化』18-3
- 桐原 健 1983 「埋甕」『縄文文化の研究』第9巻
- 桐原 健 1988 『縄文のムラと習俗』雄山閣
- 栗島 義明 1999 「第三章 叙文時代の遺跡」『小川町史 資料編1 考古』小川町
- 栗島 義明 2010 「第2章 森の資源とその利用」『考古学の挑戦』岩波ジュニア新書 岩波書店
- 栗原 文蔵 1973 『岩の上・雉子山』埼玉県遺跡発掘調査報告第1集 埼玉県教育委員会
- 黒坂 稔二 1984 『深作東部遺跡群』大宮市遺跡調査会報告第10集 大宮市遺跡調査会
- 黒坂 稔二 1992 『薬師堂遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第117集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 黒坂 稔二 1995 『向山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第155集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 黒坂 稔二 1999 『小川町の歴史』資料編1 考古 小川町
- 黒坂 稔二 2005 『宮西遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第310集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小出 輝雄 1978 『打越遺跡』富士見市文化財報告第14集 富士見市教育委員会
- 小出 輝雄 1983 『打越遺跡』富士見市文化財報告第26集 富士見市教育委員会
- 小金澤保雄 2006 『大鹿窪遺跡 窪B遺跡』芝川町教育委員会
- 小林 達雄 2000 『縄文人追跡』日本経済新聞社
- 小林 達雄 2007 「2 縄文時代の住まい」『住まいの考古学』学生社
- さ 佐々木藤雄 1975 「埋甕論ノート」『異貌』三 共同体研究会
- 佐々木藤雄 1998 「北の文明・南の文明(上)ー虚構の中の縄文時代集落論ー」『異貌』拾六 共同体研究会
- 笹森 健一 1977 『前畠・島之上・出口・芝山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集 埼玉県教育委員会
- 笹森 健一 1976 『志久遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告書第31集 埼玉県遺跡調査会
- 笹森 健一 1981 a 「縄文時代前期の住居と集落(I)」『土曜考古』第3号 土曜考古研究会
- 笹森 健一 1981 b 「縄文時代前期の住居と集落(II)」『土曜考古』第4号 土曜考古研究会
- 笹森 健一 1982 「縄文時代前期の住居と集落(III)」『土曜考古』第5号 土曜考古研究会
- 笹森 健一 1987 『鷺森遺跡の調査』郷土資料第33集 上福岡教育委員会
- 笹森 健一 2007 「4 古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡」『住まいの考古学』学生社
- 佐原 真 1972 「1971年の考古学会の動向—弥生時代—」『考古学ジャーナルNo.74』ニューサイエンス社
- 佐藤 洋 1976 「縄文時代の埋甕習俗」『物質文化』第27号 物質文化研究会
- 佐藤 攻 1971 「茅野和田遺跡東地区の埋甕」『長野県学会誌』11 長野県考古学会
- た 高林 重水 1971 「高河原遺跡発見埋甕のカッティング所見」『長野県学会誌』11 長野県考古学会
- 田中 和之 1991 『天神前遺跡』埼玉県蓮田市文化財調査報告書第17集 埼玉県蓮田市教育委員会
- 田中 信 1982 「埋甕形態論」『土曜考古』第六号 土曜考古学研究会
- 塙本 師也 2007 「乾燥型貯蔵穴」『なりわい』縄文時代の考古学5 同成社
- な 中島岐視生 2003 『第二椿峰遺跡群』所沢市教育委員会

- 並木 隆 1978 『裏慈恩寺東遺跡試掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告書第33集 埼玉県遺跡調査会
- 西脇対名夫 2006 「炉のない住居」『ムラと地域の考古学』同成社
- 根兵 皇平 2009 「縄文時代前期後葉の縦穴住居跡—諸磯式土器分布圏における一類型—」『遡航』第27号
早稲田大学外学院
- 野代 恵子 2008 「鰍沢河岸跡の胞衣壺」研究紀要24 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 野中 和夫 1998 「撫糸文期の竪穴住居の特性と集落に関する一考察」『群馬考古学手帳8』群馬土器観会
- 野村 智 1992 a 『坂東山遺跡 第1・2次』入間市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第11集 入間市遺跡調査会
- は 橋口 尚武 2006 『食の民俗考古学』ものが語る歴史11 同成者
- 早坂 広人 1995 『水子貝塚』富士見市文化財報告第46集 富士見市教育委員会
- 早坂 広人 1999 『勝瀬遺跡群』富士見市遺跡調査会報告第52集 富士見市遺跡調査会
- 原田 昌幸 1983 「撫糸文期の竪穴住居跡」『土曜考古』第7号 土曜考古学会
- 原田 昌幸 1984 「続・撫糸文期の竪穴住居跡」『土曜考古』第8号 土曜考古学会
- 原田 昌幸 1999 「縄文的文化の中ではぐくまれ終焉とともに消滅した『第二の道具』」『縄文学の世界』朝日新聞社
- 昼間 孝次 1984 『関山貝塚』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第3集 埼玉県教育委員会
- ま 三上 徹也 1993 「縄文時代の共同体」『駿台史学』88 駿台史学会
- 三上 徹也 1995 「土器利用炉の分類とその意義—縄文時代における吊す文化と据える文化—」『研究紀要』第1号 長野県立歴史館
- 三上 徹也 1999 「縄文人の実用と嗜好—土器利用炉にみる分布論的考察—」考古学研究第45巻第4号 考古学研究会
- 三上 徹也 2006 「吊す文化と据える文化—縄文時代における土器利用炉の分類とその意義—」『縄文「ムラ」の考古学』雄山閣
- 宮井 英一 1989 『古井戸—縄文時代—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮坂 光昭 1965 「縄文中期勝坂と加曾利E期の差」『古代』44号
- 村田 章人 1997 『原/谷畑』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第179集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- や 柳田 博之 2000 『門谷遺跡・南方遺跡・南方上台遺跡・行谷遺跡』浦和市遺跡調査会報告第274集 浦和市遺跡調査会
- 柳田 博之 2005 『門谷遺跡・南方遺跡』さいたま市遺跡調査会報告第37集 さいたま市遺跡調査会
- 柳戸 信吾 1999 『大日向遺跡・八王子遺跡』飯能日高ゴルフコース地内埋蔵文化財調査報告書 飯能市遺跡調査会
- 山形洋一他 1982 『宮ヶ谷戸第5貝塚』大宮市遺跡調査会報告第5集 大宮市遺跡調査会
- 山形 洋一 1992 『下加遺跡』大宮市遺跡調査会報告第35集 大宮市遺跡調査会
- 吉田 稔 2003 『北島VI』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 横田 光男 1984 『上野ヶ谷戸遺跡』日高町埋蔵文化財調査報告書第六集 日高町上野ヶ谷戸遺跡調査会
- わ 渡辺 新 1991 『縄文時代集落の人口構造』千葉県権現原貝塚の研究 I
- 渡辺 一 2009 『今宿東遺跡群III』鳩山町埋蔵文化財調査報告第34集 鳩山町教育委員会
- 渡辺 誠 1970 「縄文時代における埋甕習俗」『考古学ジャーナル40』ニューサイエンス社

埼玉古墳群の埴輪編年

城倉 正祥

はじめに

稻荷山古墳の後円部礫槻から出土した「辛亥銘鉄劍」、日本書記安閑紀「武藏国造争乱」の伝承など、埼玉古墳群は考古学と文献史学を結ぶ謎を秘めた古墳群である。後期を通じて同じ場所に大型古墳が営まれる稀有な古墳群であると同時に、遺構・遺物の質・量とともに卓越した内容を誇る埼玉古墳群は、関東の古墳研究史上、常に重要な位置を占めてきた。発掘調査に基づく考古学の緻密な遺構・遺物の分析、文献史学の視野の広いアプローチなど、東国古代史を巡るダイナミックな議論が蓄積されてきた、まさに夢の舞台である。

しかし、考古学の根幹である編年という点に関して言えば、埼玉古墳群の編年はまだ確立したとは言えない。様々な要素をもつ古墳の編年は、多角的に検証されるべきなのは言うまでもないが、墳丘規格・埋葬施設・副葬品・供獻土器など、どの要素を取り上げてみても、現状では全ての古墳を通して編年を確立できる要素とは言えない。その点において全古墳の通時的分析が可能な埴輪は、最も編年に有効な要素であると言える。だが、その埴輪研究においても、未だ体系的な分類を踏まえた編年は確立していないのが現状である。埴輪編年が確立できなかった原因は複数あるが、最大の問題は首長墓では当たり前に見られる現象—複数生産地からの供給、その実態を把握することができなかつた点にある。

本稿は、この最大の問題点を克服し、埼玉古墳群の確固たる埴輪編年を確立する。それは、東国古代史のダイナミックな展開を実証的に位置付けるための基礎作業に他ならない。

1 埼玉古墳群における埴輪研究の現状と課題

1－1 埼玉古墳群の編年と埴輪研究

埼玉古墳群の編年研究に関しては、長い歴史がある。しかし、埼玉古墳群の中で埋葬施設が発掘されている古墳は、稻荷山古墳・將軍山古墳に限られ、出土土器もそれほど多くはない。また、墳丘規格・周溝形態・主軸のブレや立地論など様々な角度から編年が試みられているが、単一の要素で通時的に分析が可能なのは埴輪しかない。

それ故に、埴輪の分析が埼玉古墳群の編年の最も重要な要素とされてきた。しかし、各報告書で編年は試みられているものの、埼玉古墳群出土埴輪を通時的・体系的に分析した研究は、岡本健一と若松良一の業績に限られる。必然的に、埼玉古墳群の埴輪編年を確立するためには、両氏の研究が出発点となる。まずは、その成果を概観し、現状の問題点と課題を明確化する。

1－2 若松良一「追加樹立説」の問題点

時間的には逆転するが、最初に若松良一の分析成果について検討する。若松は、埼玉古墳群の最新の発掘成果である稻荷山古墳の報告書の中で、埼玉古墳群出土埴輪全体の編年を論じている（若松2007）。

まず、若松は稻荷山古墳出土埴輪の特徴について、「バラエティに富み、型式学的にみた場合、同一集団が一定の技法に従っていちどきに製作したもの（同一型式）ではない」とする。実際の分析作業では、円筒埴輪を4大分類（A～D類）し、さらに規格差で12分類（A1・A2・A3・A4・B1・B2・B3・C1・C2・D1・D2・D3）に細分する。そして、「4大分類が工人集団の相違を示している可能性が高いのであるが、型式学的に見て、なお時間差も存在するもの」と結論付ける。しかし、若松自身が「同一時期の所産でないと証明することも容易ではない」と吐露し、「決定的な方法に苦慮した末に、稻荷山古墳と埼玉古墳群の各古墳の埴輪資料のクロスチェックを試み」るるに、集団差と時間差をどの要素において峻別するのかの戦略がないままに追加樹立を前提とした編年を展開していく。

若松は埼玉古墳群出土埴輪を、1期～6期に編年し、7期として中の山古墳の須恵質埴輪壺を位置付ける。今、若松の編年表に基づいて各期の該当類型を取り上げれば以下のようになる。

【1期】稻荷山A2・A3・A4

【2期】稻荷山B1・B2、二子山A1a・B、愛宕山C

【3期】稻荷山C1・C2、二子山A1a・C、丸墓山A2、天祥寺裏

【4期】二子山A1b・瓦塚A1・A3・B、奥の山A、愛宕山A1

【5期】稻荷山D1・D3、二子山A1a、瓦塚A2・A4、愛宕山B、將軍山A・C1・C2、
鉄砲山A

【6期】將軍山B・鉄砲山B1・B2・B3

【7期】中の山

この編年に従えば、A類（利根川右岸の未知の窯）、B類（生出塚窯）、C類・D類（和名窯か周辺の未知の窯）が、埼玉古墳群の各古墳にいずれも追加樹立されたことになる。だとすれば、各期における初出が古墳の造営時期となるので、若松の編年では稻荷山→二子山・愛宕山→丸墓山・天祥寺裏→瓦塚・奥の山→將軍山・鉄砲山→中の山の築造順序となり、およその編年が確立されたことになる。

さて、仮に埼玉古墳群における埴輪の生産体制が以上の通りであったとすれば、若松はかなり複雑な生産体制の様相を明解に読み解いていることになるだろうが、果たして正しい結論に到達しているのだろうか。大分類によって集団差を抽出する点はともかくとして、若松の方法論では時期差をどのようにして導き出しているかについて明確な説明がなされていない。そもそも若松が言う「型式差」とは、共通の特徴を有する埴輪群とその分類単位間の差異を示していると思われるが、その背後にある産地の違い・時間差・集団差・個人差などを重層的に分析・峻別する作業がないまま、ある特徴は集団差、またある特徴は時間差に置き換えるという主観的な分類に基づく議論だと考える。それ故に、結論として示された「追加樹立編年案」も混乱に満ちたものとなっている。

若松は最後に、「埴輪は古墳築造の一環として、たった一度しか設置されていないと思いこんで埴輪研究に臨んでいる研究者は少なくないと聞く。（一中略）追加樹立に注目すれば、より詳細な埴輪研究を展開することが可能となろう」と結ぶ。しかし、明確な基準がないままに、持論である「追加樹立説」（若松1982）に基づいて、一古墳出土埴輪の多様性を結果的には安易に「時間差」のみに集約させている点において、若松の議論はかなり危うい土台に立っている。

一方、近年の埴輪研究では、特に大型古墳において複数系統の埴輪が樹立されることとは、むしろ

一般的である点が認識されるようになり（中井2003、廣瀬2003・2006、古谷2003など）、その背後に埴輪生産の歴史性を読み解こうとする研究が進められている。さらに、集団差を示す系統識別を踏まえた上で、系統毎の変遷を追う作業（轟1973・犬木2005・城倉2009など）が行われている研究状況にあって、系統内分析の視点を欠く若松の分析手続きは甚だ不十分なものである。

以上、最新の研究状況を踏まえても、若松の「追加樹立先ありき」の編年論は、埴輪の編年研究自体の土台を曖昧なものにする危険があると考える。私は、埼玉古墳群に供給された生出塚窯産埴輪を刷毛目データベースの構築によって特定した上で、生出塚遺跡における窯の切り合い関係から編年を確立し、生出塚窯産埴輪に関して言えば追加樹立は存在していなかった事実を既に実証している（城倉2010a）。このような成果からすれば、今必要とされている分析は各古墳における分類成果を踏まえた上で、系統毎の変遷過程を追いかける作業である。若松が提示した「追加樹立を前提とする」編年論は、主観的な前提と誤った分析手順によって導き出されたもので、その分析方法・結論ともに根本的に間違っていると思う。もちろん、若松が長年行ってきた基礎作業は高く評価されるべきだと考えるし、基礎作業に基づいた結論を否定するのは本意ではない。しかし、若松が稻荷山古墳報告書の付図2として作成した「埴輪の複数回樹立を仮定した埼玉古墳群の円筒埴輪編年案」は、著しく客觀性に欠けた混乱した編年案で、この編年が埼玉古墳群の埴輪編年として一般化するのは、今後の埼玉古墳群の編年研究において大きな障害となりかねないし、埼玉古墳群の歴史的位置付けを誤った方向に導く可能性もある。

では、若松の議論の問題点はどこにあるのか。それは、①系統分類における基準が曖昧な点、②各系統内における変遷過程を通時的に位置付ける視点と方法論が欠如している点、この2点に集約されると言ってよい。この問題点を克服し、若松の「追加樹立編年案」を完全に覆す必要がある。

1－3 岡本健一「系統分類」の重要性

一方、將軍山古墳出土埴輪の詳細な分類を踏まえて、埼玉古墳群の全体編年を論じた岡本健一の成果は明確な方法論と精度の高い分析が評価される（岡本1997）。岡本は、將軍山古墳出土の円筒埴輪を、形態・製作技術・胎土・色調からA～C類に分類し、各類を「明らかに別の工人集団によって作られたもの」とする。その成果を踏まえた上で、埼玉古墳群における全ての埴輪が、①赤系、②橙系、③黃白色系に分類できることを指摘し（明確な峻別が難しいものもあるとするが）、各系統の埴輪にみられる円筒埴輪の突帶扁平率を調べた。これによって、各系統の円筒埴輪の突帶が扁平化していく方向性を明らかにし、稻荷山・二子山・丸墓山→愛宕山・瓦塚・奥の山→鉄砲山・將軍山の編年案を提示した。

後述するように將軍山古墳における岡本の分類は精度が高く、刷毛目工具の同定や同工品の視点から見ても、かなり的を射た分析だと考える。さらに、將軍山古墳での岡本の分類基準は、そのまま埼玉古墳群の全古墳出土埴輪の分類に適用が可能である。岡本が指摘する黃白色・橙褐色・赤褐色の3分類は、私も生産集団の違いを反映するものと考えており、これらの分類を埼玉古墳群の全ての古墳に適用することで系統差を抽出できると考える。

さらに、系統差を抽出した上で、系統毎にその変遷過程を追う方法論も首肯できる。ただ、各系統の変遷過程を突帶の扁平率のみで導きだそうとした岡本の分析はやはり不十分である。円筒埴輪の形態的特徴や製作技法、あるいは形象埴輪も踏まえた上で、各系統の変遷過程を位置付ける必要

がある。そして、その作業によって各古墳の各系統の埴輪がしっかりと縦軸でスムーズに繋がるのであれば、若松の主張する「追加樹立説」を覆すこともできよう。

結論を先に言えば、埼玉古墳群の埴輪は大きく3系統に分類でき、各系統の埴輪はスムーズな型式学的変遷を辿ることが分かっている。つまり、岡本の分析を踏襲し、各古墳の分類と古墳群全体を貫く分類を常にフィードバックしながら、その型式的特徴の変遷過程を位置付けることこそが、今やらなければならない作業だということが分かる。

2 分析視角

2-1 古墳内分析と古墳間分析

上述した研究史の整理で、問題点と課題が浮かび上がってきた。ここでは本稿の分析視角についてまとめる。

まず埼玉古墳群の各古墳には、複数生産地の製品が供給されているという事実が分析の出発点となる。これに関して言えば、埼玉古墳群出土埴輪のうち、生出塚窯産埴輪は全てその生産窯まで特定できているし(城倉2010a)、桜山窯周辺で生産された埴輪も部分的ながら特定している(城倉2010b)。つまり、物理的な証拠から複数生産地の製品が運ばれている事実が確認されているわけである。さらに、埼玉古墳群に埴輪を供給していたと考えられる生産遺跡一生出塚窯・和名窯・桜山窯・姥ヶ沢窯・権現坂窯の発掘成果により、生産地毎の埴輪の特徴が次第に明らかになりつつある。それら生産地の成果を踏まえれば、埼玉古墳群の各古墳出土埴輪の分析で、生産地の違いを示す分類が可能である。

分析作業では、これら生産地の特徴把握を踏まえた上で、一古墳を単位として分類を行い、その分類単位間の型式的距離を測っていくことになる。実際にはその作業はそれほど困難なものではなく、円筒埴輪・形象埴輪ともに、形態・製作技術・胎土の相関から整合的な分類が可能であるし、その妥当性は生産遺跡との刷毛目の一致からも確認することができる。そして、各古墳の分類を踏まえた上で、古墳群全体を通時的に見れば、埼玉古墳群全体では、やはり岡本が指摘した大きく3系統が認識できる。本稿では、①黄白色系統、②橙褐色系統、③赤褐色系統と呼称する。このように、一古墳出土埴輪の分類(古墳内分析)と、古墳群全体を貫く分類(古墳間分析)をフィードバックすることで、生産集団の差異を把握することができ、各系統の展開過程を考究できる。

2-2 埼玉古墳群出土埴輪の大別と生産地の推定

では、埼玉古墳群に供給された各系統の生産地が問題となる。

まず、③の赤褐色系統については、そのほとんどが刷毛目の同定作業によって、生出塚窯産製品だと判明しており、その生産窯まで特定している。さらに、生出塚遺跡においては、八手状の窯が相互に切り合いを持つことから、窯の物理的前後関係によって埴輪の編年が確立している。すなわち、天祥寺裏→二子山→瓦塚→奥の山→愛宕山→將軍山→鉄砲山に関しては、既に生産窯の物理的前後関係という動かない編年を組んでいる(城倉2010a)。また、生出塚遺跡の分析では、窯の切り合いで離れた類型が埼玉古墳群の一つの古墳で共伴することはないという事実を把握しており、埼玉古墳群に供給された生出塚窯産埴輪に関しては、追加樹立は全く行われていない点を確認している。このように、生出塚窯産埴輪はかなり様相が明らかになっているが、①②の系統との系譜関係

と並行関係を明らかにしていく必要がある。

問題となるのは①黄白色系統、②橙褐色系統の生産地である。

まず、①黄白色系統について言及する。黄白色系統の円筒埴輪は、客体的なB種ヨコハケ・半円透孔・小穿孔・突帯板押圧技法・最上段が長い形態など特徴的な埴輪群で、埼玉古墳群以外の出土例も比較的多い。例えば、とやま古墳（塙野1967）、鎧塚古墳（寺社下1981）、新屋敷古墳群（高崎1992、田中1994、金子・大谷1996、昼間・大谷1998）、月輪古墳群（関口・市川2008）、屋田古墳群（横川1984）、下道添遺跡（渡辺1981・坂野1987）、古凍古墳群（横川1984）などいずれも5世紀末～6世紀初頭とされる古墳から出土している。共伴する形象埴輪も古手の様相を呈し、上毛野を含めた北関東地域の広い範囲で共通性の高い埴輪群である。特に、北武藏地域の黄白色系統は、胎土の共通性が極めて高く、実際に古墳を超えて刷毛目が一致する例も確認できるので、かなり限定された場所で、特定の集団によって生産された可能性が高いと判断している。若松は稻荷山古墳出土埴輪の胎土分析で火山岩類が検出されたことから、「群馬県域の火山地帯と連絡する利根川筋の沼沢地」に候補が求められるとし、利根川右岸の未知の窯を想定する（若松2007）が、いずれ生産地が発見される可能性も期待されるので、現状で結論を急ぐ必要はない。ここで重要なのは、この黄白色系統が5世紀末～6世紀初頭において、広く共通する特徴をもった埴輪群で、特に北武藏においては生産地がある程度集約されていたという事実である。当然ながら、6世紀前半以降に展開する埴輪群の母体となる系統だったと推察され、その位置付けを考えていく必要がある。

最後に②橙褐色系統について言及する。橙褐色系統に関しては、赤褐色系統や黄白色系統に比べて、特徴が多様で偏差も大きく存在時間幅も長い。当然ながら複数の生産地の埴輪を含んでいることが予想されるが、それらを現状では明確に峻別することはできない。しかし、二子山古墳から出土した方形透孔の大型円筒埴輪（5-22-1）は、桜山埴輪窯で焼台として使用されていた埴輪（桜山9-1・9-6）に見られる桜山G類の刷毛目で調整され、比企地方の諏訪山7号周溝・毛塚32号埴輪棺（宮島2003・大谷2006）とも刷毛目が一致するなど桜山窯産、あるいはそれを遡る段階の製品である点が判明している。さらに、瓦塚古墳から出土した人物埴輪（調5-7-8・4-38-212）と動物埴輪（8-53-153）は、やはり桜山窯に至近の毛塚28号墳C類と刷毛目が合致するなど、桜山周辺産であることが分かっている。私が「プレ桜山」と呼称するこの埴輪群（城倉2010b）は、6世紀前半段階に下松5号墳（江原・長井2004）、岩鼻古墳群（宮島1989・江原1993）、新屋敷古墳群、月輪古墳群など比企・北埼玉を中心に分布し、波状ヘラ記号のある円筒・弓を貼りつけた板を持つ人物・扉表現のある家形埴輪、など非常に共通性が高い一群である。さらに、この「プレ桜山」は、6世紀後半における生出塚窯産埴輪の南への製品供給圏拡大の前に、東京湾まで伝播したことが分かっている。例えば、格塚古墳（野沢1992・照林2001）、東宮下地内出土品（笠森1988）、亀塚古墳（柏江市史編纂委員会1985）、登山1号墳（今津1992・稻村1997）などが明らかに「プレ桜山」の影響を受けた埴輪を出土する古墳である。このように橙褐色系統の中でも、「プレ桜山・桜山」のように生産地がある程度絞り込んでいる埴輪群が存在する一方で、生産地が特定できない個体群も多い。この橙褐色系統をどのように位置付けるべきか。

私は比企・大里に分布する窯を分析する中で、この地域の窯は6世紀第2四半期以降においては、基本的に周辺の中小古墳へ埴輪を供給しながら、埼玉古墳群の首長墓の造営に際してのみ大型品を供給していた点を明らかにした（城倉2010b）。この成果から考えるのであれば、橙褐色系統の埴輪

において生出塚窯産埴輪のような規則的な変遷を追えない点も十分に納得できる。「拠点生産地」として埼玉古墳群に大・中型品を供給し続けた生出塚窯（山崎1981・1987・1994・1999・2001・2002・2004・2005・2006）と、「衛星生産地」として比企・大里に点在しながら断続的に埼玉古墳群へ埴輪を供給した姥ヶ沢窯・権現塚窯（新井・森田1998）、桜山窯（横川1982）、和名窯（金井塚1983・弓2003）の製品の存在形態が異なっているのは至極当然である。逆に言うと、埼玉古墳群における橙褐色系統の存在形態自体が、比企・大里地方の生産窯の歴史性を物語っているということもできる。おそらく黄白色系統の強い影響で成立した橙褐色系統の埴輪は、6世紀前半段階には「プレ桜山」を中心に盛行期を迎え、6世紀第2四半期以降は生出塚窯製品にその座を取って代わられる。その後は、基本的に地域密着型の生産を行っていた比企・大里地方の窯から断続的に埼玉古墳群へ大型品が供給されたというのが橙褐色系統の大枠だと推察される。このように、比企・大里地方の窯製品を橙褐色系統と認識するわけだが、橙褐色系統は①大型円筒の第1段が長い点、②胎土に砂粒が多い点など生出塚窯産埴輪とは明らかに異なる特徴を持っている。具体的な生産地の特定はできなくとも、現状では橙褐色系統を「比企・大里産」として一つのまとまりで認識し、その大枠での変遷を位置付けるとともに、今後、窯の調査の進展に合わせて生産地の特定を進めていくのが現実的だと思われる。

以上、埼玉古墳群の大別分類と生産地の関係を整理した。以下にまとめておく。

- ①黄白色系統一生産地は特定できないが5C末～6C初に集約された場所で生産された埴輪群。
- ②橙褐色系統一比企・大里の複数窯の生産品。6C前半の「プレ桜山」の展開が特徴。
- ③赤褐色系統一生出塚窯産埴輪。6C第2四半期以降、埼玉古墳群の主体を占める。

2-3 系統整理の重要性

以上のように埼玉古墳群出土埴輪を3大別する。その上で、各系統の変遷過程を位置付け、順調な型式変化が認められるかを確認する。注意すべきは、これら各系統の埴輪はそれぞれに系譜的派生関係を持ち、同時期に併存しながらも盛行時間幅が前後する事実である。大枠で言えば、①黄白色系統→②橙褐色系統→③赤褐色系統の順序で、それぞれが生産の最盛期を迎えるのだが、これら3系統の埴輪相互の関係を埴輪の形態・技術面を加味して全体の流れの中で位置付ける必要がある。この作業によって各系統のスムーズな展開過程を認識できるのであれば、当然ながら若松の「追加樹立説」は完全に否定できるはずである。

この系統整理の作業は、埼玉古墳群の首長を頂点とする地域社会の中で、各埴輪生産集団がどのように活動していたのかを明らかにする作業に他ならない。現在の埴輪研究では、系統把握に基づく特定系統の展開を追う作業が主体であるが（犬木2005など）、そこからさらに一步踏み込んで一つの地域社会を単位とした系統間の複雑な展開過程を考究すべきである。その作業によって、地域社会の文脈の中で埴輪生産の歴史性を追求する必要がある（城倉2009）。

2-4 本稿の分析手順

最後に実際の分析手順をまとめておく。まず、埼玉古墳群の各古墳を単位として集団差を示すと考えられる分類を行う。円筒埴輪・形象埴輪の形態・技術・胎土の相関によって群別を確立する。なお、刷毛目が共通する類型に関しては、現在までの生産遺跡の分析で、限られた工人によって限

第1表 埼玉古墳群出土埴輪の分析表①

【稻荷山古墳】						
個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別	
1集71-3	IN2	Hue10YR8/3	黄白	中型円筒	A	新48-20
1集60-1	IN5	Hue10YR8/2	黄白	大型円筒	A	新48-24
1集71-4	IN5	Hue10YR8/3	黄白	朝顔	A	新48-25
新49-31	IN5'	Hue7.5YR5/4	橙	大型円筒	A	新48-26
新50-33	IN5	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A	新50-34
新50-35	IN5	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A	新52-43
新66-106	IN5	Hue10YR8/3	黄白	円筒破片	A	新52-44
新66-110	IN5'	Hue10YR8/3	黄白	円筒破片	A	新53-46
新66-111	IN5	Hue10YR8/3	黄白	円筒破片	A	新53-49
新67-115	IN5'	Hue10YR8/3	黄白	円筒破片	A	新53-52
新54-53	IN6	Hue10YR8/2	白	大型円筒	A	新69-131
新54-54	IN7	Hue7.5YR8/4	黄白	大型円筒	A	新78-23
新53-51	IN10	Hue10YR8/3	黄白	円筒破片	A	新78-27
1集34左下	IN11	Hue10YR8/1	黄白	円筒破片(Bヨコ)	A	調研報16-9-30
1集60-2	IN11	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A	調研報16-9-31
1集60-6	IN11	Hue10YR8/3	黄白	朝顔	A	調研報18-4-129
1集61-2	IN11	Hue10YR8/4	黄橙	大型円筒	A	調研報18-5-139
1集73-1	IN11	Hue10YR8/1	黄白	円筒破片(Bヨコ)	A	調研報18-5-140
1集73-3	IN11	Hue10YR8/2	黄白	円筒破片(Bヨコ)	A	調研報18-6-142
新45-1	IN11'	Hue10YR8/2	黄白	大型円筒	A	調研報18-10-187
新71-153	IN11	Hue10YR8/3	黄白	円筒破片(Bヨコ)	A	調研報19-1-2
1集71-1	IN16	Hue10YR8/4	黄白	中型円筒	A	調研報19-3-5
調研報17-8-61	IN21	Hue10YR8/4	黄白	人物	A	
調研報17-8-62	IN21	Hue10YR8/4	黄白	人物	A	
1集53-3	—	Hue10YR8/4	黄白	人物	A	
1集53-5	—	Hue10YR8/2	黄白	人物	A	
1集54-1	—	Hue10YR8/2	黄白	人物	A	
1集54-2	—	Hue10YR8/2	黄白	人物	A	
1集54-4	—	Hue10YR8/4	黄白	人物	A	
1集56-2	—	Hue10YR8/3	黄白	人物破片	A	
1集58-2	—	Hue10YR8/3	黄白	盾	A	
1集59-4	—	Hue10YR8/3	黄白	形象破片	A	調研報16-6-13
1集59-9	—	Hue10YR8/3	黄白	形象破片	A	調研報16-9-28
1集60-3	—	Hue7.5YR8/6	黄白	中型円筒	A	IN1
1集60-8	—	Hue7.5YR8/6	橙	大型円筒	A	Hue2.5YR6/8
1集61-1	—	Hue2.5YR6/1	灰	大型円筒	A	赤
1集71-2	—	Hue10YR8/2	黄白	中型円筒	A	大型円筒
1集71-5	—	Hue7.5YR8/6	黄白	大型円筒	A	C
新46-11	—	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A	1集61-4
新47-14	—	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A	IN1
新49-30	—	Hue10YR8/3	黄白	中型円筒	A	Hue2.5YR6/8
新50-36	—	Hue10YR8/2	黄白	中型円筒	A	赤
新50-37	—	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A	大型円筒
新52-39	—	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A	C
新52-40	—	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A	1集62-7
新52-41	—	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A	IN1
新53-47	—	Hue10YR8/3	黄白	中型円筒	A	Hue2.5YR6/8
新53-48	—	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A	赤
新53-50	—	Hue10YR8/2	黄白	大型円筒	A	人物
新76-1	—	Hue10YR8/2	黄白	人物	A	C?
調研報5-1	—	Hue10YR8/2	黄白	朝顔	A	調研報18-15-213
調研報17-8-63	—	Hue10YR8/4	黄白	人物	A	Hue2.5YR6/8
【黄墓山古墳】						
個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別	
新49-29	IN1'	Hue5YR7/8	橙	大型円筒	B 1	6集15-20
1集60-4	IN3	Hue5YR6/6	橙	朝顔	B 1	6集15-28
新45-5	IN3?	Hue7.5YR7/6	明茶	中型円筒	B 2	6集15-29
新45-7	IN3?	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B 1	6集15-34
新46-12	IN3	Hue5YR7/6	橙	大型円筒	B 1	6集16-12
新47-15	IN3	Hue5YR7/6	橙	中型円筒	B 1	6集18-33
新56-14	IN3	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B 1	6集19-50
新63-80	IN3?	Hue5YR7/6	橙	朝顔	B 1	6集17-10
1集52-2	IN4	Hue5YR6/8	明橙	盾持人	B 1	6集18-34
新46-13	IN9	Hue5YR7/4	橙	大型円筒	B 1	6集15-30
新47-16	IN9	Hue5YR7/4	橙	大型円筒	B 1	6集16-1
新48-21	IN9	Hue5YR7/8	橙	中型円筒	B 1	6集16-11
新52-42	IN13	Hue7.5YR8/6	明橙	大型円筒	B 3	6集17-13
新46-9	IN14	Hue5YR6/6	橙	大型円筒	B 1	6集20-64
新51-38	IN14	Hue5YR6/8	橙	朝顔	B	6集20-65
新47-18	IN17	Hue5YR6/8	橙	大型円筒	B 1	6集20-66
新48-22	IN17	Hue5YR6/8	橙	中型円筒	B 1	6集17-25
新48-23	IN17	Hue5YR6/8	橙	大型円筒	B 1	MH1
1集52-1	—	Hue5YR6/8	橙	人物	B	6集20-62
1集52-3	—	Hue5YR6/8	橙	人物	B	MH2
1集53-1	—	Hue5YR6/8	橙	人物	B	6集21-75
1集53-2	—	Hue2.5YR6/4	橙	人物	B	MH3
1集55-2	—	Hue2.5YR6/6	橙	馬破片	B	MH4
1集55-3	—	Hue2.5YR6/6	橙	馬破片	B	MH5
1集56-1	—	Hue2.5YR6/8	橙	人物破片	B	MH6
1集58-1	—	Hue5YR6/6	橙	盾	B	MH7
1集60-5	—	Hue2.5YR6/6	橙	朝顔	B	MH8
1集66-5	—	Hue2.5YR6/6	橙	雷電山復古型	B	Hue10YR8/2
1集66-6	—	Hue2.5YR6/6	橙	雷電山復古型	B	Hue5YR6/8
新45-2	—	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	B 2	Hue5YR6/8
新45-3	—	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B 2	Hue5YR6/8
新45-4	—	Hue5YR7/6	橙	大型円筒	B 1	Hue5YR6/8
新45-6	—	Hue7.5YR7/3	橙	大型円筒	B 1	Hue5YR6/8
新46-8	—	Hue10YR8/3	黄橙	中型円筒	B 2	Hue5YR6/8
新46-10	—	Hue5YR7/6	橙	中型円筒	B 1	Hue5YR6/8
新47-17	—	Hue5YR6/8	橙	大型円筒	B 1	Hue5YR6/8
新47-19	—	Hue2.5YR5/8	橙	大型円筒	B 1	Hue5YR6/8

第1表 埼玉古墳群出土埴輪の分析表(②)

6集22-9	—	Hue2.5YR5/8	赤	雷電山復古型	C	8集41-30	KZ9	Hue5YR6/6	明橙	円筒(4条)	A					
6集22-10	—	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	C 2	4集39-213	KZ11	Hue7.5YR8/4	黄白	人物	A					
6集22-11	—	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	C 2	8集54-154	KZ11	Hue7.5YR8/3	黄白	鳥	A					
6集22-12	—	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	C 2	4集19-83	KZ20	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A					
【天祥寺裏古墳】																
個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別	4集19-84	KZ20	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A					
31集5-7	TS1(生出塚W4)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	4集19-85	KZ20	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A					
31集7-20	TS1(生出塚W4)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	4集20-86	KZ20	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A					
31集8-24	TS1(生出塚W4)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	4集13-6	—	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A					
31集9-27	TS1'(生出塚W4')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	4集13-10	—	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A					
31集9-28	TS1(生出塚W4)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	4集20-87	—	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A					
31集10-32	TS1'(生出塚W4')	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(4条)	A	4集22-97	—	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A					
31集13-59	TS1(生出塚W4)	Hue2.5YR5/8	赤	人物	A	8集50-119	—	Hue7.5YR8/4	黄白	円筒(4条)	A					
31集17-78	TS1'(生出塚W4')	Hue2.5YR5/8	赤	馬破片	A	8集50-123	—	Hue7.5YR8/4	黄白	馬	A					
31集18-92	TS1(生出塚W4)	Hue2.5YR5/8	赤	馬	A	8集51-126	—	Hue7.5YR8/4	黄白	馬	A					
31集4-1	TS2'(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	8集51-149	—	Hue7.5YR7/4	橙	人物	A?					
31集4-2	TS2/TS2'(生出塚W1/W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	調研報5-3-1	—	Hue10YR8/3	黄白	大刀	A					
31集4-3	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	調研報5-4-2	—	Hue7.5YR7/3	黄白	人物	A					
31集5-4	TS2'(生出塚W1')	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(4条)	A	調研報5-5-5	—	Hue7.5YR8/4	明茶	人物	A					
31集5-5	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	4集38-212	KZ3(毛塚28号C)	Hue5YR6/4	橙	人物	B					
31集5-6	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(4条)	A	8集53-153	KZ3(毛塚28号C)	Hue5YR6/6	橙	猪	B					
31集5-8	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	調研報5-7-8	KZ3(毛塚28号C)	Hue5YR6/4	橙	盾持人	B					
31集5-9	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(4条)	A	4集21-90	KZ4	Hue2.5YR6/4	橙	円筒破片	B					
31集6-11	TS2'(生出塚W1')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	4集21-95	KZ4	Hue2.5YR6/4	橙	円筒破片	B					
31集6-12	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	4集23-116	KZ4'	Hue5YR6/6	橙	朝顔	B					
31集7-16	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	4集37-211	KZ4'	Hue5YR6/6	橙	人物	B					
31集7-17	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	7集21-7	KZ4'	Hue2.5YR6/6	橙	円筒破片	B					
31集7-22	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	7集22-17	KZ4'	Hue7.5YR7/4	明茶	円筒破片	B					
31集7-23	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	8集52-152	KZ7	Hue5YR6/6	橙	鳥	B					
31集7-24	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	4集23-115	KZ8	Hue2.5YR5/6	赤	朝顔	B					
31集8-23	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	8集39-21	KZ8	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(4条)	B					
31集9-29	TS2/TS2'(生出塚W1/W1')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	8集37-1	KZ10	Hue5YR6/6	橙	円筒破片	B					
31集9-30	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	7集35-169	KZ12	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	B					
31集13-58	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	人物	A	4集23-113	KZ13	Hue2.5YR6/8	橙	大型円筒	B					
31集14-60	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	盾持人	A	8集55-165	KZ17	Hue5YR7/6	橙	円筒破片	B					
31集14-61	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	盾持人	A	4集12-4	—	Hue2.5YR6/8	橙	円筒破片	B					
31集16-73	TS2'(生出塚W1')	Hue2.5YR5/8	赤	鳥	A	4集12-5	—	Hue5YR7/6	明茶	円筒破片	B					
31集17-81	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	馬	A	4集39-216	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	B					
31集18-82	TS2'(生出塚W1')	Hue2.5YR5/8	赤	馬	A	7集35-168	—	Hue5YR7/6	橙	円筒(4条)	B					
31集18-93	TS2/TS2'(生出塚W1/W1')	Hue2.5YR5/8	赤	形象器台	A	8集40-24	—	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	B					
31集仮1	TS2'(生出塚W1')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A	8集50-117	—	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B					
31集17-74	—	Hue2.5YR5/8	赤	馬	A	8集50-118	—	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B					
31集17-77	—	Hue2.5YR5/8	赤	馬破片	A	8集50-121	—	Hue5YR7/6	橙	円筒(4条)	B					
31集馬鈴一括	—	Hue2.5YR5/8	赤	馬	A	調研報6-1-1	—	Hue5YR7/6	橙	家	B					
31集10-31	TS5	Hue5YR7/6	橙	円筒破片	B	4集33-189	KZ1'(生出塚DE8')	Hue2.5YR5/6	赤	家	C					
31集15-67	TS3	Hue5YR8/4	明茶	盾(群馬系)	C	4集34-190	KZ1'(生出塚DE8')	Hue2.5YR5/8	赤	盾	C					
31集15-68	TS4	Hue5YR8/4	明茶	帽子(群馬系)	C	4集35-191	KZ1'(生出塚DE8')	Hue2.5YR5/6	赤	盾	C					
【二子山古墳】																
個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別	4集36-208	KZ1'(生出塚DE8')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C					
5集23-3	—	Hue10YR8/3	黄白	円筒(5条)	A	8集41-31	KZ1(生出塚DE8)	Hue2.5YR4/8	赤	円筒破片	C					
5集30-64	—	Hue10YR7/3	黄白	円筒破片	A	8集55-161	KZ1(生出塚DE8)	Hue2.5YR4/8	赤	円筒破片	C					
5集45-259	—	Hue10YR8/3	黄白	鳥	A	4集23-114	KZ2'	Hue2.5YR5/8	赤	大型円筒	C					
5集23-2	FT2	Hue5YR7/8	橙	円筒(5条)	B	4集32-188	KZ2	Hue2.5YR5/6	赤	家	C					
5集22-1	FT4(桜山G)	Hue5YR6/6	橙	円筒(5条)	B	8集55-160	KZ6	Hue5YR6/8	赤	人物	C					
5集29-61	FT6	Hue7.5YR7/6	橙	円筒破片	B	8集40-28	KZ10'	Hue7.5YR8/4	明茶	朝顔	C					
5集27-27	FT9	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B	8集37-4	KZ14	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C					
5集26-25	FT12	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	B	8集40-26	KZ15	Hue10YR8/3	明茶	円筒破片	C					
5集26-18	—	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	B	8集39-23	KZ16	Hue2.5YR5/8	赤	朝顔	C					
5集26-19	—	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	B	4集20-89	KZ18	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C					
5集30-67	—	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B	4集20-88	KZ19	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C					
5集33-92	—	Hue2.5YR6/8	橙	人物	B ?	8集51-150	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物	C					
5集26-22	FT1(生出塚DE8)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	調研報5-4-3	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物	C					
5集46-284	FT1(生出塚DE8)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	調研報5-5-4	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物	C					
5集46-294	FT1(生出塚DE8)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	【奥の山古墳】										
8集18-100	FT1(生出塚DE8)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(5条)	C	個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別					
5集24-24	FT3	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(5条)	C	7集11-61	OY7	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	A					
5集43-231	FT5	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	7集11-69	OY7	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	A					
5集37-146	FT7	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	7集11-71	OY7	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	A					
5集26-23	FT8'(生出塚M6')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	7集11-74	OY7	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	A					
5集27-30	FT8(生出塚M6)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	7集12-1	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A					
5集31-79	FT8'(生出塚M6')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	7集12-2	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A					
5集32-86	FT8'(生出塚M6')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	7集12-3	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A					
5集36-139	FT8(生出塚M6)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(5条)	C	7集12-4	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A					
5集36-145	FT8(生出塚M6)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	7集12-5	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A					
5集30-66	FT10	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	7集12-6	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A					
5集26-20	FT11	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	7集12-7	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A					
5集26-21	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	7集12-10	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A					
5集26-24	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	7集12-11	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A					
5集26-26	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	7集12-13	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A					
5集26-31	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	7集12-14	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A					
5集30-68	—	Hue2.5YR5/8	赤	朝顔	C	7集12-15	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A					
5集31-80	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	7集14-47	—	Hue5YR6/6	橙	家破片	A					
5集31-81	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	7集14-48	—	Hue5YR6/6	橙	家破片	A					
5集32-83	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	7集7-5	OY1	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	B					
5集32-87	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C	7集7-2	OY2(生出塚DE13)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	B					
5集33-89	—	Hue2.5YR4/8	赤	盾破片	C	7集8-3	OY2(生出塚DE13)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B					
5集33-99	—	Hue2.5YR4/8	赤	人物破片	C	7集10-43	OY2(生出塚DE13)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B					
【瓦塚古墳】																
個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別	7集7-1	OY3	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	B					
調研報5-6-7	KZ5	Hue7.5YR8/4	黄白	人物	A	7集8-16	OY4(生出塚DE19)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B					
調研報6-2-3	KZ5	Hue7.5YR8/4	明橙	人物	A	7集8-18	OY4(生出塚DE19)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B					
						7集8-23	OY4(生出塚DE19)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B					

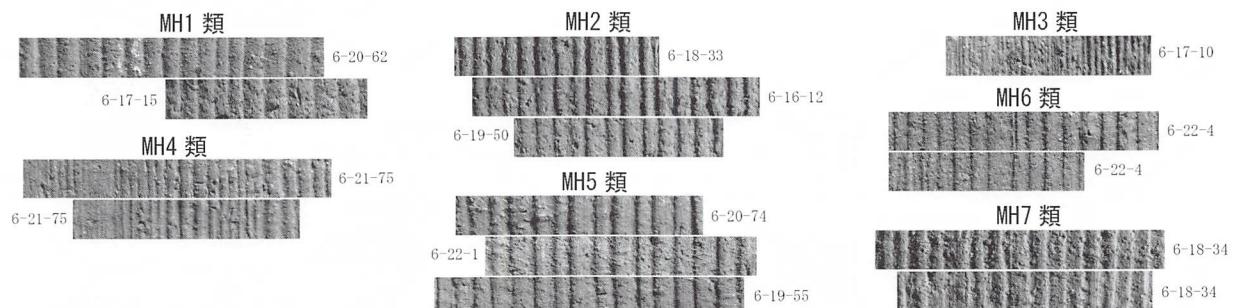
第1表 埼玉古墳群出土埴輪の分析表③

7集8-15	OY5(生出塚 DE12)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B	確認36-22	SG5'	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(3条)	A						
7集8-19	OY5(生出塚 DE12)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B	確認36-23	SG5'	Hue5YR7/8	橙	円筒(3条)	A						
7集8-7	OY6'(生出塚 DE6')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B	確認36-24	SG5	Hue2.5YR4/8	赤	円筒(3条)	A						
7集7-3	—	Hue2.5YR6/8	赤	円筒(4条)	B	確認37-25	SG5'	Hue2.5YR5/8	橙	円筒(3条)	A						
7集7-4	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	B	確認37-26	SG5/SG5'	Hue5YR6/8	橙	円筒(3条)	A						
7集12-9	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物破片	B	確認37-27	SG5	Hue2.5YR5/8	橙	円筒(3条)	A						
7集12-12	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物破片	B	確認37-28	SG5	Hue2.5YR5/8	橙	円筒(3条)	A						
7集12-16	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物破片	B	確認41-42	SG5	Hue2.5YR7/6	橙	朝顔	A						
7集12-17	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物破片	B	確認41-43	SG5	Hue5YR6/8	橙	朝顔	A						
7集14-41	—	Hue2.5YR5/8	赤	靭破片	B	確認41-45	SG5	Hue2.5YR5/8	橙	朝顔	A						
7集14-42	—	Hue2.5YR5/8	赤	形象破片	B	確認38-31	SG6	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(4条)	A						
7集14-43	—	Hue2.5YR5/8	赤	形象破片	B	確認41-41	—	Hue10YR8/3	明茶	朝顔	A						
7集14-46	—	Hue2.5YR5/8	赤	家破片	B	確認42-43-1	SG1	Hue5YR7/6	橙	靭	B						
7集14-49	—	Hue2.5YR5/8	赤	家破片	B	確認39-36	SG2	Hue5YR5/6	橙	円筒(4条)	B						
【愛宕山古墳】																	
個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別	確認44-41	SG2	Hue2.5YR6/6	橙	靭	B						
3集24-89	AT1	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(3条)	A	確認45-31	SG2	Hue5YR6/6	橙	盾持人	B						
3集25-90	AT1	Hue5YR6/6	橙	円筒(3条)	A	確認39-33	SG7	Hue5YR8/6	明茶	円筒(4条)	B						
3集24-91	AT1	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A	確認39-34	SG7?	Hue5YR6/8	橙	円筒(4条)	B						
3集25-92	AT1	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A	確認39-35	SG7	Hue10YR8/4	明茶	円筒(4条)	B						
3集26-94	AT1	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	A	確認40-37	SG7'	Hue5YR6/8	橙	円筒(4条)	B						
3集27-113	AT1	Hue5YR7/2	灰	円筒破片	A	確認44-10	SG9	Hue5YR7/6	橙	靭	B						
3集27-114	AT1	Hue2.5YR6/8	赤	円筒破片	A	確認38-32	SG10	Hue7.5YR8/4	明茶	円筒(4条)	B						
3集29-128	AT1	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A	確認38-30	—	Hue5YR7/8	橙	円筒(4条)	B						
31集9-3	AT1	Hue10YR7/3	明茶・灰	円筒(3条)	A	確認40-38	ナデ	Hue5YR7/6	明茶	円筒(4条)	B						
31集9-4	AT1	Hue10YR7/3	明茶・灰	円筒(3条)	A	確認38-39	ナデ	Hue5YR8/4	明茶	円筒(4条)	B						
31集10-5	AT1	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(3条)	A	確認40-40	ナデ	Hue5YR7/6	橙	円筒(4条)	B						
31集14-34	AT1	Hue2.5YR6/4	人物	A	【鉢砲山古墳】												
31集16-66	AT1	Hue2.5YR6/8	橙	人物	A	確認32-1	SG3(生出塚 DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C						
3集16-13	AT5	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(3条)	A	確認32-2	SG3(生出塚 DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C						
3集25-93	AT5'	Hue5YR6/6	橙	円筒破片	A	確認32-3	SG3(生出塚 DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C						
31集10-6	AT5	Hue7.5YR8/3	明茶	円筒(3条)	A	確認33-5	SG3(生出塚 DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C						
31集10-7	AT5	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(3条)	A	確認33-6	SG3(生出塚 DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C						
31集11-10	AT5	Hue10YR7/3	明茶・灰	円筒破片	A	確認33-7	SG3(生出塚 DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C						
31集14-33	AT5	Hue2.5YR6/4	橙	人物	A	確認33-8	SG3(生出塚 DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C						
3集15-11	AT6	Hue5YR5/8	橙	円筒(3条)	A	確認35-20	SG3(生出塚 DE9)	Hue5YR6/8	橙	円筒(4条)	C						
3集17-14	AT7	Hue2.5YR5/8	橙	円筒(3条)	A	確認33-9	SG4(生出塚 DE27)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C						
31集11-8	AT7	Hue10YR6/3	こげ茶	円筒(3条)	A	確認33-10	SG4(生出塚 DE27)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C						
31集16-65	AT7'	Hue2.5YR6/8	橙	人物	A	確認33-11	SG4(生出塚 DE27)	Hue2.5YR6/8	赤	円筒(4条)	C						
3集16-12	AT8	Hue5YR6/1	灰	円筒(3条)	A	確認34-12	SG4(生出塚 DE27)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C						
3集20-45	—	Hue5YR7/2	灰	円筒破片	A	確認34-13	SG4(生出塚 DE27)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C						
3集33-188	—	Hue2.5YR6/8	橙	大刀	A	【中の山古墳】											
3集33-190	—	Hue2.5YR6/8	橙	蓋	A	個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別						
3集33-191	—	Hue2.5YR6/8	橙	蓋	A	2集13-50	TP1(生出塚 DE16)	Hue7.5YR7/6	明茶	円筒破片	A						
3集11-2	AT2(生出塚 DE9)	Hue10YR8/4	明茶	円筒(3条)	B	2集16-1	TP1(生出塚 DE16)	Hue10YR6/1	灰	大型円筒	A						
3集12-3	AT2(生出塚 DE9)	Hue7.5YR8/6	明茶	円筒(3条)	B	2集10-1	TP2	Hue2.5YR6/8	橙	大型円筒	A						
3集13-5	AT2(生出塚 DE9)	Hue10YR8/2	明茶	円筒(3条)	B	2集11-17	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集13-6	AT2(生出塚 DE9)	Hue10YR8/4	明茶	円筒(3条)	B	2集11-19	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集20-46	AT2(生出塚 DE9)	Hue5YR5/6	赤	円筒破片	B	2集12-24	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集23-77	AT2(生出塚 DE9)	Hue5YR7/4	橙・灰	円筒破片	B	2集12-36	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集23-78	AT2(生出塚 DE9)	Hue5YR7/4	橙・灰	円筒破片	B	2集13-53	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集23-83	AT2(生出塚 DE9)	Hue5YR7/4	橙	円筒破片	B	2集14-68	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	大型円筒	A						
3集29-132	AT2(生出塚 DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B	2集14-70	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集14-7	AT3'	Hue10YR8/3	明茶	円筒(3条)	B	2集14-75	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集15-9	AT3	Hue10YR8/4	明茶	円筒(3条)	B	2集15-77	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集15-10	AT3	Hue10YR8/4	明茶	円筒(3条)	B	2集15-81	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集17-16	AT3'	Hue7.5YR7/4	明茶	円筒破片	B	2集19-71	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集20-47	AT3'	Hue5YR7/2	灰	円筒破片	B	2集19-73	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集22-76	AT3'	Hue2.5YR6/1	灰	円筒破片	B	2集20-103	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集23-85	AT3'	Hue7.5YR7/4	明茶・灰	円筒破片	B	2集21-109	TP3(生出塚 DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集23-86	AT3	Hue7.5YR7/4	明茶・灰	円筒破片	B	2集21-11	TP4'(生出塚 DE8')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集23-88	AT3	Hue7.5YR7/4	明茶・灰	円筒破片	B	2集21-15	TP4'(生出塚 DE8')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
31集9-2	AT3'	Hue7.5YR8/4	明茶	円筒(3条)	B	2集21-28	TP5(生出塚 DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
31集12-13	AT3'	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B	2集15-86	TP5(生出塚 DE31)	Hue7.5YR7/6	明茶	円筒破片	A						
3集11-11	AT4	Hue10YR6/1	灰	円筒(3条)	B	2集19-58	TP5(生出塚 DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集12-4	AT4	Hue10YR6/1	灰	円筒(3条)	B	2集19-61	TP5(生出塚 DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集14-8	AT4	Hue5YR7/6	橙	円筒(3条)	B	2集21-113	TP5(生出塚 DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集29-127	AT4	Hue5YR6/6	橙	円筒破片	B	2集21-117	TP5(生出塚 DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集29-129	AT4	Hue5YR6/6	橙	円筒破片	B	2集22-127	TP5(生出塚 DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
31集12-16	AT4	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B	2集22-134	TP5(生出塚 DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集19-24	—	Hue5YR6/6	橙	円筒破片	B?	2集22-135	TP5(生出塚 DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集33-187	—	Hue10YR5/8	赤	大刀	B	2集22-136	TP6(生出塚 DE13)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A						
3集33-189	—	Hue2.5YR5/8	赤	大刀	B	2集22-125	TP7(生出塚 DE44)	Hue7.5YR7/2	灰	円筒破片	A						
31集15-64	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物	B	【将軍山古墳】											
31集16-71	—	Hue2.5YR5/8	赤	馬	B	個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別						
31集16-75	—	Hue2.5YR5/8	赤	馬	B	7集52-9	NK1/NK1'(未野 A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A						
【將軍山古墳】																	
個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別												
確認9-1	SG5	Hue2.5YR5/8	橙	円筒(3条)	A												
確認9-2	SG5	Hue10YR5/8	赤	円筒(3条)	A												
確認11-1	SG5	Hue5YR6/6	橙	円筒(3条)	A												
確認11-2	SG5	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(3条)	A												
確認11-5	SG5	Hue10YR8/3	明茶	円筒(3条)	A												
確認11-7	SG5'	Hue5YR7/8	橙	円筒(3条)	A												
確認34-14	SG5	Hue5YR7/8	橙	円筒(3条)	A												
確認34-15	SG5'	Hue5YR7/8	橙	円筒(3条)	A												
確認35-16	SG5	Hue2.5YR7/6	橙	円筒(3条)	A												
確認35-17	SG5'	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(3条)	A												
確認35-18	SG5'	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(3条)	A												
確認35-19	SG5	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(3条)	A												

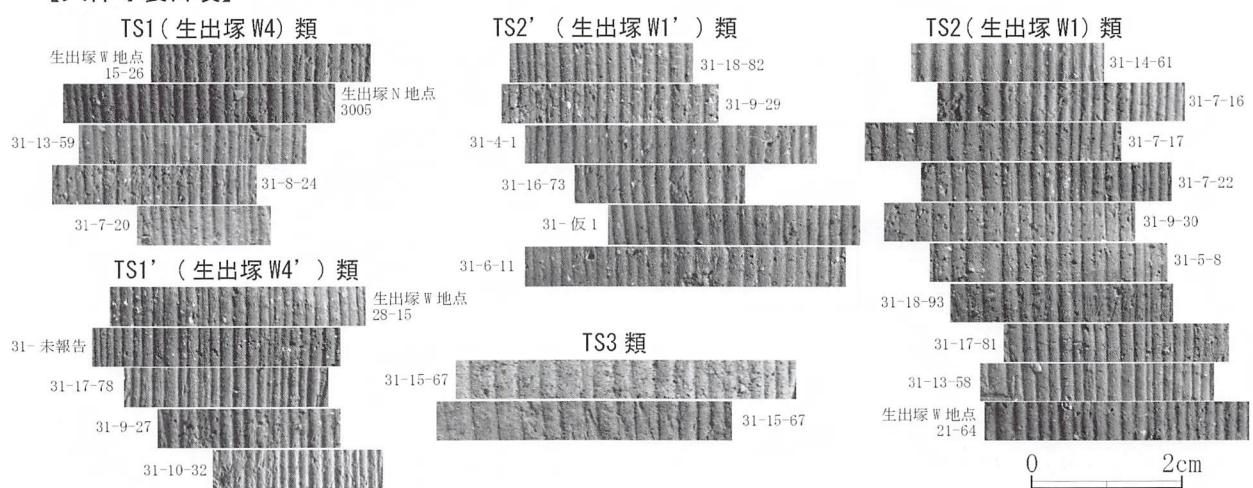
【稻荷山古墳】



【丸墓山古墳】

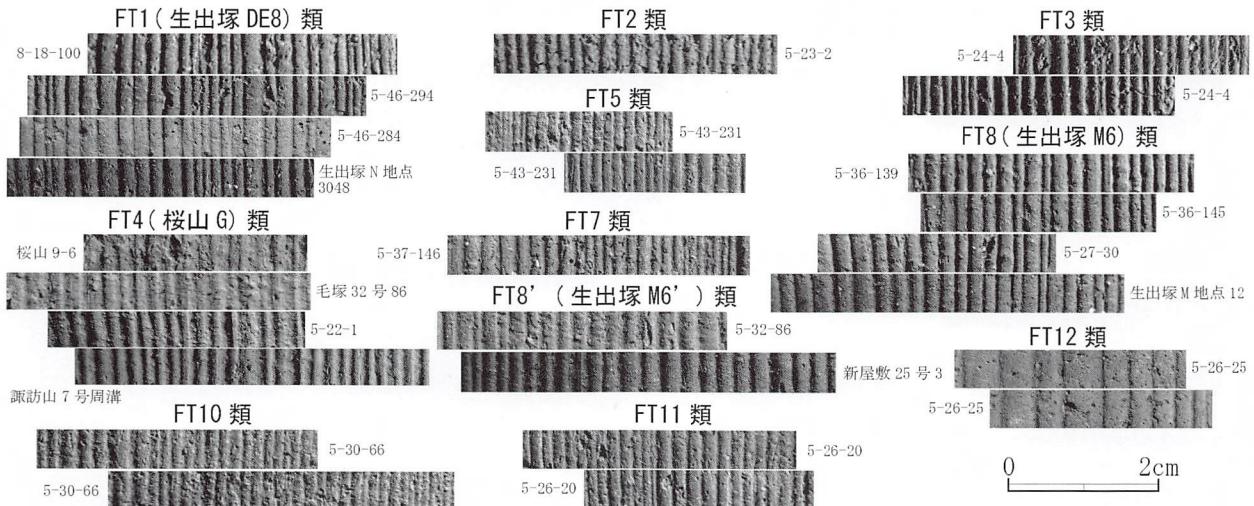


【天祥寺裏古墳】

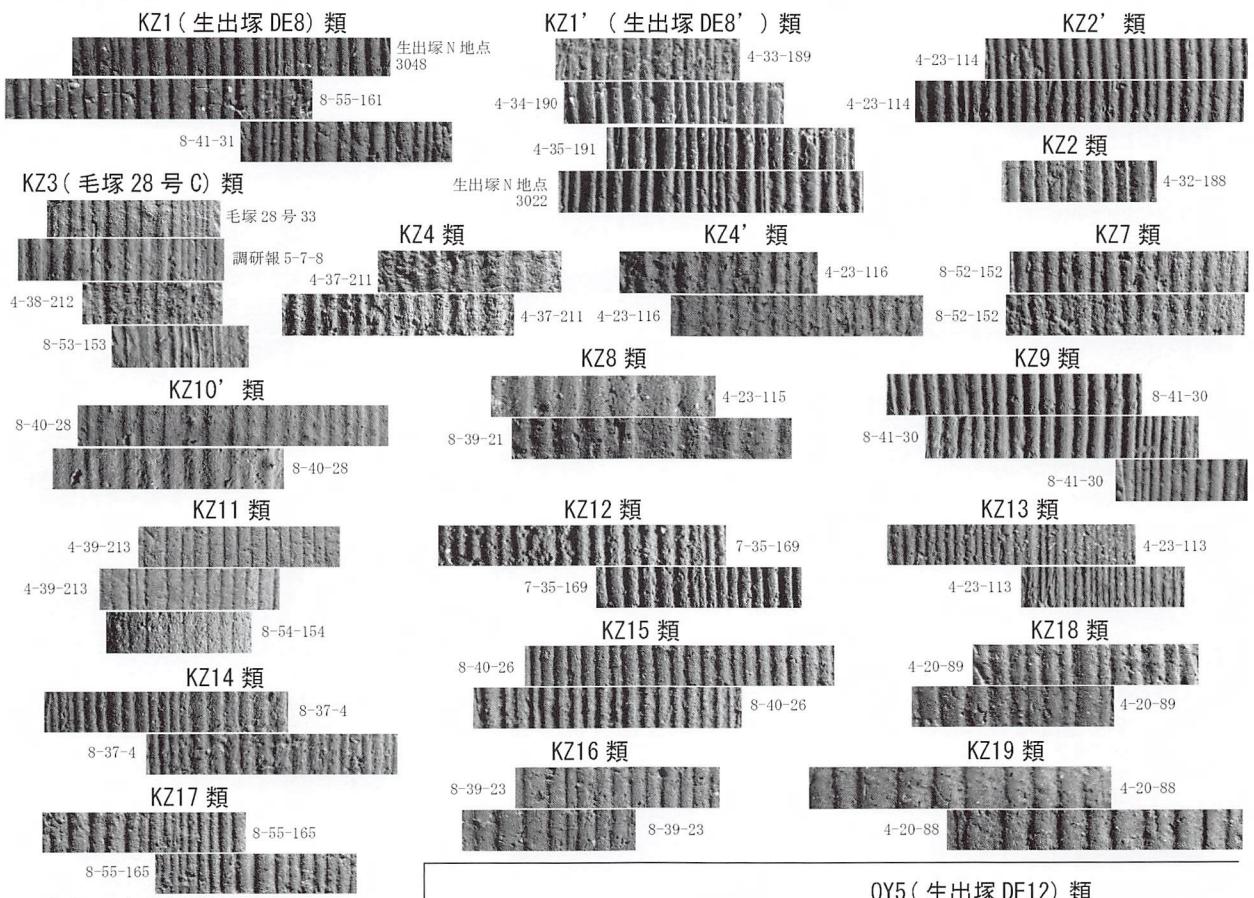


第1図 埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目データベース①

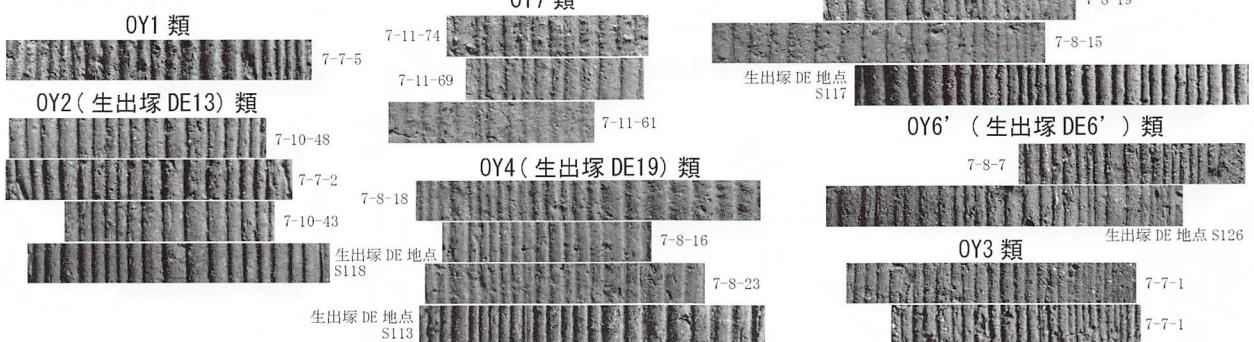
【二子山古墳】



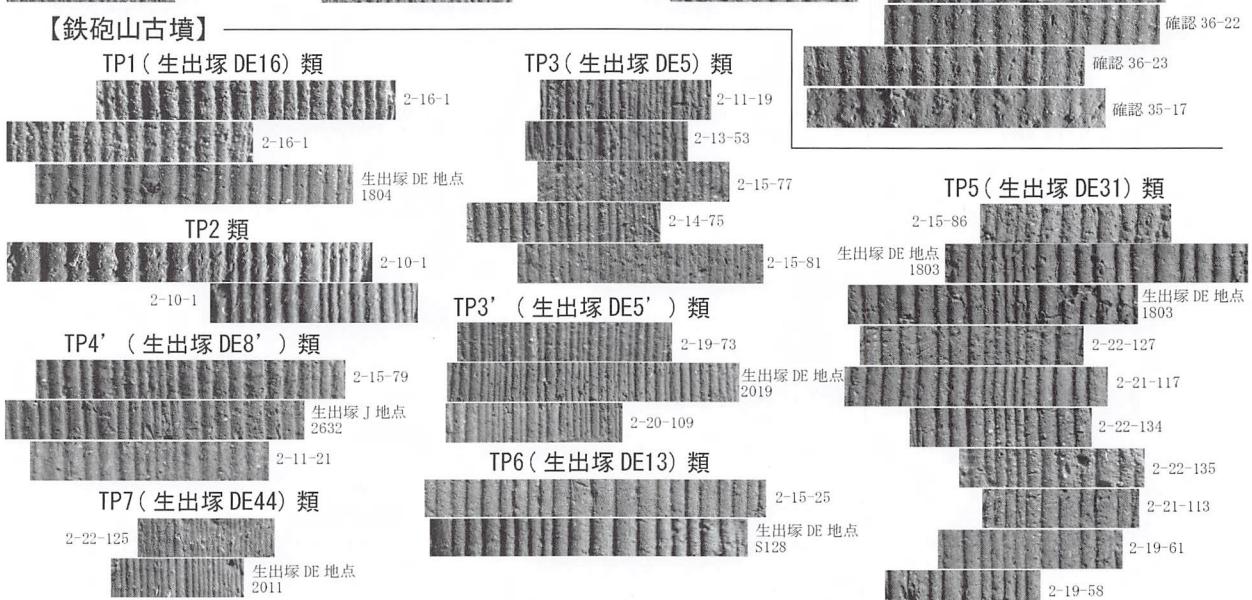
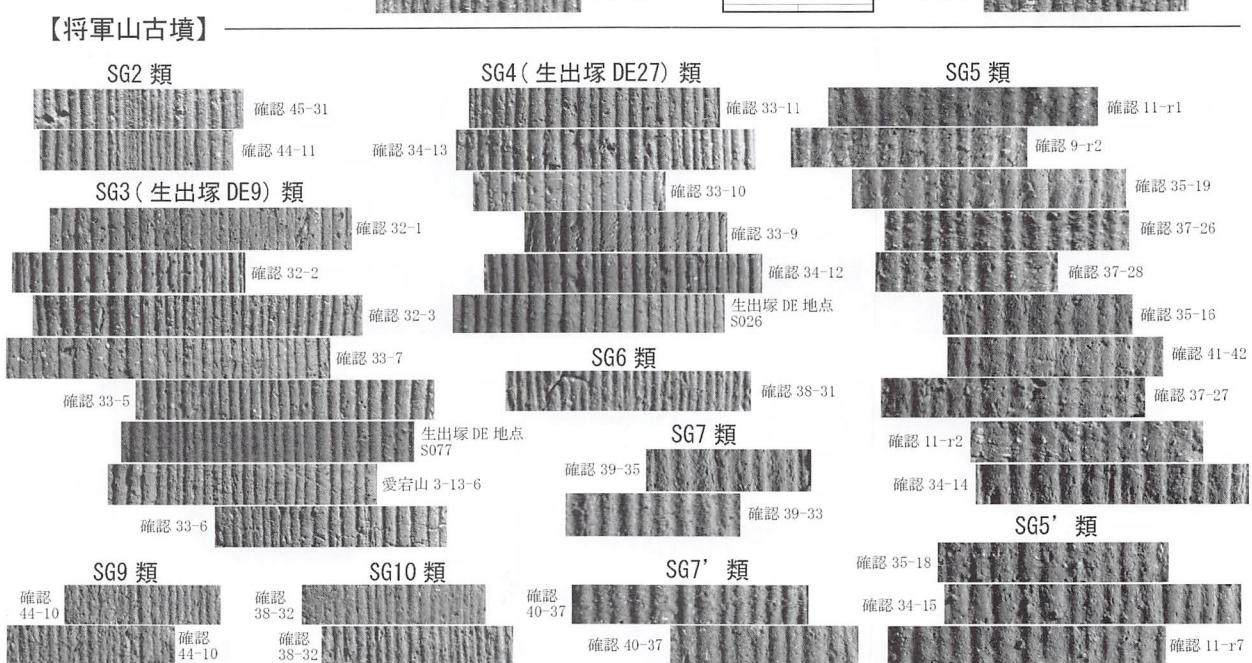
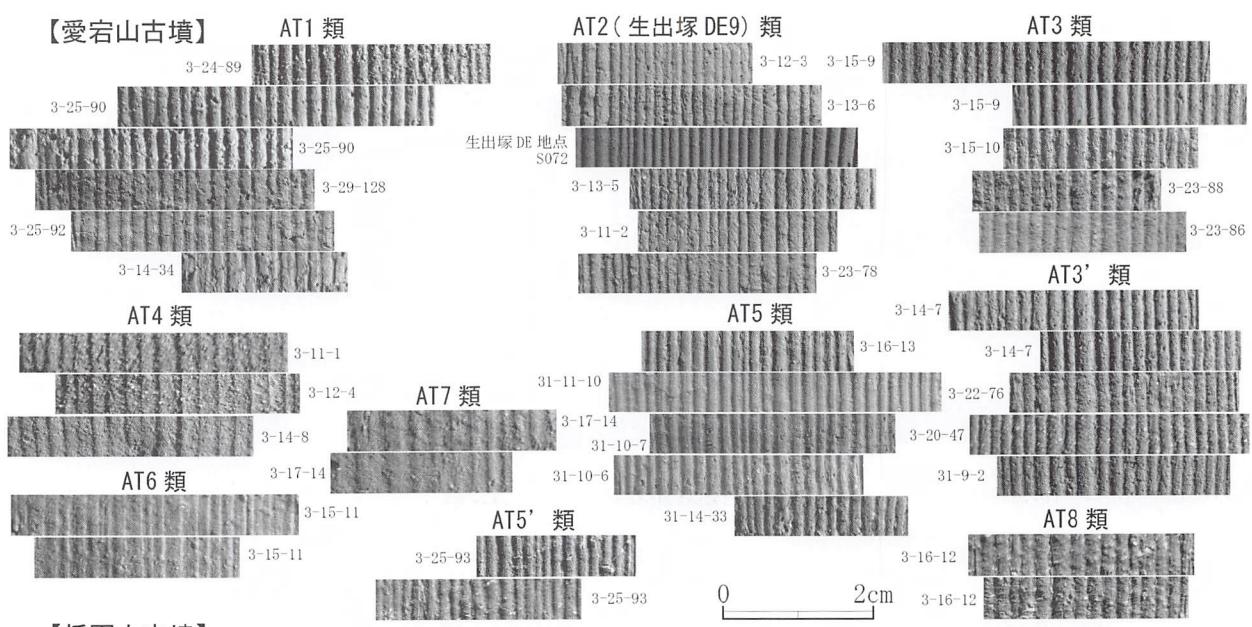
【瓦塚古墳】



【奥の山古墳】

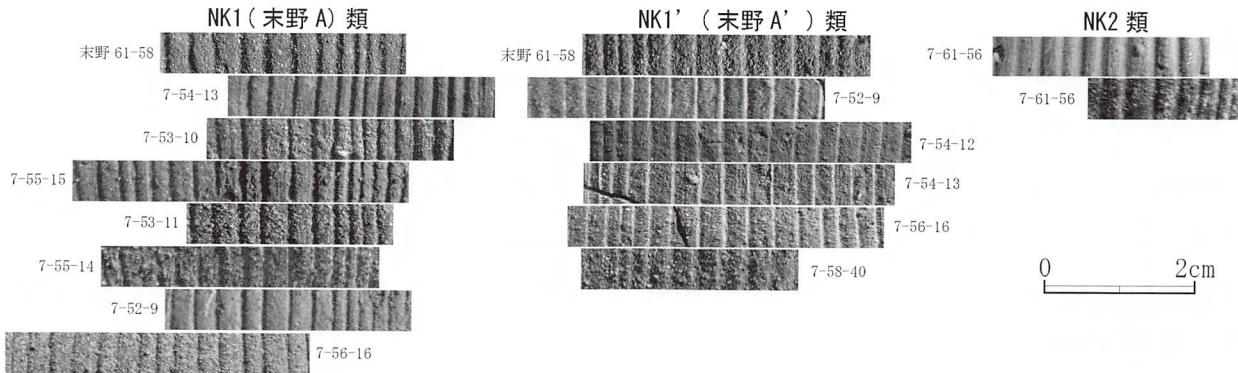


第1図 埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目データベース②



第1図 埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目データベース③

【中の山古墳】



第1図 埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目データベース④

第1表・第1図〈基礎データ集成〉凡例一覧

【第1表】

※埼玉古墳群の各古墳から出土した埴輪の特徴を整理した。

※個体番号は、各報告書を参照。〈集番号－図版番号－個体番号〉で全個体を記載した。

なお、報告書名に関して省略名を使っているのは以下である。

①「調研報」→『埼玉県立さきたま資料館調査研究報告』

②稻荷山古墳「新」→『武藏埼玉稻荷山古墳』

③將軍山古墳「確認」→『將軍山古墳 確認調査編』

※刷毛目は、古墳毎に通し番号を付けた。各古墳の略称は、稻荷山 (IN)、丸墓山 (MH)、天祥寺裏 (TS)、二子山 (FT)、瓦塚 (KZ)、奥の山 (OY)、愛宕山 (AT)、將軍山 (SG)、鉄砲山 (TP)、中の山 (NK) である。この略称の後に 1 から番号を振っている。なお、「'」は逆目を示す。

※埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目のうち、生出塚窯・桜山窯・末野窯・毛塚古墳群・新屋敷古墳群・諏訪山 7 号周溝など生産遺跡や古墳と合致する刷毛目は、その事実を表中に明記した。なお、生出塚遺跡における刷毛目番号に関しては、以下の論文を踏襲する。

〈城倉正祥2010「生出塚窯産円筒埴輪の編年と生産の諸段階」『考古学雑誌』第94巻第1号〉

※埴輪の色調に関しては、土色帖による客観的な数値を全個体に関して示した。さらに、資料調査の際の感覚的な要素も表現するため、色調部分には肉眼観察による色調分類を示した。

※全個体に関して、器種と円筒の場合は条数を明示した。

※群別に関しては、古墳毎の大分類をアルファベットで示した。アルファベットはあくまで各古墳における群別を示し、埼玉古墳群全体での分類単位ではない。

【第1図】

※埼玉古墳群の各古墳から出土した埴輪の刷毛目を整理した。

※刷毛目写真は、デジタルカメラで接写した画像を原寸で示している。ただし、各個体に応じて焼成時の収縮率が異なるため、できるだけ焼成良好な資料を基準として縮尺を微調整している。

※刷毛目番号、及び個体番号は第1表に対応する。

※生産遺跡、あるいは他古墳と刷毛目が合致する場合、その合致状況も写真で提示している。

その場合、報告書に掲載されている番号を記載した。

※第1表中に刷毛目番号があつて第1図に写真のない刷毛目に関しては、刷毛目の分類そのものはできるが、器表面の状況などから写真による明示が難しいことを示す。

※刷毛目の詳細に関しては、以下の論文を参照。

〈城倉正祥2007「埴輪製作に使用された刷毛目工具」『埴輪研究会誌』第11号〉

られた期間に製作された点が既に判明しているので（城倉2010a・2010b）、「刷毛目共通類型」と呼称し図面を重ねて提示する。ちなみに、これら刷毛目共通類型が群別を越えて存在する事例は一例も存在しないので、大別分類の妥当性が確認できる。

次に、各古墳出土埴輪の刷毛目データベースを提示し、群別認識の妥当性を示すと共に、生産地が判明している類型を明示する。なお、刷毛目の分析方法については別に詳述している（城倉2009）、それに倣った整理を行う（第1表・第1図凡例参照）。

これらの基礎作業を踏まえた上で、埼玉古墳群出土埴輪全体の大別・細別基準を示し、黄白色系統・橙褐色系統・赤褐色系統それぞれの変遷過程を明らかにする。さらに、各系統相互の派生関係を明らかにし、その時間軸を整理した上で埼玉古墳群の埴輪編年を確立する。

3 各古墳出土埴輪の分類

では、具体的に各古墳出土埴輪の分類成果について示す。なお、各古墳出土埴輪の基礎データについては第1表にまとめ、分類単位の主要な実測図を第2～11図に示した。

3-1 稲荷山古墳（第2図①②）

稻荷山古墳については、若松良一の大分類を修正した分類案を示す。若松は4類に分類するが、ここではA・B・C群に3分類する。

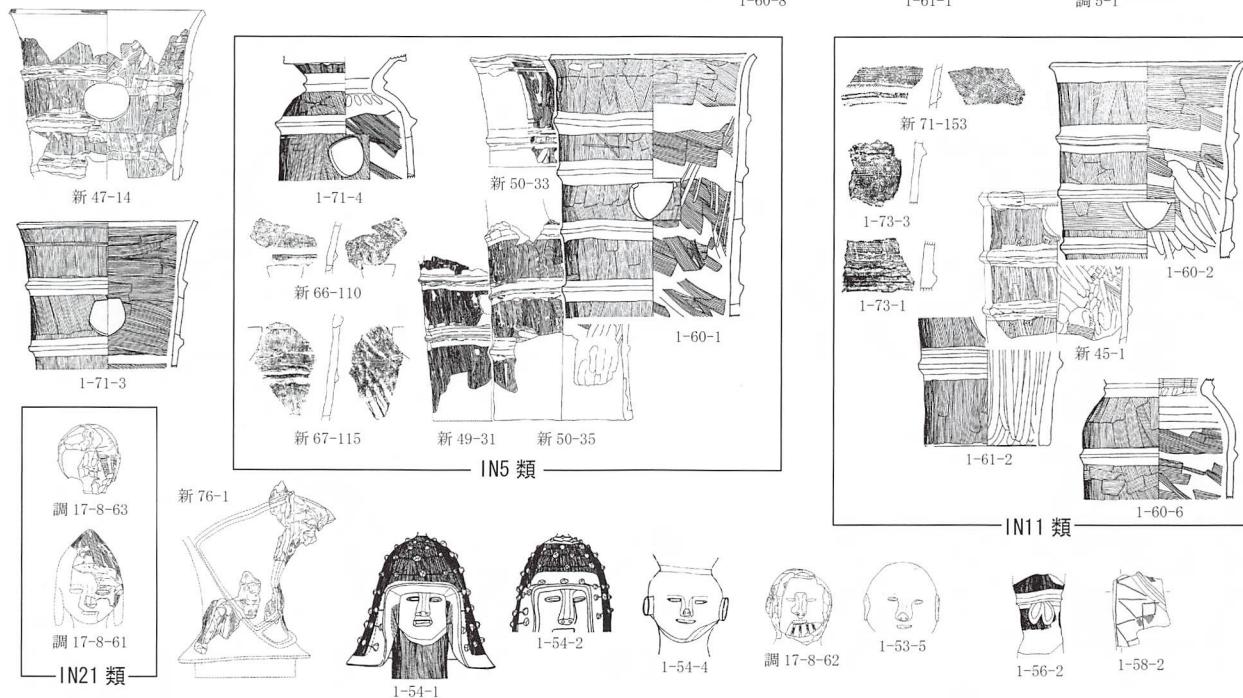
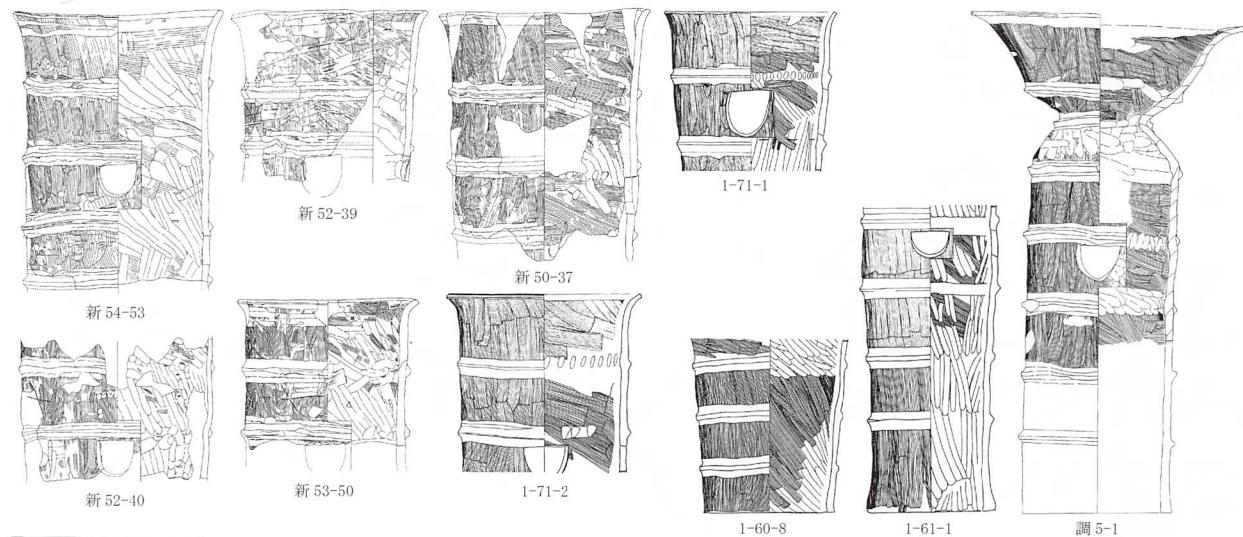
【A群】若松がA類とする一群である。黄白色のなめらかな胎土を特徴とし、軟質で断面が黒色を呈する。客体的なB種ヨコハケ・半円透孔・突帯下側につく板押圧技法・赤彩など共通性の高い埴輪群で識別が容易である。大型円筒はいずれも半円透孔を有する。B種ヨコハケの個体が認められるが、その多くがIN11の刷毛目で調整され、特定類型に集中する点が注目される。極めて限られた工人のみがB種ヨコハケの技法を使用していたと推察される。大型円筒では、最下段と最上2段が非穿孔域になっているよう、5条6段の可能性が高いと考える。なお、新47-14と1-71-3のように、円形透孔の中型品の規格も存在する。形象埴輪では眉庇付冑の武人が特徴的である。

【B群】若松がC・D類とする一群である。若松がC・D類と分けながらも、その生産地とともに「和名窯かその周辺」としているように、若松のC・D類は明確には峻別できないため一括して類型化する。なお、若松がC1・C2類とする円筒については、刷毛目の一致から明らかにC群に分類できる埴輪が含まれているので、本稿のB群と若松のC・D類は明確な対応関係ではない。橙褐色で砂粒の多い胎土を特徴とするが、若干多様な様相を示し、複数生産地の製品を含んでいる可能性が高い。しかし、後述するC群とは異なり円筒の第1段が高く、段間も広めであることが特徴である。透孔はいずれも円形で、口縁部に外面ナナメハケを施す個体が多い。円筒の突帯板押圧技法、朝顔の擬口縁状の作りなど、基本的にはA群と共通する技法が見出せる。

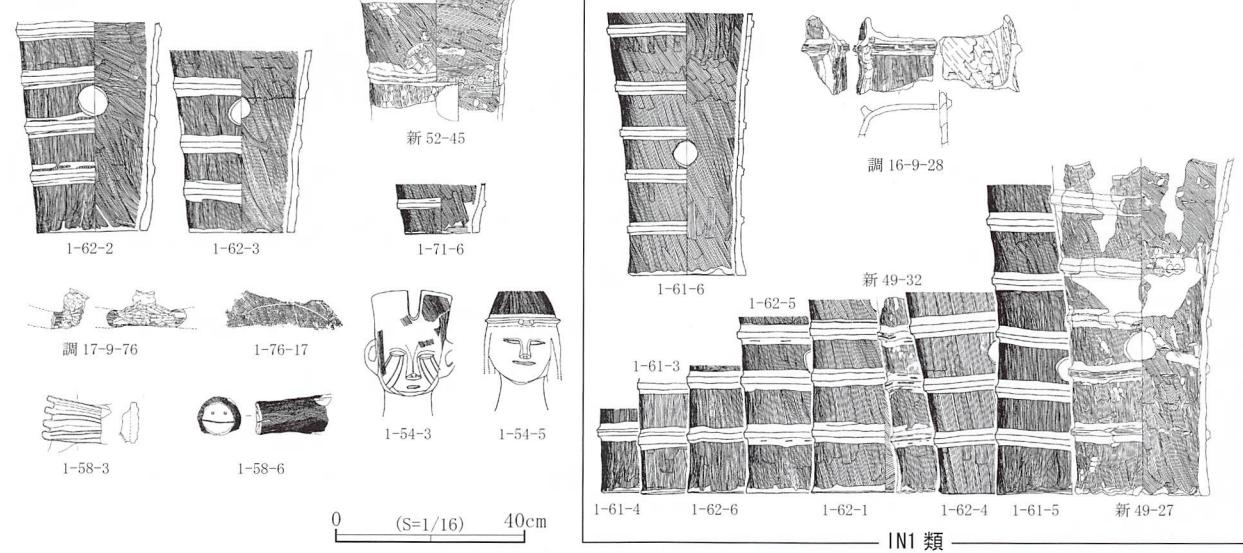
なお、重要なのは1-66-5、1-66-6の個体に見られるような3本突帯の円筒が認められる点である。後述するが、丸墓山C群MH5類にもこのような複数稜の突帯を持つ円筒が認められ、これらは比企の雷電山古墳（埼玉県県史編纂室1986）出土埴輪の系譜を引くものと考えている。そのため、本稿では「雷電山復古型」と仮称する。

形象埴輪は、家・馬・鳥・器財・人物が認められる。特に人物埴輪は、色調・胎土こそ違うが、A群とよく似た特徴を有する。

【A群】

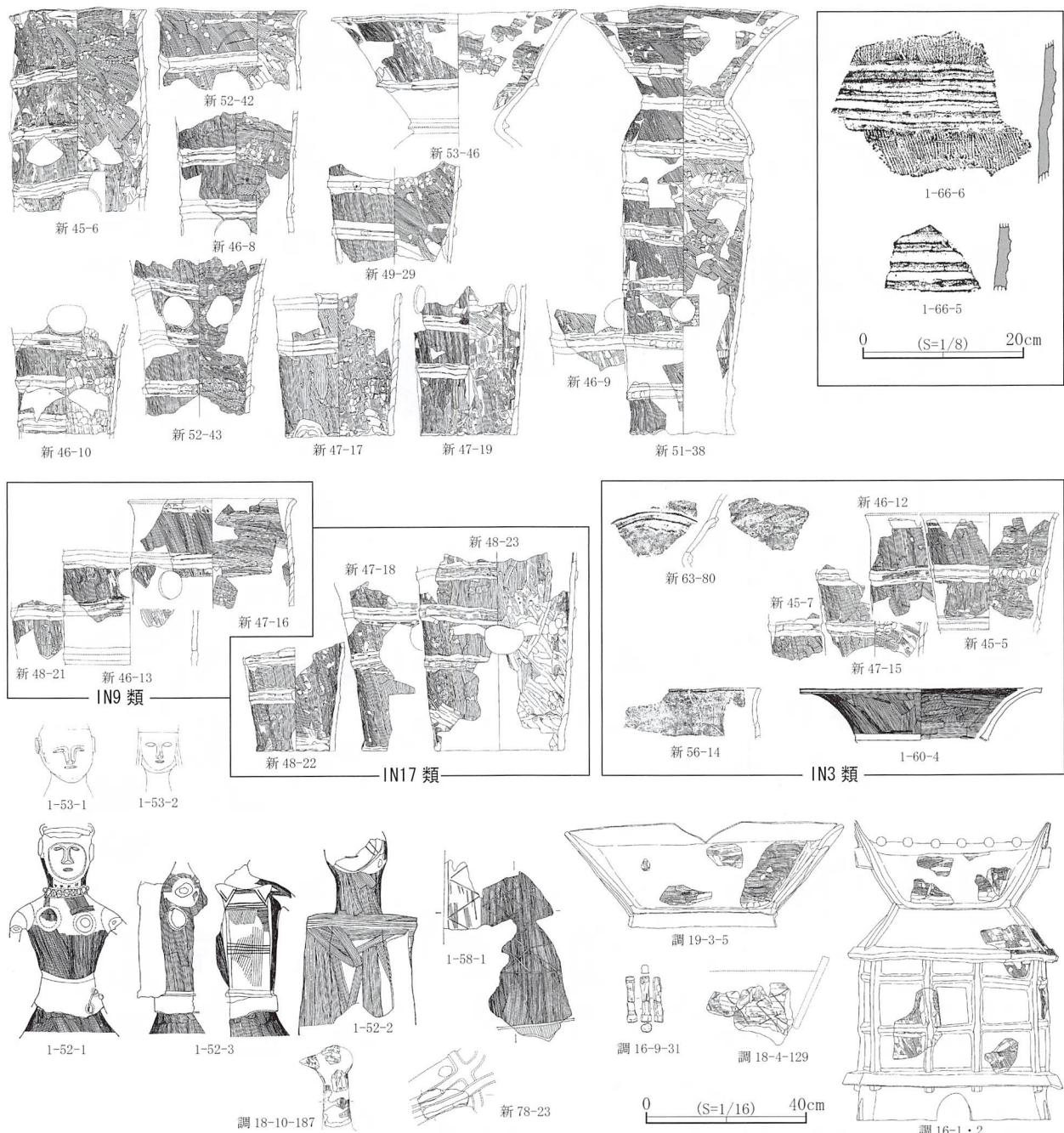


【C群】



第2図 稲荷山古墳出土埴輪の分類①

【B群】

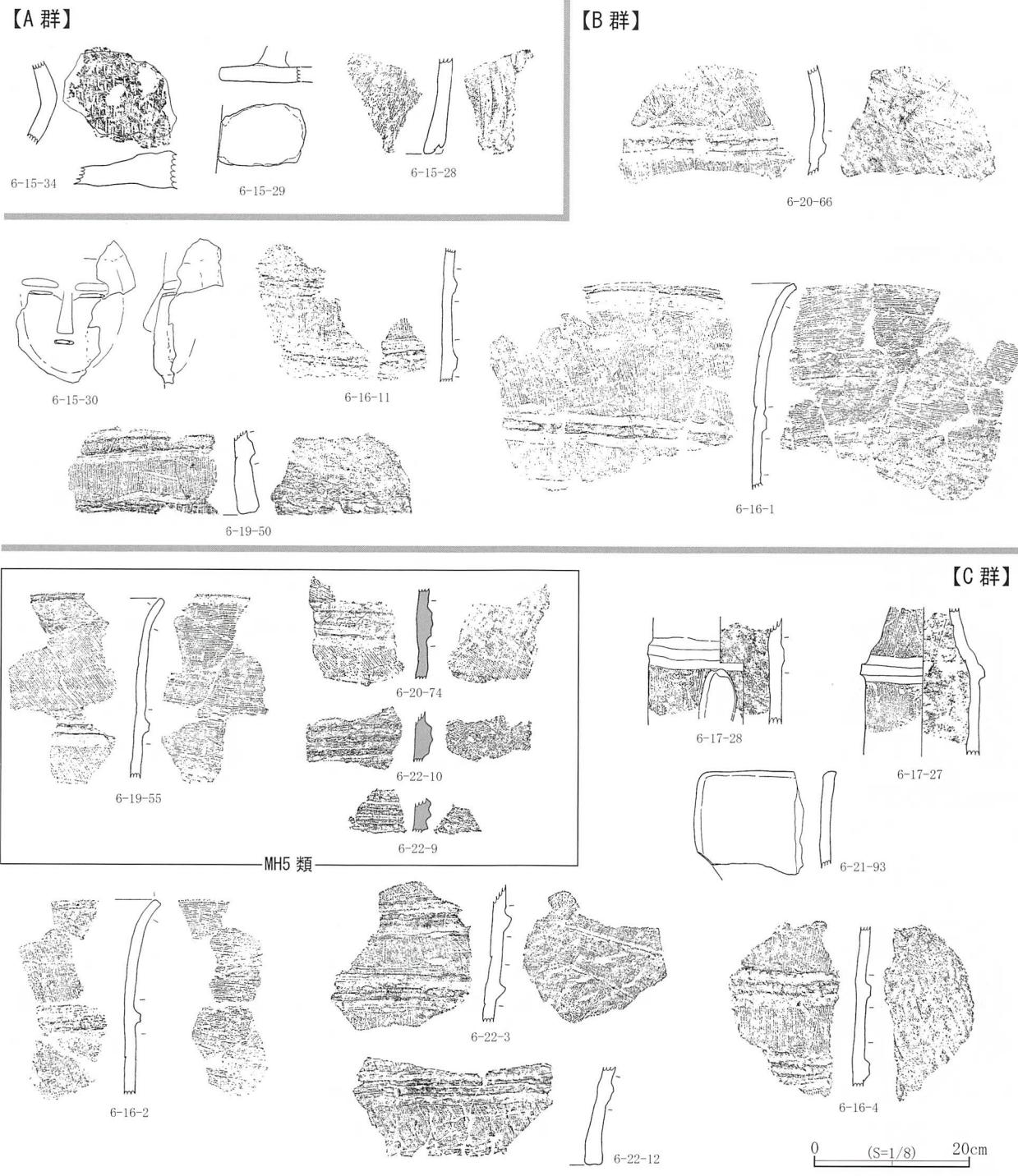


第2図 稲荷山古墳出土埴輪の分類②

【C群】若松が生出塚窯産とするB類とC1・C2類の一部を含む一群である。若松がB類とC類の峻別に苦労しているように、基本的にはB群の中での特徴的な一群をC群として類型化しているのが実態に近い。赤褐色の砂粒が少ない胎土を特徴とする。円筒はいずれも細身で、最下段及び段間がかなり狭い。5段目以上に顕著なナナメハケを施す個体が多く、突帯も断続ナデ状の歪みをもつ個体が多い。特に同じ刷毛目で調整されるIN1類は非常に画一的な埴輪群である。

形象埴輪は、家・動物・人物が認められるが、やはりB群と共通性が高い。

このC群については、若松が生出塚窯産である可能性を指摘し、生出塚W地点33号窯出土品との共通性を示唆するが、現状で確認されている生出塚遺跡の窯に同一刷毛目は見出せず、生出塚窯製品と判断はできない。しかし、C群（若松B類）を生出塚窯産とした若松の指摘は重要で、この稻



第3図 丸墓山古墳出土埴輪の分類

荷山C群は、後述する二子山C群FT1類・FT8類の大型円筒（生出塚窯産）へと型式的にスムーズに繋がりうる特徴を持っている点が注目される。すなわち、IN1類は細身の5条6段構成で、第一段が低く、段間も狭い。さらに、5段目以上にナナメハケを多用し、最上段が幅広いなど二子山FT1類・FT8類と共通した特徴を持つ。しかしながら、IN1類は二子山FT1類・FT8類に比べて器形が寸胴化しておらず突帯が高いなど前出的で、まさに系譜関係を想定させる特徴を保持する。つまり、稻荷山C群は稻荷山B群の一部から生まれた「生出塚系統の直接の祖形となりうる埴輪群」ということになる。しかし、B群の中の特徴的な一群をC群として認識したように、B群・C群両者の型式的距離は近い。さらに、生出塚I期に位置付けられる生出塚W地点でもIN1類の刷毛目や同じ特徴をもった大型円筒を確認できることからすれば（城倉2010a）、稻荷山古墳の段階では生

出塚は開窯していない可能性が高い。A群とB群を主体とする稻荷山古墳の埴輪生産の段階で、B群の一部に生出塚系統の直接の祖形となりうるC群が生まれていた状況と理解するのが妥当だろう。

3—2 丸墓山古墳（第3図）

丸墓山古墳に関しては、現在までの発掘で出土した埴輪は破片資料に限られており、全形が分かる資料は存在しない。しかし、破片資料の分析でも、A・B・C群の3分類が可能である。

【A群】黄白色の胎土を特徴とする。確認できる個体数は限られているが、稻荷山A群と酷似する特徴を有する。

【B群】橙褐色の胎土を特徴とする。稻荷山B群と酷似する。

【C群】赤褐色の砂粒が少ない胎土を特徴とする。破片資料のみだが、最下段と段間が非常に狭い一方で、最上段が長く設定されている。これらの破片資料から推定される円筒の形態上の特徴は、まさに稻荷山C群IN1類と二子山C群FT1類・FT8類の間の過渡的様相を呈している。なお、稻荷山古墳における状況と同じく丸墓山C群は丸墓山B群と特徴がよく似ている。

ところで、C群には6-20-74、6-22-9、6-22-10のように3稜の突帯を持つ「雷電山復古型」が存在している。破片資料のためあまり積極的に評価されてこなかった資料だが、6-19-55の普通円筒と同じMH5の刷毛目で調整されるなど、普通円筒と一連で製作された埴輪だと考えられる。稻荷山古墳と丸墓山古墳においてのみ、この「雷電山復古型」が存在している点は重要である。橙褐色系統の埴輪が比企地方の窯で生産された事実を示すものだろう。

3—3 天祥寺裏古墳（第4図）

天祥寺裏古墳出土埴輪は、A・B・C群の3分類が可能である。

【A群】赤褐色で砂粒の少ない胎土を特徴とする。焼成が良好で灰褐色に変色する個体も多くある。TS1類・TS2類とともに4条5段の円筒埴輪で、最下段と段間が狭く、最上段が広く設定されている。鳥・馬・人物も確認できる。A群に関しては、生出塚遺跡南支台W地点32・33号窯で焼成された事実が判明している。生出塚編年のI期後半に位置付けられる（城倉2010a）。

【B群】橙褐色で砂粒が非常に多い胎土を特徴とする。現状で確認できるのは、31-10-31の1個体のみなので、混入の可能性もある。

【C群】明茶褐色を呈する特異な一群である。胎土に径3～5mmの砂粒を大量に含み、黒色の小石も混じる。北武藏では全く認められない胎土で、帽子と盾の器財のみが確認できる。刷毛目もA・B群と一致しない。埼玉古墳群中唯一の群馬系の埴輪と考える。

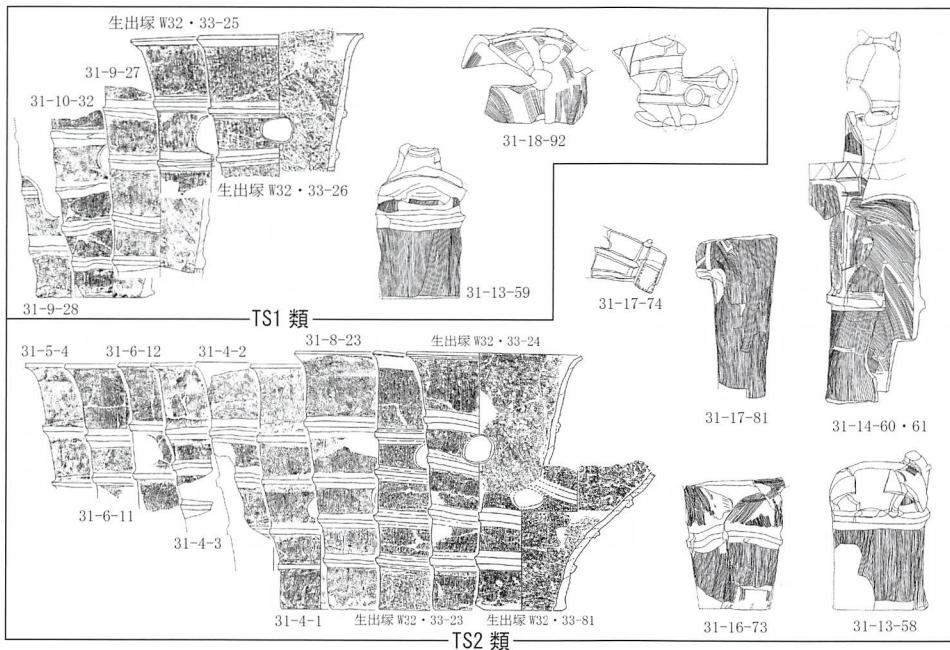
3—4 二子山古墳（第5図）

二子山古墳出土埴輪は、A・B・C群の3分類が可能である。

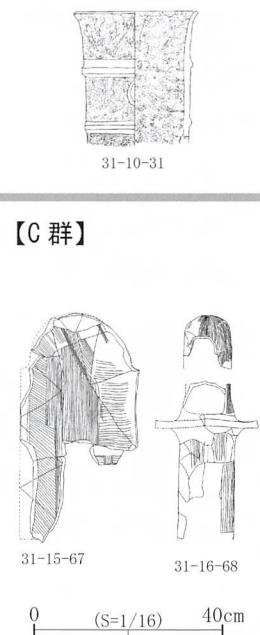
【A群】黄白色のなめらかな胎土を特徴とする。現状で確認できるのは破片数点だが、稻荷山A群・丸墓山A群と酷似する埴輪群である。

【B群】橙褐色で砂粒が比較的多い胎土を特徴とする。発色がピンク色に近い個体が多い。全形を把握できる資料としてFT4類がある。FT4類は段間が均等に設定される大型円筒で、方形透孔が

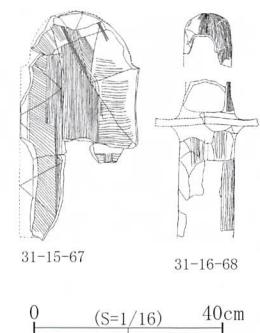
【A群】



【B群】

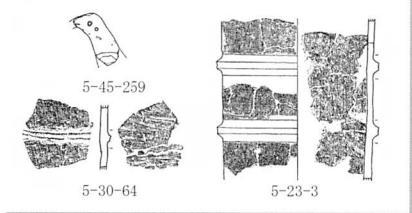


【C群】

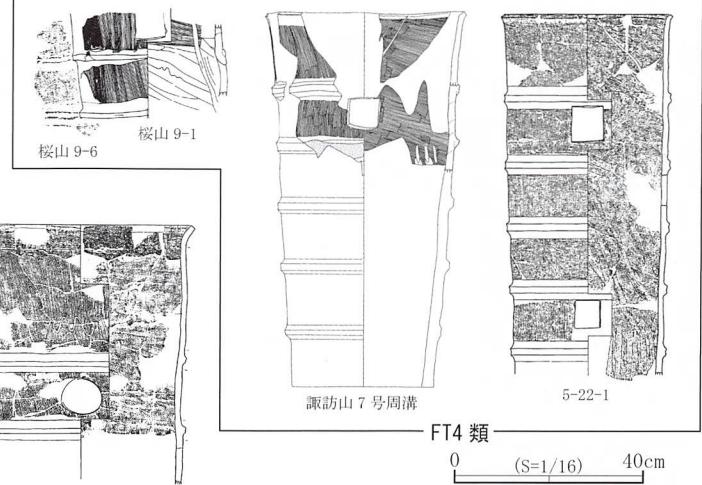


第4図 天祥寺裏古墳出土埴輪の分類

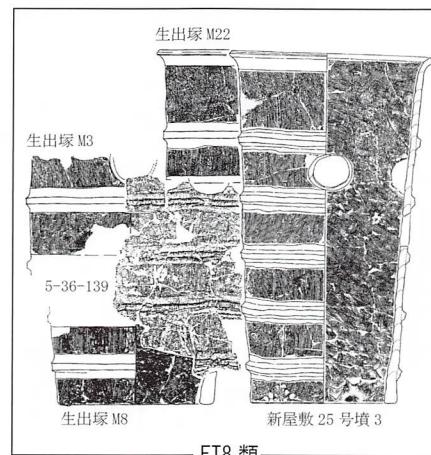
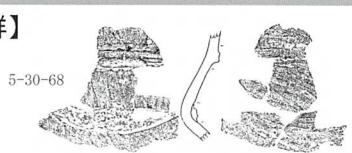
【A群】



【B群】



【C群】



生出塚 M22
生出塚 M3
5-36-139
生出塚 M8
新屋敷 25号墳 3
8-18-100

FT1類

第5図 二子山古墳出土埴輪の分類

特徴的である。FT 4 類の刷毛目に関しては、桜山遺跡 9 号窯の焼台として使用された大型円筒、さらに諏訪山 7 号周溝・毛塚 32 号墳出土円筒と一致することが判明しており、「プレ桜山」に属する(城倉2010 b)。同じく、B群では 5-23-2 のように最上段が著しく長い大型円筒も確認できるが、最上段に「プレ桜山」の特徴である波状文も見出せる。つまり、B群はいずれも比企の桜山周辺で生産された埴輪群であることが明白である。

【C群】赤褐色の砂粒の少ない胎土を特徴とする。前述したように稻荷山 C 群 IN 1 類、及び丸墓山 C 群の系譜を引く FT 1 類・FT 8 類が注目される。5 条 6 段構成の寸胴な大型円筒で、第 1 段が著しく短い。この FT 1 類・FT 8 類は生出塚遺跡 N 地点 30 号窯、及び M 地点 27・28 号窯で焼成された埴輪で、この二子山 C 群の生産を契機として生出塚遺跡では北支台の大規模な生産活動が始まる。生出塚 II 期の開始である(城倉2010 a)。さらに、後述する瓦塚 C 群 KZ 1 類の大型円筒は、二子山 FT 1 類と同一の刷毛目であり、FT 1 類の第 1 突帯を省略した 4 条 5 段の規格である。すなわち、二子山 C 群・瓦塚 C 群が生出塚遺跡における大規模生産の開始の大きな画期となるのである。

3-5 瓦塚古墳（第 6 図）

瓦塚古墳出土埴輪は、A・B・C群の 3 分類が可能である。

【A群】黄白色の滑らかな胎土を特徴とする。しかし、稻荷山 A 群・丸墓山 A 群・二子山 A 群とは異なり、白色が弱くクリーム色に近い色調が特徴である。円筒は段間が均等に設定される。形象は、全身像を含む人物・馬・鳥・器財が確認できる。瓦塚 A 群は黄白色系統に属しながらも、かなり後出的な様相を呈する。さらに、人物埴輪の特徴をみると B 群ともかなり型式的距離が近いことが伺われる。

【B群】橙褐色で砂粒の多い胎土を特徴とする。残存度の高い個体も多く、全体像を把握することができる。円筒は 4 条 5 段を基本とし、段間が均等、最上段と最下段が若干長めに設定される。3・4 段目に直交する円形透孔を穿孔する。器形は緩やかに開くものから、若干寸胴気味に立ちあがるものまで存在する。形象は、家・動物・人物が確認できる。なお、KZ 3 類の刷毛目は、桜山窯に至近の毛塚古墳群 28 号墳 C 類と同一の刷毛目であるように、B 群は明らかな「プレ桜山」に属する。二子山 B 群と極めて近い埴輪群と言える。

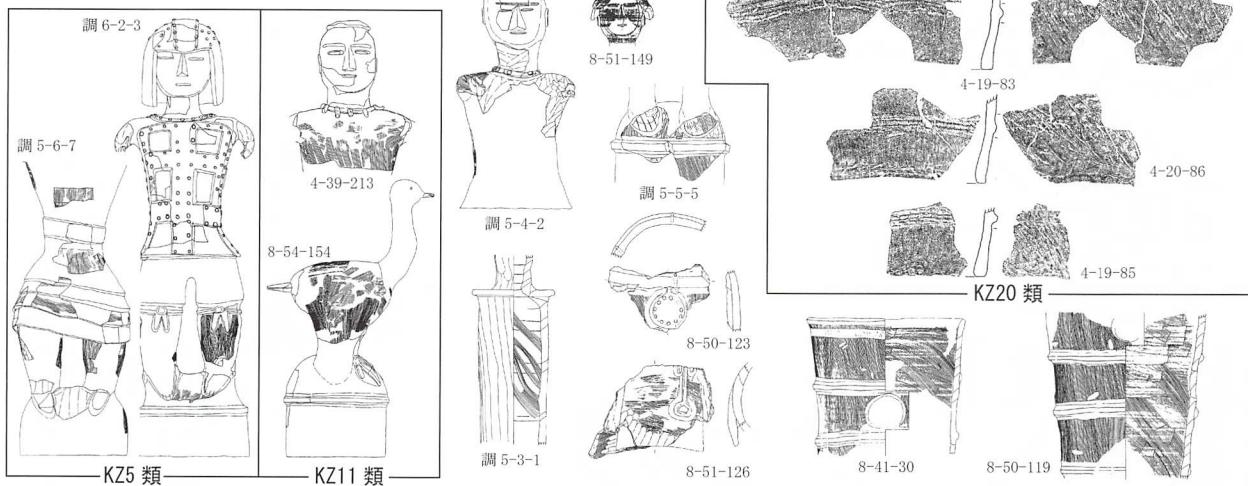
【C群】赤褐色の砂粒の少ない胎土を特徴とする。前述したように KZ 1 類は二子山 C 群 FT 1 類と同一の刷毛目で、生出塚窯産である点が確定している。瓦塚 C 群の円筒は、二子山 C 群の円筒と器形・調整手法が酷似する。特に、KZ 1 類と FT 1 類は同じ刷毛目で同工品の可能性が高いと考えているが、両古墳の階層差を明示するために円筒の条数を一本減らしていることが注目される。ちなみに瓦塚 KZ 1 類は、新屋敷古墳群の埴輪棺 228-2 にも同じ刷毛目が認められる。形象埴輪は、馬・家・器財・人物が確認できるが、いずれも円筒と同じく濃い赤色で、生出塚産埴輪の特徴が明らかである。

3-6 奥の山古墳（第 7 図）

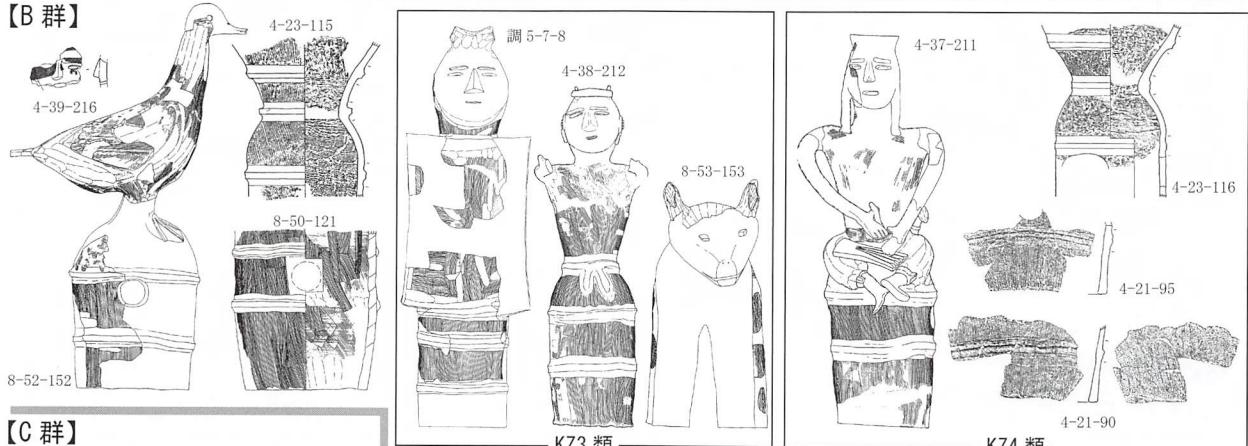
奥の山古墳出土埴輪で報告されている個体は、いずれも破片資料である。近年の発掘調査によって良好な資料が出土しているようだが、ここでは破片資料をもとに A・B 群に分類する。

【A群】橙褐色の色調を特徴とする。二子山 B 群・瓦塚 B 群とよく似た胎土で、ピンク色に近い発

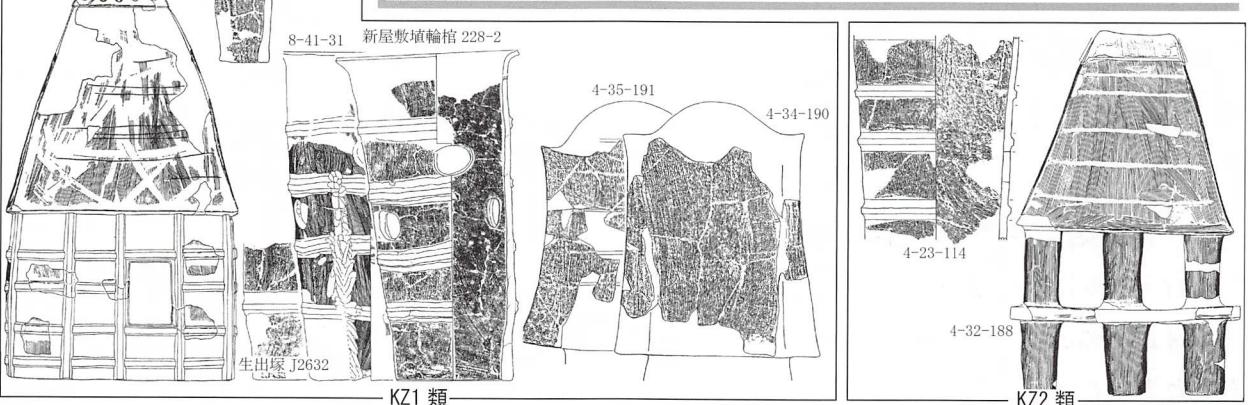
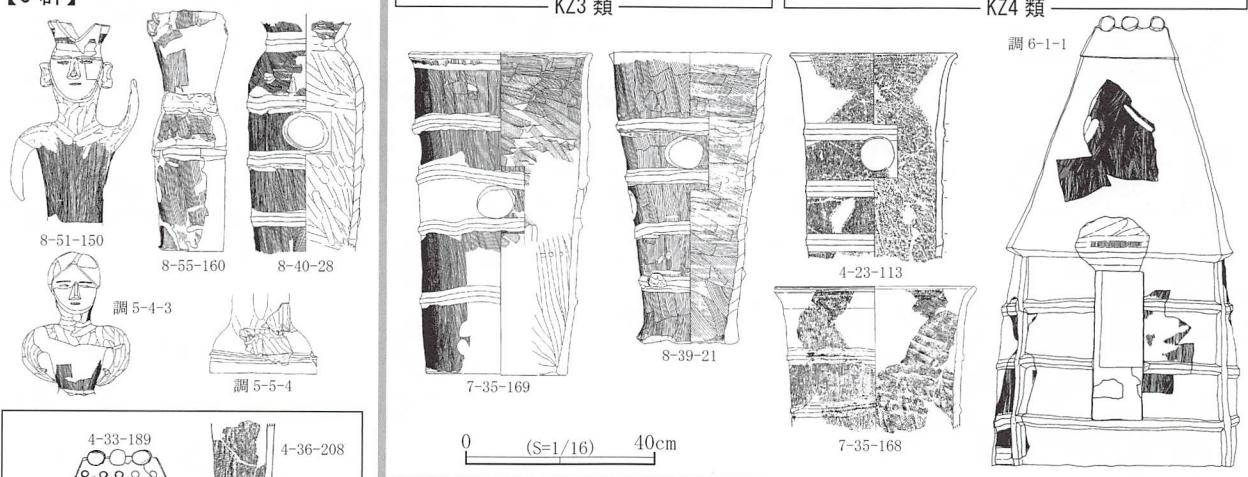
【A群】



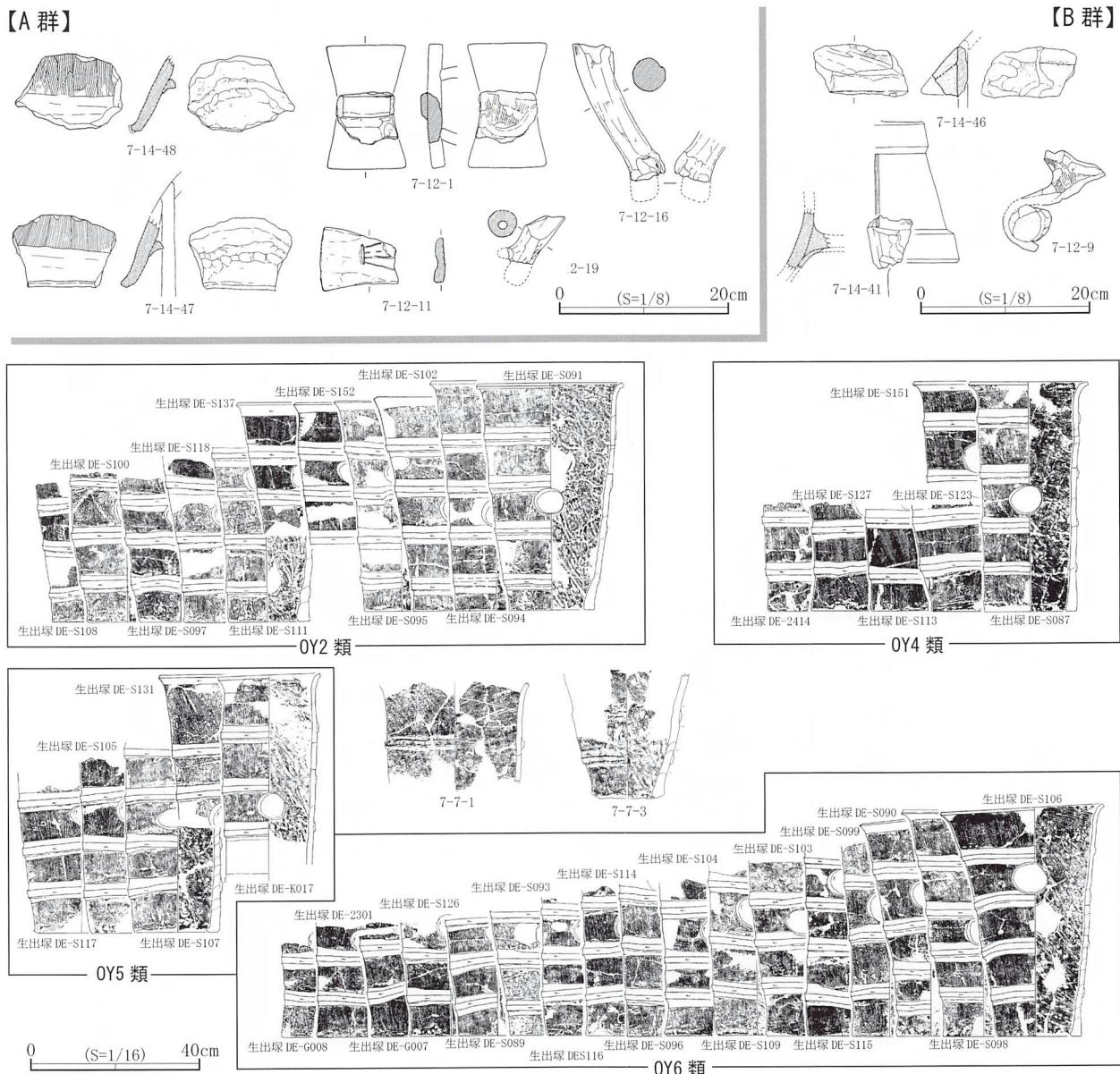
【B群】



【C群】



第6図 瓦塚古墳出土埴輪の分類



第7図 奥の山古墳出土埴輪の分類

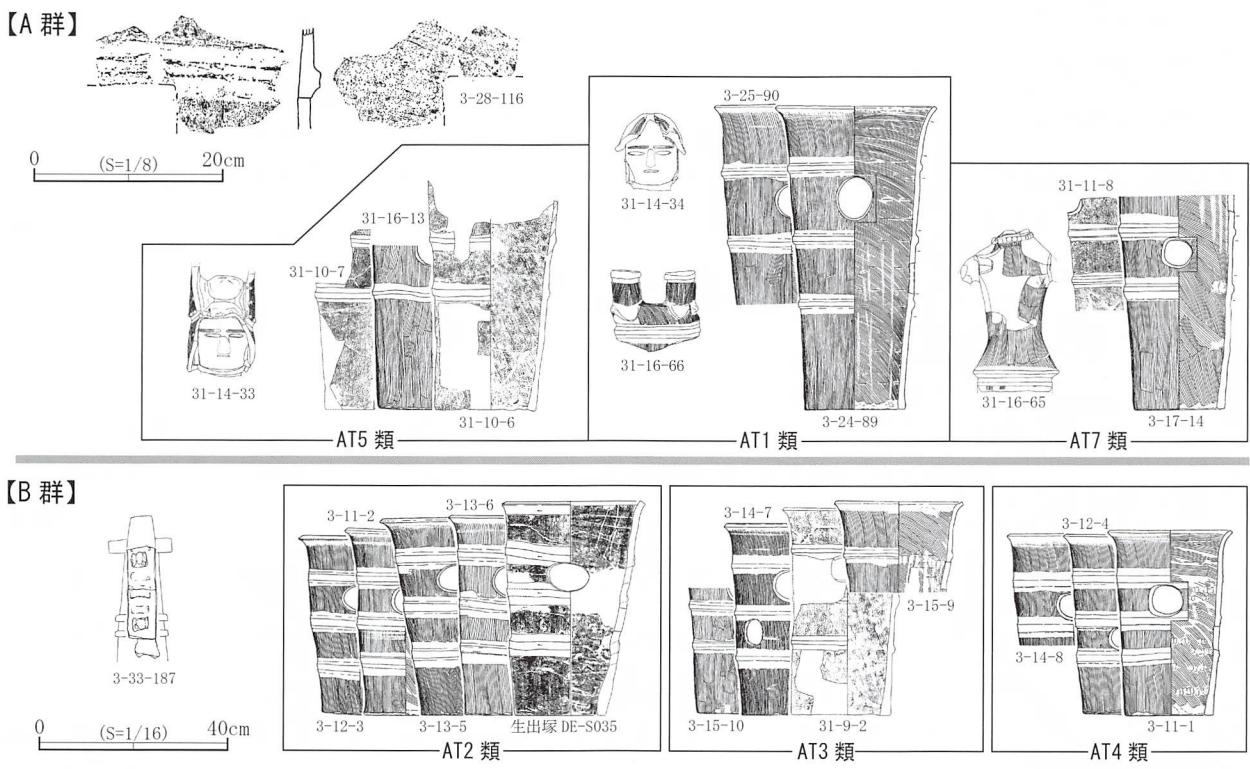
色の個体が多い。家・人物など形象破片が主体を占める。

【B群】赤褐色の砂粒の少ない胎土を特徴とする。奥の山B群はいずれも小破片で様相が分かりにくいが、生出塚DE地点出土品の刷毛目と一致するため、生出塚窯産であることが確定している。さらに、生出塚DE地点を中心に残りの良い個体が多く確認されており、全体像の把握が可能である。図示したようにOY2類・OY4類・OY5類・OY6類とほぼ円筒の様相が判明している。いずれも第1段が低い4条5段で、天祥寺裏A群TS1類・TS2類からのスムーズな変遷が追える資料である。生出塚編年のII期前半、二子山古墳・瓦塚古墳の直後に位置付けられる埴輪群である。

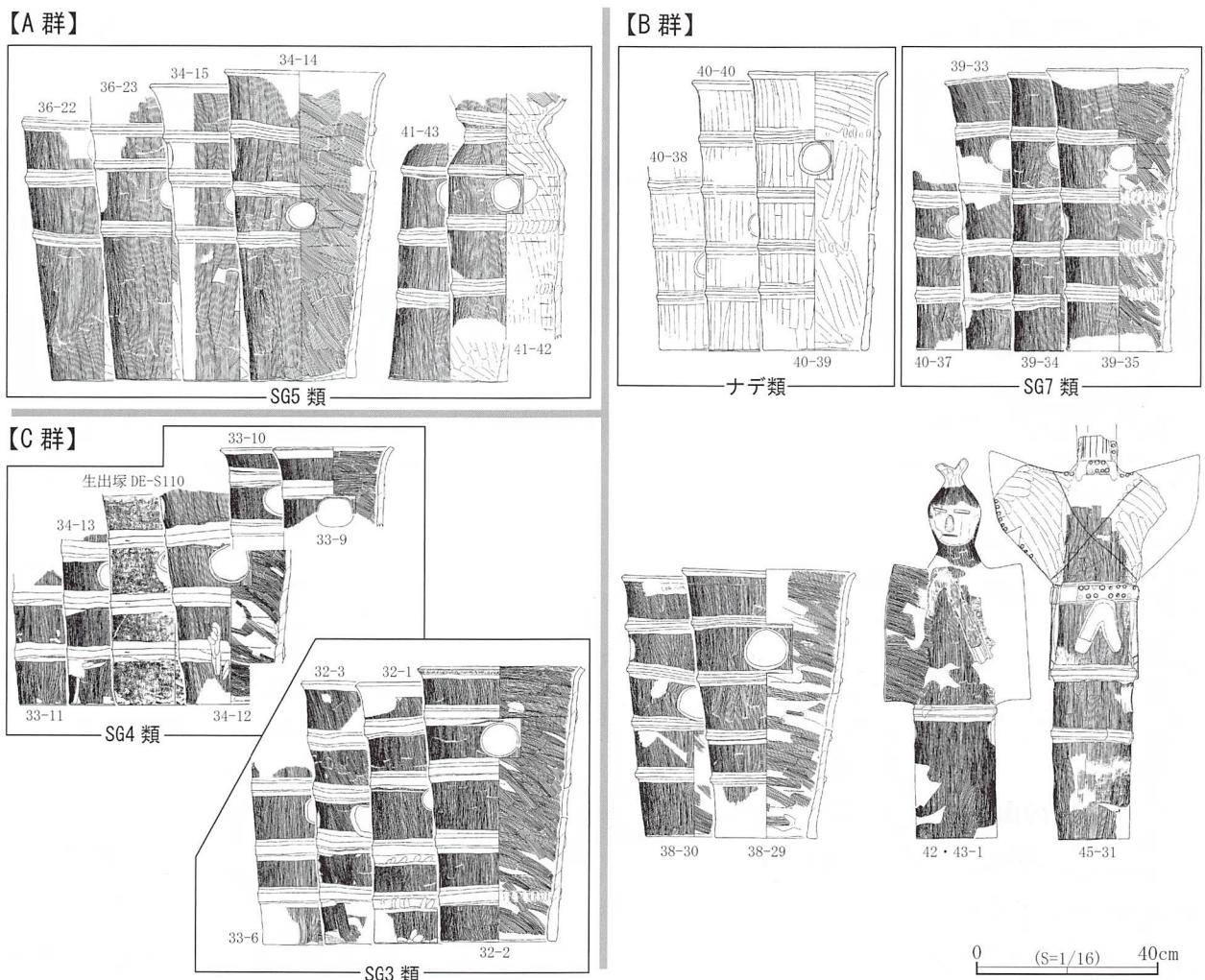
3-7 愛宕山古墳（第8図）

愛宕山古墳出土埴輪は、A・B群の2分類が可能である。

【A群】橙褐色で著しく砂粒の多い胎土を特徴とする。意図的に胎土に多量の砂粒を混入しているものと思われ、後述する將軍山A群も酷似した胎土を有する。円筒は、いずれも第1段が著しく長い3条4段で、同じ3条4段のB群の円筒と比べてもかなり法量が大きい。主体を占めるAT1類と



第8図 愛宕山古墳出土埴輪の分類



第9図 将軍山古墳出土埴輪の分類

AT 5 類は同一母材の工具である可能性が高い。また、破片資料 3-28-116など方形透孔も存在するが、混入資料の可能性も残る。形象は全身像を含む人物を確認している。

【B群】赤褐色の砂粒の少ない胎土を特徴とし、明茶～灰褐色を呈する焼成良好品が多い。AT 2 類は、生出塚遺跡 DE 地点21・22号窯で一括焼成された埴輪で、生出塚編年II期後半に位置付けられる。小型の3条4段、突帯が低平でナデ幅が広いのが特徴である。後述する將軍山C群 SG 3 類と同じ刷毛目で、同時期の製作品である。なお、形象では大刀を確認している。

3-8 將軍山古墳（第9図）

將軍山古墳出土埴輪については、岡本健一の的確な分類（岡本1997）をそのまま踏襲する。ここでは分類名称を変更し、A・B・C群に3分類する。

【A群】岡本分類B類が該当する。橙褐色で著しく砂粒の多い胎土を特徴とする。器高半分に達するほど第1段が長い3条4段で、前述した愛宕山A群に酷似する。しかし、突帯が愛宕山A群よりも扁平化し、第1段が高くなっている点などより後出的な特徴を有する。大半がSG 5 類の刷毛目で調整される同工品である。

【B群】岡本C 1・C 2 類が該当する。橙褐色を基本とし、焼成の硬質な個体が多い。後円部北側周辺から集中的に出土した埴輪群である。岡本が細分しているように、若干距離のある埴輪群を含む。岡本がC 2 類とした板ナデ調整による個体群（40-38・40-39・40-40）とSG 7 類の個体群は、寸胴な4条5段の形態がよく似ている。一方で、岡本がC 1 類とする38-29や38-30などの個体は、形態的に見れば生出塚窯産のC群と類似する。なお、形象では盾持人・鞍が確認できる。

【C群】岡本A類が該当する。赤褐色の砂粒の少ない胎土を特徴する。岡本が生出塚窯産であることを想定した通り、SG 3 類・SG 4 類は生出塚遺跡 DE 地点出土品と刷毛目が一致する。4条5段の中型品で、特にSG 3 類は愛宕山B群 AT 2 類と同じ刷毛目の別規格品である。同じく生出塚編年II期後半に位置付けられる。なお、C群は將軍山古墳出土埴輪で主体を占める。

3-9 鉄砲山古墳（第10図）

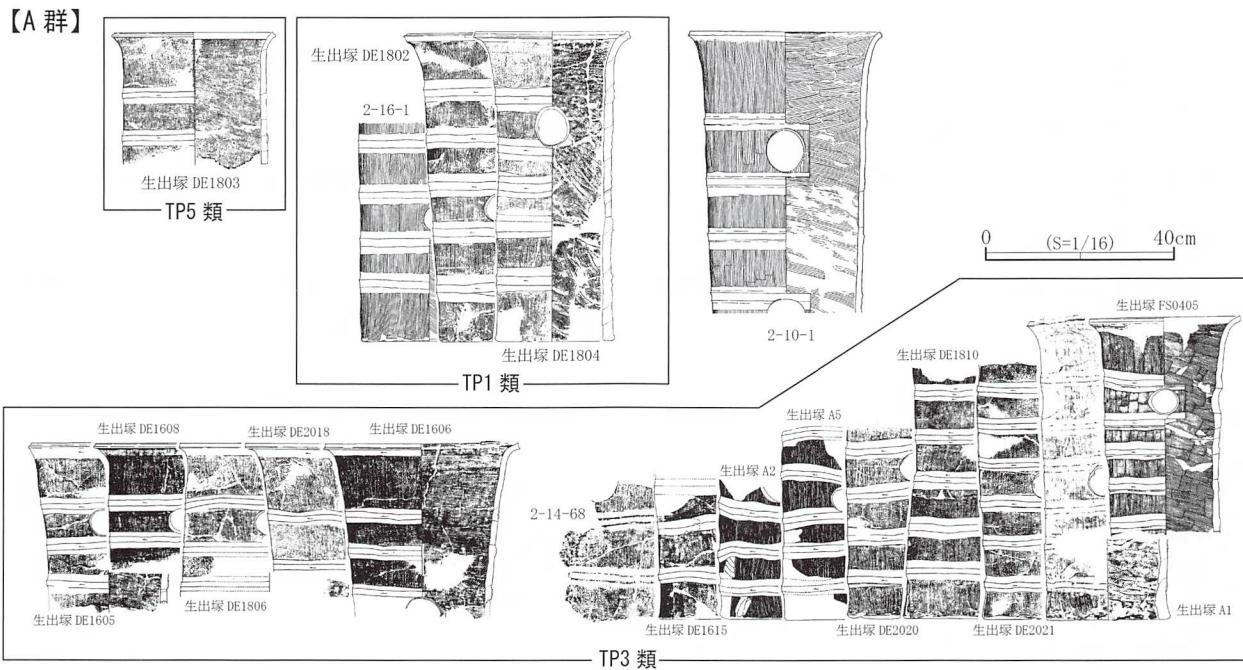
鉄砲山古墳出土埴輪はすべて赤褐色系統で、生出塚窯産であることが確定している。現状では報告品の破片資料にも橙褐色系統を確認していないが、近年、発掘調査も進んでおり、新しい分類群が確認される可能性もあるので、ここではA群と呼称する。

【A群】赤褐色の砂粒の少ない胎土を特徴とする。図示したTP 1 類・TP 3 類・TP 5 類ともに生出塚遺跡 DE 地点18・16・20号窯で焼成されている。寸胴で裾広がりの個体も多い大型多条の円筒である。前述した愛宕山B群 AT 2 類・將軍山C群 SG 3 類が焼成された21・22号窯を切る窯で焼成されており、愛宕山古墳・將軍山古墳に続く生出塚編年III期前半に位置付けられる。

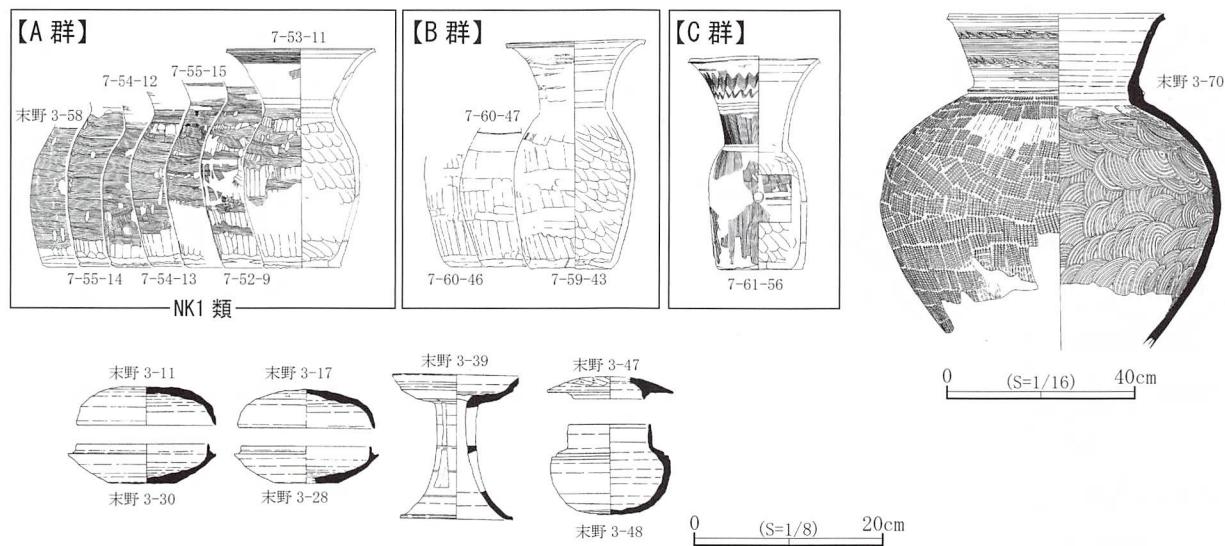
3-10 中の山古墳（第11図）

中の山古墳からは「須恵質埴輪壺」が出土している⁽¹⁾。近年、太田博之が分類とその位置付けを行っている。その分類を基本とし、A・B・C群に3分類する。

【A群】太田A類が該当する。外面に回転ヨコハケを有する青灰色の一群である。従来から、埼玉県寄居町の須恵器生産遺跡である末野3号窯で焼成された可能性が指摘されてきたが（福田1998）、



第10図 鉄砲山古墳出土埴輪の分類



第11図 中の山古墳出土埴輪の分類と末野3号窯出土須恵器

刷毛目の合致によって供給関係が確定した。第11図には、末野3号窯で同時焼成された須恵器も図示した。TK209型式とされる須恵器である。

【B群】太田B類が該当する。外面をナデ調整する酸化焰焼成の明黄褐色の一群である。

【C群】太田C類が該当する。外面をタテハケ調整し、口縁部外面に波状文を有する一群である。

4 刷毛目分析と産地の特定

ここまで埼玉古墳群の各古墳から出土した埴輪の分類についてまとめた。これら分類の妥当性を検証するとともに、その分類群の生産地を明らかにするため、刷毛目の分析成果についてまとめる。埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目データベースについては、第1図に一括して原寸写真を提示した。基本的には各古墳を単位として通し番号を設定し、生産地の刷毛目と一致するものは第1表にその関

係を明示した上で写真によって一致状況を示している。

4－1 各古墳出土埴輪の刷毛目データベース

【稻荷山古墳】IN 1～IN21の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はなく、分類の妥当性を確認できる。A群では、B種ヨコハケが全て IN11で調整される点が注目される。また、C群においても IN 1 が極めて共通性の高い埴輪群に確認された。このように同一刷毛目が認められる類型（刷毛目共通類型）が基本的に型式的距離の近い埴輪群で構成される点は、各生産地の分析で明らかになっているが（城倉2010a・2010b）、生産地の判明していない分類群においても基本的に同じである。刷毛目共通類型は、限られた工人によって限られた期間に製作されたという前提はかなり普遍的な現象と考えることができる。

【丸墓山古墳】MH 1～MH 8 の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。C群では、MH 5 の刷毛目が普通円筒と「雷電山復古型」に認められた。

【天祥寺裏古墳】TS 1～TS 5 の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。A群では TS 1 が生出塚W 4 、 TS 2 が生出塚W 1 と合致した。

【二子山古墳】FT 1～FT12の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。B群では、FT 4 が桜山Gと合致した。C群では FT 1 が生出塚 DE 8 、 FT 8 が生出塚M 6 と合致した。

【瓦塚古墳】KZ 1～KZ20の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。B群では KZ 3 が毛塚28号墳Cと合致した。C群では KZ 1 が生出塚 DE 8 と合致した。

【奥の山古墳】OY 1～OY 7 の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。B群では OY 2 が生出塚 DE13 、 OY 4 が生出塚 DE19 、 OY 5 が生出塚 DE12 、 OY 6 が生出塚 DE 6 に合致した。

【愛宕山古墳】AT 1～AT 8 の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。B群では AT 2 が生出塚 DE 9 と合致した。

【將軍山古墳】SG 1～SG10 の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。C群では SG 3 が生出塚 DE 9 、 SG 4 が生出塚 DE27 に合致した。

【鉄砲山古墳】TP 1～TP 7 の刷毛目を設定した。TP 1 が生出塚 DE16 、 TP 3 が生出塚 DE 5 、 TP 4 が生出塚 DE 8 、 TP 5 が生出塚 DE31 、 TP 6 が生出塚 DE13 、 TP 7 が生出塚 DE44 と合致した。そのうち、TP 4 と TP 6 の刷毛目を持つ個体は、それぞれ瓦塚古墳・奥の山古墳からの流れ込み資料の可能性が高い。

【中の山古墳】NK 1・NK 2 の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。A群では NK 1 が末野Aと合致した。

4－2 生産地の特定

埼玉古墳群における刷毛目データベースの構築によって、各古墳の分類の妥当性が証明された。また、刷毛目共通類型が極めて限られた工人によって限られた期間に製作された点も推定できた。最後に、刷毛目の同定から生産地が特定できている例について、対応関係をまとめておく。

【生出塚窯】(TS 1 = W 4) (TS 2 = W 1) (FT 1 = KZ 1 = TP 4 = DE 8) (FT 8 = M 6) (OY 2 = TP 6 = DE13) (OY 4 = DE19) (OY 5 = DE12) (OY 6 = DE 6) (AT 2 = SG 3 = DE 9) (SG 4 = DE27) (TP 1 = DE16) (TP 3 = DE 5) (TP 5 = DE31) (TP 7 = DE44)

【桜山窯周辺】(FT 4 = 桜山G = 毛塚32B = 諏訪山7号周溝) (KZ 3 = 毛塚28C)

【末野窯】(NK 1 = 末野A)

以上、現状では埼玉古墳群出土埴輪のうち、21種類の刷毛目共通類型の生産地が特定できていることになる。特に、生出塚窯産埴輪の刷毛目一致率は非常に高く、その生産窯までほぼ特定できている。今後の研究で、他の窯との刷毛目一致率も上がっていくことが予想される。

5 埼玉古墳群出土埴輪の系統と編年

5-1 大別と細別

前節まで埼玉古墳群の各古墳から出土した埴輪の分類を行った。ここでは、各古墳での分類成果をもとにして、古墳群全体の中で系統関係を整理し、編年を確立する。

まず、埼玉古墳群出土埴輪全体が大きく①黄白色系統、②橙褐色系統、③赤褐色系統に大別できる点は既に指摘した。しかし、各古墳での分類成果を踏まえれば、更なる細別が可能である。以下、系統の細別基準を明記すると共に、各古墳の分類単位との対応関係を示す。

【黄白色A】稻荷山A群・丸墓山A群・二子山A群が該当する。黄白色の特徴的な胎土の一群で、円筒の客体的なB種ヨコハケ・半円透孔・赤彩を特徴とする。

【黄白色B】瓦塚A群が該当する。黄白色Aに比べて、色調がクリーム色に近い。円筒は円形透孔を基本とし、赤彩は認められない。黄白色Aより新相を示す。

【橙褐色A】稻荷山B群・丸墓山B群・二子山B群・瓦塚B群・奥の山A群が該当する。にぶい橙褐色～ピンク色を特徴とする。円筒の特徴は多様だが一連の流れの中で位置付けられる埴輪群である。稻荷山B群では最下段が長い円筒が、徐々に最下段が短くなる。二子山B群では方形透孔の個体が認められ、瓦塚B群では円筒の小型化が認められる。なお、二子山B群・瓦塚B群に関しては、前述したように桜山窯周辺での生産を確認しており、「プレ桜山」の特徴的な埴輪群である。

【橙褐色B】愛宕山A群・將軍山A群が該当する。砂粒の著しく多い胎土で、円筒の最下段が著しく長い特徴的な埴輪群である。

【橙褐色C】將軍山B群が該当する。焦げ茶褐色に近い橙褐色を特徴とする。円筒は寸胴な4条5段で、將軍山古墳で共伴しながら橙褐色Bとは形態が大きく異なる。

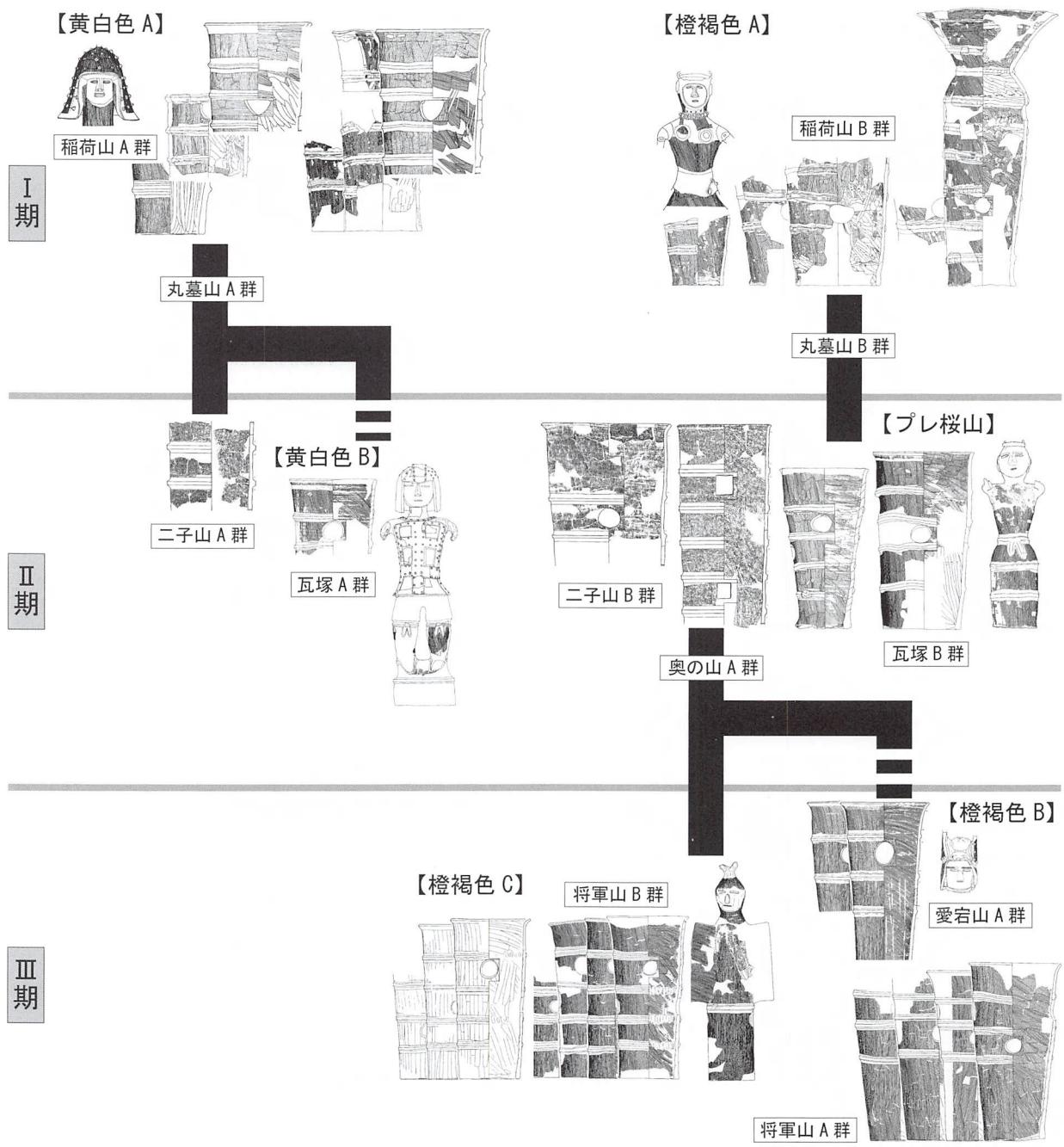
【赤褐色A】稻荷山C群・丸墓山C群が該当する。最下段と段間が短く設定される細身の円筒を特徴とし、明らかに二子山古墳・瓦塚古墳以降の生出塚窯産埴輪に繋がる特徴を有する埴輪群である。橙褐色Aから派生した系統である。

【赤褐色B】天祥寺裏A群・二子山C群・瓦塚C群・奥の山B群・愛宕山B群・將軍山C群・鉄砲山A群が該当する。刷毛目の同定から生出塚窯産と判明している(城倉2010a)。

5-2 系統関係の整理と画期の設定

各古墳出土埴輪の分類と古墳群全体の大別・細別について述べてきた。それらを総合的にまとめて、埼玉古墳群出土埴輪の系統関係を整理する。

第12図には、埼玉古墳群出土埴輪の系統関係を整理した編年図を提示した。各古墳出土埴輪の分析で分解した分類群を、系統の大別と細別に基づいて組み直せば、極めて整合的な編年が確立する。そして、埴輪生産の画期に基づいて埼玉古墳群を編年するならば、I～IV期の編年が可能である。



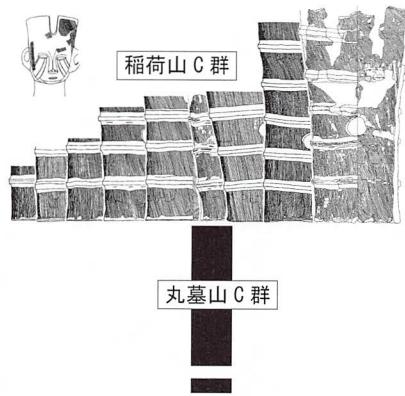
※実線は系譜関係が明瞭、破線は系譜関係が想定される

		黄白色A	黄白色B	橙褐色A	橙褐色B	橙褐色C	赤褐色A	赤褐色B	埴輪壺
I	稻荷山	A群		B群			C群		
	丸墓山	A群		B群			C群		
	天祥寺裏							A群	
II	二子山	A群		B群				C群	
	瓦塚		A群	B群				C群	
	奥の山			A群				B群	
III	愛宕山				A群			B群	
	将軍山				A群	B群		C群	
	鉄砲山							A群	
IV	中の山							A～C群	

※各古墳出土埴輪の分類群と系統の対応関係を示す

第12図 埼玉古墳群出土埴輪の系統と編年①

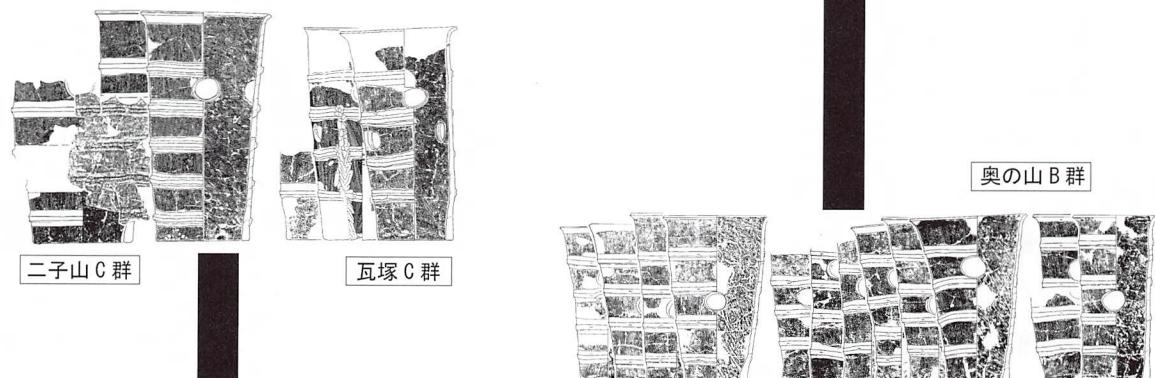
【赤褐色 A】



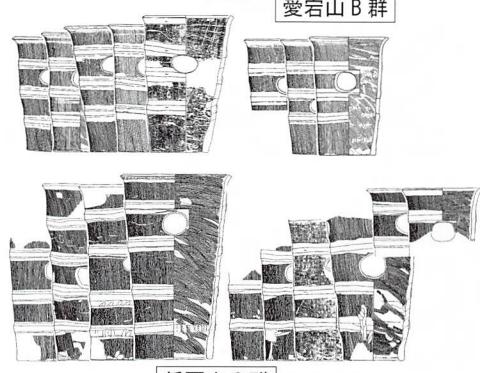
【赤褐色 B】生出塚中型品系列



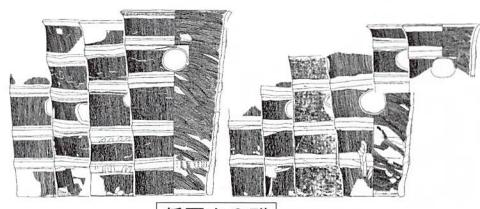
【赤褐色 B】生出塚大型品系列



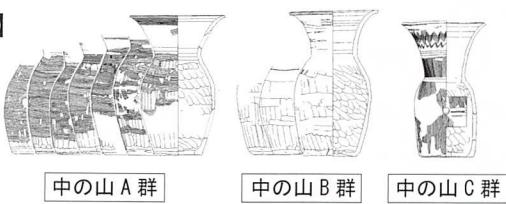
愛宕山 B 群



鉄砲山 A 群



【埴輪壺】



0 (S=1/25) 40cm

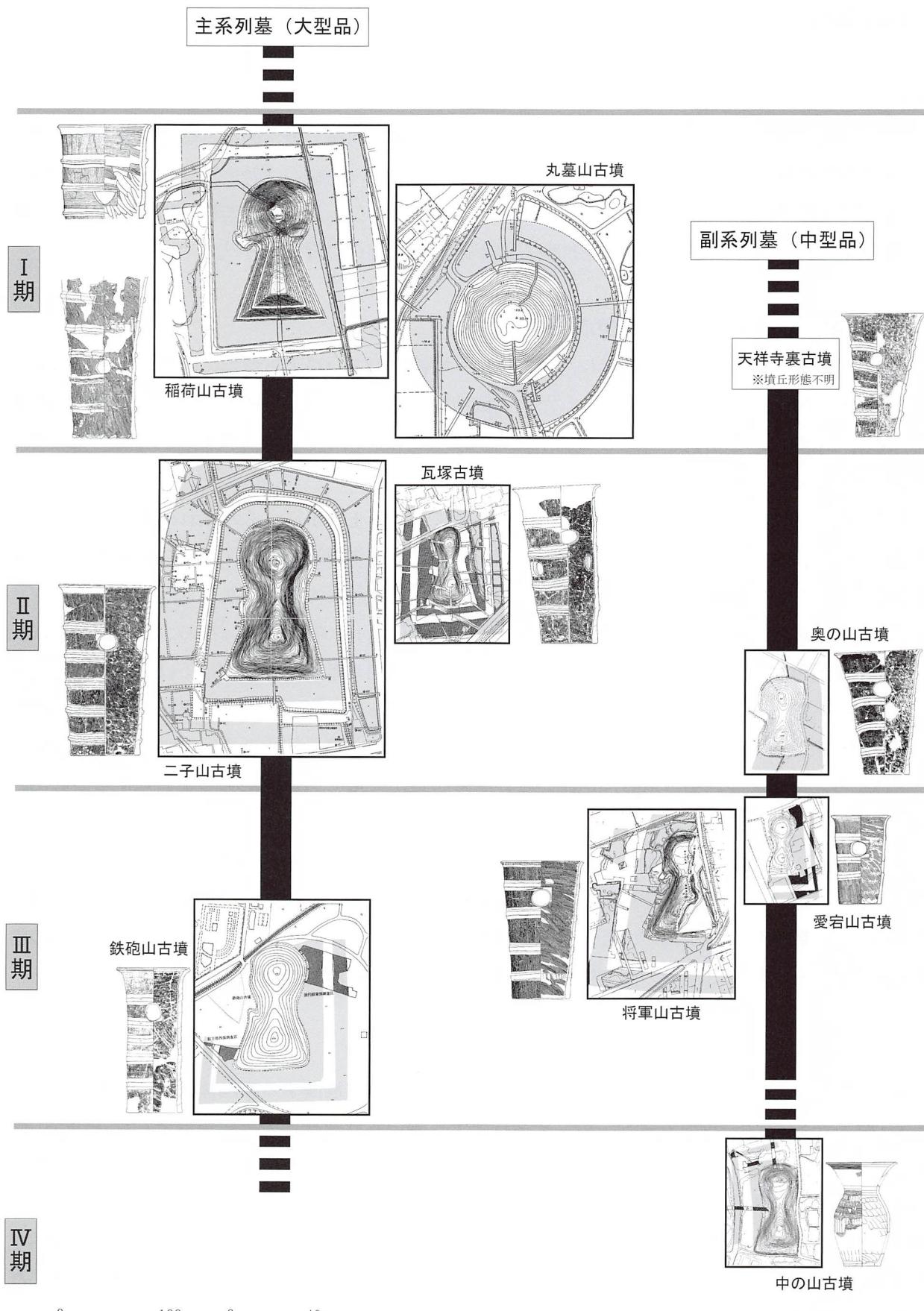
第12図 埼玉古墳群出土埴輪の系統と編年②

まず、各系統の時間軸を整理しよう。再三述べてきたように、赤褐色Bの生出塚窯産埴輪に関しては、窯の物理的前後関係から既に動かない編年が確立している。天祥寺裏→二子山→瓦塚→奥の山→愛宕山→將軍山→鉄砲山である。問題は稻荷山・丸墓山だが、両古墳には赤褐色Aの埴輪が認められた。その中で稻荷山C群 IN 1類の円筒が、二子山C群 FT 1類・FT 8類に直接繋がり得る特徴を持つ点は前述した通りである。一方、丸墓山C群はその間を埋める資料なので、赤褐色系統の一連の変遷からみて、稻荷山→丸墓山→天祥寺裏→二子山→瓦塚→奥の山→愛宕山→將軍山→鉄砲山の順序が確定する。すなわち、生出塚の埴輪は、稻荷山B群から生まれた稻荷山C群のIN 1類を直接の祖形として発展したのである。さらに、生出塚窯産円筒埴輪には大型品と中型品2系列の存在を確認できるが(城倉2009)、両系列ともに①器形の寸胴化、②突帯の扁平化が進む順調な変遷を読み取ることができる。

次に、黄白色Aは稻荷山において主体をなすが、丸墓山・二子山ではわずかな破片資料しか存在しない。客体的なB種ヨコハケ・半円透孔・突帯板押圧技法・赤彩などの特徴は、確かに埼玉古墳群中最も古い要素を持っている。この黄白色系統が他系統と稻荷山などで共伴する事実をもって、若松は追加樹立の可能性を指摘するわけだが、実は古手の埴輪の特徴とされる板押圧技法や朝顔の擬口縁などは稻荷山B群にも認められる。また、稻荷山A群・B群・C群の各群に認められる人物埴輪の特徴を見ても、いずれも古い様相を示しており、稻荷山における各群の並存は、同時期に活動した異なる集団の生産品が供給された事実を示すと考えるほうが自然である。実際に、新屋敷古墳群・月輪古墳群・鎧塚古墳など黄白色系統が出土する古墳では、必ず橙褐色系統が共伴している。すなわち、この時期の黄白色系統と橙褐色系統の共伴は、むしろ普遍的な現象なのである。やはり、黄白色Aと橙褐色Aは同時期に存在した別集団とすべきである。さらに、量は少ないながらも黄白色Bとした瓦塚A群が、黄白色Aの系譜を引く埴輪である事実も上記の年代観を裏付ける。

最後に、橙褐色系統の変遷をまとめよう。橙褐色Aについては、稻荷山において黄白色Aと同時期に存在した点が推定された。稻荷山B群には、突帯下側につく板押圧技法・朝顔擬口縁など、二子山以降の埴輪には認められない特徴があり、やはり古く位置付けるのが自然である。さらに、稻荷山B群は、桜山窯周辺での生産が判明している二子山B群・瓦塚B群(プレ桜山)にスムーズに繋がる特徴を備えている点が注目される。すなわち、最下段と最上段が長めで、段間が短く設定されるのが橙褐色Aの円筒全体に通じる特徴である。この橙褐色Aの円筒の系譜を引くのが、橙褐色Cとした將軍山B群である。將軍山B群の均等な段間の4条5段は、瓦塚B群円筒の器形を寸胴化させたものである。また、將軍山B群の盾持人も、瓦塚B群の盾持人とよく似ていることが知られ、その系譜関係を確認できる。一方、砂粒が著しく多い胎土を特徴とする橙褐色Bはその位置付けが難しいものの、桜山窯製品に最下段の長い類型が存在する(城倉2010 b)、やはり橙褐色Aの系譜を引くものと考えることができる。

このように各系統の埴輪は比較的スムーズな変遷を辿ることが明らかになり、分類作業によって埼玉古墳群の各古墳の前後関係が確定した。次には埴輪生産の画期に基づき、その段階を設定する。まず、稻荷山古墳から始まる埼玉古墳群造営の中で大きな画期となるのは、生出塚窯における大規模生産開始の契機となった二子山古墳の出現である。この画期をもってII期を設定する。これ以後、鉄砲山古墳に至るまで、生出塚窯は埼玉古墳群へ大型品・中型品を専属的に供給するようになる。次なる画期は、橙褐色系統の橙褐色Aが大きく変質し、橙褐色B・Cが登場する愛宕山古墳・將軍



第13図 墓輪からみた埼玉古墳群の階層構造

山古墳の出現である。この画期をもってIII期を設定する。その後、埼玉古墳群への埴輪供給は鉄砲山古墳を最後に終焉し、中の山古墳に須恵質埴輪壺が供給される。この画期をもってIV期を設定する。以上、埼玉古墳群における埴輪生産の画期を踏まえれば、埼玉古墳群I～IV期（段階）の設定が可能である。

以上、埼玉古墳群出土埴輪の系統整理によって、各古墳の埴輪を整合的に位置付けることができた。各系統の展開を追うことで、全ての分類群がほぼスムーズに縦軸と横軸で結ばれたことになる。ここまで状況証拠を積み上げれば、改めて議論をする必要はないだろう。若松の想定する「追加樹立」は存在しない。故に、若松の「追加樹立編年案」は完全な虚構である⁽²⁾。

5—3 墓からみた埼玉古墳群の階層構造

埼玉古墳群のI～IV期編年を提示した。最後に、埴輪からみた埼玉古墳群の階層構造についてまとめる（第13図）。埼玉古墳群を中心とした北武藏地域に関しては、増田逸朗が墳丘規模と円筒の条数に基づく階層構造を指摘している（増田1987）。ここでは、増田の視点に時間軸と埴輪の系統差・系列差を加えて、埼玉古墳群の階層構造を復原する。

まず、本稿で確立した埼玉古墳群I～IV期編年によれば、I～III期にそれぞれ稻荷山古墳・二子山古墳・鉄砲山古墳という5条以上の大型円筒を樹立する大規模墳系列がスムーズに展開する。私は以前、生出塚窯産埴輪の分析で大型品と中型品の2系列の差異を抽出したが（城倉2009）、まさにその大型品が供給される古墳系列である。これを「主系列墓」と呼称する。なお、稻荷山古墳に続いて大型品が供給された丸墓山古墳と、二子山古墳と同時期で条数を意図的に下げた大型品が供給される瓦塚古墳もこの系列に含めておく。一方、天祥寺裏古墳・奥の山古墳・愛宕山古墳は、生出塚窯産の3条もしくは4条の中型品を樹立する規模の小さい古墳系列である。これを「副系列墓」と呼称する。なお、愛宕山古墳と同工品が存在する将軍山古墳、須恵質埴輪壺を樹立する中の山古墳もこの系列に含めておく。

このように、埼玉古墳群において、おそらく被葬者の階層差を反映するであろう2系列を見出すことができた。主系列墓が「国造墓」と想定されるのは言うまでもないが、III期に主系列墓が衰退する一方で、副系列墓の規模が大きくなるのは偶然であろうか。いずれにしても、この2系列の階層構造の存在が、埼玉古墳群の歴史性の一端を示しているのは間違いない。

おわりに

埼玉古墳群の埴輪編年がようやく確立した。北武藏の各地に展開する埴輪窯跡群一生出塚窯・馬室窯・姥ヶ沢窯・権現坂窯・桜山窯・和名窯から出土し報告された全ての埴輪を分析し（城倉2010a・2010b）、各生産地における様相を把握した上で、北武藏地域の頂点に位置する埼玉古墳群出土埴輪の系統整理と編年を行った。その結果、埼玉古墳群には、①黄白色系統（5C末～6C初に北武藏の集中した場所で生産された製品）、②橙褐色系統（比企・大里方面の生産窯の製品）、③赤褐色系統（生出塚窯産製品）の3系統が供給されている事実を確認し、それら系統相互の系譜関係を整理した。この成果によって、埼玉古墳群を頂点とする階層秩序のもとで、各地に活動した生産集団の様相が垣間見えてきた。

また、埼玉古墳群出土埴輪の系統整理によって、稻荷山→丸墓山→天祥寺裏→二子山→瓦塚→奥

の山→愛宕山→將軍山→鉄砲山→中の山という埼玉古墳群の主要古墳の築造順序が確定し、埴輪生産の画期からみた埼玉古墳群のI～IV期編年が確立した。この編年の確立によって、埼玉古墳群の中で「主系列墓」と「副系列墓」の階層構造を抽出することができた。従来の墳丘規模と円筒条数だけに基づく素朴な階層論を一步進めて、時間軸の中で埴輪の系統も踏まえた階層差の抽出に成功した点は重要である。

さらに、本稿で確立した埼玉古墳群の埴輪編年に基づけば、今後、埼玉古墳群の歴史性をより深く掘り下げる議論が可能になる。最後に、今後焦点となるべき幾つかの議論を整理しておく。①「国造墓」と目される「主系列墓」が各期に1基ずつ築造される中で、稻荷山古墳と二子山古墳に挟まれる形で日本最大の円墳である丸墓山古墳が築造されたのはなぜか。②稻荷山古墳と丸墓山古墳出土埴輪のみに、比企系の「雷電山復古型」が認められるのはなぜか。③II期の二子山古墳・瓦塚古墳の埴輪生産を画期として、生出塚遺跡で大規模生産が始まるのはなぜか。④III期の「主系列墓」にみられる衰退現象の一方で、「副系列墓」に内容が卓越し墳丘形態も全く異なる將軍山古墳が出現するのはなぜか。⑤III期の鉄砲山古墳を最後に、埼玉古墳群への生出塚窯産大型品の供給がストップする一方で、代わって遠距離供給用にスリム化された小型品が東京湾にまで供給域を拡大するのはなぜか。

このように議論すべき問題は多い。これらの論点については、埼玉古墳群における埴輪以外の要素を深く分析し、北武藏地域の古墳時代後期の様相を広い視野で整理した上で、改めて論じたい。

※本稿は、科学研究費補助金（若手研究B『古代工房の復原的比較研究—埴輪・須恵器・瓦の工房を中心に—』課題番号20720217：城倉正祥）の成果である。

謝辞

本稿の掲載に際しては、鈴木敏昭館長と中村倉司氏に多大なご配慮を頂きました。また、君島勝秀氏・利根川章彦氏には、報告書掲載全個体の調査という無理なお願いにご配慮を頂き、度重なる資料調査にも丁寧に対応して頂きました。さらに、埼玉古墳群の埴輪研究の先駆である若松良一氏・岡本健一氏には、特に論文で多くの示唆を頂きました。結果的に両氏の見解とは異なる結論を導き出した点も多いが、両氏の真摯な研究姿勢に深い感銘を受けました。最後に、資料調査の際にお世話になった方々のご芳名を記すとともに、すべての方々に心からの感謝を申し上げます。

大久根茂・篠田泰輔・杉崎茂樹・田中英司・田中正夫・伝田郁夫・中島洋一・大和修（五十音順、敬称略）

《註》

- (1) 中の山古墳出土土器については、報告者が「須恵質埴輪壺」と呼称する（若松1989）。一方、朝鮮半島からの系譜を重視し「有孔平底壺系円筒形土器」と呼称する立場（太田2006など）もある。しかし、中の山古墳の土器が在地の埴輪・須恵器の製作技術系譜上にある点は多くの意見が一致しているので、わざわざ難解な呼称を使う必要はない。若松の「須恵質埴輪壺」は、モノの性質と歴史性をよく表現した極めて的確な用語だと思う。私は「須恵質埴輪壺」の呼称を用いる。
- (2) 本稿では、若松の重要な指摘である「追加樹立説」を真摯に受け止めた上で、その可能性を詳細に検討し、批判的立場に至ったものである。なお、本稿はあくまでも埼玉古墳群に関する分析に基づく結論をまとめただ

けであって、一般論としての「追加樹立説」を否定するものではない。

《引用文献》

- 犬木 努 2005 「下総型埴輪再論」『埴輪研究会誌』第9号
- 太田 博之 2006 「埼玉県中の山古墳出土の有孔平底壺系円筒形土器」『考古学雑誌』第90巻第2号
- 岡本 健一 1997 「確認調査のまとめ」『將軍山古墳』埼玉県教育委員会
- 城倉 正祥 2009 『埴輪生産と地域社会』学生社
- 城倉 正祥 2010 a 「生出塚窯産円筒埴輪の編年と生産の諸段階」『考古学雑誌』第94巻第1号
- 城倉 正祥 2010 b 「生産地分析からみた北武藏の埴輪生産」『考古学研究』第57巻第2号
- 轟 俊二郎 1973 『埴輪研究』第1冊
- 中井正幸他 2003 『昼飯大塚古墳』大垣市教育委員会
- 廣瀬 覚 2003 「柳井茶臼山古墳の埴輪とその生産組織」『立命館大学考古学論集』III 立命館大学
- 廣瀬 覚 2006 「五色塚古墳と前期後葉の埴輪生産」『史跡五色塚古墳 小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』神戸市教育委員会
- 古谷 毅 2003 『埴輪工人の移動から見た古墳時代前半期における技術交流の政治史的研究』科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書 東京国立博物館
- 増田 逸朗 1987 「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』新人物往来社
- 若松 良一 1982 「同一古墳における円筒埴輪の多様性の分析」『法政考古学』第7集
- 若松 良一 2007 「稻荷山古墳の埴輪と提起される諸問題」『武藏埼玉稻荷山古墳』埼玉県教育委員会

《報告書一覧》

- 【岩鼻古墳群】宮島秀夫 1989『岩鼻遺跡』東松山市教育委員会／江原昌俊 1993『岩鼻遺跡(第2次)』東松山市教育委員会【姥ヶ沢・権現坂埴輪窯】新井端・森田安彦 1998『千代遺跡群—弥生・古墳時代編一』江南町教育委員会【生出塚埴輪窯】山崎武 1981『生出塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会／山崎武 1987『鴻巣市遺跡群II(A地点)』鴻巣市教育委員会／山崎武 1987・1994『鴻巣市遺跡群III(D・E地点)』鴻巣市教育委員会／山崎武 1999『生出塚遺跡(P地点)』鴻巣市遺跡調査会／山崎武 2001『鴻巣市遺跡群IX(J地点)』鴻巣市教育委員会／山崎武 2002『鴻巣市遺跡群X(M地点)』鴻巣市教育委員会／山崎武 2004『鴻巣市遺跡群11(N・X・30・33・37・41地点)』鴻巣市教育委員会／山崎武 2005『生出塚遺跡(35・39・45・46地点)』鴻巣市遺跡調査会／山崎武 2006『鴻巣市遺跡群12(W地点)』鴻巣市教育委員会【亀塚古墳】狛江市史編纂委員会 1985『狛江市史 原始古代』【毛塚古墳群】宮島秀夫 2003『杉の木遺跡(第3次)』東松山市教育委員会／大谷徹 2006『杉の木遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団【埼玉愛宕山古墳】小久保徹ほか 1985『愛宕山古墳』埼玉県教育委員会／斎藤国夫 1994『愛宕山古墳』『埼玉古墳群発掘調査報告書』行田市教育委員会【埼玉稻荷山古墳】斎藤忠・柳田敏司・栗原文蔵 1980『埼玉稻荷山古墳』埼玉県教育委員会／若松良一 1992『埼玉稻荷山古墳中堤発見の朝顔形円筒埴輪』『調査研究報告』第5号 埼玉県立さきたま資料館／若松良一 2003『資料報告 武藏埼玉稻荷山古墳出土の埴輪I』『調査研究報告』第16号 埼玉県立さきたま資料館／若松良一 2004『資料報告 武藏埼玉稻荷山古墳出土の埴輪II』『調査研究報告』第17号 埼玉県立さきたま資料館／若松良一 2005『資料報告 武藏埼玉稻荷山古墳出土の埴輪III』『調査研究報告』第18号 埼玉県立さきたま資料館／若松良一 2006『資料報告 埼玉稻荷山古墳出土家形埴輪の復原について』『調査研究報告』第19号 埼玉県立さきたま資料館／柳田敏司ほか 2007『武藏埼玉稻荷山古墳』埼玉県教育委員会【埼玉奥の山古墳】若松良一ほか 1989『奥の山古墳の調査』『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉県教育委員会【埼玉瓦塚古墳】杉崎茂樹ほか 1986『瓦塚古墳』埼玉県教育委員会／塙田良道 1988『瓦塚古墳・下埼玉通遺跡』行田市教育委員会／若松良一ほか 1989『瓦塚古墳の調査』『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉県教育委員会／若松良一 1992『瓦塚古墳の調査』『二子山古墳・瓦塚古墳』埼玉県教育委員会／若松良一・日高慎 1992『形象埴輪の配置と復原される葬送儀礼(上)』『調査研究報告』第5号 埼玉県立さきたま資料館／若松良一・日高慎 1993『形象埴輪の配置と復元される葬送儀礼(中)』『調査研究報告』第6号 埼玉県立さきたま資料館【埼玉將軍山古墳】杉崎茂樹 1988『將軍山古墳』『丸墓山古墳・埼玉1~7号墳・將軍山古墳』埼玉県教育委員会／岡本健一 1997『將軍山古墳』埼玉県教育委員会【埼玉鉄砲山古墳】杉崎茂樹・小久保徹 1985『鉄砲山古墳』埼玉県教育委員会【埼玉天祥寺裏古墳】斎藤国夫 1994『天祥寺裏古墳』『埼玉古墳群発掘調査報告書』

行田市教育委員会【埼玉中の山古墳】若松良一ほか 1989「中の山古墳の調査」『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉県教育委員会／斎藤国夫 1994「中の山古墳」『埼玉古墳群発掘調査報告書』行田市教育委員会【埼玉二子山古墳】杉崎茂樹ほか 1987『二子山古墳』埼玉県教育委員会／若松良一ほか 1992「二子山古墳の調査」『二子山古墳・瓦塚古墳』埼玉県教育委員会／斎藤国夫 1994「二子山古墳」『埼玉古墳群発掘調査報告書』行田市教育委員会【埼玉丸墓山古墳】杉崎茂樹 1988「丸墓山古墳の調査」『丸墓山古墳・埼玉1～7号墳・將軍山古墳』埼玉県教育委員会【桜山埴輪窯】横川好富 1982『日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財調査報告VI—桜山窯跡群—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団【下松古墳群】江原昌俊・長井正欣 2004『上松本遺跡（第2次）』東松山市遺跡調査会【下道添遺跡】渡辺久生 1981『野本東部遺跡群発掘調査報告書一下道添・東町・古吉海道遺跡』東松山市教育委員会／坂野和信 1987『下道添遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団【新屋敷古墳群】高崎光司 1992『新屋敷遺跡B区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団／田中正夫 1994『新屋敷遺跡A区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団／金子直行・大谷徹 1996『新屋敷遺跡C区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団／昼間孝志・大谷徹 1998『新屋敷遺跡D区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団【末野窯】福田聖 1998『末野遺跡I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団【月輪古墳群】関口正幸・市川康弘 2008『月輪遺跡群』滑川町月輪遺跡群発掘調査会【登山1号墳】今津節生 1992『登山1号墳出土遺物調査報告書』厚木市教育委員会／稻村繁 1997『厚木市登山1号墳出土埴輪修理報告書』厚木市教育委員会【とやま古墳】塩野博 1967『とやま古墳』埼玉県教育委員会【格塚古墳】野沢均 1992『格塚古墳範囲確認調査報告書』朝霞市教育委員会／照林敏郎 2001『宮台遺跡第5・6地点発掘調査報告書』朝霞市教育委員会【東宮下】笹森紀巳子 1988『中里遺跡・篠山遺跡』大宮市教育委員会【古凍古墳群】横川好富 1984『一般国道254号線川島バイパス東松山地内埋蔵文化財発掘調査報告書II—古凍根岸裏一』埼玉県埋蔵文化財調査事業団【屋田古墳群】横川好富 1984『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告III—屋田・寺ノ台—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団【鎧塚古墳】寺社下博 1981『鎧塚古墳』熊谷市教育委員会【雷電山古墳】埼玉県県史編纂室 1986『雷電山古墳』『埼玉県古式古墳調査報告書』【和名埴輪窯】金井塙良一 1983「比企地方の古代窯業生産の研究(I) 和名埴輪窯址群の発掘調査」『東洋研究』第66号 大東文化大学／弓明義 2003「新たな埴輪焼成窯を発見」『彩の国埼玉発掘調査速報展2003』

《図表出典一覧》

第1表 資料調査の成果をもとに作成。

第1図 筆者撮影画像をもとに作成。写真については、埼玉県教育委員会・東松山市教育委員会・鴻巣市教育委員会より掲載許可を得た。

第2～11図 資料調査の成果に基づき、各報告書掲載実測図から作成。

第12・13図 各報告書掲載実測図より作成。

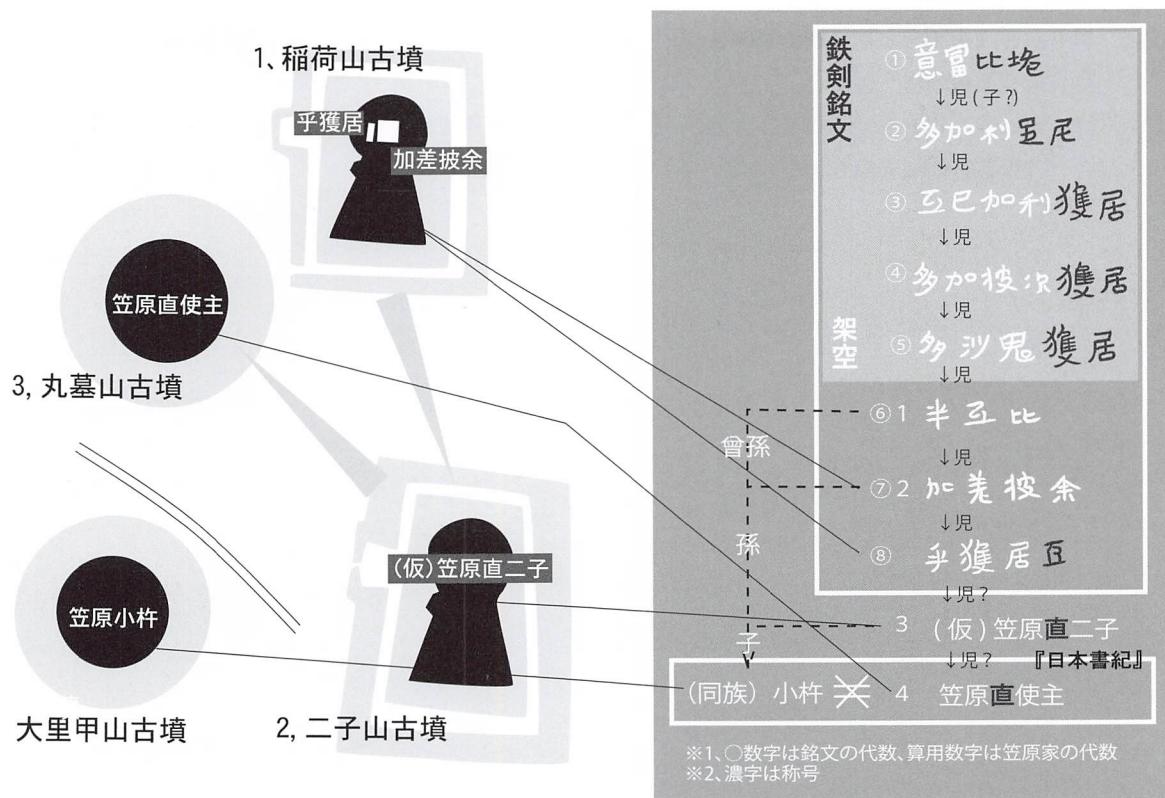
埼玉古墳群の墓主

墓主を想定できる古墳は極めて少ない。その中で当古墳群は極めて恵まれている。当古墳を語るには二つの文字資料がある。稻荷山古墳出土の辛亥銘鉄剣(471年)と『日本書紀』安閑期の武藏国造争乱記事(534年)である。

辛亥銘鉄剣には、製作主の乎獲居を含む8代の系譜が記されている。先祖などは架空であろうが、乎獲居の父「加差披余」、祖父「半豆比」は実在の人物と考えられている。素直に読めば銘文鉄剣を出土した礫槨には、乎獲居が眠つてたことになる。しかし、稻荷山古墳の墓主ではない。この墓主は、礫槨の下に存在するであろう未確認の埋葬主体部に眠る人物であり、彼こそ乎獲居の父「加差披余」である可能性がある。それでは祖父「半豆比」は、どこに眠るのであろうか。これは、稻荷山古墳出現の経緯を考える上で極めて重要な課題である。その答えは未だ見出せないでいるが、同古墳群内に存在するのではないかと夢想している。

武藏国造争乱記事には、笠原直使主と同族小杵の名前が見える。小杵は国造職の奪取を目指したが、結局使主(「朝廷」)に誅殺される。そして使主は国造職を得る。使主の墓を安閑期と年代の近似する丸墓山古墳に想定したい。我が国最大の円墳(105m)出現の背景には、このような事情が存在したのであろう。そして、敗者小杵は、荒川の対岸約8kmに存在する巨大円墳甲山古墳(95m)を想定したい。不遇な死を遂げた小杵もまた、前方後円墳の築造は適わなかつたのである。

(中村倉司)



緑泥片岩を用いた横穴式石室の構築

— 緑泥片岩の来歴と石室構築技術について —

栗島 義明

1 はじめに（問題の所在）

平成20年度に嵐山史跡の博物館で開催された企画展「板碑が語る中世」は、県内の代表的な板碑の展示を通してこの埼玉を代表する中世遺物の重要性を再認識させるに十分な展示であった。しかも、見やすく、解りやすくという展示構成・工夫に加えて板碑の起源や採石遺跡の紹介など、最新の研究成果も取り入れた中世研究の拠点としての嵐山史跡の博物館ならではの企画展であったと言えよう。この企画展で特に印象深かったのは、小川町の下里割谷から発見された板碑用石材の採石遺跡であり、今後の板碑研究に与えるであろう影響は計り知れない。ところで、展示を担当された加藤光男氏に案内を頂いた際に改めて不思議に感じたことがあった。それは初期板碑の石材供給・利用についてであり、現在でも板碑表面に往々にして「ポットホール」が観察されることから、「石材は採石場から切り出したものではなく、河原に露出していた石を使用した」と評価されている点にある。言うまでもなくポットホールとは、河床面に露呈した岩石上の凹み部に入った小石が水流によって回転し、表面を徐々に削ることで生じた凹状の凹みのことである。長瀬町の高砂橋上流の荒川右岸に日本一のポットホールが存在することを知る人も多いに違いない。

しかし、供養対象となる仏や菩薩を刻み、製作年月日や供養者の名前、造った理由や経文を刻むという人々の信仰を集約的に表象する板碑、その表面に凹面を残したままであろう筈がない。通常、河床面に露呈する緑泥片岩の表面は凹凸が著しい。自然面をそのまま利用したとすれば、板碑表面はあまりに平坦過ぎるし、そもそも表面に仏や種子、脇侍、記年銘を彫るに際し、仮に緑泥片岩の表面にポットホールでもあれば避けるか、或いは整形して平滑とするに違いない。そんな素朴な疑問を根拠に、これらの「ポットホール」は自然のものではなく人工的なものとの考えを持った。そこで折々の機会を見て以下の観察をおこなってきた。

- 1) 小川町（下里地区）や長瀬町（親鼻橋周辺、高砂橋周辺、白鳥橋周辺）の河床面に露呈した緑泥片岩⁽¹⁾にポットホールを観察できるか否か。
- 2) 古墳の石室や板碑、石燈籠などの緑泥片岩を用いた建造物における「ポットホール」の有無とその位置。

その結果、1) については自然に存在するポットホールとはそもそも形状や大きさがまったく異質であり、小さく浅い（板碑に見られるような）ものは殆ど皆無であり、しかもそれらが狭い範囲に点在（密集）した様を認めることはできなかった。これは予想されていた当然とも言える結果であり、水流により礫等が回転して河床部の緑泥片岩体を削る場合、径数センチ程度の凹部を形成するに足る小礫では岩体を削る前に水流に流さ



写真1 「ポットホール」を持つ板碑
(東松山市正法寺蔵)

れてしまう。真性のポットホールは径が数十センチ以上もあり、しかも深さが数十センチから1メートル程もあり、板碑表面に残る凹部イコール「ポットホール」という考えは余りに安直な発想としか言いようがないと考えるに至った。

2) については調査を始めた当初に小川町の下里観音近くで燈籠の台座に多数のポットホールを見出しあが、運良く近くを通りかかった老婆から、それらが「子供が遊びで凹みを作り草や木の実を潰した跡」と説明を頂いた。その後、そのような目で数々の燈籠や碑などの構造物を観察すると、幼児などが手が届く、座り心地が良いなど、子供達に身近な場所にあるもの、身近な箇所にのみ限定してポットホールが認められることを確認した。また、石材店の方からは石同士がぶつかった場合、特に緑泥片岩は石の目に対して垂直方向からの衝撃があった時、一瞬にして凹みが形成されるとの指摘も頂いた。確かに小さな石橋や路面に敷かれた緑泥片岩にそうした痕跡を認める機会は多い⁽²⁾。

考古学には遺跡・遺物に関するタフォノミー (Taphonomy) という研究分野があるが、当該研究により遺物形成やその分布が人為的な行為の他にも堆積土や埋没過程、その環境（自然・生物）などと言った多様な影響を被っていることが明らかとなりつつある。遺物が遺構内に一括遺棄された場合でも、数千年の間に風や水、霜やモグラ、ミミズなどにより本来の場所を離れてしまうことなどはあまりに卑近な例と言えよう。緑泥片岩に見られる所謂「ポットホール」も、それを直ちに河床面からの採取などに結びつける必要はないのでは、こうした消極的ながらも私なりの考えを得たことで満足していたし、その内容については機会があれば何人かの知人に紹介するに留まっていた。しかし、史跡の博物館に異動して各種古墳の石室観察をした際、図らずも凹部がポットホールでな



河床面に露呈した緑泥片（左：小川町、右：長瀬町）

このような水流の激しい場所でさえも板碑に認められた様な「ポットホール」は一切確認できない。



典型的な真性のポットホール（小川町遠山）



燈籠の台座に残された「ポットホール」（小川町下里）

い明確な証拠を得る機会を得たのと同時に、古墳の横穴式石室の構築についての興味深い事例を確認することができた。

本稿では、板碑や横穴式石室に多用される緑泥片岩、往々にしてその表面に観察される凹部が一律的に「ポットホール」と理解され、極めて短絡的に「河床面から採取された」と石材由来が結論されることに明確な反証を提示し、併せて横穴式石室の構築に関する若干の問題提起をおこなうと共に、その供給地についても触れながら派生する問題へと言及できたならばと考えている。

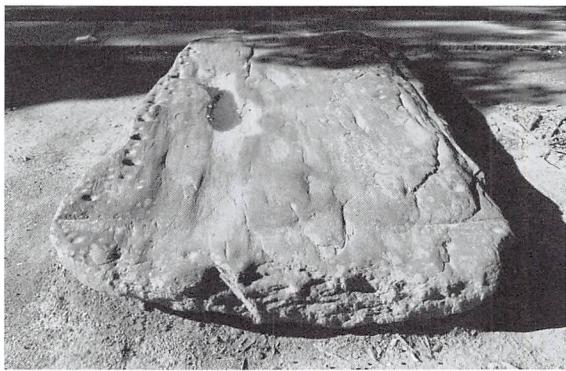
2 緑泥片岩に残る凹部生成の要因

史跡の博物館に異動してまもなく、周辺の古墳群を見学する機会があったが、なかでも最も強い印象を与えたのが行田市小見真觀寺古墳で、ここはさきたま古墳群に後続する6世紀後末の墳長100mを越す巨大な前方後円墳である。当該古墳の二つの横穴式石室と共に目を引いたのが、この真觀寺境内にある楠の巨木下に設置された緑泥片岩の一枚岩であった。長さ380cm、幅190cm、厚さ25~30cmにも及ぶこの緑泥片岩は、真觀寺古墳から北西へ約50mの距離にある虚空藏山古墳（墳長推定50mの前方後円墳）の天井石とされており、設置されている上面は概して平坦であるのに対し、その裏側は凹凸が顕著で整形されていないことから、この上面の側が天井石として石室内部に設置されていたであろうことは容易に察しがつく。また緑泥片岩製の板石の両端部側には短軸方向に段差が形成されていることが確認され、それが横穴式石室の側壁部板石との組合せ用に構築時に整形された平滑面であったことは一目瞭然である。

さて、この天井石の縁辺部（特に片側に偏在）には沢山の「ポットホール」が観察され、しかもそれは縁辺部分に接し直線的に並んでおり、加えてその箇所は板石が最も高まりを持つ箇所でもあることも注意を引いた。この時、改めて先の企画展「板碑が語る中世」での疑問が蘇ってきた。そもそもこのような凹部配列の偏在性や形成箇所だけを見ても自然成因を疑うに十分であるが、何よりも不自然な点は、同じ「ポットホール」が組合せ用に石室構築時に刻んだ平滑面にも観察されている点にある。直線的な平滑面は端部でマイナス2~3cm程も板石面を削っていることから、ここに残る「ポットホール」が整形以前のものではなくそれ以後に形成されたことを明示している。

このように幾つかの特徴やその属性をチェックしてゆくと、この緑泥片岩に見られる「ポットホール」が自然のものではなく、後代になって人工的に形成されたことは明らかと言えよう。この虚空藏山古墳の天井石が何時の段階で真觀寺の境内に移されたかのか明確とはし難いものの、昭和初期であることは間違いないとされているので、これらの「ポットホール」は境内のベンチとして設置された以後に形成されたと判断して良いだろう。

また史跡の博物館中の山古墳の南側、約200mにある常世岐姫神社境内にも好例がある。神社境内の手水場の踏み石には長さ180cm、幅110cm、厚さ20~30cmの立派な緑泥片岩の一枚岩が使用されている。或いは付近の消滅した古墳石室に使用されていた部材であったと考えられるが、詳細等は一切不明である。この緑泥片岩（裏側は確認不能）には一面に見事な「ポットホール」群が見られるが、これらも自然に形成されたものではなく同じく人工的なものと考えている。その理由の一つとして一面に密集するように「ポットホール」が分布しながらも、それらはほぼ一定の大きさであり径5cm、深さ2~3cm以上のものは見られない。加えてこれだけの数の「ポットホール」が形成される場合、緑泥片岩の表面は長時間にわたって水流や浸食作用等を被っていることから摩滅が著し



虚空藏山古墳出土天井石
手前の横位に筋が見えるが、これが組合せ
用の整形。そこにも「ポットホール」がある。



常世岐姫神社境内に残る横穴式石室部材
全面に見事な「ポットホール」が存在する。

い筈であるが、しかしその表面には水流に起因した摩滅等の痕跡を一切留めておらず、寧ろ波打つような小さな凹凸面（恐らく石材の分割面）が観察されるのである。これらの「ポットホール」が手水場の踏み台に転用された後に作られたこと、つまりその成因が自然ではなく人工であることは明らかであると言えよう⁽³⁾。

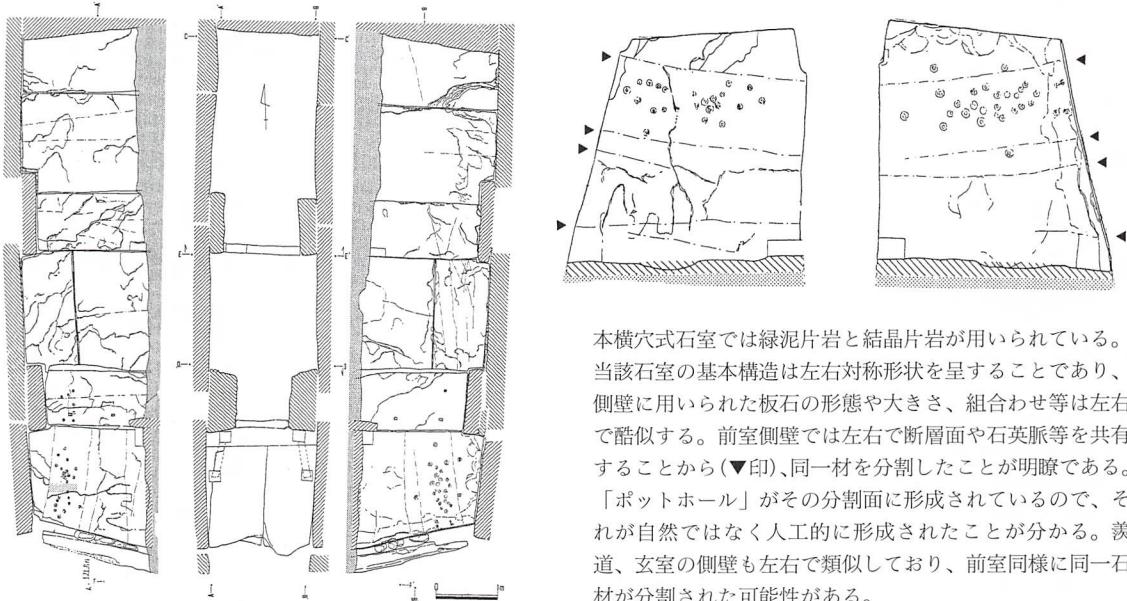
こうした「ポットホール＝人工（後代の人為的形成）」という例証は石燈籠や石碑など、少なくとも著者が注意し観察した多数の資料を挙げることが可能であるものの、考古資料中においてより明確な証拠を、小川町の穴八幡古墳の横穴式石室石材から得ることができた。以下にその点について詳述し、併せて同時に確認された横穴式石室に於ける特徴ある緑泥片岩利用の一形態についても言及しておきたい。

〈小川町穴八幡古墳〉

小川町のほぼ中央部に位置する八幡台は、北を冨川、南を槐川に挟まれた浸食の進んだ典型的な丘陵地形を有しており、その平坦部には槐川流域でも有数の規模を誇る縄文時代遺跡であることが町教委の調査で判明している。この八幡台遺跡の南側斜面を望む場所に巨大な片岩を用いた複式構造の横穴式石室を誇る埼玉県指定史跡の穴八幡古墳が存在する。この古墳は方墳という墳丘形態もさることながら、見事な石室構造とその構築技術の高さが近隣の古墳群中にあっても異彩を放つ存在となっている。この穴八幡古墳の石室は緑泥片岩の板石をパネル状に組合させて構築されている、と記載されている場合が多いが、しかし、板碑などの素材として用いられた緑泥片岩と同一なものは羨道部分だけである。他は同類の片岩ではあっても緑泥片岩とは相違した結晶片岩等の変成岩である。

さて著者がここで取りあげる緑泥片岩について、小川町史では埋葬主体部の羨道部の紹介に併せて次のような記載がおこなわれている。「左右の壁面・天井石は、大型の一枚岩が使用され、壁面は石の目を横にしてすえられていた。……左右の壁面の上位には、凹穴（おうけつ）と呼ばれる壺状の穴が多数あいており、この石材が河川に洗われた露頭から採取されたきたことを物語っている」。この緑泥片岩製の側壁は大凡 2 m × 2 m の大きさを有し、その外形は共に台形状を呈している。地上約 1 m 以上の各々の側壁表面には左右それぞれ 20-30箇所もの「ポットホール」が観察されるが、それ以外の箇所には一切存在しない。

ところで緑泥片岩には、しばしばその中に脈状の断層面や堆積層理面、更には白色の石英脈の貫入等を認めることが出来るが、本例はそのような特徴が特に顕著に認められる。上記文中でも触れ



穴八幡古墳の横穴式石室（左）と前室側壁に残る「ポットホール」（上）

られているように側壁に用いられた緑泥片岩には石の目が略横（水平）方向に観察できる。これは著者の観察だけでなく石室実測図にも的確に描かれており、水平方向に筋のように細い4本の石英脈が左右それぞれの側壁石に表現されている。左右それに同じ本数、そして間隔を同じくして同一箇所に見られることは、改めて指摘するまでもないように同じ石を分割した、即ち同一母岩であったからに他ならない。白色の筋状の石英脈は決して石の目（層理面：石の脈）に沿うものではなく、貫入していることから層理面を違えるとその間隔は数10cmは食い違ってくる。事実、厚さ15cm程の側壁の表裏でさえも石英脈の位置は、確認した箇所で水平方向で10cm以上も食い違ったものとなっている。それ故にこの羨道の左右に配された緑泥片岩の巨石は、それが分割面であることを明示し、つまり左右の側壁が分割に伴うネガ・ポジの関係に在ることから、以下のような二つの点で興味深い資料として注目されるのである。

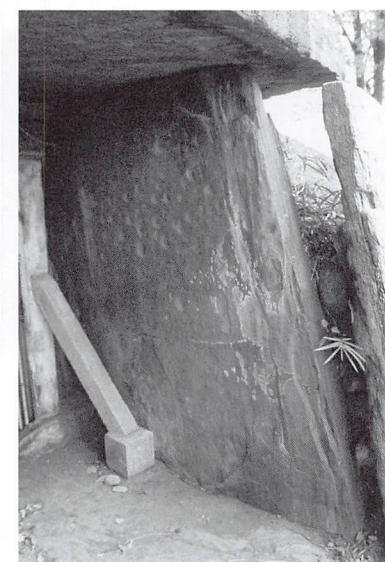
一つは改めて言うまでもないが、この側壁の左右に形成されている凹部が「ポットホール」ではあり得ないことである。側壁表面は河床に露呈していたものではなく、古墳築造時にここまで運搬された後に層理目に沿って半分割された、人為的な分割面、そのものであった点に疑いを挟む余地はない。石の種類、形態だけでなく、断層面や片理面、貫入した石英脈のラインまで同一であることから、左右の側壁は横穴式石室を構築する際に分割された同一石材の分割部材であり、向かい合った面は各々ネガ・ポジの関係にり、それ故に水流による「ポットホール（甌穴）」説は成り立ち得ない。この凹部の形成はどれほど古く見積もっても古墳時代以後に形成されたことは明らかで、さらに同じ緑泥片岩ではないものの石室内の他の片岩類には同類の凹部を観察できないことからも、それらが現在のように鉄格子によって人の出入りが規制された後にその外側の側壁にのみ凹部が形成されたと判断して良いだろう。しかもそれらが地上1m程の高さに集中していることは、これらの穴を作った人物の大まかな年齢層についても示唆しているようで興味深い。

さて、もう一つ看過できない問題は、古墳の横穴式石室の構築に際する石材分割という技術介在の存在についてである。穴八幡古墳の場合は羨道部に用いられた台形状の側壁という形態的特徴からして、長方形ではなく一辺のみをやや斜め方向に整形する当該形態形成では、2枚の板石を同

本横穴式石室では緑泥片岩と結晶片岩が用いられている。当該石室の基本構造は左右対称形状を呈することであり、側壁に用いられた板石の形態や大きさ、組合わせ等は左右で酷似する。前室側壁では左右で断層面や石英脈等を共有することから（▼印）、同一材を分割したことが明瞭である。「ポットホール」がその分割面に形成されているので、それが自然ではなく人工的に形成されたことが分かる。羨道、玄室の側壁も左右で類似しており、前室同様に同一石材が分割された可能性がある。

一規格で別々に切り出し、加工・整形するよりも、1枚を仕上げた後に石の目に沿って半分割した方がより効率の良いことは容易に察しがつく。とりわけ水平方向に石の目（片理面）のある緑泥片岩の場合、その分割が極めて容易である点は改めて指摘するまでもない。また、小川地域にあっては当該緑泥片岩の産地が同町下里地区であることは明白であることから、河川・陸路の何れを使用したとしても八幡台までの3～5kmの距離の運搬作業は不可避となる。その場合、単純に考えても2m四方の板石ではあっても厚さが30cmと15cmのものとでは、その重量（前者は後者の倍）から判断しても運搬に関わる労力が大いに異なることは事実であろう。だが、それが重量に比例するよう倍の労力となるかと言うと、強ちそうであるとは断定できない。移動に要したであろう河川の場合での筏や、陸路運搬の場合に用いた修羅、コロの製作、数量、設置、使用等の場面では重量に比例した差異が存在したとは考え難いからであり、むしろこうした諸作業を考慮したうえでの効率性を考えれば二度の運搬よりは、仮に重くとも一度で済ませた方が総体としての労力、効率化、効果等でより優ったものと判断されるのである。加えて一定程度の厚さを確保したうえでの石材移動の方が石材自体の破損等の不安も軽減されたものと考えられるのである。

穴八幡古墳の側壁部石材については他に前室、玄室部のそれぞれで左右で一組みずつの酷似した結晶片岩を見出すことができ、これらも同じ石材且つ同一規格であることなどから横穴式石室構築時に分割して石組みをおこなっていた蓋然性がたかい。恐らく片岩石材産地での切り出し、或いは



穴八幡古墳横穴式石室
左右の側壁には沢山の「ポットホール」
が見られる。緑泥片岩中には白い石英
脈や断層線などが明瞭に観察される。

(左右の側壁とその拡大：上)

採掘時には、側壁や奥壁、天井石など使用する部位によって緑泥片岩の大きさや形、厚さなどを調整したうえで岩体から剥ぎ取り、それを運搬後に半分割して左右対称形状となる横穴式石室を構築していたに違いない。何故ならば同一規格の緑泥片岩板石をそれぞれ別個に岩体から剥ぎ取るよりも、一つを厚めに岩体から切り出して運搬後に半分割すれば、左右対称形の側壁等は極めて効率的に作り出すことができるからである⁽⁴⁾。そして石室構築段階での分割、整形等に伴う石片こそが、石室の裏込め材などとして利用されていたのであろう。

3 横穴式石室用材としての緑泥片岩利用

緑泥片岩は中世の板碑素材として広く利用されたように、薄く片理面に沿って剥がれることから板状の素材獲得が容易であるという特性を持つ。片理という言わば石の目に沿って「ヤ」または平刃（鉄製クサビ）の工具を当て、ハンマーでそれを打てば容易に岩体から割り、剥がすことが可能であるが、その一方で石の目に直交しての加工は非常に困難である。その為に平面的に露呈した河床面からの切り出しは容易ではなく、小型の板状のものは露頭において側面方向からクサビや「ヤ」を打ち込むことで、順次剥ぎ取るように獲得する方がより効率的であった筈である。この片理面方向の露呈とそこからの加工が緑泥片岩を扱ううえでの基本的技術とも言えるのである⁽⁵⁾。横穴式石室部材に確認された分割とは、そうした意味でも極めて理にかなった技法であったと推察される。

さて、古墳時代に於ける横穴式石室の構築が現地（古墳）でおこなわれたものであることは明白であるが、使用する部材（石材）の概形作出は間違いなく石材原産地でなされていたと考えて良いだろう。何故ならば、横穴式石室の構築に際しての最も大きな課題は、石材の切り出しや整形、組み立てもさることながら、その運搬にあったことは予想に難くない。概形形成を現地でおこなつておくということは、何よりも運搬時における重量軽減に直結した問題であり、特に本論で対象とした緑泥片岩のような長距離の石材移動には不可欠な課題であったに違いない。さきたま古墳群周辺には緑泥片岩を用いた横穴式石室を持つ大型古墳があり、その代表的例として小見真觀寺古墳と八幡山古墳を取り上げ、次にこれらの古墳の横穴式石室における緑泥片岩利用の姿を概観することで問題点の確認と整理を進めておきたい。

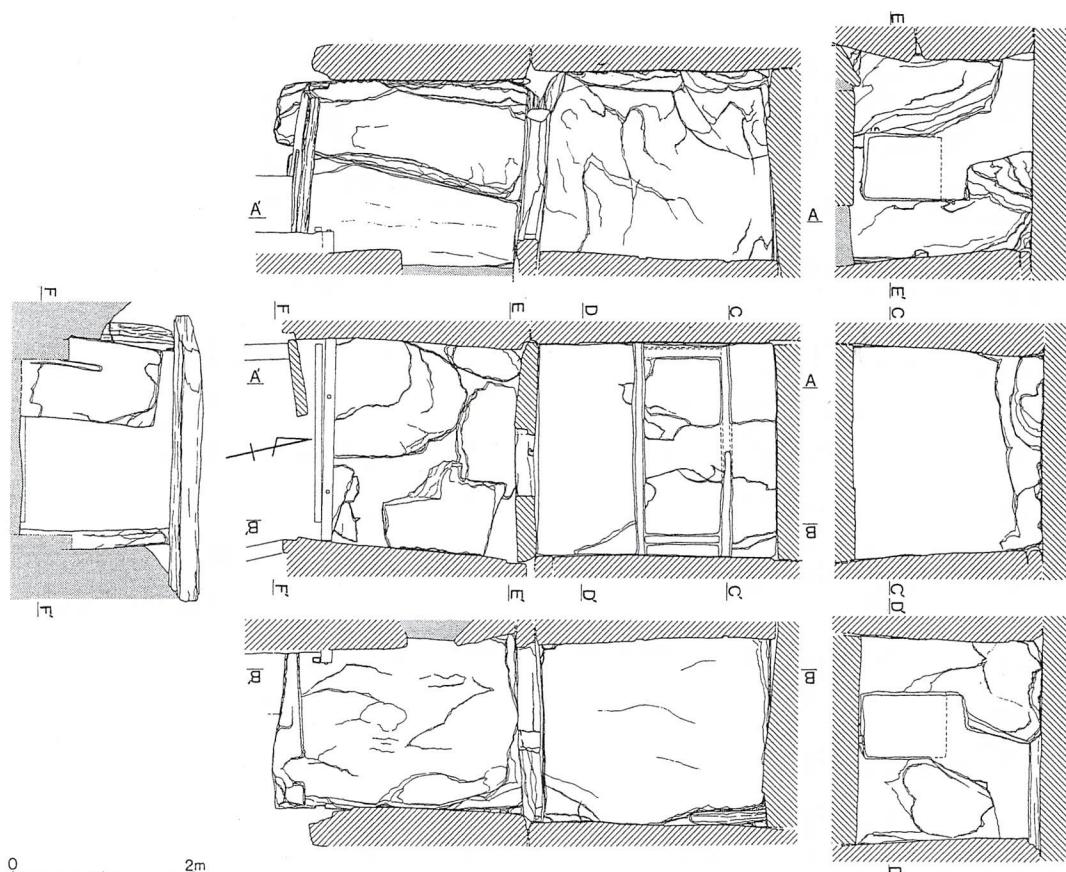
小見真觀寺古墳は全長112m（後円径55m・高さ765m、前方部幅48m・高さ7m）の大型前方後円墳で、二段に構築された墳丘からの埴輪の出土は確認されておらず、古墳や石室形態に加えてこの点も本古墳の年代推定（6世紀後半から7世紀初頭）の根拠とされている。寛永年間に発見された横穴式石室は緑泥片岩を用いた前室と玄室、そして羨道が付設された三室構造を有しており、特に玄門が緑泥片岩の一枚岩の割り抜きで造られている点に特徴がある。構造上の特徴や類例についての詳細は田中広明氏が述べているとおりであるが、著者がここで注視したい点は緑泥片岩の加工痕跡に在る。確かに奥壁については平滑化された様子が伺われたものの、他の側壁等についての明確な加工・整形痕跡を認めることは出来なかった。この平滑化も文字通りに受け取るべきではなく、穴八幡古墳側壁のように一枚岩を割った分割面は「河床礫面」とも勘違いされる程に平滑であり、古墳石室の部材はその平坦面に限り原産地等で岩体から切り出したままの状態で使用している蓋然性はたかい。小見真觀寺でも左右側壁や天井石に同一形態、規格のものが見られることから、それらの相似性（同一石材の分割）を検討したが、現地調査では明確な確証を得られるには至らなかつた。だが、そもそも側壁などの場合には分割面が互いに内側に向かい合った場合では特定可能であ

るが、片方、両者が互いに外側を向いて設置された場合の特定は不可能である。そしてここ小見真觀寺の横穴式石室石材は、そこに特徴ある層理面や石英脈や断層などを持つ例が極めて少なかったこともあり、分割された用材がないと直ちに否定できるものではない⁽⁶⁾。

「関東の石舞台」とも形容される八幡山古墳は若小玉古墳群の南側に位置する径80m程の巨大な円墳で、失われた盛土の高さは10m近くあったと推察されている。この古墳は巨大な横穴式石室を持つ7世紀前葉の古墳として有名であり、1977年の石室復元工事によってほぼその全容が明らかくなっている(小川ほか 1977)。石室の中心線はほぼ磁北を示し、羨道、前室、中室、奥室で構成される横穴式石室は推定約16.7m、平面形は奥室が隅丸方形、中室が胴張り形、前室が方形を呈している。八幡山古墳の石室は周知のようにその来歴を違えた三種の岩石(緑泥片岩、砂質凝灰岩、安山岩)が使用されている⁽⁷⁾。少々冗長となるが石室石材について報告書の文章を引用しておこう。

「床面は、各中央に緑泥片岩を2枚敷き、周囲を砂質凝灰岩で埋めている……各玄室部分の床は、前室玄門部分が玄門の石を抱きかかえる工法を施した1枚の緑泥片岩板石、中室玄門部分は玄門板石を挟む2枚の緑泥片岩板石、奥室玄門部分は緑泥片岩板石の玄門の扉石を立てる溝を刻んで砂質凝灰岩が敷かれている。……玄門は、各室ともに緑泥片岩を立てている。奥室、中室の玄門は平面形「T」字形になるように2枚を組合わせているが、前室玄門は各1枚である。側壁は、前・中室が壁面中央に緑泥片岩板石を立て、両側を角閃石安山岩、輝石安山岩の切石で築いている……。天井は、すべて緑泥片岩板石を加構している」。

緑泥片岩の使用について注意すべき点は、各室共に両側壁から上面観T字形となるように緑泥片岩の板石を立てて入口としていること、そして中央部に2枚の緑泥片岩を設置したうえでその回り



小見真觀寺古墳横穴式石室実測図(田中 1989)

に切石を敷きつめる工法を採用していることがある。これらは明らかに石目に沿って水平方向に分割される、平滑面を容易に得やすい緑泥片岩の特性を熟知したうえでの工法と言えよう。何よりも重要なことは床面に敷かれた緑泥片岩板石は中心軸を挟んで、ほぼ同様な大きさ、形態のものが対となっている点である。羨道部の床石は明らかに同一材を分割したものであり、他についても同様な分割の可能性を持つ例がある。

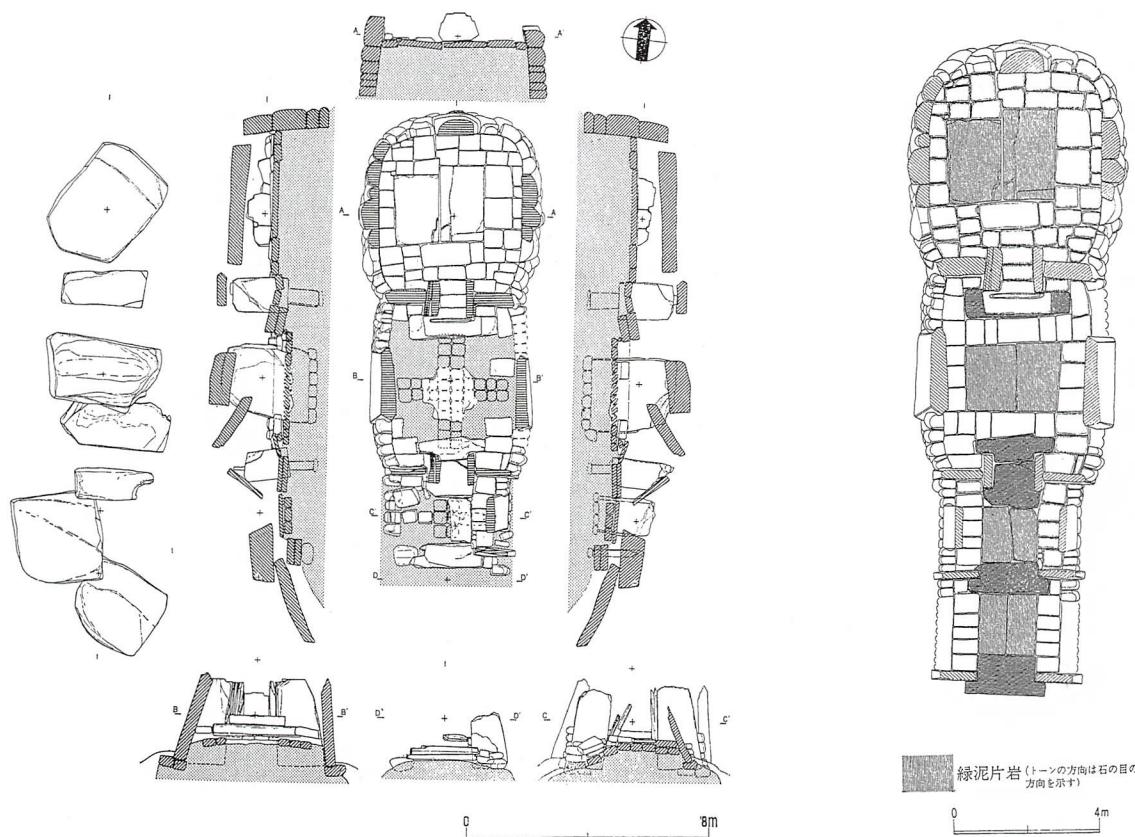
また、各室を隔てる玄門の板石、これも基本的には（奥室と中室を隔てる例を除き）同じ形態、規模を有している。また、T字状の石室長軸に平行した箇所の板石については明らかに同一石材を分割したものである。構造上、左右対称形の形態を採用する横穴式石室の構築には、長方形、正方形、台形等々の部材を厚めに切り出し、古墳への運搬後に分割することで有効、且つ効率的に横穴式石室の部材を造りだしていた蓋然性のたかいことをこれらの資料は雄弁に物語っている。

八幡山古墳の天井石は緑泥片岩の切り出しや加工を考える場合に極めて興味深い資料である。現存する天井石は実に巨大であり、奥室と前室の天井石は特に突出した大きさを誇っている。その大きさは報告書によれば以下のとおりである。

	縦（長軸）	横（短軸）	厚さ	重量
奥 室	398cm	282cm	54cm	13.8 t
中 室	212cm	362cm	70cm	12 t
中 室	170cm	360cm	?	?
前 室	306cm	288cm	74cm	14.6 t
羨 道	254cm	282cm	40cm	6 t

八幡山古墳天井石の大きさと重量

※重量は著者の計算による。各々の天井石は無論、長短軸の長さも均一でなく、厚さも一定していない。あくまで概算と考えて頂きたい。



八幡山古墳石室実測図

床面と緑泥片岩使用箇所



八幡山古墳前室天井石に残るクサビ痕跡、側面に残る整形痕(右上) ▼がクサビ痕を示す



石の目に沿って何カ所にクサビを打ち込んで巨石を分割しようとしたが、上手く行かず一部だけが剥がれ落ちた。本例は上位面が自然面で下位が分割面。その側面には切り出し時に概形を整形した際の痕跡が明瞭に残っている。緑泥片岩は石の目に沿った水平方向での分割は容易だが、垂直方向に石を割ったり切ったりするのは容易ではない。そこでノミ状の工具で刃先を石の目に直交するようにコツコツと削っていったと考えられる(下写真)。こうした石の

目を意識した加工方法は近世に至るまで基本的に変化していない。



左下のクサビ痕跡を拡大したもの。この箇所も石の目に沿ってクサビ痕が穿たれている。この痕跡を写真右方向に追ってゆくと天井石の底面となる。不本意な箇所で割れてしまつた為にこの2箇所だけが取り残されたものと考えられる。

横穴式石室の構造は天井石の形態や規模に左右される場合が多い。側壁などは切石を組むことができるが天井部は相違し、大きな緑泥片岩の板石で覆うしかなく、それは小見真觀寺や若王子古墳など念頭に置けば十分であろう。大きな天井石で石室を覆うとなればそれを支える強固な側壁部が不可欠となり、石材の種類やその形状や工法も相違してきたに違いない。八幡山の場合は側壁に加えて特徴的なT字状の玄門、しかも厚みのあるその板石の採用はとりわけ重量のある本天井石を支える機能的な意味もあった特殊な事例に違いない。八幡山の天井石は平面的にはほぼ同じ大きさの伝若王子古墳の2点の天井石（1：長軸360cm、短軸270cm、厚さ25-30cm、2：長軸340cm、短軸295cm、厚さ20cm）と比べると、長短軸長では同一であるのに対し、八幡山例は2倍から3倍近い厚みを有している。当然、その重量もその厚さに比例している点は改めて述べるまでもない。同じ緑泥片岩ではあっても若王子古墳例は石の目が均一的で良質なそれであるが、八幡山例は石英脈や石の目に沿って亀裂が貫入した比較的粗悪な緑泥片岩であり、明らかに石室内部の床面や側壁、板石に使用された緑泥片岩とは質が異なっている。通常よりも厚みを確保した天井石であった点にはそのような石質にも問題があった為なのかも知れない⁽⁸⁾。

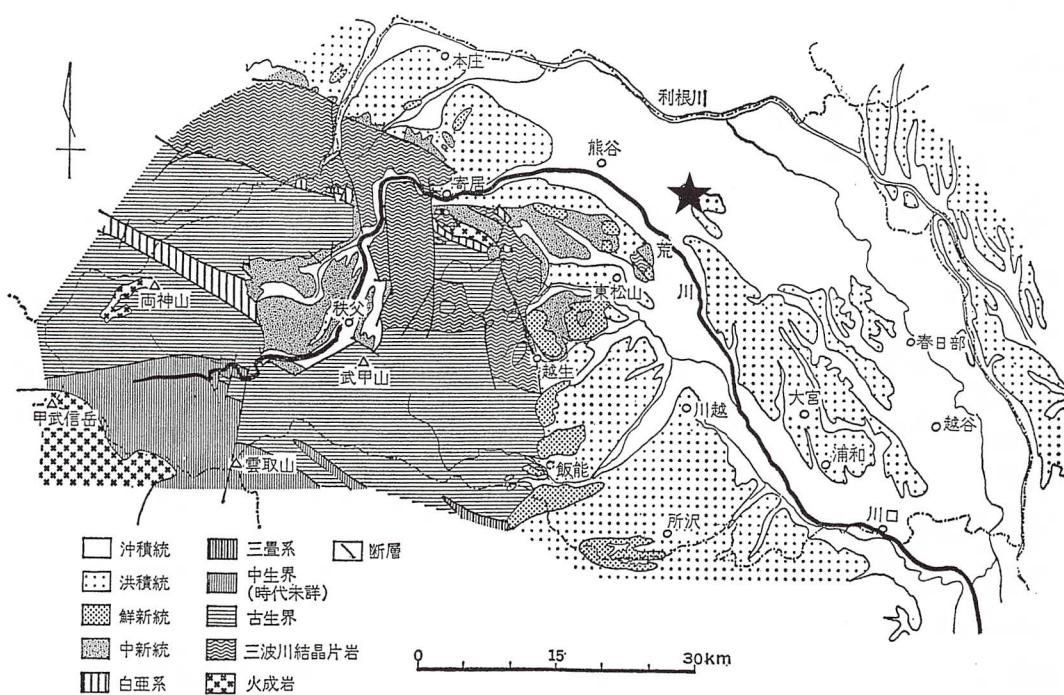
ところで八幡山の天井石を仔細に観察すると、その側面部に何箇所かの分割を試みた痕跡、水平方向に走る片理部に沿って平刃の工具で穿った跡を見出すことができる。その最も明瞭な事例（前室天井石）では縦1.0cm、横2.5cm、深さは3cm程であることが確認された。このクサビ痕の左側には約10cmの間隔をおいて同様な痕跡が存在し、しかもこれらは明らかに石の目に沿って穿ったものである点で看過できない。同様な痕跡は同じ天井石の反対側側面にも観察され、ここではクサビ痕に沿って一部が剥落している。何れにしてもこの厚い天井石が切り出し時か運搬時、或いは石室構

築時点で分割が試みられた可能性はたかいと言わなければならない。

他の緑泥片岩（八幡山古墳以外も含め）についても、この分割技法の有無を調べるべく横穴式石室部材の主に側面部観察をおこなったが、クサビ痕等の明確な痕跡を見出すことができなかった。しかし、これは直ちに分割という技法や工程が皆無であったことを意味するのではなく、石材分割が石室構築に先行することから削りや整形によって僅かな痕跡が失われてしまう為であろう。やや感覚的なきらいはあるものの、横穴式石室に使用された緑泥片岩の部材は極めて類似（緑泥の色合い、石英脈の有無、点紋の有無及び密度等）したものが多いとの印象を抱く。これが直ちに同一材を分割したものを示すとは言い切れないものの、同一の石材産地から持ち込んだものを使用していることを背景としている点は間違いない。今後はこうした視点に立って横穴式石室の継続的観察に努めてみたいと考えている。次に緑泥片岩の産地、その産状についての調査成果を紹介しておこう。

4 緑泥片岩の産状と産地

埼玉県の地形を概観すると西部は山地、東部は平野と明瞭に区分することができ、前者では秩父、上武、外秩父という3つの山地帯が見られ、後者には9つの丘陵（児玉、松久、比企、吉見、岩殿等）と18の台地（本庄、櫛引、江南、松山、大宮等）、4つの低地（妻沼、加須、荒川、中川）とに区分されている。このような埼玉県の地形を縦断するように流れるのが荒川であり、全長169km（全国15位）でその流域面積は2,940km²（全国19位）を誇る。荒川の最も大きな特徴は平地が流域面積に占める割合がたかいという点にあり、地形的な割合が山地面積(48.7%)、平地面積(51.3%)となっており、これは現在の流域人口の密度とも関連していると判断して良いだろう。このような地形的特徴を反映して、荒川が秩父山地から秩父盆地を経た後には上武山地と外秩父山地との間を縫うようにして北上し、その後は寄居付近から一気に流れを変え関東平野に向かって東流してから南下しており、流路の半分近くは関東平野部に相当しているのである。



埼玉県の地質区分とさきたま古墳群の位置（★印）

荒川が秩父盆地で堆積、浸食作用を繰り返して多くの段丘形成を形成した後、再び上武山地と外秩父山地の間を縫うようにして流れる部分が緑泥片岩を含む三波川結晶片岩地帯に相当する。この緑泥片岩を含む三波川結晶片岩は地底深くに押し込められた泥や砂、火山灰などが高温・高圧の変成作用によって生成されたもので、薄く剥がれやすい性質を持っていることが最大の特徴でもある。この層理面にそって薄く剥がれやすいという特徴が故に、緑泥片岩は板状の石材を獲得することが極めて容易な岩石となっているのである。

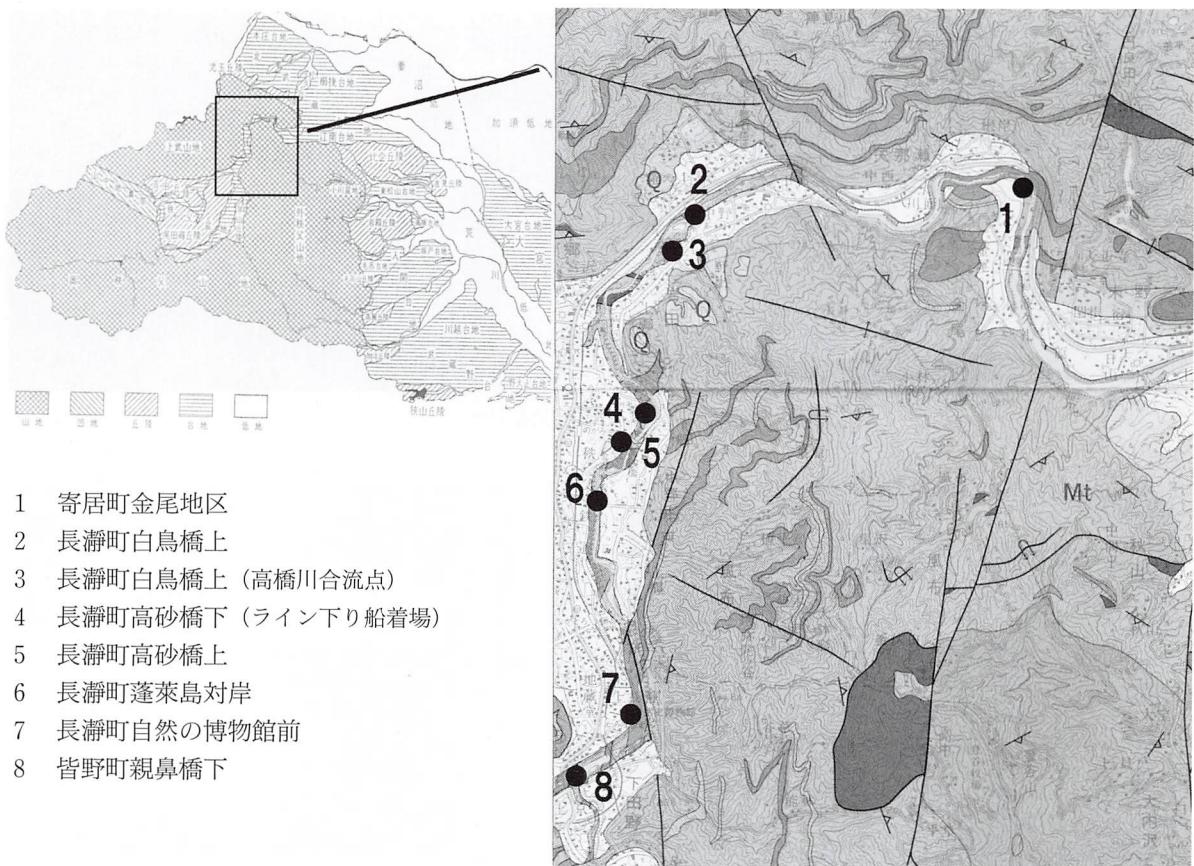
さて、上記したように緑泥片岩は三波川結晶片岩帯に含まれ、そこには結晶片岩や黒色片岩、蛇紋岩、紅簾石片岩、赤鉄片岩等と言った多様な岩相が認められる。著書が現地調査した古墳石室に用いられた中には、例えば八幡山古墳の最も巨大な天井石には明らかに河床面に露呈していた痕跡をその表面に留めた例があることから、基本的に河床面や河床近くの緑泥片岩が利用されたものと考えている（ただし、それは前述したような「ポットホール」の有無が基準とはならない）。古墳石室石材を中世板碑の採掘跡と同様に野上下郷滝の上地区「古虚空蔵」（標高450m：秩父鉄道樋口駅の北西山腹を2km登った場所）に求める意見もあるが、明確な論拠が示されている訳ではない。巨大且つ多量な緑泥片岩ブロックや板石を山頂付近の露頭から切り出し、急峻な斜面地を数百メートルも引き出した後に筏等で河川運搬したとすれば、陸上運搬に費やす労力はもとより、途中で石材自体を破損してしまう危険性が存在することからも肯首できるものではない。

横穴式石室部材は基本的に河床や低位段丘崖に露呈した緑泥片岩を切り出して利用したとの理解の基、著者は荒川中流域の三波川結晶片岩帯に相当する長瀬町を中心に荒川の河床面、及び段丘崖部分の緑泥片岩の分布やその産状についての現地調査を実施した。参考にしたのは『長瀬長史 長瀬の自然』、『荒川』、『埼玉県史』等であり、それぞれの本には文章や略図、地質図などで緑泥片岩の分布が記載されている。ただし寄居町から長瀬町にかけての荒川中流域の総ての河床面を踏査した訳でもなく、また古墳時代以後の長い歴史上では多少の流路変更などを考えなければならず、早急に結論を出すことは不可能であろうが、しかし著者としてはこの踏査によって一定の結論を得ることができたと考えている。以下、順次、その点について触れてゆくこととしたい。

先ず緑泥片岩の岩体を荒川中流域の河床面や段丘崖に確認できたのは6箇所であった。他にも地質図等で「緑泥片岩」と記載されたり、色塗りされた箇所があったが、しかし現地では我々が通常イメージする緑泥片岩を見出すことはできなかった。特に高砂橋上流や長瀬岩畠周辺では緑泥片岩の分布と紹介されてはいても、それは著者が緑泥片岩と認識する岩石とは遠くかけ離れた類のものであった。岩石学的な意味での緑泥片岩と我々が考古学的に認識するそれとは多少なりとも齟齬があると言えようか。

緑泥片岩の産状を含めた原産地の様相を以下に紹介してゆこう。最も下流で確認された緑泥片岩は玉淀ダム湖畔の金尾地区のもので、秩父線の波久礼駅から約300m上流の荒川右岸で確認された。この箇所は荒川の川幅は極度に狭くなってしまっており、緑泥片岩が川（人造湖）に平行して約20mの幅で確認された。緑泥片岩中には石英脈や点紋も確認され、石の目は水平方向に整然と並んだ比較的良質なものが多いが、縦横方向に無数の亀裂が入ったものが多くて横穴式石室の側壁や天井石などと言った大きな板状の切り出しには不向きとの印象を強く抱いた。

秩父線樋口駅の川を挟んだほぼ対岸、白鳥橋上流の約100mの箇所にも良質な緑泥片岩が分布する。中州となった島と右岸側において顕著に観察され、左岸側には緑泥片岩の分布は及んでいない



荒川中流域と緑泥片岩踏査地点

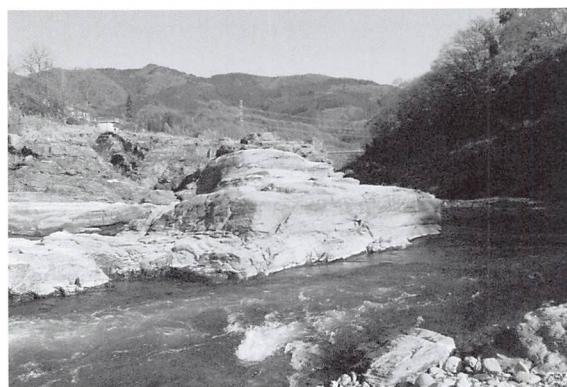
ことが確認できた。恐らく川の流れに直交するように10~20m程度の岩帯として露呈している局所的な分布と思われる。右岸段丘崖部分には比較的大きな露頭も観察され、そこには典型的な甌穴(おうけつ=ポットホール)を認めることができる。この箇所の緑泥片岩の特徴は白色の点紋を持つ「点紋緑泥片岩」が顕著であること、そして片理面が彎曲することなく水平方向に規則的に認められた。

この上流域では白鳥橋下から続く黒色片岩が至る所で観察され、特に河床近くには小山のような黒色片岩の岩体(通称トンビ岩)も存在する。上記した緑泥片岩の露呈箇所から約300m上流の荒川右岸、高橋川との合流地点付近にも緑泥片岩の分布が見られる。ここから上流にかけて約50mの範囲で河床部に確認された緑泥片岩は、斑状に白い結晶を持つ点紋緑泥片岩であり、キラキラと光る磁鉄鉱の結晶も認めることができた。しかし、この箇所に分布する緑泥片岩は片理面の彎曲が著しく、加えて断層面や縦横に走る亀裂を持つもので、一見して古墳横穴式石室の部材には不適であると判断された。恐らく露呈箇所のものでは1m²の石材さえ満足に切り出すことは困難であろう。この上流部は河川両岸が段丘崖を形成しており、宮沢対岸と西浦採銅坑跡付近の二箇所での観察しかできず、この地点では黒色片岩しか確認できなかった。次に緑泥片岩の存在を認められたのは高砂橋下流であった。

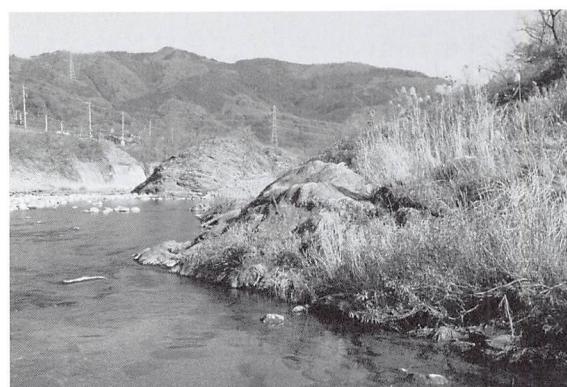
高砂橋下流部の緑泥片岩露呈部は丁度、長瀬ライン下りの船着き場に相当する。ここでは荒川を横断して対岸まで走る比較的広範囲な緑泥片岩の岩体(相)を確認することができる。だが、ここでの緑泥片岩も縦横の断層面や亀裂を無数に有するもので、しかも最も重要な要素である片理面が水平ではなく著しく彎曲している。緑泥片岩ではありながらも、何らかの加工を施すことさえ困難な材質と言えるものであった。



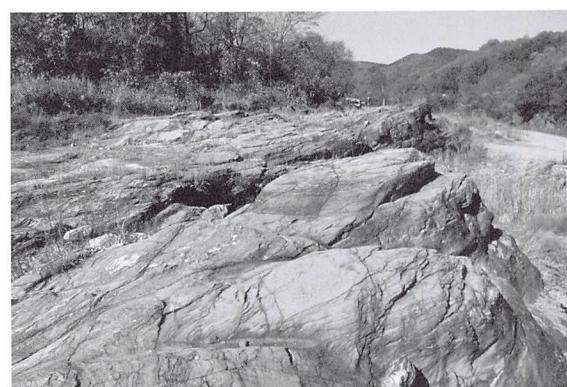
寄居町金尾の緑泥片岩産状



長瀬町白鳥橋上の緑泥片岩産状



長瀬町白鳥橋上の緑泥片岩産状

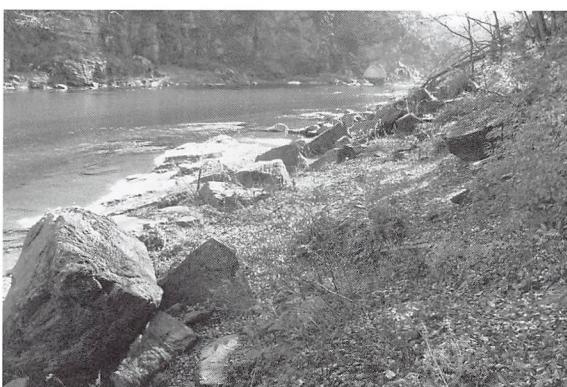


長瀬町高砂橋下の緑泥片岩産状

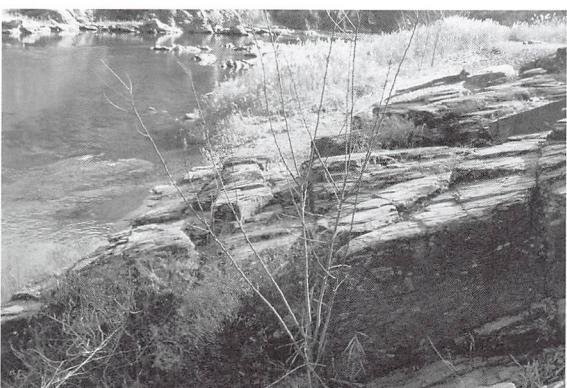
産 地 1



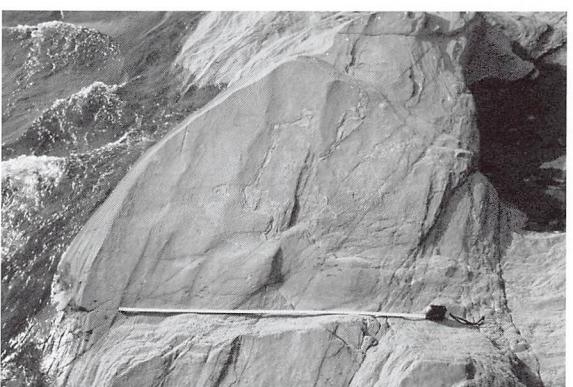
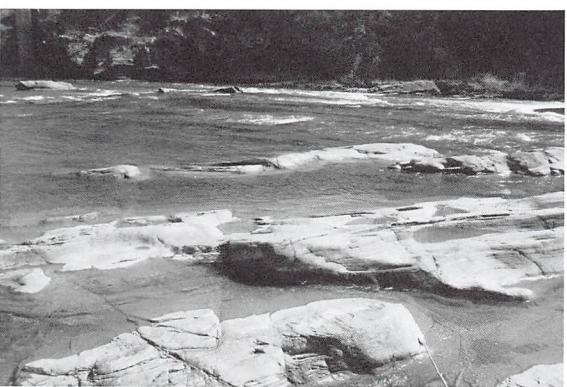
長瀬町高砂橋上の緑泥片岩産状



長瀬町蓬萊島対岸の緑泥片岩産状



長瀬町自然博前の緑泥片岩産状



皆野町親鼻橋上の緑泥片岩産状

産 地 2

長瀬の自然史博物館前の虎岩や石割の松周辺にも緑泥片岩が分布するとされている。しかし、ここに露出した片岩は岩畳の下流（四十八沼：念佛沼南）付近の段丘崖近くに見られる片岩や高砂橋上のものと同類の片岩で、色調は確かに緑色を呈してはいるもののそれは全体的に薄く明るく、点紋が見られずに石英脈が著しく、断層面や亀裂が異常に多い。当然、古墳石室等に使用される緑泥片岩とは似ても似つかない石材である。

長瀬水管橋から100m程上流の荒川左岸、丁度、蓬萊島対岸に相当する地点では緑泥片岩が段丘崖に露呈した状態が確認できた。対岸の鶴沢側では見られないことから右岸側に於いて荒川に平行するように分布している蓋然性がたかい。ここで緑泥片岩の特徴は崖面に巨大な緑泥片岩岩体が露呈し、それは石英脈や断層面が少なく、片理面は彎曲することなく整然と水平方向を保っている点にある。段丘崖から河床面側にもこの緑泥片岩の分布が及んでおり、河川脇には崖面から落石した巨大なブロック状の緑泥片岩が散在している。

中流域で最も上流に緑泥片岩の見られる箇所が国道140号が荒川を横断する親鼻橋下である。橋脚直下からその上流に向かって100m程の範囲に亘り、荒川を縦断するように右岸から河床面、そして左岸に至るまで広い範囲に緑泥片岩の分布が確認できる。この地点の緑泥片岩の特徴は点紋を有し、僅かな石英脈や断層面を持つこと、そして片理面が彎曲せずに水平方向に整然と発達した状況が確認できる点にある。この箇所の緑泥片岩は荒川中流域では最も良質であり、そして最も広範な分布状況を呈している。

5 どこから、どのように切り出したのか？

分布調査を実施する最中も、緑泥片岩がどこから行田市を中心とした古墳群へと運ばれたのか、常に念頭に置きつつ調査をおこなっていた。今後は上記した産地以外での新たな露頭、特に河川河床や段丘だけでなく、山間部へと対象を広げてゆくことも必要ではあろうし、また理化学的な分析手法の確立も望まれる。とりあえず現状での見解として古墳群の横穴式石室に用いられた緑泥片岩の産地について考えてみたい。

先にも指摘したように、横穴式石室の石材は石英脈などの不純物を含まずに断層面（線）が入り乱れることのない、そして何よりも薄くて剝がれ易い片理面が水平方向に整然と並んだ「素性の良い」ものでなくてはならない。石英脈や断層線が入ったものは石材として脆弱なうえに破損し易く、何よりも横穴式石室で必要とされる大きく板状の素材獲得が困難であり、そのうえ石室の組合わせ段階での加工という点でも不適である。また片理面が変成作用によって著しく彎曲している場合、加工のみならず切り出し時の母岩（岩体）からの分離が極めて難しくなるに違いない。無論、クサビ等による分割など及びもつかないし、そもそも古墳の横穴式石室に彎曲する片理面の乱れた緑泥片岩を見出したことはない。

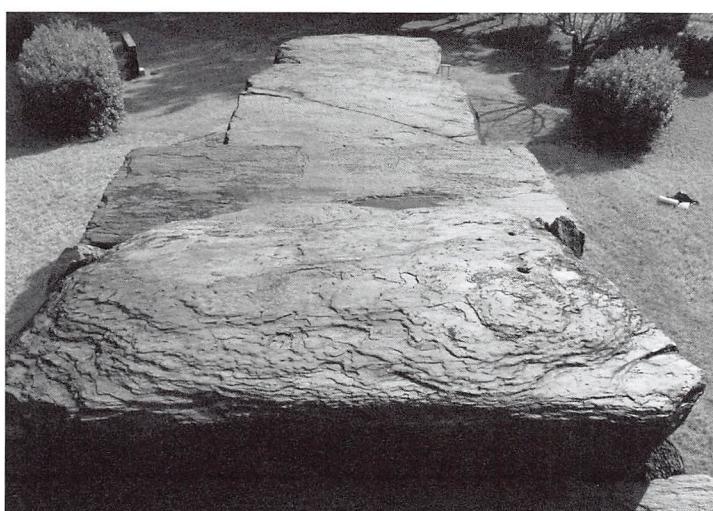
緑泥片岩という岩石学的な特質のみではなく、横穴式石室の用材としての要件を満たした緑泥片岩との条件を課した場合、該当する産地は上記した原産地の中でも僅かに3箇所（白鳥橋上流、蓬萊島対岸、親鼻橋上流）に限定されてくる。しかしながら、白鳥橋上流の地点は産状が極めて限定的であり、その殆どが段丘崖下に伸びてしまっていることから継続的な切り出しは困難と断言して良いだろう。加えて注視しなくてはならない点は同じ緑泥片岩産地と言えども、例えば寄居町金尾や長瀬町野上（白鳥橋上流）、同長瀬（小滝の瀬）などの箇所は、川幅が著しく狭まった場所に位置

している。石材の切り出し（岩体の露出、加工、切り出し、積み出し・運搬）等といった一連の作業での、作業空間の確保が困難との懸念は払拭できない。基本的には古墳時代に於いても荒川の大規模な流路変更は無いと考えられ、同箇所は現状とほぼ同じく荒川中流域では著しく川幅が狭まっていた地点であったと考えられるのである⁽⁹⁾。

さきたま古墳周辺の緑泥片岩を用いた横穴式石室等を観察すると、何れも良質な緑泥片岩を用いている。ここで言う良質な緑泥片岩とは色調な無論、石英脈や断層などが少なくて片理面が整然と水平方向に走っている類の石材である。しかも横穴式石室部材に用いられた側壁、天井石等は長さが3～4m、幅が2mのクラスが基本的なサイズである。このような要件を満たした、即ち片理面が彎曲せずに水平方向に走行し、断層や亀裂等によってブロック状に割れておらず、また、その危険性の少ない緑泥片岩原産地は、唯一、親鼻橋上流部に限られてくる。著者はさきたま古墳の周辺を始めとした各地の横穴式石室に用いられた緑泥片岩は、この場所から切り出されて荒川本流を運搬されたものであった蓋然性がたかいと考えている。加えて注目したいのがこの地点の川幅にあり、150m～200m近くに及ぶ河原の幅は中流域でも希であり、段丘崖に露呈した緑泥片岩の加工、切り出し、整形のみならず、筏を組んだり、そこに緑泥片岩を積む場合にもこの地点は好条件を提供しているのである。

さて、八幡山古墳の中室天井石はその表面が全体的に緩やかに凸状を呈しており、片理面上に風化・浸食・剝離の痕跡が明瞭に観察され、あたかもさざ波岩の様である。その下面（石室内部側）に目を転じるとそこは対照的な平坦面であることから、前者の凸面は河床等に長らく露呈し流水等によって浸食作用を被った証と考えている。今後、詳細な比較研究が必要となるであろうが、八幡山古墳には同様な特徴を持つ天井石が前室にも存在しており、著者の踏査経験から判断しても片理面表面が全体的に摩耗している状況は、少なくとも河床面以外では観察できなかった。

八幡山古墳の天井石は、緑泥片岩とは言っても古墳内部（玄門や床面）に用いられたものとは異質なものである。これは当初から気がかりなことであったが、今回、同様な特徴を持つ緑泥片岩が蓬萊島対岸に存在することを突き止めることができた。八幡山古墳天井石の特徴は片理面が一様に波模様を呈すること、そしてその片理面に絹雲母などの結晶が顕著に観察されることにある。このような特徴は他の緑泥片岩石材には見たことがなかった為に産地踏査の折りに注意を払っていたところ、長瀬の岩畠下流の蓬萊島対岸（荒川左岸）に類似した絹雲母の結晶を持つ緑泥片岩をの存在



八幡山古墳の天井石(左)と片理構造(上)
この巨大な天井石は風化・摩滅した片理面の
様子から、河床面から切り出されたものと考
えられる。



荒川左岸・蓬萊島対岸における緑泥片岩の産状

河床面から段丘崖にかけて良質の緑泥片岩が露呈しており、崩落したブロックは一辺が4～5mもあり、そのまま石室用材として使用できそうである。

を確認した。今後、何らかの科学的な分析等で両者の比較研究がおこなえればと考えているが、少なくとも他の緑泥片岩産出地点では一切、確認できない特徴である点は間違いない⁽¹⁰⁾。

ところで、多くの研究者は板状の緑泥片岩を岩体や母岩から切り出す、特にそれが河床面や段丘面、崖の場合は多くの労力を要すると考えているに違いない。しかし、意外にも横穴式石室の部材程度の板状石材は比較的容易に獲得することができる。先ず、緑泥片岩は変成岩であるが故に強い圧力等により岩体に亀裂等が入っているのが通例であり、それは破碎状態の場合からブロック状、板状に至るまで多用な形態での産状として顕在化している。その為、既にブロック状となっている緑泥片岩については、適当な厚さの石材の側面部を敲いて整形すれば容易に横穴式石室部材を確保できるのである。緑泥片岩の場合に最も苦労するのはその表裏の平坦面を確保することではなく、むしろ側面部の整形にあった点は疑いない。

天井石や側壁等の表裏平坦面は基本的に切り出し時の分割面をそのまま用いていると判断して間違いないが、側面部は多くの場合にその部位の加工によって板石の平面形態が決まることから入念となっている。だが、この側面の場合もその総ての面が整形されているかというと強ちそうとも言えず、石棺や玄門、側壁など規格性の強い部材はともかく、天井石などはその側面に亀裂や断層などによって生じた平坦面、言わば自然面をそのまま残存させた例も多い。八幡山古墳の奥室天井石には側面の自然面と加工面とを残した良好な事例である。良質であるが故に、一見すると加工程度のたかい印象を与える伝若王子古墳の巨大な天井石についても、その側面には部分的に自然面の残存が確認でき、大きな緑泥片岩部材の場合には適合する大きさのブロックを選別したうえで加工していた蓋然性がたかい。古墳の石室部材としては利用されていないが、長瀬の県立自然の博物館近くに水神の祠が祀られた箇所があるが、自然の状態でも四面が削ぎ落とされたような状態の岩体が見られるし、また切り出しが容易なブロック状の片岩産状もしばしば目にすることができます。八幡山古墳の天井石に酷似した絹雲母の結晶を持つ蓬萊島付近では、あたかも緑泥片岩の切り出し場的な情景が観察できたが、これらの中から素性の良い石質と目的とする横穴式石室部材に合致した板

状の素材を選別すれば、大きな手間（加工）をかけることなくしかも切り出すことなく容易に石室素材を確保できたに違いない。

6 まとめ

古墳時代の問題について調べレポートを書くことは、著者にとっては始めての経験である。当初、述べたようにそのきっかけは板碑に残る「ポットホール」についての極めて初步的な疑問であり、その後も機会があれば板碑や燈籠、石造物などに目を向けていたが、穴八幡古墳の側壁に見事な「ポットホール」を確認した時は驚いた。板碑に残る「ポットホール」が緑泥片岩の河床面採取の証左という類推は的外れであること、そして古墳時代の横穴式石室構築に際し石材を等分割して用いる技法があった点が指摘できればという点が本論執筆の動機であった。「天井石を除いて左右対称形を基調とする横穴式石室の部材は、基本的に産地で形態を整えたうえで運搬し、その後の石質構築時にクサビ等を用いて分割することでより効率的に獲得する」との著者の安直な発想は、しかし実際の横穴式石室の観察をおこなえばおこなう程に容易に検証し得ない仮説でしかないことを痛感させられた。今後は少し時間をかけて緑泥片岩の問題、特に横穴式石室構築の技法・方法について調べてみたいと考えている。

今回、外秩父地域にしか産しない緑泥片岩の流通を調べる為に、県内に点在する古墳の緑泥片岩利用の集成をおこなったが、概略的には横穴式石室部材に緑泥片岩を多用する古墳はほぼ行田・羽生周辺に限られ（八幡山、地蔵塚、小見心願寺、虚空蔵山、小針鎧塚、稻荷山、毘沙門山、小松1号、永明寺など）、熊谷から行田にかけては天井石や奥壁、閉塞石などの一部に緑泥片岩を用い（酒巻2, 3, 5, 6, 11, 21号、將軍山、戸場口山、白山、中条大塚、西原11, 18号など）、特に荒川中流域の深谷市鹿島古墳群でもこうした傾向が顕著である。緑泥片岩以外では群馬県側に由来する角閃石安山岩を用いる場合と鹿島古墳群のように荒川河床の円礫を用いる場合がある。無論、こうした石材利用形態はそれぞれの被葬者の経済関係や政治体制の相関関係を反映していると判断して良いだろう。そのような意味で緑泥片岩は横穴式石室構築部材として、一定の社会的価値を有すると認識されていた点は間違いない、県内ではさいたま市の茶臼塚古墳や春日部市塚内16号墳などでも緑泥片岩の利用が確認でき、更に東京湾沿岸の古墳群にも石質部材として利用されている。丁度、將軍山に運ばれた房州石に対向するような動きを緑泥片岩を見てとれるのである。

本論では緑泥片岩の産地・産状、その特徴にも言及した。今後、更に緑泥片岩露頭などが確認される可能性はたかいものの、殆どの横穴式石室用材に用いられた緑泥片岩については親鼻橋付近から切り出されたものと推定する。当該地点は良質な緑泥片岩が広く河床、段丘崖に露呈していること、そして荒川の広く緩やかな流れは加工、切り出し、積み出し等の作業を進めるうえで絶好の場所であるうえに、筏を組んでそこに石を固定するにも最適であったに違いない。恐らく下流域への石材運搬は水量の豊富な時期を選んでおこなわれていたのであろうが、長瀬町の白鳥橋付近と寄居町金尾付近の川幅が狭まった激流部をどのように運んだのか、しかも八幡山古墳の天井石のように15t近い重量の巨石を……。確かに大きく重い緑泥片岩を運ぶのは一大事業であったに違いない。しかし、だからこそ河川を利用した運搬であったのだろう。筏に乗せ、或いは括り付けて寄居町の玉淀を抜てしまえば、後は川幅も増して比較的緩やかな流れとなる。八幡山古墳や伝若王子古墳の天井石は確かに巨大であるが、最も大きなもので長さが約4m、幅は3m程に留まる。殆どの横



片岩の産状（自然史博物館前の水神）
自然の状態でもこのような板状の産状を呈す
場合も多い。



親鼻橋下の緑泥片岩の産状
段丘崖にある良質な緑泥片岩。古墳時代にはこれをブロック状に切り取ったのであろう。

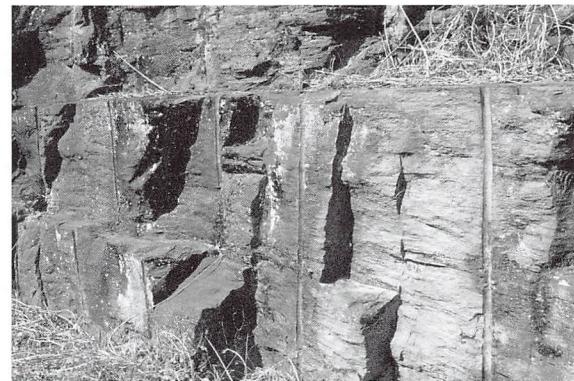
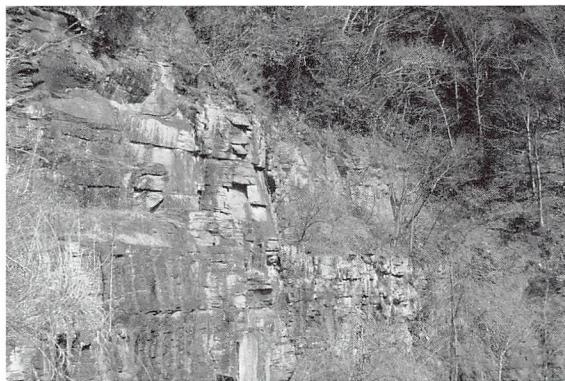
穴式石室部材はこれ以下のサイズであることから、荒川中流の川幅の狭い、急流でも通り抜けるには十分余裕があったものと推察される。

古墳築造に際しての横穴式石室の構築もさることながら、部材となつた緑泥片岩の切り出しは一大事業であったと考えるべきであろう。親鼻橋付近の緑泥片岩の切り出し・加工が箱式石棺の製作段階に始まつたとすれば横穴式石室の構築の最盛期を含め1世紀近くの存続を考えなくてはならない。緑泥片岩の加工は実は極めて効率的に進めることができたが、概形作出と整形には入念な加工が必要とされる。長距離の河川運搬、特に川幅の狭まつた急流部の運搬では完成形に近くまで仕上げて運搬の労力とコストの削減を図らなければならず、現地での加工には特に時間と人手を要したものと推察される。緑泥片岩が古墳石室築造部材として一定の社会的ステータスを有していた点は上記したとおりであるが、ならばその掌握が故にさきたま周辺の豪族が直接に工人集団を原産地へと派遣し、継続的に緑泥片岩の切り出し、加工、運搬を進めていた可能性は十分にある。生産性の極めて低い砂礫層の露出した猫の額ほどの段丘面上に在る金崎古墳群。その見事な石積み技術と特異な立地、そして構築年代からもこれらが眼下の緑泥片岩切り出し、加工に関わる工人集団の墓だった可能性も考慮する必要があろうか。

緑泥片岩は中世に於いては板石塔婆の材料、古墳時代は横穴式石室の部材として、そして縄文時代には石棒、石剣、石皿の材料として極めて広範に流通している。緑泥片岩は長い歴史を通じて埼玉を代表する貴重な資源でもあった訳であり、長らくこの資源活用と流通について考古学的に検討を加えてみたいと考えていたが、今回、やっとその足掛かりを得ることができた。近々、縄文時代の緑泥片岩利用についても研究を進めてみたいと考えている。最後に当館職員の方々、そして埋蔵文化財事業団の大谷徹氏には種々ご教示を得た。深謝。(2010.12.18脱稿、2011.2.1校了)

《註》

- (1) 考古学者や歴史学者は「緑泥片岩」と呼び習わしてきているが、正式な地質学的用語は「緑泥石片岩」である。しかし、これだけ一般化、周知化した名称をいきなり覆すことはできず、ここでもこれまでの慣例に従つて緑泥片岩という名称を用いることとする。なおこの緑泥片岩は三波川変成帯を構成する高圧で低温型の広域変成帯に含まれたもので、我々が片岩類とするなかには原石により碎屑性の堆積岩のもの（黒色片岩、砂質片岩、石英片岩）と塩基性火成岩や火山灰を起源とするもの（緑色片岩、緑色岩、蛇紋岩）とに分けられ、さらに構成鉱物の種類や量によって細かく黒色片岩（石墨片岩、絹雲母片岩）、砂質片岩、石英片岩（赤鉄石英片岩、赤簾片岩、藍閃石片岩）、緑色岩（変ハシレイ岩、変玄武岩、角閃石岩、輝石）に区分されることも多い。
- (2) 因みに径 5 cm、深さ 2 cm 程の典型的な「ポットホール」がどれくらいの時間で作れるか、博物館裏にある緑泥片岩で実験をおこなった。普通の金槌で 40 回程、平坦な面を叩き続ければ 1 ~ 2 分で典型的な形状の「ポットホール」ができる。無論、円礫の側面や角礫の縁を用いても容易に作れる。
- (3) やはり博物館近くの埼玉神社の参道にある石燈籠と鳥居の礎石にも同じ「ポットホール」が観察される（写真参照）。これらは緑泥片岩ではなく凝灰岩、安山岩であり、何れも礎石用に加工された面に深く見事なポットホールが多数形成されている。もはやこれらを「ポットホール」と呼ぶことも、それを河床面成因と理解することもできまい。
- (4) こうした分割行為は、木材などの建築部材では極めて一般的な技術であったと認識され、それは縄文時代から連綿と続くものであった。板材などの獲得で通有なクサビ等を用いた分割技法が古墳時代に至り、石材加工技術に応用された可能性も捨てきれない。何れにしても緑泥片岩の加工技術は本文中でも述べるが、かなり特化した内容を持つ点は留意すべきである。
- (5) 群馬県の三波川で確認した石切場では、緑泥片岩を切り出す場合に片理（石の目）方向に直交する穴を数カ所穿った後、石の目に沿ってクサビを打ち込んで石材を岩体から効率的に剝離していた（写真参照）。こうした手法は岩の構造に即した加工（切り出し）方法は不变であったと考えられる。小川町教育委員会には同下里で用いられていた緑泥片岩の切り出し、加工に関する道具一式（金槌、ノミ、ヤ、タガネ等）が保管されており、どのように緑泥片岩を切り出し、加工したかを知るうえでとても興味深い資料となっている。



上：埼玉神社参道と鳥居礎石（安山岩）に見られる「ポットホール」

下：群馬県鬼石町の緑泥片岩採掘場跡と採掘痕（縦方向に穴を穿った後に片理面側から剥ぎ取る）

- (6) 小見真觀寺の第1石室は巨大な緑泥片岩を用いた複式構造の横穴式石室である。2回に亘って観察をおこなったところ玄室（左）と前室（右）のそれぞれの側壁に用いられた緑泥片岩は極めて類似しており、またそれぞれの天井石についても酷似していた。確証を得るには至らなかったが、穴八幡古墳例と同様な工法が用いられた可能性は捨てきれない。
- (7) 古墳時代の横穴式石室に用いられた石材鑑定については再検証が不可欠と感じる。本論で緑泥片岩を取りあげた意図もそのような点にあり、他にも凝灰岩や房州石等についてもより詳細な現地踏査を通じた産状の観察、切り出し地点の特定など地道な研究が必要であろう。
- (8) このように古墳単位ではなく、横穴式石室の部材を単位に相違した緑泥片岩が使用されている事実は興味深い。八幡山古墳の現存する天井石は同じ産地で岩体を同じくしていると考えられる程に酷似しているが、床面等に用いられているものとは明らかに相違する。若王子古墳の天井石から類推するまでもなく、良質で典型的な緑泥片岩（3×4m程の規格）の切り出しは十分に可能だった筈である。しかも後述するようにこの天井石は産地が別の地点にあり、同じ古墳の横穴式石室部材でありながら、切り出し地点を違えていた可能性がたかいと考えられる。或いは石工集団の編成や帰属の違いを反映しているのであろうか。
- (9) 中流域の更新世末期から完新世に形成された段丘面（野上面）は、荒川からの比高差が平均して10m程ある。この野上面には縄文時代から古墳、奈良・平安時代の遺跡が点在し、現在の市街地もこの段丘面上に形成されている。古墳時代の荒川の流路もさほど大きくは変わっていないと考える所以である。
- (10) この地点に見られる緑泥片岩には、1) 褶曲軸が片理上に反映して細かなスジ模様を描いている、2) その片理面に絹雲母などの結晶が見られる、といった特徴が観察される。今後は周囲の踏査も含めて詳細な比較を進めてみたい。

《参考文献》

- 小川町教育委員会 1999 『小川町の自然（地質編）』
- 埼玉県教育委員会 1980 『埼玉県指定史跡 八幡山古墳石室復原報告書』
- 埼玉県 1987 『荒川 自然－荒川総合調査報告書－』
- 埼玉県農林部林務課 1999 『埼玉県地質図（山地・丘陵地）解説書』
- 長瀬町教育委員会 1997 「第1章 地質」「長瀬の自然」
- 高橋一夫・田中広明・水口由紀子 1999 「古墳時代の遺跡 穴八幡子墳」『小川町の歴史 考古』
- 田中広明・大谷 徹 1989 「東国における後・終末期古墳の基礎的研究（一）」『研究紀要』5 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中 広明 1989 「緑泥片岩を運んだ道－変容する在地首長層と労働差発権－」『土曜考古』14号
- 塙野 博 2004 『埼玉の古墳 [比企・秩父]』(株)さきたま出版会
- 塙野 博 2004 『埼玉の古墳 [北埼玉・南埼玉・北葛飾]』(株)さきたま出版会
- 堀口 万吉 1986 「埼玉の地形と地質」『新編 埼玉県史』別編3 自然

平成21年度 埼玉古墳群周辺の確認調査報告

佐藤 康二

はじめに

さきたま史跡の博物館では、埼玉古墳群の範囲を確定し指定範囲の拡大を検討するための基礎資料を得るために、行田市教育委員会の協力のもと、平成19、20年度に「埼玉古墳群範囲確認調査」を実施した。微地形の確認、古墳所在の伝承がある地点の調査、將軍山古墳の周堀の位置の確認等の成果があった（西口2009、西口・佐藤2010）。

平成21年度からは、埼玉古墳群と周辺遺跡群との関係を解明し、今後の史跡整備及び調査・研究の基礎資料を得るために、周辺遺跡の分布や立地・地形などの調査を目的とした「埼玉古墳群周辺確認調査」を開始した。平成21年度は埼玉古墳群の南西側の水田域を集中して調査した。ここは塚もしくは古墳の所在の記録が残る箇所である。

調査箇所の選定について

今回の調査対象地である渡柳字陣場地区の古墳の記録については、詳細に検討し、その位置を推定している（杉崎2006）とおり、文献、迅速測図、地籍図等に記載が認められる。隣接地点は平成19年度に調査したが、遺構、遺物は検出されていない。古墳跡の痕跡が果たして残っているのか、削平により全く消滅したのか。「埼玉古墳群周辺確認調査」はそれら遺構の所在する可能性が高い箇所を優先することに決定した。なお、この調査箇所の選定については、考古学の専門家、地元有識者などで構成する史跡埼玉古墳群保存整備協議会に諮り、平成21年7月3日に承任された。

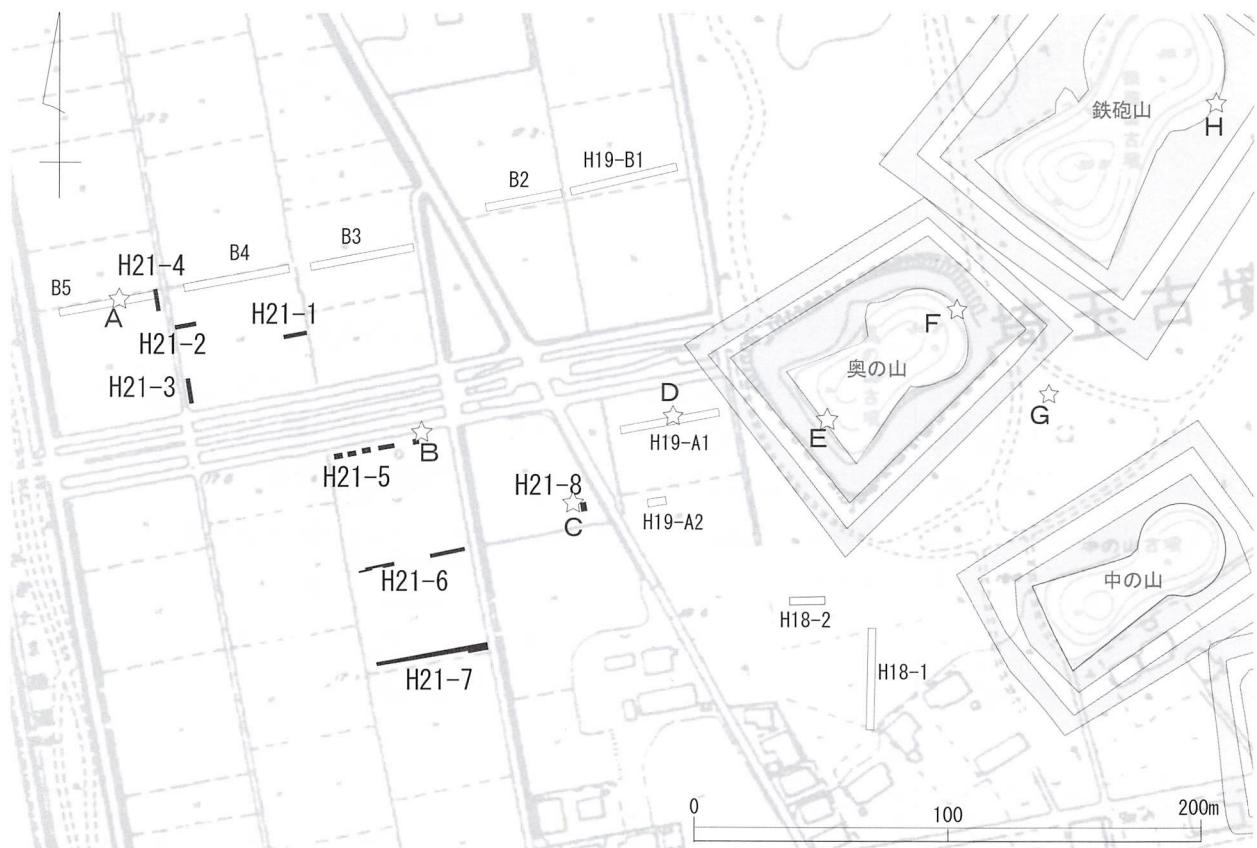
平成21年度周辺確認調査

平成21年7月22日と平成22年2月23～26日及び3月1日の計6日間で計8地点の調査を実施した。調査はいずれも人力により表土掘削を行い、遺構の有無及び地形確認、記録写真撮影、断面図作成、人力による埋め戻しを行った。なおトレンチ平面図等は専門業者に委託してGPSデータ計測により測定した。なお、第5トレンチは土地所有者の承諾を得て、それ以外の調査箇所は県有地のため管理する行田県土整備事務所の承諾を得て調査を実施した。

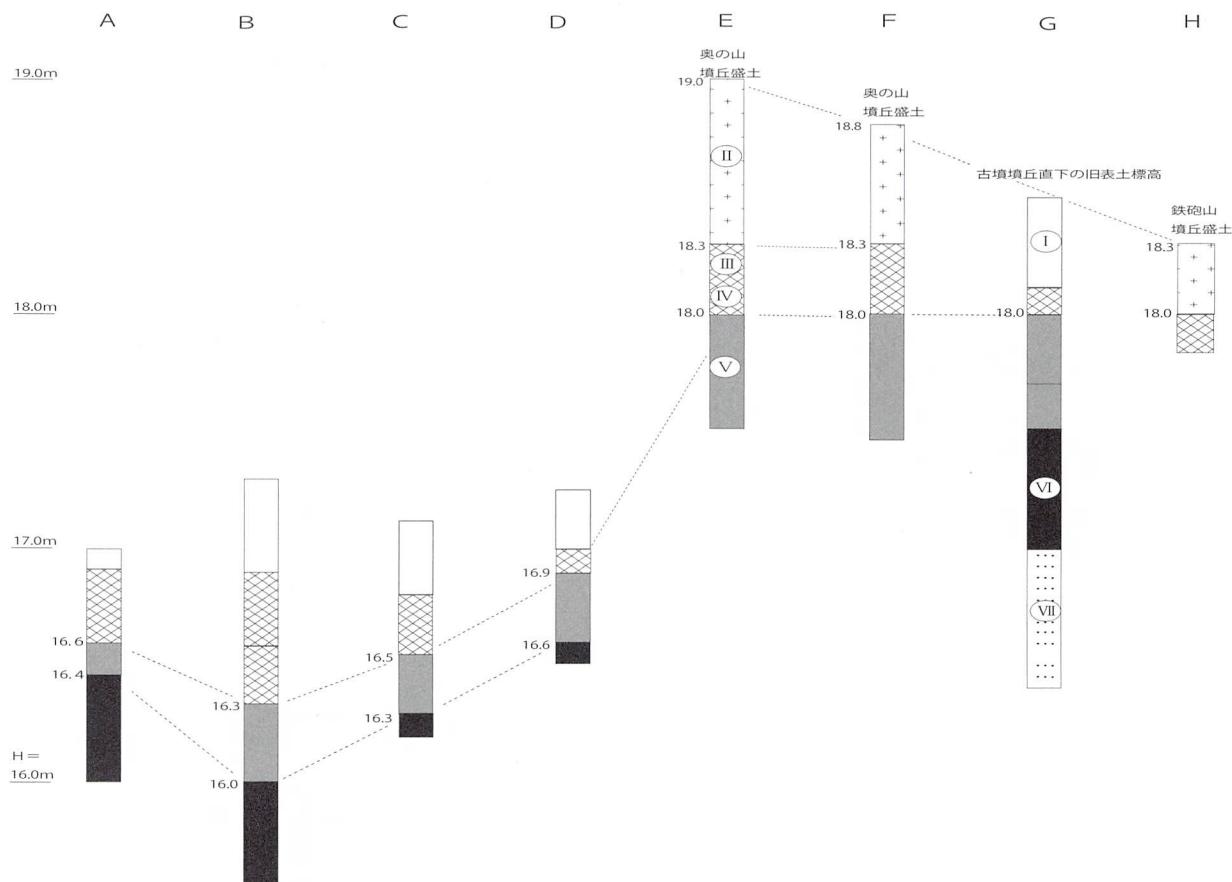
第1トレンチはさきたま緑道の北側約20m、平成19年度B4トレンチ南側20mの位置に設定した。推定「古墳跡ホ」に該当する位置である。長さ8m、幅1mのトレンチを設定した。厚さ30cmの表土直下がローム層であった。ロームはいわゆる水浸ロームで暗黄褐色を呈し、確認範囲では平坦であった。その下層は褐色土となる。遺構、遺物は検出されなかった。

第2トレンチは推定「古墳跡ヘ」に該当する位置である。長さ9m、幅1mのトレンチを設定した。厚さ20cmの表土直下がローム層であった。遺構、遺物は検出されなかった。

第3トレンチは推定「古墳跡ニ」に該当する位置にある。長さ7m、幅1mのトレンチを設定した。第2トレンチの南約20mと至近にあるものの、地表下30cmで検出したローム確認面は北端35cm、南端70cmと南側へ傾斜することが判明した。また1層耕作土とローム面の間に軟質の黒褐色土層が



第1図 周辺確認調査 位置図



第2図 周辺の基本層序柱状図

層厚約20cmで堆積していた。遺構、遺物は検出されなかった。

第4トレンチは推定「古墳跡ト」に該当する位置にある。層序等の整合性のため、北端で平成19年度トレンチと重複させた。南側約半分は地表下20cmでローム面が検出されたが、北側は平成19年度B4トレンチ西端でも検出された細砂質土及び鉄分を多く含むオレンジ色の砂質土がロームを垂直に切り込むように検出された。またその中に木杭が1本残存していた。『史蹟埼玉』(高木1936)所収の「埼玉村全図」には無名塚西側に接するように走る細い水路が描かれていることからも、近・現代の水路跡と考えられる。

第5トレンチは推定「古墳跡ハ」に該当する。一筆の地割だが、西側半分の標高が高く、畠として利用されている。土地所有者から平成になってからの盛土であることを御教示頂いた。5ヶ所の壺堀を実施したところ、盛土されていない東側3ヶ所では現地表下20~30cmでソフトローム層、以下ハードローム層、暗褐色土層、黒褐色土層が確認された。黒褐色土は腐植質で縦縞状の植物痕に入る。盛土部分は約80cmの客土直下が暗褐色土層であった。いずれからも遺構、遺物は検出されなかった。

第6トレンチは「古墳跡口」に該当する。東側長さ13m、西側長さ15mのトレンチを設定した。表土下約25cmでローム面が検出されたが、西側で傾斜し、西端は表土下60cmであった。東側で1ヶ所、西側で1ヶ所トレンチにほぼ直行する溝跡が検出された。いずれも幅約1m、深度約10cm。表土(水田土)直下から掘り込まれていたが、覆土は崩壊ロームブロックを含む軟質の黒色土で近・現代の所産と考えられる。

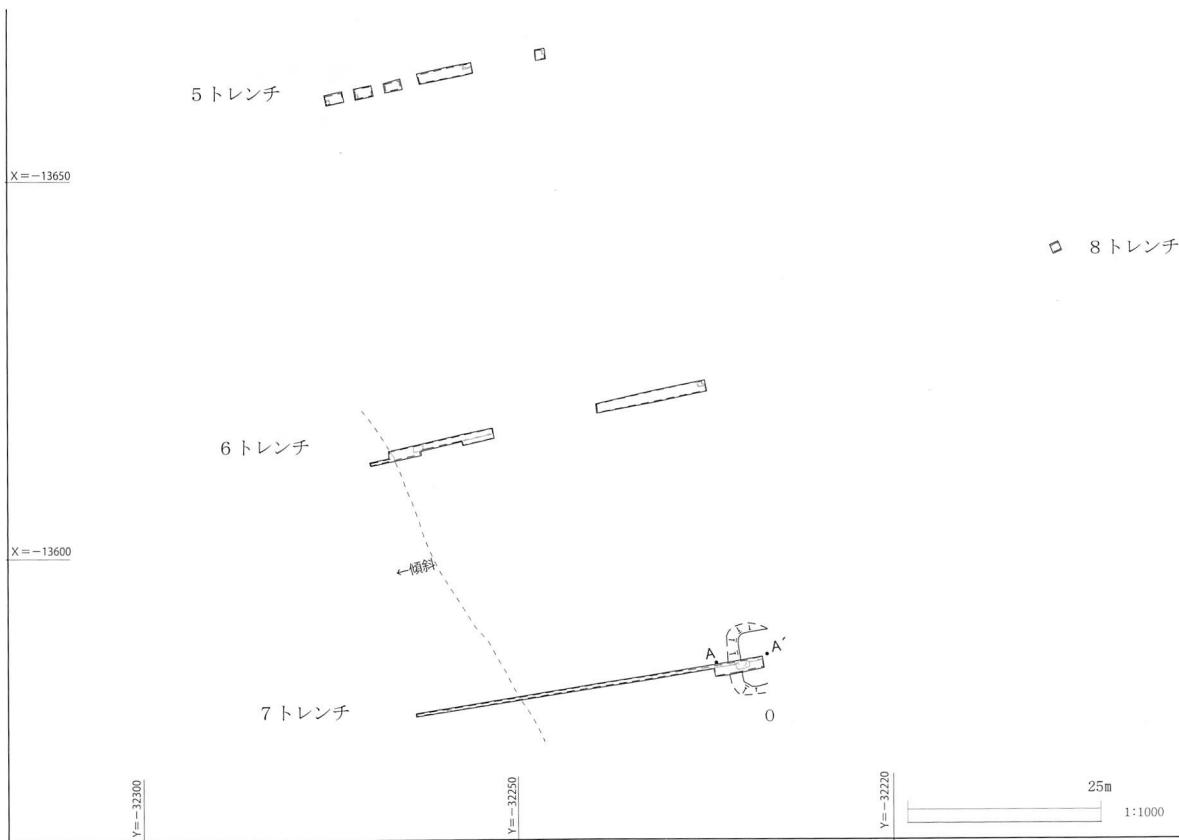
第7トレンチは推定「古墳跡イ」に該当する。現況は行田市道(未舗装)から一段低い水田に向かい張り出す方台状の高まりである。また隣接する未舗装の市道も、その高まりに一致し、わずかに地膨れが認められる。方台状の高まりの中央にトレンチを設定し調査を行った。第4図のとおり現地表下はII、III層が漸移層、IV層以下がローム層であった。ただし周辺の調査で判明した層序との色調、含有物からの対比は困難である。あえて色調の明暗で対比させるならば、IV層=ソフト化が進行したローム層、V層=黒色帶となる。そうであれば第2図のB地点、C地点の黄褐色のローム下の暗褐色土のレベルと概ね一致する。なおV、VI層は極めて硬緻である。したがって方台状の高まりは人為的な盛土ではなく、水田造成の際の地山の削り残しと考える。第I層から第5図の壺形土器片が出土した。器面は摩耗しているが、外面に赤彩が認められる。時期は概ね古墳時代前期と推定する。

高まり以外の現水田内では、表土下20cmでV層ローム面となるが、ほぼ中央以西で緩やかに傾斜することが判明した。この落ち込みの肩は第6トレンチ西端と対応すると思われる。ただし、ローム層の上には水性堆積層は検出されなかった。なお第6トレンチで検出された近・現代溝跡と同一と考えられる溝が検出された。

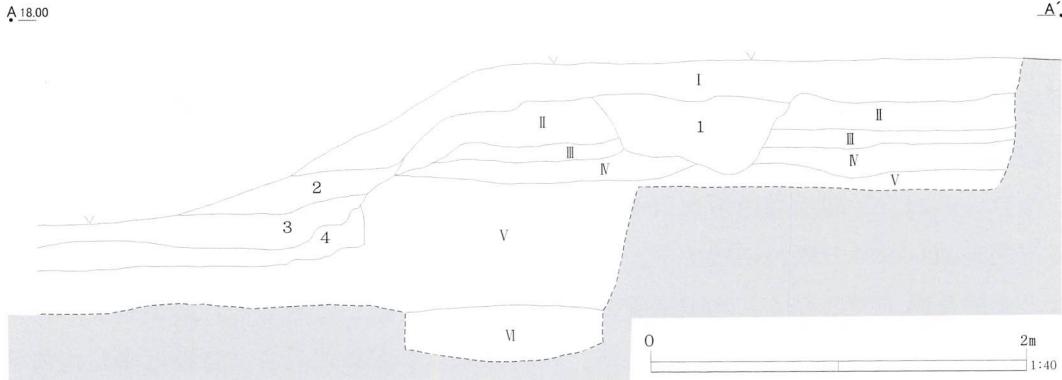
第8トレンチは古墳跡所在推定箇所から離れるが、旧地形を把握するために設定した。地表下30cmで良好なローム面を検出した。

周辺の基本層序について

第2図は平成19、21年度の確認調査及び鉄砲山古墳、奥の山古墳の調査成果⁽¹⁾を元に作図した周辺の基本層序である。テフラ(AT火山灰)分析等実施していないため黒色帶については、正確な対



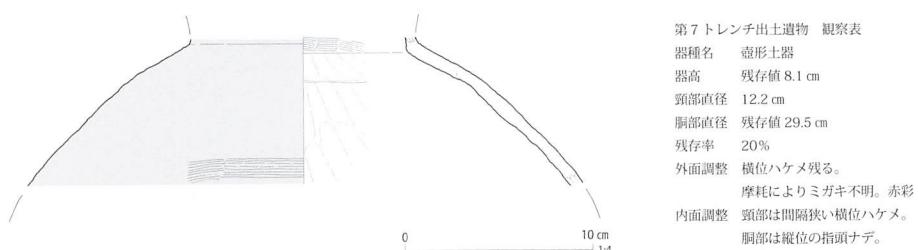
第3図 第5～8トレンチ 平面図



第7トレンチ（高まり） 土層誌

1 暗褐色土 (7.5YR3/3)	擾乱。I層土に崩壊ロームブロック多量含む。	I 暗褐色土 (7.5YR3/3)	表土。根攪乱顆粒著
2 黄灰色土 (2.5 Y5/1)	現代水田関係土。暗褐色土ブロック少量含む。	II 暗褐色土 (7.5YR3/4)	微量のローム粒子含む。
3 暗灰黃土 (2.5 Y5/2)	現代水田関係土。暗褐色土ブロック多量含む。	III 暗褐色土 (7.5YR4/1)	部分的にブロック状に鉄分付着。ローム粒子微量含む。
4 灰色シルト (10 Y5/1)	水田耕作土。	IV 明黄褐色土 (10YR6/6)	ローム層だが土質不均一。鉄分が植物根状に入る。
		V 暗褐色土 (7.0YR4/4)	ローム層、鉄分による酸化著で植物根状の縦方向の混入多し。
		VI 橙色土 (7.5YR6/6)	ローム層。極めて硬い。

第4図 第7トレンチ 断面図（部分）



第5図 第7トレンチ 出土遺物

比はできないが、I層客土、II層古墳時代表土層、III層ソフトローム、IV層黄褐色ハードローム(III、IV層が分離できない箇所あり)、V層暗褐色（もしくは灰褐色）、VI層黒褐色（もしくはV層より色調暗い暗褐色）である。V、VI層が黒色帶となるがATとの関係等は今後の課題である。ただし各トレンチの層序は色調の変化に整合性がある。V層は奥の山西側の現水田地帯で約1m急激に低くなり、B地点で最深となり武藏水路に向かい再び上昇する。なお平成19年度のBトレンチの調査所見はIV層、VI層ともB2東側が最深となり、西に向かい上がっていき、B4西端からB5にかけては表土直下で良好なローム層が検出されており矛盾はない。したがって埼玉古墳群と武藏水路の間の水田地帯は凹凸があるものの埼玉古墳群ののる台地と同様の層序をなす（埋没）ローム台地であることが再確認された。なお墳丘直下の古墳時代地面のレベルからは、西から東に向かって緩やかに下がることも判明している。

調査のまとめと今後の課題

以上、調査の結果、古墳や塚等に関連する遺構、遺物は検出されなかった。至近の奥の山古墳では第1図E地点の内堀底面は標高17.6mであり古墳時代地面から1.4m掘り込み、概ねV層の下位が底面となる。大雑把に計算すると今回調査した水田域もIII層上にII層古墳時代表土層が同程度（50～70cm）堆積していれば、概ね古墳時代表土から1m以上、言い換えるとV層土を掘削する深度の遺構は遺存する可能性があった。

埼玉古墳群の梅塚古墳等の小円墳跡の場合、周堀底面の標高は概ね16.8m前後である。隣接する丸墓山古墳で検出された古墳時代旧表土標高18.3mから1.5mの掘削がされた計算になる。したがって今回の限られた範囲の調査で断言することはできないが、迅速図、公図等で示された高まりは古墳ではなく、周堀を伴わない塚の可能性が高くなったと言える。

埼玉古墳群周辺の地形把握については、行田市教育委員会の周辺の確認調査データも隨時ご提供頂きながら、ロームの有無、谷地形等を図面上に落としているが、隣接地であっても状況が異なる箇所が多い。周辺の地形把握は途についたばかりである。より微細な地形を把握するには地質学的な土壤分析、あるいは理化学的な年代測定等が必要であろう。

《註》

- (1) 平成24年度報告書刊行予定

《引用・参考文献》

西口 正純 2009 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第3号 埼玉県立さきたま史跡の博物館

西口正純・佐藤康二 2010 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第4号 埼玉県立さきたま史跡の博物館

高木豊三郎 1936 『史蹟埼玉』埼玉村教育委員会

杉崎 茂樹 2006 「埼玉古墳群陣場地区所在古墳についての覚書」『調査研究報告』第19号 埼玉県立さきたま資料館



第 6 図 確認調査位置図



H21-1 トレンチ



H21-2 トレンチ



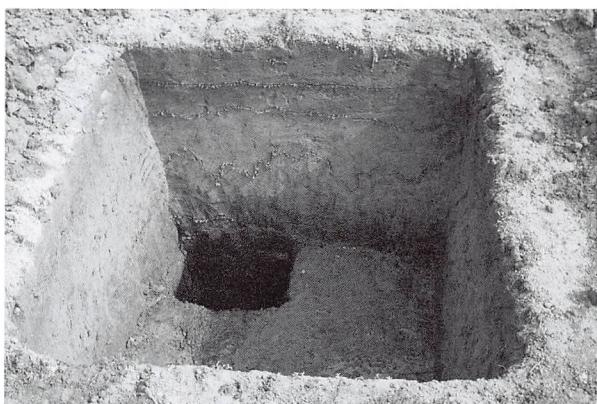
H21-3 トレンチ



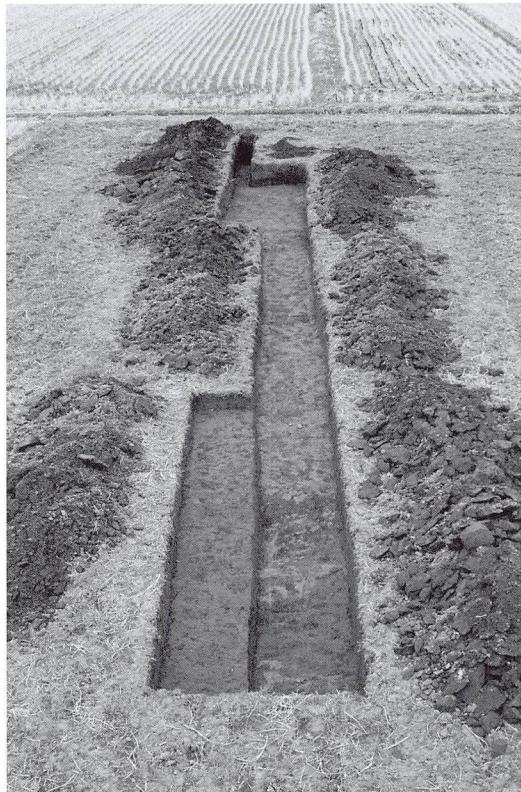
H21-4 トレンチ



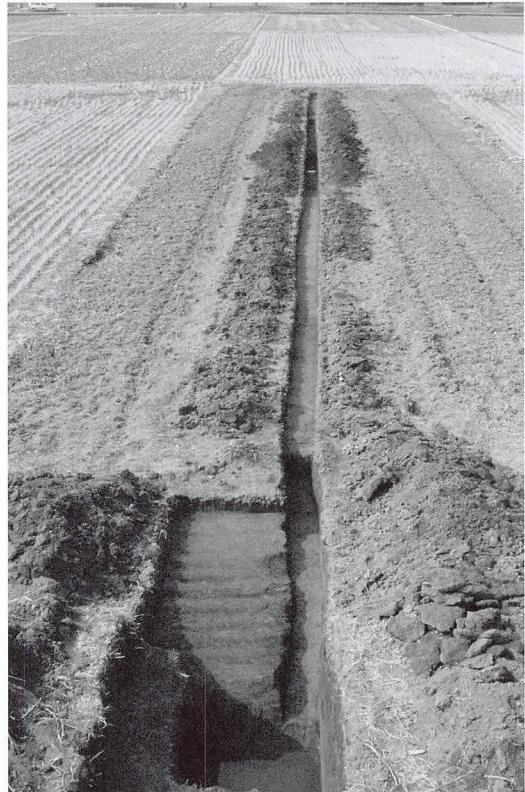
H21-5 トレンチ



H21-5-1 トレンチ



H21- 6 トレンチ（西側）



H21- 7 トレンチ



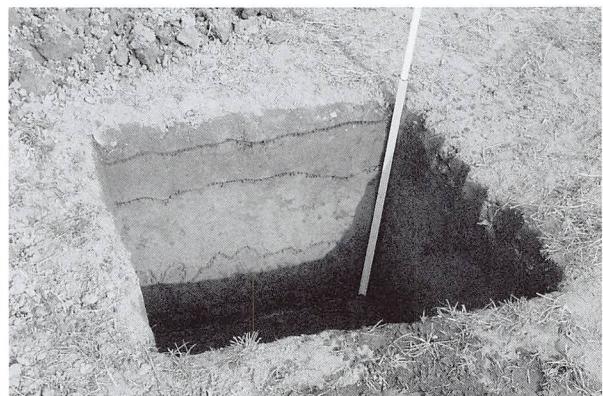
H21- 7 トレンチ方台状の高まり（調査前）



H21- 7 トレンチ方台状の高まり断面（1）



H21- 7 トレンチ方台状の高まり断面（2）



H21- 8 トレンチ

鉄砲山古墳の中地レーダ探査実験について

佐藤源之*・横田裕也**・西口正純・末木啓介

*東北大学東北アジア研究センター長

**東北大学東北アジア研究センター

はじめに

埼玉古墳群における地中レーダ探査は、昭和57年に丸墓山古墳と稻荷山古墳、平成10年に稻荷山古墳の墳頂部で、探査を行っている。結果については、良好な結果を得ることはできなかったことと業者の試験的な探査で行われたという事もあり、十分な検討はできず報告が内部資料として残されている。その後この2回のレーダ探査に立ち会った小川は、稻荷山古墳には、五つの埋葬施設が存在する可能性があると推測している（小川2003）。

埼玉古墳群で埋葬施設の調査が行われているのは、稻荷山古墳と將軍山古墳の2基であり、その他中の山古墳については伝承で、横穴式石室であろうと予想されている。稻荷山古墳については、第三の埋葬施設の存在が論議されていることから、平成18年度に策定した『史跡埼玉古墳群保存整備基本計画』の中で、2基以外の埋葬施設確認調査の必要性が盛り込まれている。その他の古墳については、史跡であることから埋葬施設の発掘調査には慎重であらねばならず、現状では発掘調査を行える状況にはない。そんな中で、平成21年3月に、東北大学東北アジア研究センターの全面的な協力で、「史跡埼玉古墳群の中地レーダ探査実験に関する共同研究」として奥の山古墳後円部墳頂において、墳丘を非破壊で行う従来のレーダ探査システムと精密な位置計測システムを組み合わせた3DGPRシステムで計測を行うことができた。

その結果、幅50cm、長さ2mの物体が2地点で検出されるなどの成果を上げることができ、データを検討した博物館の考古学的な評価として、未盗掘の箱式石棺であることが考えられるとした見解を出している（佐藤・井上2010）。今年度も前回に引き続き、東北大学東北アジア研究センターの協力により、整備が鉄砲山古墳に移行することとなったため、同古墳でレーダ探査を行うことになった。

また、探査地点は、鉄砲山古墳墳頂部とレーダ探査の結果と発掘調査の結果を比較できる地点を選んではどうかとの「史跡埼玉古墳群保存整備協議会」で意見があったことを受けて、今年度調査を行う前方部南東コーナーで行うこととした。

1 鉄砲山古墳の現状

鉄砲山古墳は、埼玉古墳群の中では、二子山古墳、稻荷山古墳に次ぐ3番目に大きな前方後円墳で、墳丘長109mである。南にある奥の山古墳に外堀が検出されたことで、整備事業が鉄砲山古墳の南側に及び、整備完成標高に段差が生じてしまうため「史跡埼玉古墳群保存整備協議会」で承認を得て、鉄砲山古墳の整備に取り掛かることとなった。鉄砲山古墳は、昭和54・58年に調査が行われ、

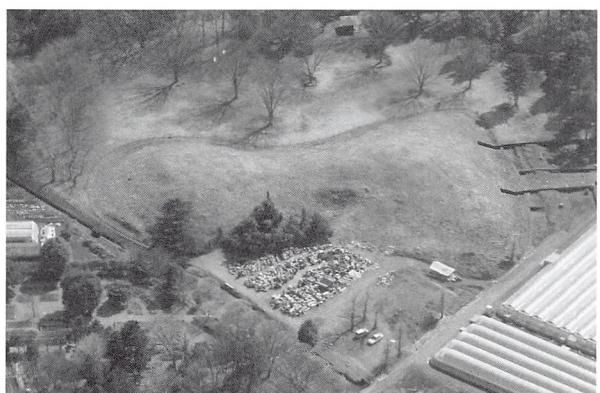


図1 鉄砲山古墳全景

古墳の東側・西側に二重周堀が存在することが知られている。さらに平成19・20年に行った奥の山古墳との関係を見るための調査では、周堀どうしの重複関係は確認されなかったが、鉄砲山古墳の中堤・内堀・外堀は奥の山古墳を避けたためか、古墳の東西で確認された中堤内・外堀に比べて幅が狭い設計となっている。

墳丘は、西側の括れ部付近が土取りされたよう
に抉れているほかは、墳形は比較的良く残ってい
る。一方後円部墳頂よりやや下がった部分には、
数箇所の窪地が認められることから、盗掘を受け
ている可能性が考えられる。

今回探査を実施した箇所は、前方部南東コ
ーナー部と墳頂部の2ヶ所である(図4)。

2 GPR計測と結果

地中レーダ(Ground Penetrating Radar:以下GPRと略す)は5m程度までの比較的浅い地層中を、短時間のデータ取得で高分解能に地下構造の可視化が可能な計測手法として遺跡調査にも応用が広がりつつある。GPRは電波の反射から地中構造を推定するが、電波が土壤中を伝搬するとき、主として水分によって減衰を受けるため検知深度には限界がある。一方、土壤の湿り具合や、土質変化による不均質性と、土壤に含まれる礫のような物体による電波の散乱により、可視化される物体の形状や位置には誤差を生じる。特に、細い物体や物体の隅の形状が明瞭に捉えきれない場合が多く見られる。また通常のGPR計測では装置に取り付けた車輪の回転から移動距離を計測するため、平坦な地表面以外での計測が難しい。例えば古墳の墳丘部のような傾斜面でのGPR計測は以上のような理由から、ほとんど成功例が見られない。

こうした問題を解決する手法が3DGPRである。東北大学とマイアミ大学は共同で3DGPR手法の開発を行い、各種の精密なGPR計測への応用を試みてきた。3DGPRは、GPR装置にレーザ位置計測システムを併用することで、GPRアンテナの位置を数mmの精度で計測し、これにより起伏がある地表面でも鮮明なレーダ画像を得る事を可能とするシステムである。我々は、2009年度に奥の山古墳頂上部で3DGPRを適用することでその実用性を示すことができた。

今回計測に使用した機材は、ほぼ昨年(2009)
の奥の山古墳と同一であるが、3種類の周波数の



図2 鉄砲山古墳括れ部現況



図3 鉄砲山古後円部墳頂現況

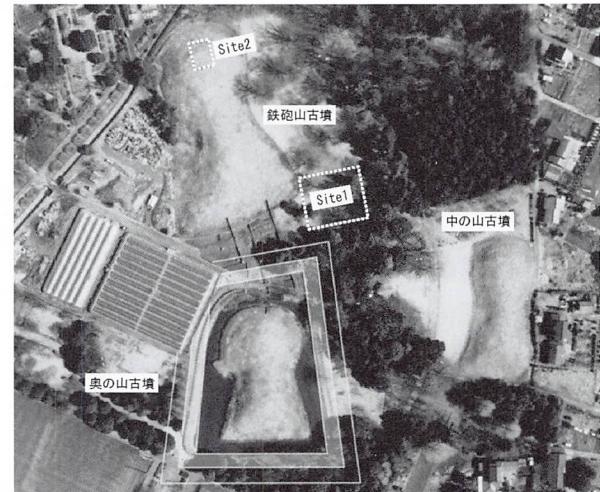


図4 計測地点
前方部南東コーナー部(Site 1)と墳頂部(Site 2)

GPR アンテナを利用し、結果を比較した。GPR に使用する電波の地中での減衰は周波数が高いほど強いため、深部計測が難しい。しかし周波数を下げるに周波数帯域が狭くなるため、分解能が低下するので小さい対象物に対する焦点がぼけるような現象を避けられない。つまり GPR 計測では計測深度と計測分解能が周波数に対して相反する要素となっている。従って GPR 計測を行う上で、周波数の選択は計測対象物とその深度から慎重に選定する必要がある。

(1) 前方部南東コーナー部

本サイトは土壤が湿潤であること、また周堀遺構が深さ数mに及ぶことが予想されたため、100 MHz のアンテナを使用して計測を行った。図 6 に計測した代表的な GPR プロファイル（垂直断面図）を示す。地中に水平的な地層の境界面や、孤立した反射体が存在するとき、電波はその縁端部で回折されるため、GPR プロファイルでは図中に矢印で示す双曲線として現れる。双曲線の頂点を水平面上で結べば、反射を起こす物体の形状が確認できる。現場では GPR プロファイルを直ちに確認し、異常体の見られる地点にペグを打ちながら、異常体の連続して現れる方向を予想しながら計測を進めた。図 7 に GPR 計測から得られた推定反射体の構造を示す。

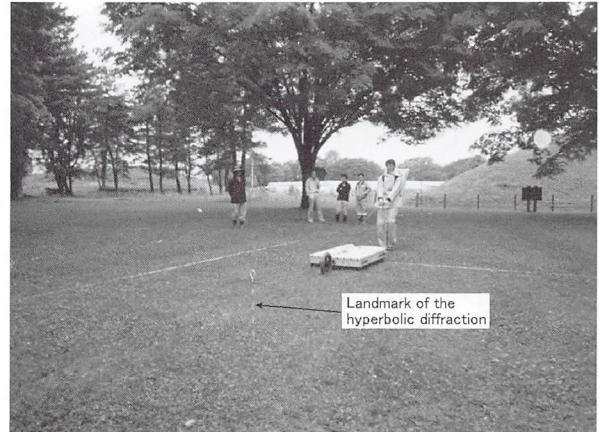


図 5 前方部南東コーナー部

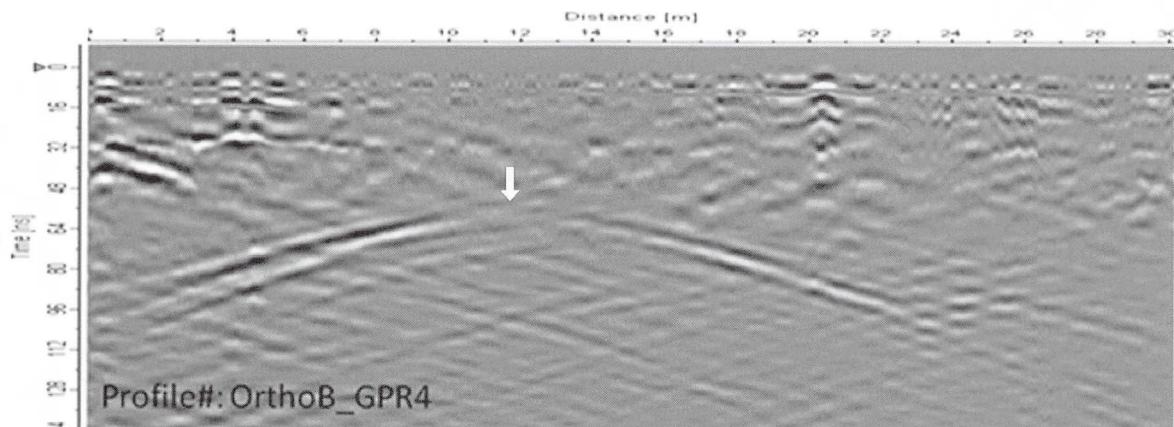


図 6 前方部南東コーナー部での GPR プロファイルの一例

矢印に双曲線頂点を示す。

横軸：距離 縦軸：時間（深度に対応）

(2) 墳頂部

墳頂部の計測は比較的平坦な区域を選んだが周端部は常に斜面にかかっていた。計測は100MHz、250MHz、500MHz のアンテナを利用したが、異なるアンテナによる計測でも同じ位置に異常体が見られており、明確に地下埋設構造の存在を示している。

図 8 に250MHz で計測した垂直断面図を示す。本図では深度約 6 mまでの範囲を示している。深度約 2 m と 4 m に、明瞭な双曲線状の反射波が捉えられている。

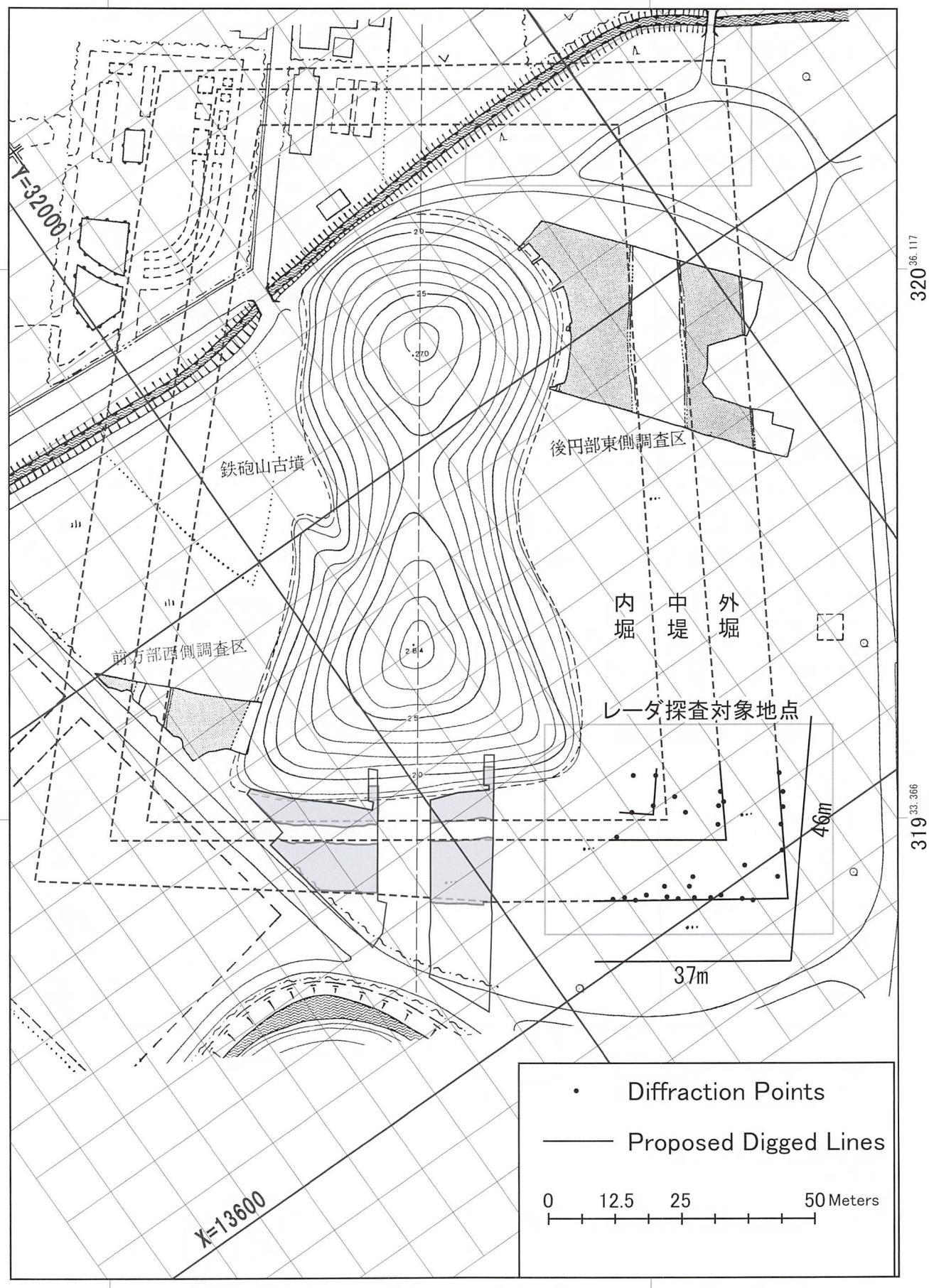


図7 GPR 計測から推定される反射体構造
点が双曲線の頂点位置を示す

図9に250MHzで3DGPRにより得られた水平断面図を示す。深度2.52mでは細長い形状の物体が確認できるのに対して深度3.93mでは1m四方程度の大きさを持つ物体が数個存在するようにも見える。

図10に、3DGPRで得られた信号にマイグレーション処理を施して得られた水平断面図を示す。マイグレーションは電磁波の回折効果を相殺し、本来の地下構造をより正確に再現するために利用される。

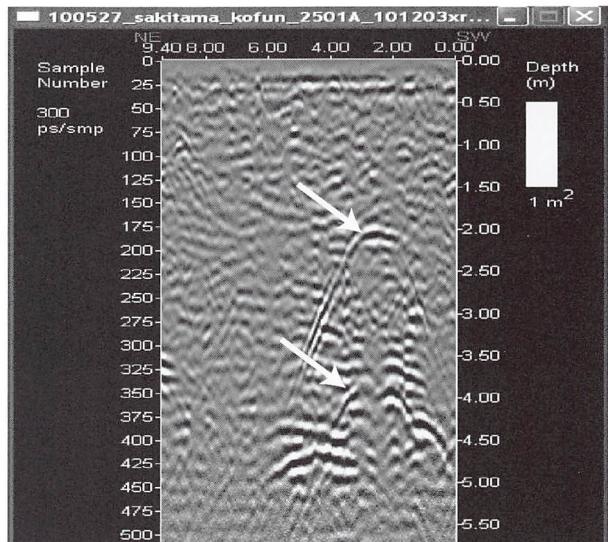


図8 墳頂部の垂直断面 (250MHz)

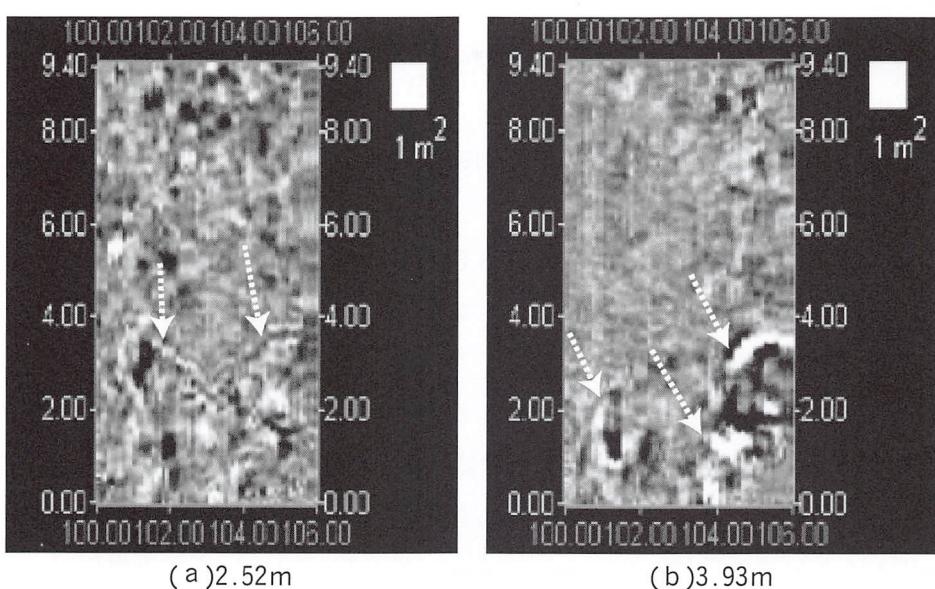


図9 3 DGPRによる墳頂部の水平断面 (250MHz)

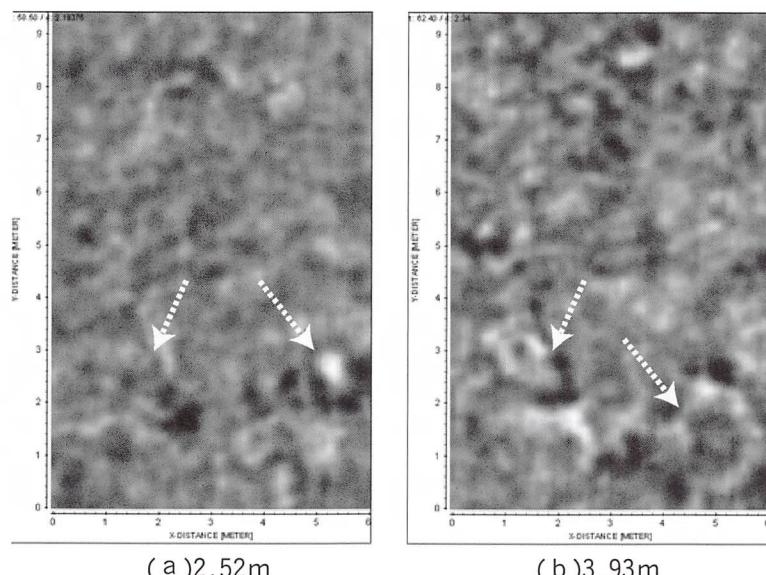


図10 マイグレーション処理後の墳頂部の水平断面 (250MHz)

3 計測結果の考古学的知見

前方部南東コーナー周堀部分のレーダ探査範囲（図7）は、今年度発掘調査の対象となっている箇所であり、レーダ探査と発掘調査の成果を比較検討することが可能となった。

鉄砲山古墳の周堀については、昭和54・58年度、平成20年度に発掘調査が行われており、図7に示したように復原プランが想定されている。

なお、鉄砲山古墳の周堀底の標高は昭和58年度調査によると約17.3m、平成20年度の調査によると約17.2mである。また、探査範囲を含め鉄砲山古墳周辺は、昭和40年代の公園整備により、現地表から50cmほどの深さまでは客土である。

今年度の発掘調査はレーダ探査終了後の7月6日から開始した。外堀、中堤、内堀の位置関係を把握するため、東西方向、南北方向に細長いトレンチを設定したほか、外堀と内堀のコーナーが想定される箇所にもトレンチを設定した（図11）。

レーダ探査結果によると特に外堀推定プランに対応する双曲線の頂点が地表から1m付近で検出されている（図6）。今年度の発掘調査の知見では、地表下1m前後でローム層となることから、ローム層に掘りこまれている遺構等に反応したものと考えられる。しかし、外堀の検出が予想された第1・2・3・4トレンチでは、ローム層検出面（標高約17.1m）まで近世以降の耕作、特に昭和初期の耕地整理などが及んでいて、外堀プランは検出できなかった。わずかに第1・2・4トレンチで外堀の覆土が検出され第2・4トレンチでは覆土内から埴輪がまとまって出土している。

双曲線の頂点は推定外堀プランに沿うようにプロットされている（図7）。第3・4トレンチでは、この部分でローム層を掘りこむ近代の耕作に伴う溝が検出され、地表下1mを越えると湧水する。レーダは土中の水分率の変化点に反応するという特性があることから、この溝をとらえたものと思われる（図11）。

また、内堀は第1・5トレンチで確認できたが、中堤側は内堀の肩を破壊するように近世の溝が並行して走っている。レーダ探査によるとこの部分でも双曲線の頂点が見られたが、これはこの溝に反応した可能性がある（図7、11）。

後円部墳頂部の探査では、墳頂より深度2mと4m付近で反応があった。深度2m付近の反応は、長さ約2～3mの棒状の反応でその周囲には構造物等の反応は無く、単体で埋まっているようである。材質は不明であり、遺構らしき反応も認められないことから埋葬物あるいは、副葬品との判断はできない。

深度4m付近では、大な石状の物体が同じ深さで4・5個ばらばらに反応している。これらは、

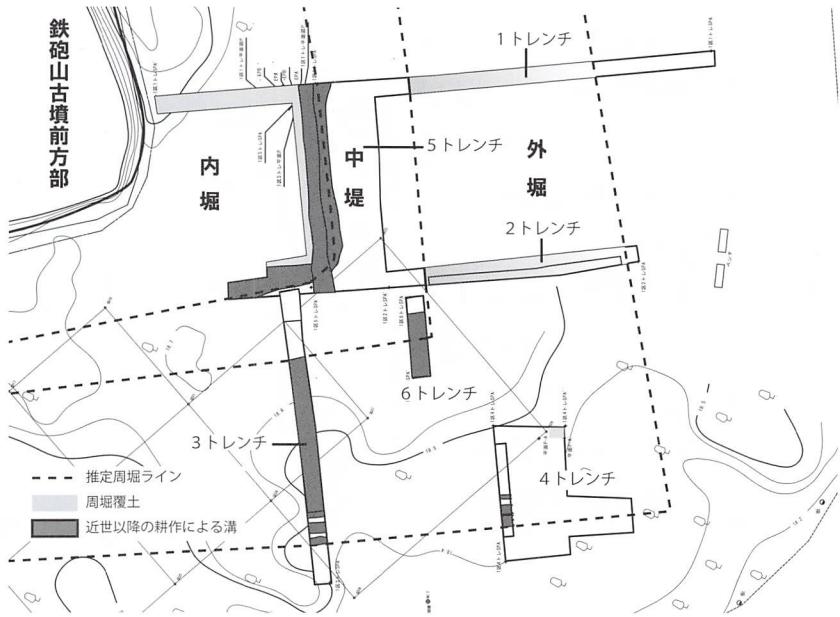


図11 前方部南東コーナー全体図

連續はせず単体で反応している。なお、四隅が反応する場合もあるという事であったが、現状では情報量が少なく構造物とは判断できない。

鉄砲山古墳の埋葬施設形態については、鉄砲山古墳に隣接して近い時期とされる瓦塚古墳において、横穴式石室の開口が予想される後円部墳丘東側が、かなり削平されていたにもかかわらず、石材の痕跡が見当たらないことから、鉄砲山古墳についても主体部は竪穴系の埋葬施設で、いまだ横穴式石室を採用していない可能性があると指摘がある(増田1995)。また、一方では横穴式石室であろうとする考えもあり、現状では判断が付いていない。

今回の探査では、墳頂下4mまでは均質な土で墳丘が構築されていることがわかり、奥の山古墳で見られたような反応は確認されていない。しかし4m付近では、比較的大きな物体の反応を得ていることから、埋葬施設の一部をかすっている可能性は否定できない。

謝辞

本研究は科学研究費補助金基盤研究(S)18106008ならびにJST戦略的国際科学技術協力推進事業(日米研究交流)「地中レーダ(GPR)による高精度地下3次元可視化」によるものである。
3DGPR信号処理は佐藤研究室 Ahmed Gaberによるものである。

《引用・参考文献》

小川 良祐 2003 『ワカタケル大王とその時代』山川出版社

佐藤源之・井上尚明 2009 「奥の山古墳の地中レーダ探査実験について」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第4号

増田 逸朗 1995 「北武藏における初期横穴式石室導入期の様相」『調査研究報告』第8号



鉄砲山古墳南東コーナー（レーダ探査箇所）

日誌抄

1 期 間 平成22年5月25日～28日

2 メンバー 東北大学東北アジア研究センター

佐藤源之・横田裕也・松本正芳・Ahmed Gaber

埼玉県立さきたま史跡の博物館

西口正純・末木啓介・佐藤康二

3 日 程 5月25日（午後）：鉄砲山古墳前方部南東コーナーで計測範囲の確認。

5月26日（終日）：鉄砲山古墳前方部南東コーナーでレーダ探査実験を行うが、途中
雨で中断。NHKの撮影取材があったが、撮影はできなかった。

5月27日（終日）：鉄砲山後円部墳頂のレーダ探査実験、同時にNHKにより撮影
取材。

5月27日（午前）：鉄砲山古墳前方部南東コーナーでレーダ探査実験。



器材の準備



前方部南東コーナー一部の計測



NHK の取材撮影



後円部墳頂部の計測

国宝金錯銘鉄剣の貸出と最新分析

野中 仁・田中英司

はじめに

当館が保管する稻荷山古墳出土国宝金錯銘鉄剣は昨年度、2009（平成21）年10月20日から11月29日までを開催期間とする、九州国立博物館の『古代九州の国宝』展への特別貸出を行った。当初九州国立博物館側からは全期間の展示・借用希望が出されていた。しかし国宝鉄剣は内規上原則的に貸出は行わないが、仮に例外的に行う場合でも入館者の増加する春秋季は避けることになっている。また、10月30日から11月3日までは本県主催の『まなびピア埼玉2009』が開催され、全国各地の関係者が国宝鉄剣の見学に来館することが考えられるため、九州国立博物館における実物の展示期間は11月11日から29日までとした。

今回、国宝鉄剣の出陳を特別に了承したのは保存状態の調査にある。鉄剣は銘文が発見された1978年から1980年までの保存修理事業（埼玉県教育委員会1982）、2000・2001年に行われた東京文化財研究所によるポータブル蛍光X線分析装置による材質調査以外には科学的調査が行われていない（早川他2003）。一方九州国立博物館には資料を梱包状態のまま透過分析できる最新鋭のX線CTスキャナーと解析ソフトがあり、文化庁と協議のもと、これらの機器によって10年ぶりに現状調査することを前提に今回貸出を行った。

館外貸出を行わないことが原則の国宝鉄剣であるが、所有者である国の意向があれば当館との協議のもと、貸出を行っている。しかしあくまで天皇の在位記念をはじめとする国家的事業に限定されるため、今回も含め銘文発見から32年の間に7回のみの実績である。そのため過去現在を問わず、当館学芸員の大半が搬出入に伴って直接実物を扱う経験をもっていない。このたびの九州国立博物館への出陳を機会に作業に伴う一連の手順を田中が、最新機器による分析結果の概要を野中がここに記載し、今後の検討材料としたい。

（田中英司）

1 搬 出

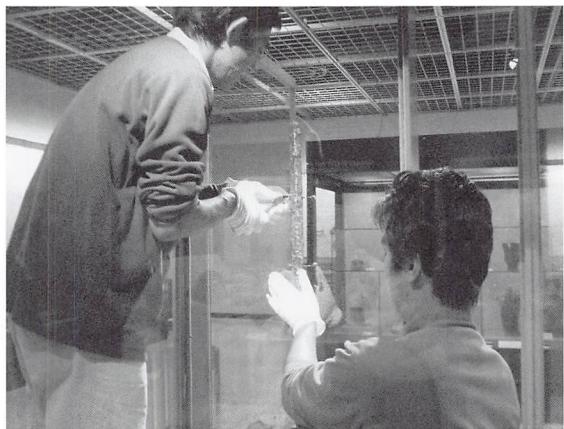
国宝鉄剣の搬出作業は2009年11月9日(月)に行われた。当日は休館日であり、始業時間から作業を開始した。作業には保存科学を専門とする国立歴史民俗博物館の永嶋正春氏に立ち会いをお願いした。

まず、市内のガラス業者2名により内部気密ケースの前面ガラスを取り外す作業から始めた。過去に同作業を行っていた業者がすでに廃業してしまったため、今回は新規業者による施工となった。前面のガラスの枠に埋められたパテを取り除き、四隅の留め金具を外してガラスを搬出した（写真1①）。次いで学芸員2名がケース内に入り、鉄剣を支える上下2ヶ所のコの字型の留め金具間をやや広げ、テグスを切って慎重に留め金から鉄剣を外した（②）。ケース外に持ち出された鉄剣の検品が手早く行われた（③）。

鉄剣は貸与の条件として、展示室と同じ環境を輸送中も含めて保持することとしている。九州国



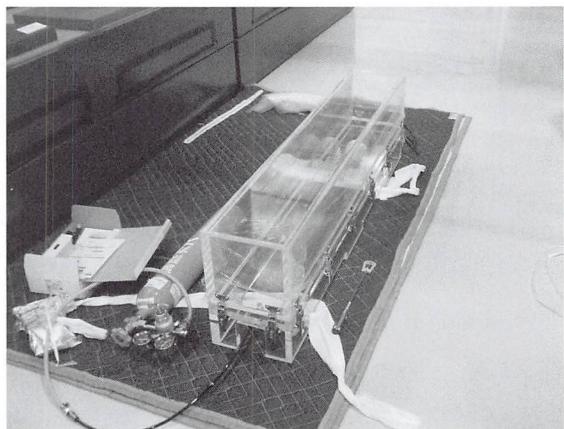
①ガラスの撤去



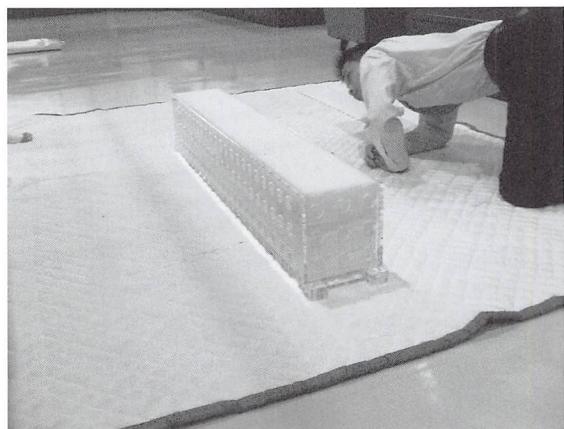
②テグスを切り、留め金から外す



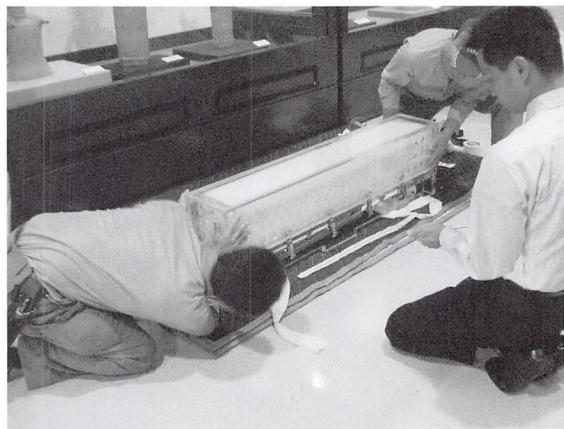
③検品を行う



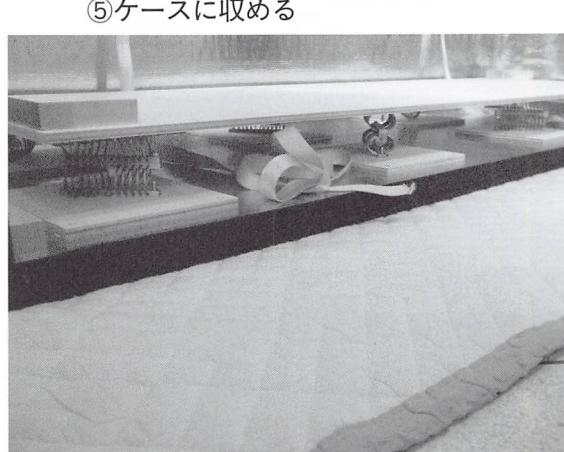
④移動用のアクリルケース



⑤ケースに収める



⑥慎重に台座に設置する

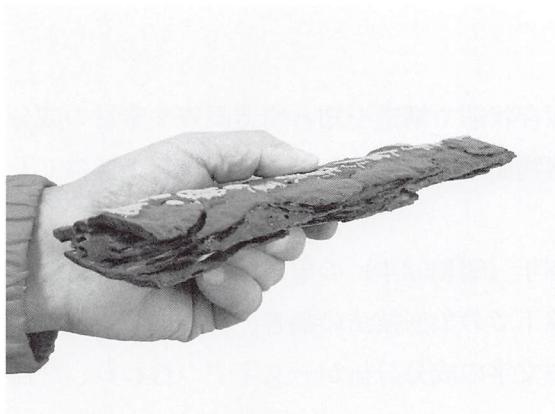


⑦振動を吸収する金具



⑧木枠に収める

写真 1 鉄剣の搬出作業



①内部の分かる複製（2倍）



②複製鉄剣に触るイベント

写真2 複製鉄剣の活用

立博物館側でもこうした条件を十分に勘案して、運搬に際しては鉄剣に合わせて型抜きした台座に梱包した鉄剣を収め、脱酸素剤を入れさらに窒素ガスを注入できる特製のアクリル製ケース内に収納するという、2重3重の酸化防止策を採った(④・⑤)。それをさらに強化段ボールに入れ、振動を吸収する台座に載せ(⑥・⑦)、厳重に木組みのケースに収納し、陸送した(⑧)。

国宝鉄剣を搬出した後には、ケース内に銘文鉄剣レプリカと銘文研ぎ出し前の2種のレプリカを収めて観覧した。特に銘文研ぎ出し前のレプリカは普段目に触れることができなく、木質の残る鞘は拵えを髪髾とさせ、見学者からも好評だった。

今回の貸出の大きな副産物は触れる鉄剣の製作である。九州国立博物館にはX線CTスキャナーのデータをもとに、石膏を樹脂で固めながら立体物を製作できる特殊な3次元プリンターがあり、実際に触ることのできる複製も作っていただいた。複製はプリンター容量の関係上、20~30cmの長さに分割される。作られたのは実物大と2倍の2種類の大きさで、鉄と金部分のみ着色を分けて造形している。実物では樹脂の充填によって見えない内部の、鎌により膨れた地金の重なりがよく分かる(写真2①)。このレプリカによってはじめて国宝鉄剣の内部状態が実態として理解でき、今後の経年変化を立体物として残し、比較検討することが可能となろう。

こうした分析と複製製作の成果を5月29日~7月4日までの当館企画展示室における通史展「埼玉あの遺跡 この遺跡」において展示し、あわせて会期中の日曜日の午後2~3時まで学芸員の解説とともに、「触ってみよう 国宝鉄剣はこんな感触」というイベントを開催した(②)。イベントは6回行われ、国宝鉄剣の感触を味わえるとして計256名という多くの参加者があった。複製鉄剣は今後は体験工房内で活用するとともに、外部の視覚障害をもつ方々にも利用していただこうと考えている。

今回の貸出作業の際に気づいた点をいくつか記すと、(1)ケースのガラスに作業の際の油膜等が表面に残り除去しにくく、十分な清掃の必要があること、(2)展示留め金具の劣化の危険性、(3)止めていた窒素ガスを再度ケース内に注入した際の観察等である。

(田中英司)

2 X線 CT による調査

(1) これまでの鉄剣の科学的調査

文化財に対する科学的手法による調査は、内部の保存状態や構造を知る構造調査や素材の成分などを分析する材質調査などがある。今回、九州国立博物館で実施された調査は、最新のX線 CT スキャナーによる鉄剣内部の構造調査といえる。

過去に行われた金錯銘鉄剣に対しての調査は、1978年（昭和53年）の象嵌銘文発見当初の保存処理に伴うX線透過撮影や象嵌表出作業における顕微鏡下での象嵌技法の調査、さらに金象嵌の成分分析などであった。また、2000・2001年には、金象嵌文字の成分分析が一文字ずつ行われ、今回の調査はそれ以来9年ぶりの調査ということになる。

これまで金錯銘鉄剣に対して行われた科学的手法による調査を概観すると次のようになる。

ア) 1978年の銘文発見時

1968（昭和43）年に稻荷山古墳から出土した鉄剣の保存処理を1978年に元興寺文化財研究所（奈良県）に依頼し、X線透過撮影の結果、115文字の銘文が発見された。銘文は象嵌の技法で鉄地に埋め込まれているが、通常出土鉄製品は、その表面を鉄鏽が覆っているため表面からは見えない。そのため、その発見にはX線透過撮影が有効であり、この銘文の発見を契機に出土金属製品の保存処理の過程にX線透過撮影の必要性が認識され、全国的に普及したといつても過言ではない。鉄剣は、その後合成樹脂含浸による強化処理と鉄鏽からの銘文の表出作業が行われた（西山1982）。

鉄剣の保存処理終了後の1980（昭和55）年には、象嵌の金線の成分分析が蛍光X線分析と放射化分析で行われた。その結果、金線の金の含有比は72%～73%で、残りが銀であることが明らかになった（沢田・秋山・馬淵1982）。また、銘文表出前の鉄剣は、鞘木と柄木の木質が表面に薄く残存していたため、木材の樹種調査も行われ、ヒノキの可能性が高いことが確認されている（松田1982）。

イ) 2000・2001年の金線の成分分析

東京国立博物館で開催された「日本国宝展」出品に伴い、東京国立文化財研究所（現独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所）及び当館において、金線の詳細な成分分析が、蛍光X線分析で行われた。1980年の蛍光X線分析との違いは、機器の進歩によるX線の照射範囲の極小化と機器のポータブル化である。照射範囲が2mmとなったころから、金象嵌の文字を一文字ずつ分析することが可能となった。その結果、金70%、銀30%の材料と金90%、銀10%の材料の成分比が異なる主に2種類の材料が同じ鉄剣の中で使われていることが明らかとなった。また、金含有率が99%以上の箇所が3箇所確認された（早川ほか2003）。

(2) 今回の調査の目的

九州国立博物館では、同館に設置されている最新の分析・調査機器を使用して、全国から展示等のために借用した資料を調査、分析し、今までに多くの有益な情報を抽出、提供してきた。

今回の鉄剣についても、搬送から展示、それに伴う内部の詳細な調査を、同館の保存科学的業務を担う博物館科学課の専門官が中心となって実施されており、特別展開催の一連の動きの中で、保存科学の担当者が密接に関与し、資料の安全性を最大限に考慮しつつ、最新の科学機器を駆使しての分析・調査を展開するといった動きは、博物館活動の一つの理想形と言える。

今回の調査は、特別展に係る運搬や展示前後の状態検査として、また、資料の内部構造をX線 CT

スキャナーで調査することで、内部の保存状態や象嵌に関する3次元の詳細なデータを取得し、保存することが目的である。

なお、調査は、同館の今津節生氏、鳥越俊行氏、輪田 慧氏、宮地総一郎氏が中心となって、同館への鉄剣搬入時の2009年11月10日と搬出時の2009年12月3日に実施されたものである。また、調査結果については、2010年6月26日～27日の第27回日本文化財科学会で発表している（今津ほか2010）。

(3) 調査の方法

九州国立博物館設置のX線CTスキャナー（Y.CT Modular320FPD, YXLON International社製）は、文化財調査用に開発されたもので、中央の回転台に資料を乗せ、ゆっくりと回転させて360度の方向から、X線を照射させ撮影する（写真3）。得られた0.4mm間隔の断層画像をコンピュータ上で再構成することで、内部の状況を3次元データとして取得できる。撮影時間は今回の鉄剣の場合で45分であった。

一度3次元データを取得すると、X線CT用解析ソフト（VG Studio Max）で様々な方向から内部状況を観察することが可能である。しかも、資料の表層から内部といった、深さによる情報の分離や強調もコンピュータ上で容易に行えるため、鉄剣の表裏に施された象嵌を分離し強調して視覚化することも可能である。また、象嵌の位置と鉄芯や鑄の状態像を重ねて表現させることで、鑄と象嵌の位置関係が正確に把握することもできる。

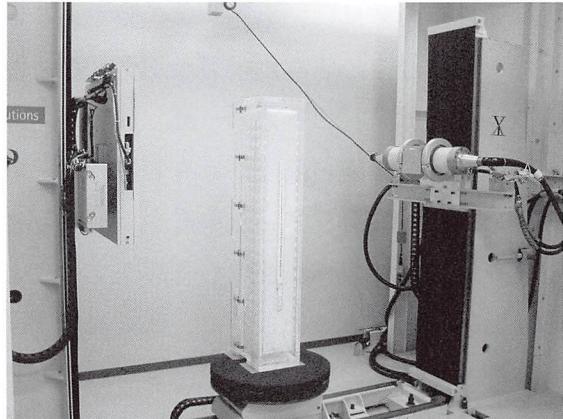


写真3 鉄剣のX線CT調査の状況
(窒素ガスを封入した梱包状態で調査が可能)

(4) 調査の結果

ア) 鉄剣の保存状態

鉄剣の表面の状態及び亀裂の状態を強調させた画像が写真4である。実際の表面の肉眼観察に比べ、細部の亀裂や銘文との位置関係がよく分かる。鉄剣表側の13字目「祖」部分、22字目「加」の下部、32字目「利」の下部には、比較的大きな亀裂が見られる。この部分は、保存処理前に腐食により剥落していた大破片を保存処理の際に接合した部分である。また、裏側の鉄剣上半部分には、縦方向の亀裂が多く存在している。

鉄芯は、鉄剣の中心部の鉄の密度が高い部分で、鉄剣の強度を維持しており、全体が腐食した状態にあっては、鉄剣の「骨」と考えていい。この鉄芯と銘文とを同一画像で表したのが写真5である。鉄芯の残存状況と銘文の位置関係がよく分かる。X線透過撮影でも鉄芯の状態は確認できるが、表裏の銘文は同一画面上に重なって写し出されるため、表裏銘文が分離されて鉄芯がこれほどシャープには見られない。これを見ると、表側26字目「其」から28字目「名」までの部分は、鉄芯が非常に細くなっていることが分かる。また、縦断面の画像（写真5の中央）では、鉄芯を中心に銘文が乗る磁鉄鉱の層が腐食により膨らんで剥離し、波打って存在することがよく分かる。X線CTによる解析でなければ表現できない画像である。

鉄剣などの出土鉄製品には腐食の進行に伴い、鑄が層状に剥離、剥落している。層状剥離によっ

て鉄剣内部には無数の亀裂や空隙部が存在しており、その部分には保存処理の際に合成樹脂が含浸され、補強されている。しかし特に鉄芯が細くなっている部分は、今後の取り扱いには細心の注意が必要である。今回の調査においては、1980年の保存処理完了時の状態と現在の保存状態とを単純に比較することはできないが、今後の劣化状態の把握には十分な基礎データを取得することができた。

イ) 柄部分の金属痕跡

今回の調査の新たな知見として、銘文以外の柄元の部分にも銘文と同様の金属反応を示す箇所が見つかった（図1）。鉄剣表裏両面の柄元の柄木が残存する部分に小さく点のように存在する。鉄鏽や残存する木質、土などが混在する中にあり、明確に柄木に付着しているように見えない。また、裏側最終字「也」の左斜め下方にも確認できる。金象嵌銘文と同程度のX線の不透過を示すことから、金、あるいは他の金属である可能性が高い。ただし、成分分析は実施していないので断言はできない。

これについては、金象嵌銘文の一部の小片が腐食の過程で移動し、鏽によって固定された可能性や、剣装具の柄元部に何らかの装飾が施された痕跡である可能性などが考えられる。古墳時代中期の柄元部分の装具は、木製や鹿角製である場合が多く、そこに金属装飾が施される類例をあまり知らないが、今後の研究に重要な知見となった。

ウ) 銘文「辛」の下方の一画

写真6は、象嵌の部分だけを表裏分離して視覚化したものである。これによって、例えば表出されずに鏽中に埋もれている象嵌や、柄元部に確認されたような表面からは見えない金象嵌と同様の反応を示す痕跡のみを抽出して観察することができる。

その結果、写真8のように、鉄剣表側1字目の「辛」の下方に横一画が存在していることが明らかになった。この一画は、表出はされておらず、字としては不自然な部分でもあることから、今後慎重な検討が必要となろう。今回は事実の報告のみにとどめておきたい。

(野中 仁)

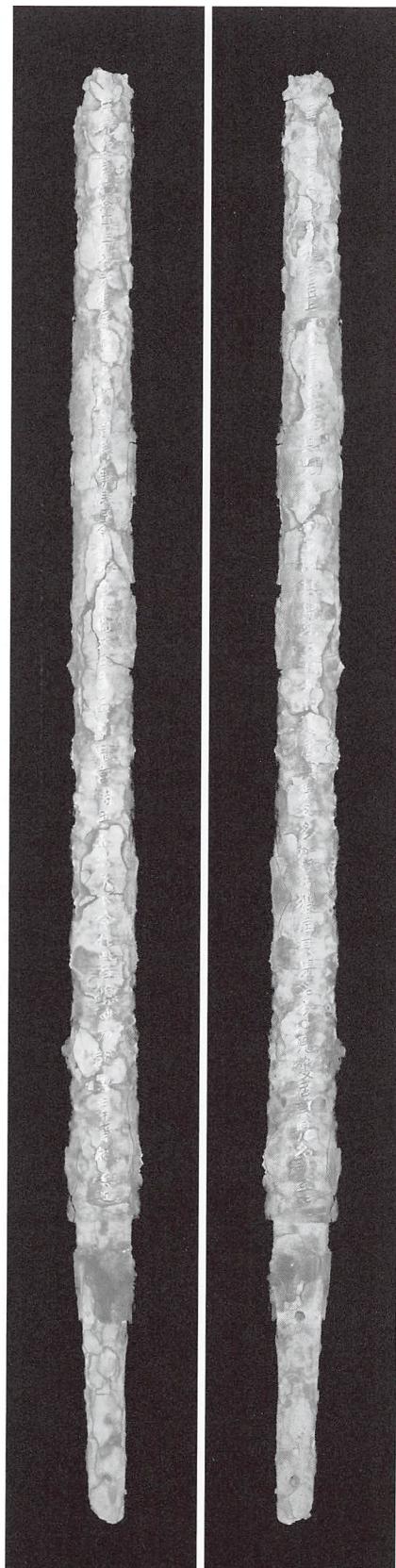


写真4 表面の状態を強調

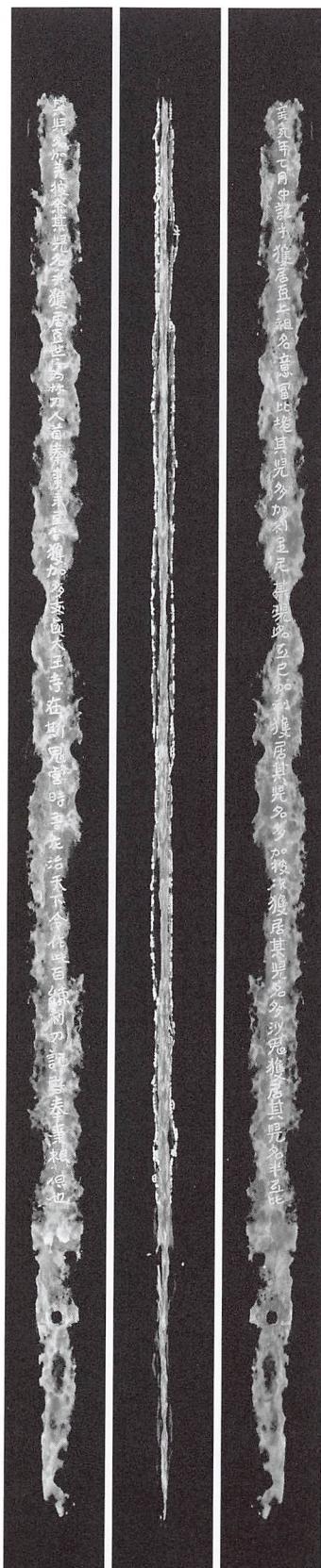


写真5 鉄芯と象嵌の位置

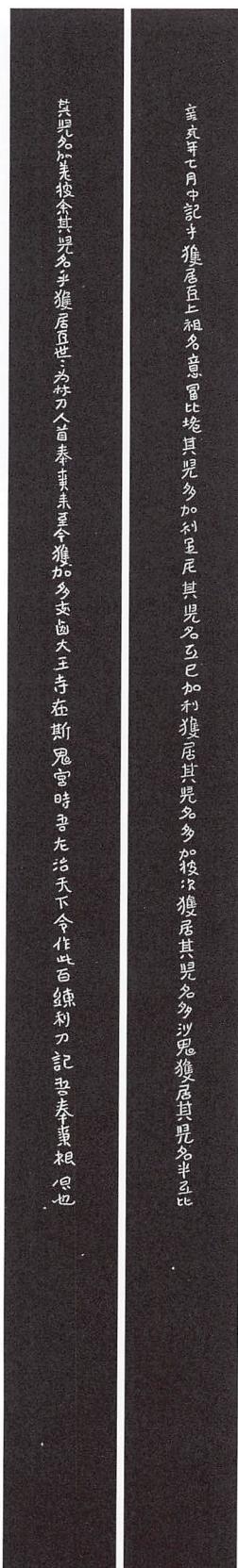


写真6 金象嵌の分離

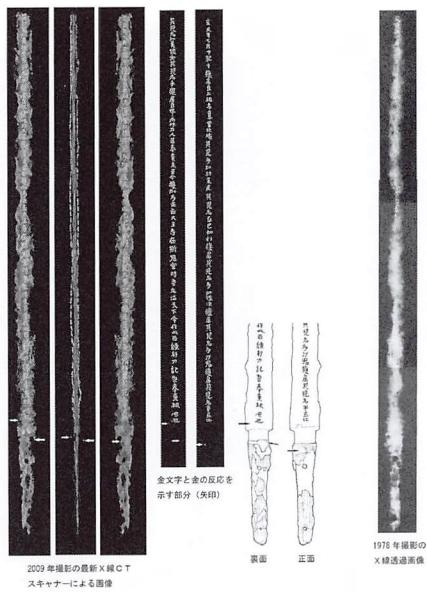


図1 金属痕跡を示す部分



写真7 表1字～3字

おわりに

稻荷山古墳出土の国宝金錯銘鉄剣については、資料の特殊性と置かれた環境もあり、分析を行う機会がきわめて限られている。今回は貸与に伴う調査という時間的に限られた状況ではあったが、新たな金と思われる痕跡の発見や地金の状況など、最新機器ならではの成果が得られた。鉄剣はここ10年来本格的な分析調査が行われておらず、今後の保存環境の整備のためにも、また経年変化を把握する意味でも日進月歩の分析機器を用いた計画的な調査の必要性を感じる。末文ながら、御尽力いただいた九州国立博物館三輪嘉六館長、環境保全室長今津節生氏をはじめとする同館職員の皆さまにお礼申し上げます。

(田中英司)

《引用・参考文献》

- 今津節生・鳥越俊行・輪田 慧・野中 仁 2010 「国宝・辛亥銘（稻荷山）鉄剣のX線CT調査」『日本文化科学会第27回大会研究発表要旨集』190—191頁
- 埼玉県教育委員会 1982 『埼玉稻荷山古墳辛亥銘鉄剣修理報告書』
- 沢田正昭・秋山隆保・馬渕久夫 1982 「銘文金線の材質調査」『埼玉県稻荷山古墳辛亥銘鉄剣修理報告書』10—11頁
- 西山 要一 1982 「保存処理と銘文の表出」『埼玉県稻荷山古墳辛亥銘鉄剣修理報告書』14—21頁
- 早川泰弘・三浦定俊・大森信宏・青木繁夫・今泉泰之 2003 「埼玉稻荷山古墳出土金錯銘鉄剣の金象嵌銘文の蛍光X線分析」『保存科学』第42号 1—18頁
- 松田 隆嗣 1982 「鞘木の樹種鑑定」『埼玉県稻荷山古墳辛亥銘鉄剣修理報告書』13頁

史跡整備と考古学II

井上 尚明

はじめに

紀要4号では「史跡整備と考古学I」として、埼玉古墳群の整備を中心に史跡整備計画の策定やその後の整備の展望について述べた。また、《おわりに—これからの中の史跡整備と学芸員ー》では、考古・史跡系学芸員の現状と役割について紹介・自戒し、史跡整備を通じた今後の学芸員等の可能性について若干触れた。現実として、既に多くの自治体の考古学を専門とする学芸員等が職務として史跡整備というカテゴリーに踏み込んでいるが、埋蔵文化財発掘調査の延長上で整備に着手しているのであって、史跡整備を専攻した職員はほとんどいないことは前稿で述べたとおりである。史跡整備という新たなカテゴリーを考古系学芸員等の仕事として追加・認知するため、現状や情報を整理し必要な作業が何かを分析していく必要性を感じている。

前稿でも述べたように、各種研修などを活用して考古学を専門とする学芸員等が整備技術を習得していくことも重要であるが、これまでの整備の経験や問題点・反省点を記録・分析し、これからの整備に還元していくことも整備に携わった者の責務ではないだろうか。展示の技術やセンスは学芸員個人に付随する部分も多いが、数年では完結することのない史跡整備は、組織として継続していかなければならない長期にわたる事業なのである。「史跡整備と考古学II」では、史跡整備実施に際して常日頃から疑問や話題になっていたことなどを中心に、発掘調査をどの程度実施するのか、整備の中でユニバーサルデザインをどのように考えるかなどを扱ってみたい。

なお、「史跡」とは狭義には国や自治体が指定した物件を示すが、ここでは整備の対象となった遺跡等を広義にとらえて史跡とし、指定・未指定を問わず使用したい。また、「学芸員等」と表現しているのは、学芸員という職名や博物館施設の無い自治体等もあるため、ここでは埋蔵文化財担当職員を含めた総称として記している。

1 史跡整備・環境整備・保存整備

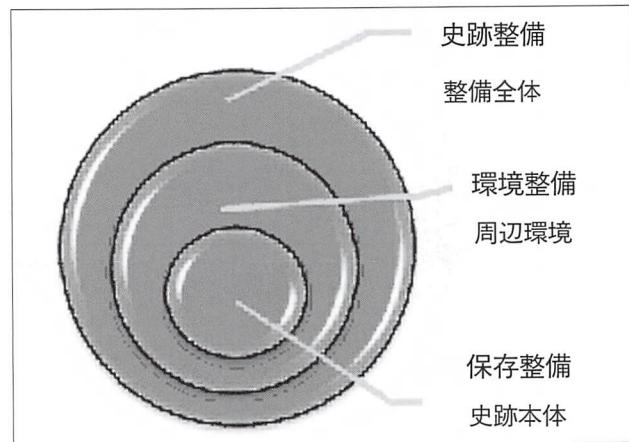
各地の遺跡で、史跡整備という表現で各種の“整備”が実施されているが、草刈り程度から城郭や古墳の復原といった大規模な土木工事を伴う事業まで、同じ言葉で一括されていることが多い。また、環境整備という言葉もいろいろな意味で使用されており、一般ばかりでなく我々にも整備の内容や範囲が伝わらないこともある。国庫補助要項などでは、環境整備には遺構調査・覆屋設置・草木除去・張芝・浚渫などが含まれ、古墳盛土・城郭等の復旧工事などは復旧（保存修理）に分類され、これらを包括する単語として保存整備を用いている。一般的には史跡整備という言葉で、内容や規模の如何を問わず整備全体を表現しているが、史跡の整備事業を理解してもらうためにも、使用者側の共通認識が必要ではなかろうか。

「環境整備」について『史跡等保存整備費（一般）国庫補助要項』では、遺構調査・整備計画立案や整地・覆屋設置などの工事から、除草・浚渫さらには照明工事・便益施設設置まで含めて明記してある。また『史跡等整備のてびき』によると、「復旧では包括しきれない要素をも加味した史跡等

整備の在り方として環境整備という用語が用いられた」とし「環境整備には遺構の野外展示に関する各種の手法とこれらを活用する上で必要となる便益施設や植栽等、史跡を活用する上で求められる快適な空間づくりも環境整備の一環として行われてきた」とある。さらに『史跡等整備のてびき』では「環境整備」とは別に、「環境基盤の整備」の項を設け「地盤整備」「修景」「環境保全」の3分野を設けているが、用語としても類似しており植栽のように重複する部分もあって混同しやすい面もある。

さきたま史跡の博物館では『埼玉古墳群保存整備基本計画』を策定する際に各種個別計画を整理しているが、その一つである「環境整備計画」の中では、環境整備は園路広場計画・植栽計画・施設整備計画・景観計画・情報施設計画によって構成するとし、史跡本体に関わる古墳整備計画や展示・ガイダンス施設に関する中核施設計画、あるいは発掘調査計画とは異なる項目に分類した。このように「環境整備」という用語には、使用者側の考え方でその範囲にはかなりの差が見られるが、用語の印象としては植栽や景観の整備を想起させる。しかし、既に整備手法として、行政的な用語として、史跡整備と並列に近い意味で環境整備が使用されているので、専門用語としては史跡整備の一分野として位置付け、整備全体をマクロに表現する用語が史跡整備であると再確認したい。

環境整備と同様に、保存整備と言う用語も頻繁に使用されているが、事業名称として「史跡〇〇保存整備事業」のような使用法が多く、ある意味行政的な用語として使われている。『埼玉古墳群保存整備基本計画』では、環境整備計画や中核施設計画の上位に総括的な括りとして保存整備を位置付けている。保存整備の字義の本来的な意味からは、史跡本体や遺構の保存に関わる整備であると



理解し、文字通り史跡本体を取り巻く周辺環境の整備としての環境整備と使い分けを考えたい。既に行政用語として使われてはいるが、一般の目にほとんど触れることのない補助要項などであり、文語と口語のような使い分けはできないであろうか。ここでは、史跡整備の内容・程度によって、下記のように環境整備と保存整備に分けることを提案しておきたい。

環境整備：草刈りや植栽、園路設置・解説板設置などで史跡本体に関わらない整備

保存整備：遺構の表示や復原、遺構展示施設設置など史跡本体に関わる整備

次に、整備担当者の間で度々話題になる用語について考えてみたい。それは、“復原”と“復元”である。この用語については、同一の意味として特に意識されずに両者が使用されていることが多く、事典・辞書でも両者の意味は異なることはない。『史跡等整備のてびき』や国庫補助要項などでは“復元”が使用されているが、“復原”を用いている自治体や書籍も少なくなく、埼玉古墳群の整備では保存整備協議会に諮って“復原”に用語を統一して使用している。川瀬健秀は復原と復元の用語の使用について、考古学や造園では復原を、建築学では復元を使用する傾向が強いとしているが、下記のような文化庁・日本建築学会の定義に従うとしている（川瀬2004）。

復原：あとから時代が変わって改造があったものを、ある時代まで戻すこと

復元：全く何もない（柱跡しかない）ものに、何らかの根拠で新しくつくること

これに従えば、竪穴住居跡や掘立柱建物跡の上屋部分を再現するのは“復元”で、古墳や城郭等で墳丘や石垣等が部分でも残存しているものを、築造当時の姿に戻すことを“復原”とすることができる。しかし、石垣の上に乗る建物については、現存する建物の修理は“復原”で、文書や絵図などから再現するのは“復元”となるのであろう。煩雑であり文章内での用語統一ができていない印象を与えるが、文字から整備の程度を読み取れるように、使用者側で用語の理解や周知をして使用方法を再確認・再検討する必要があるだろう。

2 どこまで発掘調査をするのか

保存を目的とした史跡整備に伴う発掘調査と、建設工事等に伴う行政発掘では調査の方法は当然異なる。遺跡が破壊されることを前提とした記録保存では、例えば竪穴住居跡であれば柱穴や貼床部分まで完掘してその遺構が持つ全ての情報を得ようとする。出土遺物ももちろん現場に残していくことはない。さらに竪穴住居跡の下層に旧石器時代の石器が発見されれば、前時代の遺構を取り除いてその土地に所在する全ての埋蔵文化財を調査するだろう。開発に伴う発掘調査でも、盛土保存などの措置が取られるようになったが、遺構に破壊が及ぶような場合には上記のような調査がされている。例えば古墳の調査では、墳丘や周堀はもちろん石室などの主体部についても、解体するように調査を進めていく。これに対して、史跡整備に伴う調査では基本的に最小限の範囲に抑制することが求められている。

史跡整備に伴う発掘調査に関して『史跡等整備のてびき』では、墳墓の主体部である埋葬施設の発掘調査について「墳墓に関する発掘調査の取扱い」の項目を設けて、慎重な取扱いを明記している。この項は墳墓の中でも特に古墳の主体部に主眼を置いた内容である。慎重な取り扱いの理由として「埋葬施設が良好な状態で保存されているものの希少価値が相対的に高い」「古墳の主体部の発掘調査には極めて高度な判断と技術を要する」「出土遺物の保存処理に困難を伴う場合が多い」などが指摘され、「性急に発掘調査を進めることなく、次世代へ保存・伝達されることも視野に入れ……慎重に判断することが不可欠である」としている。また、史跡指定を前提とした発掘調査であっても、指定後の保存活用を進める情報収集を目的とし、最小限の範囲の発掘調査が重要であると記している。例外的に、盗掘を受けて石室等の崩壊が進み修理が不可避なものについては、綿密な調査計画と周到な調査体制の下、慎重に発掘調査を進めるとしている。近年実施された史跡である古墳主体部の発掘調査例を見ると、原則的にこのような盗掘された古墳か、過去の調査の再検証を目的としたものである。主体部調査の至近な例としては、平成21年8月に再調査された奈良県桜井茶臼山古墳がある。同古墳は盗掘を契機として昭和24年に調査が実施されたが、主体部の詳細調査や木棺の保存処理のため、最初の発掘から60年を経過して再発掘調査を実施したもので、新聞などで大きく報道された。また、平成22年3月には、大阪府の闘鷄山古墳でファイバースコープによる石室内撮影を行い、23年度から未盗掘の主体部を発掘調査するとの新聞記事があった。

このような、原則史跡指定された古墳の主体部の発掘調査は実施しないという方針については、いろいろな考え方があるだろうが(北郷2009等)、何れにしろ調査に際して綿密な調査計画や調査体

制の整備などが大前提となる。埼玉古墳群では、平成21年3月に東北大学東北アジア研究センターとさきたま史跡の博物館の共同研究で、奥の山古墳後円部墳頂部の地中レーダー探査実験を行った（佐藤他2010）。この結果、後円部には複数の埋葬施設が存在する可能性があり、レーダーで確認された反応の規模や形状から主体部は箱式石棺と考えられる。これまで埼玉古墳群では、粘土櫛・礫櫛・横穴式石室が確認されているが、新たな主体部形態が存在する可能性は、発掘調査現地説明会や新聞報道などを通して大きな話題となった。この時、なぜ発掘調査を実施しないのかという質問を多くの方から受けた。現場の担当としては、「現在調査を実施する必要性」「調査後の保存措置の問題」「警備体制の問題」などを理由として答えたが、より現実的な問題として「調査・整備体制の問題」「予算措置の問題」があり調査着手は不可能に近い。埼玉古墳群の主体部調査については、過去にも行政内部で同様な話題が起きたことはあるが、今回は奥の山古墳の周堀と墳丘の発掘調査及びレーダー探査を実施しており、質問や期待も前回と比べるとはるかに純粋でストレートなものであった。この件に関しては、文化庁との打ち合わせでも極めてハードルは高く、現状ではレーダー探査などの非破壊分析や地形調査などを進め、将来の発掘調査に備えるのが次の選択肢なのであろう。

埼玉古墳群では、現在2種類の発掘調査を実施しており、一つは古墳群整備のために必要な情報を得るとともに内容確認を目的とする調査で、もう一つは埼玉古墳群の範囲や周辺遺跡等を確認するための調査である。両者ともに基本計画に基づくものであるが、特に前者は各古墳の兆域や規模・構造・時期の確認に主眼を置き、周堀を中心に墳丘の調査等を行ってきた。この調査成果に基づいて、周堀や中堤の復原整備の実施設計を行っており、園路や修景の基礎資料ともしている。平成19年度から、基本計画に基づいて奥の山古墳の発掘調査と整備を3年計画で開始したが、調査計画と実際の調査実績とは調査地点や地点数などで差異が生じた。これは古墳の構造や規模を把握するために、最善の地点で最少の地点数を現場と図上で選定したが、実際は搅乱で遺構が確認できなかったり、新たな遺構が発見されたりと想定外の状況が相次ぎ、現場の状況を見ながら調査地点の変更を判断していった。最大の変更点は、周堀の幅や深さを確定することと昭和43年の調査地点確認のため設定したトレンチで、一重盾形の周堀と考えられていた奥の山古墳が、二重で長方形系の周堀を持つことが確認されたことにより、調査目的や調査方法・調査期間なども大きく変更したことである。また、外堀が新たに発見されたことで、北に近接する鉄砲山古墳との位置・重複関係を見極めることが、今後の整備ばかりでなく埼玉古墳群の形成に関わる重要な点であると考え、新たな調

査地点を設定していった。さらに、墳丘規模等を含めた従来の調査を検証する必要も生じ、墳丘裾や造出し部にも調査を進めることとなった。調査計画図と調査後の測量図を比較すると、その違いが歴然である。調査地点を設定するに当たっては、測量図と現場の状況を確認しながら、最善の地点を選定したつもりであったが、前述のように調査の進展に合わせて軌道修正していった。

以上のような状況下で、内堀の形態や深さを確認するトレンチ、外堀を追跡するトレンチ、造出しや

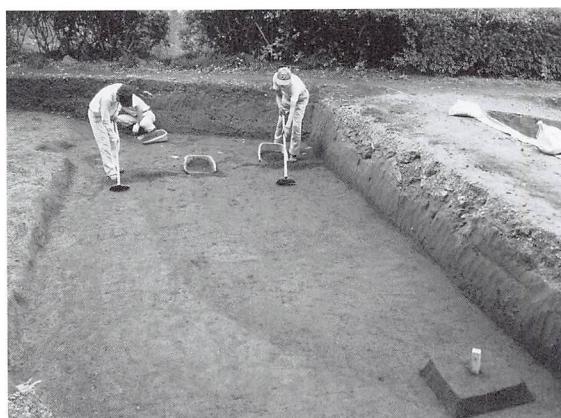


写真1 奥の山古墳内堀覆土

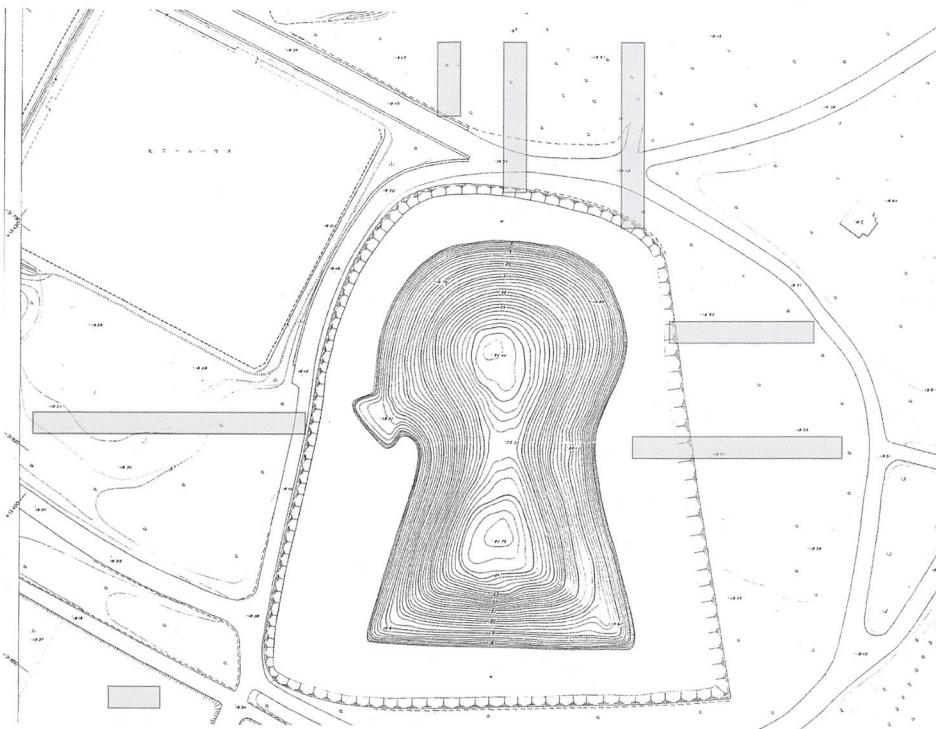


図1 奥の山古墳当初調査計画図



第2図 最終的な調査区配置図

墳丘裾を確認するトレーニチと、3ヶ年の調査で多くの調査区を設定した。特に内堀については、風土記の丘整備時に水堀とするため実際の堀底より深く掘削されているため、平面形についても覆土の残存が期待できなかったが、部分的に掘り残し部分が存在し、長方形に近い平面形であることが判明した。偶然に近い状態で覆土が残っていたものであるが、ここでピュアな覆土の存在がいかに重要であるかを再確認することができ、将来の再調査・再整備のためにも要所要所での調査可能範囲=覆土を多く残す必要性をあらためて認識することができた。また、奥の山古墳や鉄砲山古墳の発掘調査に伴って、花粉分析や火山灰分析などの土壤分析も行ったが、ここでも周堀覆土・墳丘盛土残存が必須の条件であり、分析技術の進歩を見込んだ長期展望が必要となる。10年単位での定点観測的な土壤分析などが可能なように、計画性を持って

将来に向けての情報や整備の更新を継続できるようなシステム構築も大きな課題である。

史跡整備における発掘調査は、計画的・目的的に実施することはもちろん、前述したように最小限の範囲に留めつつ、現状における知識・技術を最大限駆使して行うものである。史跡整備に伴う古墳の調査では、核心部である埋葬施設の調査ができないといった課題もあるが、他の史跡では中心部分の調査なくしては整備が不可能なものも多い。しかし、理論や制度の問題ではなく、整備には史跡を後世に正しく伝えるため、将来に検証の余地を残しておくという重要な側面も持っており、将来に委ねる部分を確保するのも保存整備の大きなファクターであると考えている。

3 史跡のユニバーサルデザインを考える

2010年8月末に、北京市郊外にある周口店遺跡博物館を訪れた。10年以上前に中国社会科学院考古研究所との交流事業などで訪れたことがあり、当時と比べると高速道路で近くまで行けるなど便利にはなったが、周辺の景観には大きな変化が無いように感じた。博物館建物は建て替えなどはされていないようであったが、ジオラマやCGを多用するなど、展示手法は大きく変わっていた。この博物館は周口店遺跡と一体となった史跡博物館であり、北京原人や山頂洞人が出土した地点へ博物館から園路を歩いて見学できるようになっている。園路には点々と原人や当時の動物の模型が置かれ、誘導板・解説板などが設置されている。また、写真2のように主要園路には車椅子対応のスロープがあり、模擬発掘体験の施設など史跡部分の各種施設も変化していた。周口店遺跡は北京に6ヶ所ある世界文化遺産の一つであるが、交通の不便さと見た目の地味さ故か見学者は多くはない。しかし、博物館だけではなく、史跡部分の施設・設備なども変化しており、新情報・UDそして新たな保存策へ対応するため、10年程度の単位で整備計画の見直しと更新の必要性を感じた。

特にユニバーサルデザインへの対応は、歩道・駅・空港・商業施設・庁舎など官民の差なく多くの施設で進んでおり、博物館施設のユニバーサルデザインに関しても既に多くの分析や調査がされている。(財)日本博物館協会では、高齢者対応・外国人対応・障害者のためのバリアフリーの3委員会を設けて検討を行ってきており、『博物館の望ましい姿シリーズ』の中で「誰にもやさしい博物館づくり事業」としてシリーズ化してまとめられている。現状では規模・内容の大小・多寡を問わなければ、ほとんどの博物館施設で実施されているのではないかろうか。埼玉県では数種類のユニバーサルデザインに関する冊子などを刊行しており(埼玉県2003他)、『史跡埼玉古墳群保存整備基本計画』を立案する際にもこれらを参考に、ユニバーサルデザインを基本とした整備計画を策定している。

埼玉古墳群では古墳公園整備に当たって、既に園路の設置などでインターロッキングブロックを採用するなど、ユニバーサルデザイン化を進めている部分もあるが、未整備な個所に比べるとごく僅かなパートでしかない。新たな計画策定に際し、現在の障壁を取り除くバリアフリーではなく、計画段階からバリアを造らないようユニバーサルデザインを当初から盛り込んだ。園路などの動線はインターロッキングブロックやカラー混合アスファルト舗装などを基本とし、便益施設等諸施設もバリアフリー仕様



写真2 周口店遺跡園路

を明記している。特に情報施設に関しては、音声ガイド・点字・外国語表記・色覚バリアフリーに加え、将来的には携帯電話などを利用した情報伝達手段の採用も考えた。これらの中で解説板については、和文・英文・点字・色覚バリアフリーに対応する仕様を採用した。写真3は現在設置が進んでいる解説板である。

史跡整備に伴うユニバーサルデザインの採用は、特に施設面において一般の公園整備などと同様にいかない部分が多い。史跡内には急斜面や段差あるいは平坦ではない園路などが存在し、史跡への影響からこれらを解消できない場合も多い。しかし、各種見学コースの設定や園路を平坦にするだけではなく、中島義晴（中島2002）が既に指摘しているように、悪路仕様のバギー系車椅子の開発・導入など、対応可能な部分はまだまだある。埼玉古墳群の整備では、古墳へ昇るためのエレベーター設置も保存整備協議会で話題に上ったこともあるが、現実として設置工事や管理の問題があり、話題となっただけで終わってしまった。しかし、その後発掘調査と整備事業を開始するに当たって、3Dレーザースキャナーという測量技術を採用し、取得した測量データを利用することによって、模型製作やCG合成も可能なことを知った。現在までに、この技術を使っていくつかの古墳の測量を行っている。将来この技術を活用し、古墳に昇り古墳の規模を体感し眺望を楽しむことができない方々にも、その一部でも感じてもらえるようなバーチャル空間を提供できるようになるのではないかと考えている。また、整備した史跡を単に見学するという考え方ではなく、植栽を利活用した園芸療法の応用などで、史跡を訪れることが癒しや治療につながるような側面をも具備させることはできないであろうか。史跡という身近な非日常空間を提供する、史跡整備の持つ可能性の一つとして記しておきたい。

写真4は横浜市歴史博物館と隣接している大塚遺跡の復元竪穴住居跡内部で、遺跡を巡る園路から直接車椅子で竪穴住居跡内部まで入れ、住居内部の見学ができるようになっている。写真5と6は国営飛鳥歴史公園にある高松塚古墳周辺の園路である。ショートカットになっている山道では階段を登るが、ゆるやかにカーブする坂道を進むと古墳正面に出ることができ、同一目的地への2種類の園路が用意されている。

埼玉古墳群のユニバーサルデザインに関しては、大きな反省点もある。基本計画策定時に行田市や県文化振興課などの協力を得て、各種資料や情報の収集を行った。その中には当然意識して関係団体の連絡先も列記したが、策定作業と並行して解説板設計も開始しており、収集した資料などをもとに一気に基本仕様を決定した。関係団体などとの検討を経て



写真3 愛宕山古墳解説板



写真4 大塚遺跡竪穴住居跡内部



写真5 高松塚古墳への園路

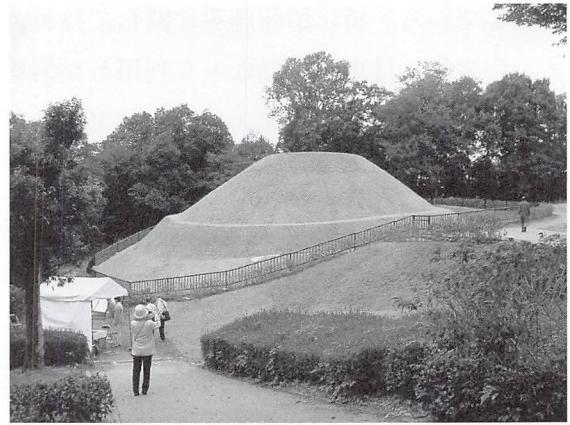


写真6 高松塚古墳正面の園路

からの設置を考えていたが、予算や時間の関係でそのまま進めてしまった。ユニバーサルデザインに基づいた解説板は、設置当初から反響があり、評判に感けて検証を経ないまま時間が過ぎてしまったが、今後は園路の設置などと合わせて、実際必要とする方々の意見を聞いていくことが重要だと反省している。

おわりに

発掘調査の資格制度が話題になっている。当初は民間調査機関による民間調査機関のための資格であったと記憶しているが、導入から数年、大学の参入などもあって目的や方向性も変化してきており、現在でも賛否両論多くの意見を聞くことができる。本稿で扱っているのは史跡整備であるが、発掘調査を伴う史跡整備がこの資格制度とどう関わってくるか気になるところである。現在多くの自治体では、学芸員資格を持った考古学を専門とする職員たちが博物館業務もし、一般文化財保護から発掘調査や整備も担当している場合が多い。県立館では学芸員資格という大きな括りの中で、原則それぞれの専門分野の館に配置されており、学芸員資格の職種欄には「学芸員（考古学）」のように表記されている。発掘調査資格と学芸員資格は重複する部分もあり、両者の関係について「学芸員資格は埋蔵文化財保護の知識や技術を保証するものではない」との指摘もあるが、逆説的には「埋蔵文化財調査資格は、博物館施設での資料管理や展示の知識技術を保証する資格ではない」ことにもなる。資格制度が自治体にも採用された場合、現実問題として教育委員会や博物館施設における学芸員と、発掘調査専門の有資格者を別に採用できるかといった点が挙げられる。別に採用されたとしても、どちらか一方だけの資格では人事異動などの交流はできず、専門職の活躍範囲を狭める結果にはならないであろうか。一般文化財だけではなく生涯学習まで手掛ける自治体職員や、学芸員を目指す学生に、新たな埋蔵文化財調査資格を取得するための負担は軽くはない。最近では財団法人でも他の部署への異動があると聞く。発掘調査資格だけで通用する組織は民間調査機関など狭い範囲に限定されるが、そのための制度であると再確認する考え方もあるだろう。しかし、同じ考古学を学ぶ仲間である民間調査機関の職員だけが資格を必要とする点も気になるところである。

これまで述べてきた史跡整備とは、整備の技術や理論的な部分だけではない。史跡や出土遺物を調査研究によって評価・報告し、保存・管理そして展示・活用まで扱うことである。整備計画立案や発掘調査から設計・整備、そして展示・公開までの連続的な流れを一元的に把握し実行できるのは、「史跡整備士」資格創設でもしない限り現状では学芸員だけである。発掘調査のレベル向上（レ

ベル低下の防止）に関しては、学芸員資格の専門分野化への指向やカリキュラムの検討、あるいは発掘調査の法的な手続きに伴って、発掘や報告書を評価するシステム構築なども考えられるだろう。

私は学芸員が文化財に関わる万能の資格だとは考えていない。寧ろあまりにも簡単に取得できるため、専門性もなく教員や一般行政職員でも代役が可能な学芸員が存在することが問題なのである。学芸員の能力向上に関しては多くの提言などがされており、平成19年6月15日の「これから博物館の在り方に関する検討協力者会議」で報告されている「新しい時代の博物館制度の在り方について」の指摘のように、上級資格の創設など既存学芸員制度の中で可能な事柄を検討するのが先決ではないかと思う。史跡整備を学芸員等の新たなカテゴリーとすることは、学芸員の負担が大きくなることでもある。しかし、遺跡を整備し復原するというクリエイティブな分野に踏み込むことであり、これまでの学芸員のイメージと活躍範囲が変化する可能性も見えてくるのではなかろうか。

この「史跡整備と考古学」は、埋蔵文化財担当職員あるいは考古学専門の学芸員が、新たな分野として「史跡整備」を志向できないかと考え、史跡整備の現場から順次情報や課題などを発信しようとしたものである。前提として発掘調査の延長上に史跡整備があったとしても、整備への階段を進むには知識と技術そしてビジョンが必要である。今回の「史跡整備と考古学II」では、平成22年度にさきたま史跡の博物館から異動したため、当初考えていた現在進行形の整備データの活用や、具体的な発掘調査や整備手法について触れることができなかった。「史跡整備と考古学III」以降で扱えればと考えている。また、今後の県内の史跡整備推進の基礎データとするためにも、埼玉県の史跡整備の歴史や今後の展望をまとめた必要性を感じている。どこかの段階で整理してみたい。

最後になったが、発掘調査と整備の現場から離れ、史跡整備はもちろん考古学関係の文献も少ない博物館へ異動したため、機会を見てはさきたま史跡の博物館や（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団で資料を閲覧させていただいた。特にさきたま史跡の博物館では、実測図・写真などの掲載も快諾され、西口正純・末木啓介・佐藤康二の3氏からは助言を得ることもできた。文末であるが記して感謝したい。

《引用・参考文献》

- 青木 豊 2006 「地域博物館・野外博物館としての史跡整備」『史跡整備と博物館』雄山閣
井上 尚明 2010 「史跡整備と考古学I」『紀要4号』埼玉県立史跡の博物館
岡崎 完樹 2010 「古墳の保存と活用の現状」『多摩のあゆみ137』（財）たましん地域文化財団
川瀬 健秀 2004 「史跡整備にともなう建築復元について」『博物館学紀要29』国学院大学博物館学研究室
考古学研究会 2008 「特集 発掘調査資格制度を考える」『考古学研究55-3』
考古学研究会 2008 「特集 続、発掘調査資格制度を考える」『考古学研究55-4』
国立教育政策研究所社会教育実践センター 2009 『平成20年度 博物館に関する基礎資料』
今野 農 2006 「史跡整備と環境」『史跡整備と博物館』雄山閣
埼玉県 2003 『お客様にやさしいユニバーサルデザイン・ガイドライン』
埼玉県教育委員会 2007 『史跡埼玉古墳群保存整備基本計画』
(財)日本博物館協会 2007 『誰にもやさしい博物館づくり事業』他
佐藤源之・渡邊 学・井上尚明 2010 「奥の山古墳の地中レーダー探査実験について」『紀要4号』埼玉県立史跡の博物館
島田 敏男 2006 「史跡で、できること、できないこと」『遺跡学研究第3号』日本遺跡学会
下津谷達男 1996 「博物館と遺跡展示」『博物館学紀要21』国学院大学博物館学研究室

- 全日本印刷工業組合連合会 2008 『メディア・ユニバーサルデザインガイドブック』
- 第一法規株式会社 1982 「座談会 史跡の整備—その歩みと展望—」『月刊文化財224』
- 高橋 浩明 1988 「遺跡博物館雑考」『博物館学紀要13輯』國學院大學博物館学研究室
- 田中 哲雄 1983 「遺跡の整備手法の分類と評価」『奈良国立文化財研究所 文化財論叢』同朋舎
- 鳥山 由子 2006 「誰にもやさしい博物館づくりがめざすもの」『博物館研究455』(財)日本博物館協会
- 中島 義晴 2002 「高齢者や障害者等に配慮した史跡整備」『文化財論叢III』奈良文化財研究所
- 長島 雄一 2003 「福島県における史跡整備の現状と課題」『福島県立博物館紀要第17号』
- ニューサイエンス社 2010 「特集 遺跡を掘るIII—資格制度—」『考古学ジャーナルNo603』
- 広瀬 和雄 2005 「日本の遺跡活用と観光」『観光考古学』国際航業株式会社文化事業部
- 広瀬 和雄 2006 「史跡公園は考古学研究の試金石」『考古学ジャーナル548』ニューサイエンス社
- 藤井 淳弘 2004 「史跡整備事業における古墳整備の変遷」『Archaeo-Clio 第5号』東京学芸大学考古学研究室
- 文化庁文化財部記念物課 2005 『史跡等整備のてびき』
- 北郷 泰道 2009 「大地が語る歴史の物語を聞くところ」『考古学研究222』考古学研究会
- 宮城県考古学会 2010 「特集 考古学における資格制度」『宮城考古学12』
- 村松 洋介 2003 「古墳の保存整備・活用と博物館」『博物館学紀要28』國學院大學博物館学研究室
- 本中 真 1999 「史跡等の保存・整備・活用事業の考え方と今後の課題」『月刊文化財434』第一法規株式会社
- 山本 哲也 1996 「博物館のバリアフリー計画」『博物館学紀要21』国学院大学博物館学研究室
- 渡邊 定夫 2006 「遺跡保存整備の限界」『遺跡学研究第3号』日本遺跡学会
- 和田 晴吾 2009 「古墳の理解と保存整備」『遺跡学研究第6号』日本遺跡学会

埼玉古墳群を支える地域

埼玉県の主要古墳は、前方後方墳→円墳→前方後円墳→方墳へと変遷している（次頁）。但し、円墳は、出現以降においては他の墳形を量的に圧倒して存在している。

まず3世紀には、前時期の前方後方形周溝墓と明瞭に区別のできない前方後方墳の時代であるが、他地域を圧倒する規模を有する古墳は見出せない。

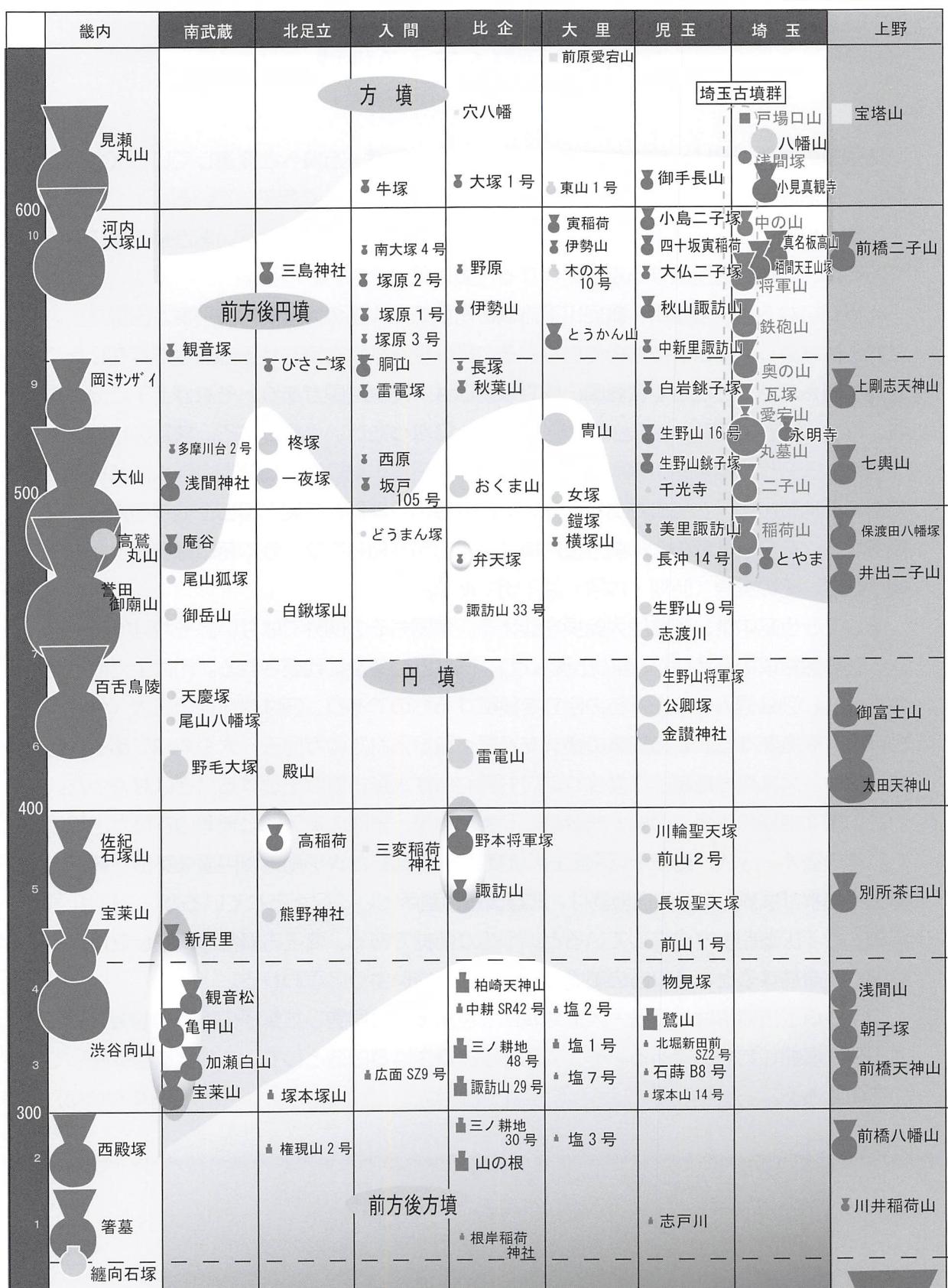
4世紀になると、多摩川・鶴見川下流域の南武蔵に4基の大形前方後円墳が出現する。これらは継続して営まれたものであり、そこには権威継承を窺わせる必然性が存在したことが予想される。ところで武蔵国の成立以前には、「ムサ」国があり、それが上下に分国され、「ムサカミ（相模）」と「ムサシモ（武蔵）」になつたという説がある。該期の古墳群は「ムサ」国時代の指導者の墓所であろうか。また三浦半島には、同時期の巨大前方後円墳である長柄桜山1・2号墳があり、先述の南武蔵の古墳群との間に相模と武蔵の境界が設定される。その後武蔵の大形前方後円墳は、川口市高稻荷古墳、野本將軍塚古墳と北上を続けたが、その実態（時期・内容）は不明である。

そして5世紀中葉、列島は大転換を迎える。東国もその例外ではない。それは(1)竈の導入、(2)食器組成の転換（銘々器の出現など）、(3)鉄器の普及に代表される。(1)は生活改善をもたらし、(2)は個人の集団からの自立を象徴するものであり、(3)は耕作地の拡大（生産力の向上）を意味する。この新来の様式を遅く取り入れたのが児玉・大里地域である。当地域では、大集落が継続的に営まれたにも関わらず大形古墳が出現することはなかつた。

この県北地域の生産力の向上を背景に5世紀後半、未開の新天地に稻荷山古墳が出現した。その後4・5代、百数十年間に亘り他地域を圧倒した大形前方後円墳を築造し続け、埼玉古墳群が展開した。同古墳群は、武蔵国造の墓所として捉えられているが、これは「武蔵国」と「国造制」が成立しているというのが前提である。埼玉古墳群の安定した首長の継承から類推すると、これらの前提は容認されて良いように思われる。

つまり埼玉古墳群は、児玉・大里地域に5世紀後半に展開した集団の経済力を背景にして出現・展開したものである。そして武埼玉古墳主は蔵国造として、その全域を支配していたのである。

（中村倉司）



埼玉古墳群 と武藏の古墳

■ 前方後円墳
○ 帆立貝形古墳
△ 円墳
■ 前方後方墳
▲ 方墳

20m 40m 60m 80m 100m 200m 300m 400m ~

板碑造立過程の検証

加藤光男

はじめに

日本近世史学担当学芸員が、企画展「板碑が語る中世 造立とその背景」を企画・運営するにあたって、板碑の造立過程について知見を得たことから、「出土板碑からみた製作工程の復元」⁽¹⁾を公にした。しかし、この拙稿では、導き出した結論と先行研究である千々和實氏の論考⁽²⁾との関連について言及できなかった。

千々和實氏は、「(前略) 種子さえも刻まれていない半製品が多数あり、或いはまた、種子だけが刻まれた次の段階の半製品が多数ある。この様に完成に向かった二つの段階の半製品板碑が、それぞれ多数存在する限り、この地は板碑の工作場であったと解せざるを得ない。即ち、この付近の採石場でとった青石を、この工場で板碑にまで工作するのだが、それが数段階に工作され、半製品のまま遣ったものと解される。」と言及している。そして、千々和到氏は、この論考を、「板碑は秩父で作られるのか、石材が運ばれて、塔の建てられるところで刻まれるのかについては、以前から議論がわかっているが、彼は大量の未完成板碑の存在から、石材供給地近くで形と種子まではつくられると結論した。全ての時代、全ての板碑にあてはまるかどうか問題が残ると思うが、重要な発見だったことは間違いない。」と評価している。

本稿は、千々和説との対応関係について述べることを第1の課題とする。そして拙稿に寄せられた疑問や批判に答えるものである。第2の課題として、造立の推移について言及する。

1 千々和説との関係について

まず、本稿で扱う時代について明らかにしておく。千々和實氏が「(前略) 初発期に近いほど、また発注者の地位・勢力が大きいほど、大型で、独特・珍奇・複雑な表現があり、それだけ個性的である。(中略) 十四世紀頃になると、需用者層が広く厚くなつて、行きつくところ、この二要素(=種子と年紀: 中略部分より筆者補足)だけを刻んだ板碑既製品が現われ得る条件がととのつたのである。(中略) ある時期になると、一般需用者は大体、既製品で間に合わせたであろうと思われる。」⁽²⁾との言及があり、時期設定については筆者も同意見である。また、石材採掘地から発見された板碑未成品も今のところ14世紀頃としている⁽³⁾。このことから、対象時期を南北朝時代(=大量需要期)に限定する。

緑泥石片岩製板碑石材の採掘地のひとつ、埼玉県比企郡小川町割谷においては、板碑用の石材として受注されており、頭部の山形が形造られ、正面と背面が区別されるなどの表面加工が施されていた。一方、現在のところ、二条線や枠線、種子や年紀などの刻みのあるものは発見されていない。つまり現段階では、「採掘地では外形の荒成形まで」であったと判断する。

次に、鎌倉街道上道の宿・今宿に隣接する板碑一大造立地のひとつ、通称「おしゃもじ山」で発見された板碑は、頭部山形の整形および正面の平面化という2次加工の痕跡が確認され、造立地において外形の追加加工がなされていたことを示す事例となった。

また、久喜市（旧菖蒲町）長龍寺から発掘された板碑には、外形の整形および正面の研磨加工が施されているものの、枠線のみ刻まれた（＝主尊の種子はない）板碑、種子までが刻まれた板碑が複数確認されている。以上のことから、種子までが刻まれた（＝年月日、発注者または受注者名、造立趣旨、真言・偈文などは刻まれない）半製品があることを確認した。

以上の拙稿で提示した事例と千々和氏の論考との相違点は以下の通りである。

千々和氏の指摘する、製作工程に段階がある、工程ごとに製作場所が異なるとする枠組みには包括されるものであり、その域を脱してはいない。

しかし、千々和氏は、①製作段階において、阿弥陀種子および年紀（日付は除く）まで刻んだものを既製品としているが、私は種子のみ刻まれた板碑が各地で多数確認されていることから、個別発注を受けるまえに刻まれる（＝既製品・半製品段階）のは枠線と種子までであると考えている⁽⁴⁾。つまり既製品段階では年紀は刻まれていないと考えている。千々和氏は、②種子や年紀（日付は除く）を刻んだ場所を児玉郡や秩父郡の山麓としているが、種子の刻まれていない板碑がこの地域以外でも確認されていることから、種子を刻むのは造立地近くの工房と考える。これは、千々和氏が発表した時期と私が検討するまでの間に多くの事例が報告されたことによるもので、千々和氏が発表した段階における情報量の違いに起因するものである。千々和氏が示した事例は、児玉郡や秩父郡の山麓地域に造立する目的で集石・加工した事例であると私は考えている。

①について千々和氏は、③「府中市高安寺には、【釈迦の種子】（＝原著書では梵字による記載。以下同じ）だけで年号月日のまったく刻んでいないものがある、（中略）しかし【釈迦の種子】は余り多くは需要者がないので、日附はおろか、年号さえも工作場では刻みこまなかったのだろう。」、④「種子と紀年文字の彫刻技巧に著しいちがいを見るのは普通である。」とも言及している。④については私も同意見であり、主尊の種子を刻む者と紀年や造立者名などを刻む者が異なると考えているが、③については先に記したように見解を異にする。

②については、近年の研究により種子や蓮座の形態に地域性があることが確認⁽⁵⁾されたことから、一定の場所で集中作製した後、各地に配達されたとは考えにくい状況にある。

現状では、南北朝時代において、a 石材採掘地では外形の荒成形まで、b 造立地では枠線、枠線と主尊の種子までが既製品として刻まれる場合があり、c 発注者の要望に応じて、年月日、造立者、造立趣旨、真言・偈文、天蓋などの莊嚴などを刻むという3段階があったと考える。

なお、種子のみ刻んでいる板碑として現存していても、年紀や人名が墨書きされていた、また紙に書かれて貼ったもので、現状では未完成品に見ても完成品であったとする意見がある。板碑には、金泥、朱、墨などで彩色されている事例は多く確認されており、五輪塔や宝篋印塔では朱や墨で文字を記した事例が確認されている。今後、先の指摘に対応するために、種子のみ刻まれた板碑の再調査が急務と思われ、私も調査実施中である。成果が出したい報告したい。

以上のように、主尊の種子を刻む者と紀年銘などを刻む者が異なることは間違いない。このことが、種子を刻む作業と、紀年銘などを刻む作業の間に段階があったとする裏付けとなるのか否かは今のところわからない。時期も材料も異なるので比較対象にはならないかもしれないが、江戸時代の浮世絵（木版画）は、人物の顔を削る上級の彫師と、背景や衣装の柄などを刻む彫師というように分業されていたことが確認されている。彫りの技巧の違いは、工程差（時間差）ではなく作業従事者の違いより起因している場合も想定しなければならない。

2 造立工程の検証

(1) 加工方法について

板碑の整形方法には、板碑独自の技法として、平刃のノミによって帯状に削る、「押し削り」という技法が確認されている⁽⁶⁾。私は、①石材採掘地では正面加工は押し削りによる整形、②造立地近くの工房における正面の最終整形時には、平刃のノミを板碑に立てて小刻みに押しあてる技法で凹凸を少なくした後、板碑石材もしくは板碑石材よりも堅い石材で磨くという2段階があると言及した。拙稿でも拓本でその事例を掲載したが、板碑の製作は、押し削りによるものとの意見をいたいた。このため再度、拓本を掲載する。図1が採掘地で発見された板碑未製品の正面に遺る整形のための押し削り痕である。この痕跡は完成した板碑の背面に遺る痕跡（押し削り痕）と同じである。図2は「おしゃもじ山」で発見された未製品板碑の正面に遺る痕跡である。比較する意味で今回、青泥石片岩を石材、現在の平ノミを道具として、二つの技法による再現結果の拓本を掲載する。図3は押し削りしたものの拓本。図4は平刃のノミを垂直に立てて敲いたものの拓本。これらを比較すれば、板碑正面の平面化に際しては、①押し削り、②ノミを立てて敲く、③砥石などで磨くの3技法があつたことは明白である。

(2) 石材の入手方法

板碑のなかには、ポットホールと呼ばれる穴を見つけることがある。この痕跡から、板碑の石材が、「山採り」だけではなく「川採り」によっても行われていたことが明らかになっている。この穴が人為的である可能性についてご意見をいたいた。この件については、人為的な削り痕との見分け方などを提示した渡辺氏による優れた論考⁽⁷⁾があり、私にはそれに付言することができないので、渡辺氏の業績を参照いただきたい。

なお、板碑に遺る溝痕の一部が古墳石棺材の石材の組み合わせ部分の溝痕である板碑が確認されたことから、古墳石棺材を転用した板碑の事例が明らかになった⁽⁸⁾。このため、大型板碑の石材の再検討が進められている。古墳石棺の石材組み合わせ部分の溝痕が残る板碑が僅かであることから、新たな視点として板碑の側面加工の痕跡と古墳石棺材の側面加工の痕跡の比較が行われている。この視点においては、石材の加工法が伝承されたことも念頭に置き、大型板碑の側面で板碑固有の加工痕を見いだせなければ、板碑側面と古墳石棺材側面の加工痕が同じことのみで石棺材転用であると短絡的に結論づけてはならない。

3 板碑造立の推移について

板碑の確認総数は、再調査や発掘による発見により日々増加している。本稿でまとめたものも実際に造られた板碑の九牛の一毛に過ぎない。しかし、埼玉県と東京都でまとめた板碑調査報告書から30年経た現在、当時の把握状況と2010年現在の把握状況の違いを言及することも意味があるものと考え、今回提示することにした。

(1) 埼玉県の場合

1981年の調査報告書には、総計20,201基の板碑（このうち年号のわかる板碑9,756基⁽⁹⁾）に関する年代ごとの造立数の推移を示した表を掲載している。報告書作成後、新たに発見・発掘された資料を補ったところ、総計27,457基（うち年号のわかるもの11,606基）であった。総数で報告書刊行時の約35.9%増、年号のわかるもので約18.9%増である。今回の調査結果をもとに作成した表が表1

である。初見の嘉禄3年(1227)から鎌倉時代後半にかけて増加傾向にある。そして、元弘の乱(1331年)から南北朝の統一(1392年)までの南北朝時代が隆盛期であり、1360年代にピークがある。その後、扇谷・山内の両上杉と古河公方の対抗期(1454~1590年)に微増した後、衰微して慶長期に消滅してしまう。この傾向は、30年前の報告書と同じ結果である。これまでの表は、西暦下一桁が0~9までの10年を1単位としている。しかし、当時の政治史は西暦に影響されていた訳ではない。このことから、今回、鎌倉幕府の滅亡が1333年、南北朝の統一が1392年であることを勘案して、西暦下一桁が3からの10年を1単位とした表2を作成してみた。二つの表を比較して、大きな傾向に差はみられないが、表2から1353~1362年と1363~1372年がほぼ同数であることが確認される。板碑を造立活動の隆盛は、この20年間の政治・社会・信仰・宗教の状況を反映したものと断定してよからう。

(2) 東京都の場合

東京都域の統一的な板碑調査の結果は、1979・80年2か年に刊行した2冊の報告書にまとめられており、埼玉県と同時期の調査といえる。その結果は、比留間博氏によってまとめられている⁽¹⁰⁾。比留間氏の集計時点では、総計8,743基(うち年号のわかるもの4,962基)であった。今回の集計時では、総計10,136基(うち年号のわかるもの4,981基)⁽¹¹⁾である。先の集計よりも総数で約15.9%増、年号のわかるもので約0.4%増である。今回の調査結果をもとに作成した表が表3である。これによれば、全体の傾向は埼玉県と同様であり、ピークも1360年代にある。埼玉県同様に政治史を勘案して集計したものが表4である。これによると、埼玉県域では、1353~72年の20年間にピークがあるのに対し、東京都下では、1393~1402年が最多、ついで1363~1372年であり、1353~1362年は第4位であることに特徴があらわれた。

東京都下の最古の板碑は、宝治2年(1248)と埼玉県下の日本最古の板碑に約20年遅れる一方、埼玉県下の最新の板碑が1598年なのに対し東京都下では1604年までくだる。また、既に比留間氏により指摘されているが、23区域においては14~15世紀の200年間、ピークはあるもののほぼ同程度の数値であるのに対し、多摩地区においては、埼玉県同様、普及・衰退の推移が急であったことが再確認された。このことから、板碑造立の推移および消長には地域差があることが今回も確認された。郡単位など地域ごと、河川や主要街道沿いなど物資の流通経路との関連からの再検討、地域史との関連性における分析が必要であることを改めて痛感する。

(3) 埼玉県と東京都の事例を合わせた場合

まず、埼玉県域における単年ごとの板碑の造立推移をあらわしたものが表5である。全体の傾向としては、10年単位のグラフと同じ傾向を示す。

単年ごとにみると、最多が①貞治7・応安元年(1368)で造立時期378年間の約3.58%、以下、②明徳5・応永元年(1394)で約2.97%、③延文6・康安元年(1361)で約2.57%、④康暦2年(1380)で約2.33%、⑤康安2・貞治元年(1362)で約2.29%、⑥嘉暦4・元徳元年(1329)で約2.25%、⑦康暦3・永徳元年(1381)で約2.17%、⑧貞治4年(1365)で約2.15%、⑨文和5・延文元年(1356)で約2.13%、⑩貞治6年(1367)で約1.95%で、この10年で全体の約24.39%(約4分の1)を占める。また、上位10のうち、②・⑥は南北朝期以外である(隣接した時期ではあるが)。1368年は平一揆の河越館籠城、1380年は足利氏満の出陣、1362年は白旗一揆らの出陣などがあり、戦が原因で造立が増えたと考えられるが、現状では原因が不明なものもある。しかし、一つの特色として改元し

た年に多く造立していることがわかる(たとえば上位20のうち改元した年が12年ある)。改元する理由のひとつとして、天災や飢饉など政治・戦争など人為的な理由でない場合があることから、このことが造立に影響しているのかもしれない。

次に、武藏国一国の動向を探るために、対象地域としては不十分であるが埼玉と東京の数値を集計し作成したものが、表6である。

最多が、①貞治7・応安元年で造立時期378年間の約1.45%、②明徳5・応永元年で約1.43%、③延文6・康安元年で約1.06%、④貞治4年で約0.97%、⑤康暦2年で約0.94%、⑥康安2・貞治元年で約0.92%、⑦康暦3・永徳元年で約0.88%、⑧嘉暦4・元徳元年で約0.85%、⑨貞治2年(1363)で約0.82%、⑩文和5・延文元年で約0.80%で、この10年で全体の約10.12%を占める。埼玉県域と比較すると、貞治6年のかわりに貞治2年(埼玉県域では19番目)が入っている、多少の順位の変動が認められるが、南北朝期とその隣接時期に集中していることに変わりはない。しかし、その集中度は埼玉県域と比較すると下がっており、東京都域では、埼玉県域よりも増減の度合いが緩やかであることが実証される。

今回は、概要を述べたに過ぎないが、郡単位でみても地域差がある。また、武藏国単位で論じるのであれば、神奈川・茨城・千葉県の一部を含めなければならず、緑泥石片岩製の板碑について総体的に論じるのであれば、先の県のほか群馬・栃木・山梨県などについても範囲を広がなければならない。このことについては、今後の課題としたい。

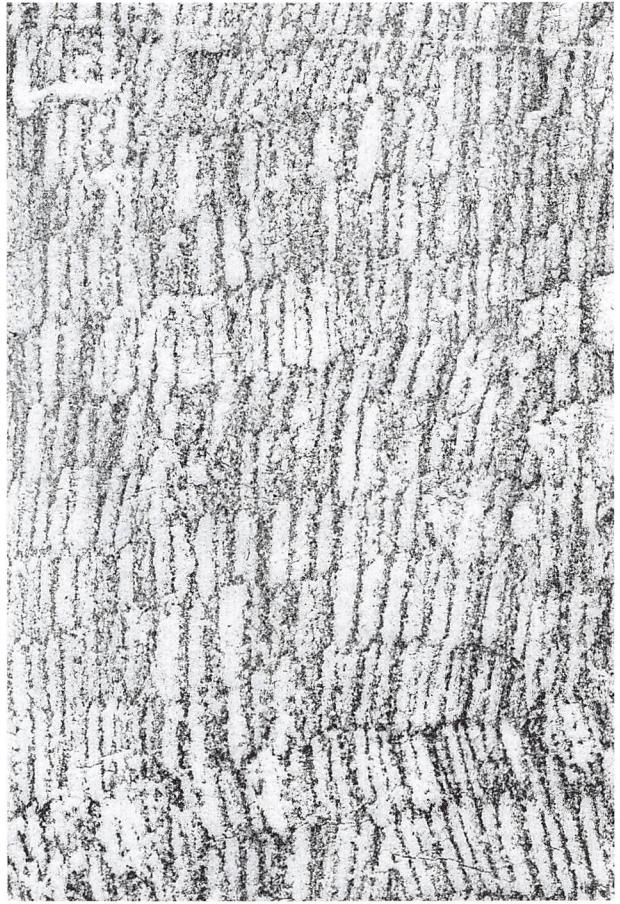
最後になりましたが、本稿をまとめるにあたり、三宅宗議氏から懇切なるご助言・情報提供を、高橋好信氏から未製品板碑の調査の際にご協力いただきました。心からの謝意を表します。

《註》

- (1) 『埼玉県立史跡の博物館研究紀要』第4号・2010年に収録
 - (2) 千々和實「板碑工作と中世商品的供給源の一考察」(『上武大学論集』3・1971年)。のち、同『板碑源流考 民衆仏教成立史の研究』(吉川弘文館・1987年)に収録。以下、特に断らない限り、千々和氏の説とはこの論文からの引用である。
 - (3) 磯野治司・伊藤宏之「小川町割谷採集の板碑未成品」(埼玉考古学会『埼玉考古』第42号・2007年)なお、この論文では指摘されていないが、板碑未製品が採掘地で発見されたことは、採掘地において採掘石材が板碑用であることが認識されていたことを実証する点でも重要なことである。
 - (4) 板碑を再調査した結果、年月日や人名が枠線に重なる・はみ出して刻まれている事例を複数確認している(正法寺所蔵資料など)。そして刻みの痕跡から枠線が先に刻まれていたことがうかがえる。一例として、『(企画展示図録) 板碑が語る中世 造立とその背景』(埼玉県立嵐山史跡の博物館・2008年)に写真掲載。ただし、この図録を執筆した段階では完成した板碑の再利用と判断したため解説文では、中世における再利用された板碑の事例として紹介している。
 - (5) 一例として、「(フォーラム発表資料集) 板碑と中世びと」(葛飾区郷土と天文の博物館・2008年)
 - (6) 渡辺美彦「大田区万福寺板碑の押し削り技法について」(東国文化研究会報告レジュメ・1999年)
 - (7) 渡辺美彦「川採りの板碑石材に関する二、三の報告」(歴史考古学研究会『歴史考古学』52号・2003年)
 - (8) 伊藤宏之・磯野治司「朝霞市東圓寺の石棺材転用の板碑」(『朝霞市博物館紀要』第11号・2008年)
 - (9) 今回の数値は、年号のみ残存する資料は除いている。
 - (10) 比留間博「東京都」(坂詰秀一編『板碑の総合研究 2 地域編』柏書房・1983年)
 - (11) 国立歴史民俗博物館のホームページ上で公開されているデータベース「東国板碑」(2010年12月現在)を参考にしながら、各区市町村の報告書等により補正を行った。
- 《補》近年の板碑研究の成果は、「特集 板碑研究の最前線」(『考古学ジャーナル』602・2010年7月)を参照されたい。



1 割谷出土の未製品板碑の正面（原寸）



2 おしゃもじ山出土の未製品板碑の正面（原寸）



3 刃幅24mmの平ノミを使用した押し削り痕（原寸）



4 刃幅24mmの平ノミを使用した調整痕（原寸）

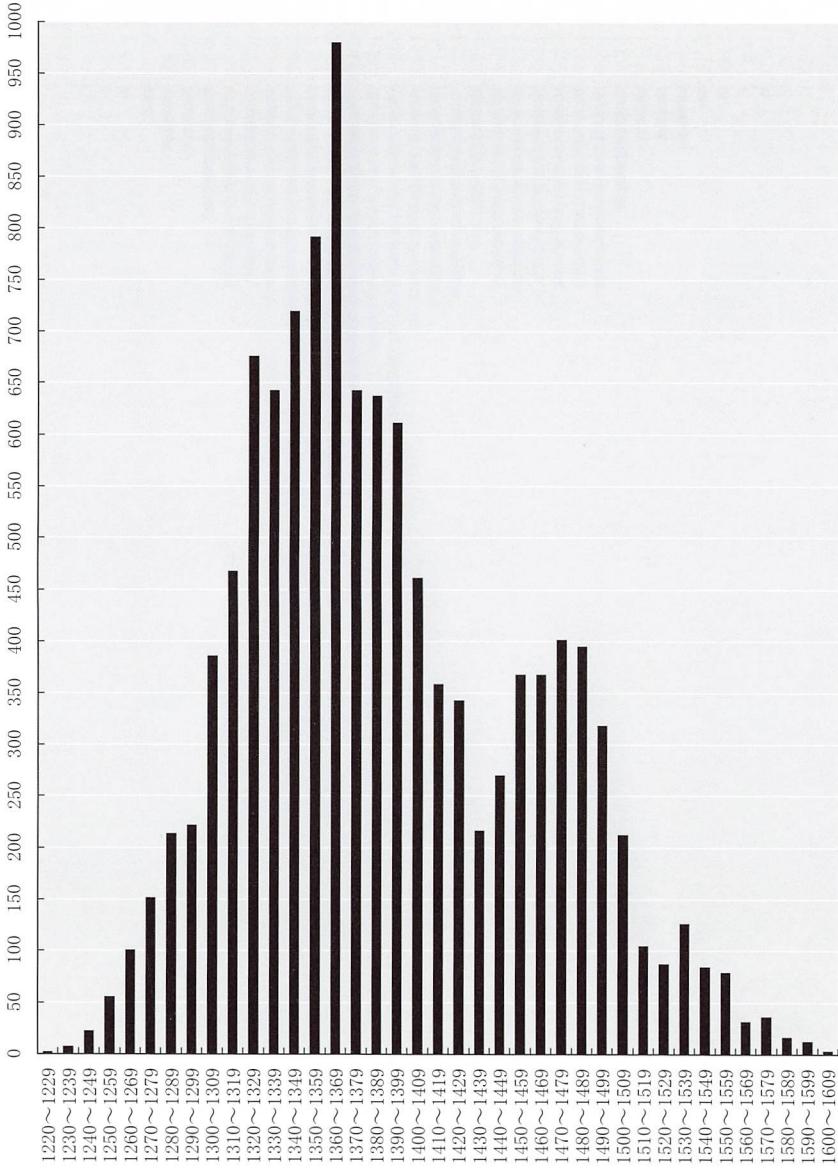


表1 埼玉県域の板碑造立の推移1（10年幅：0年～9年）

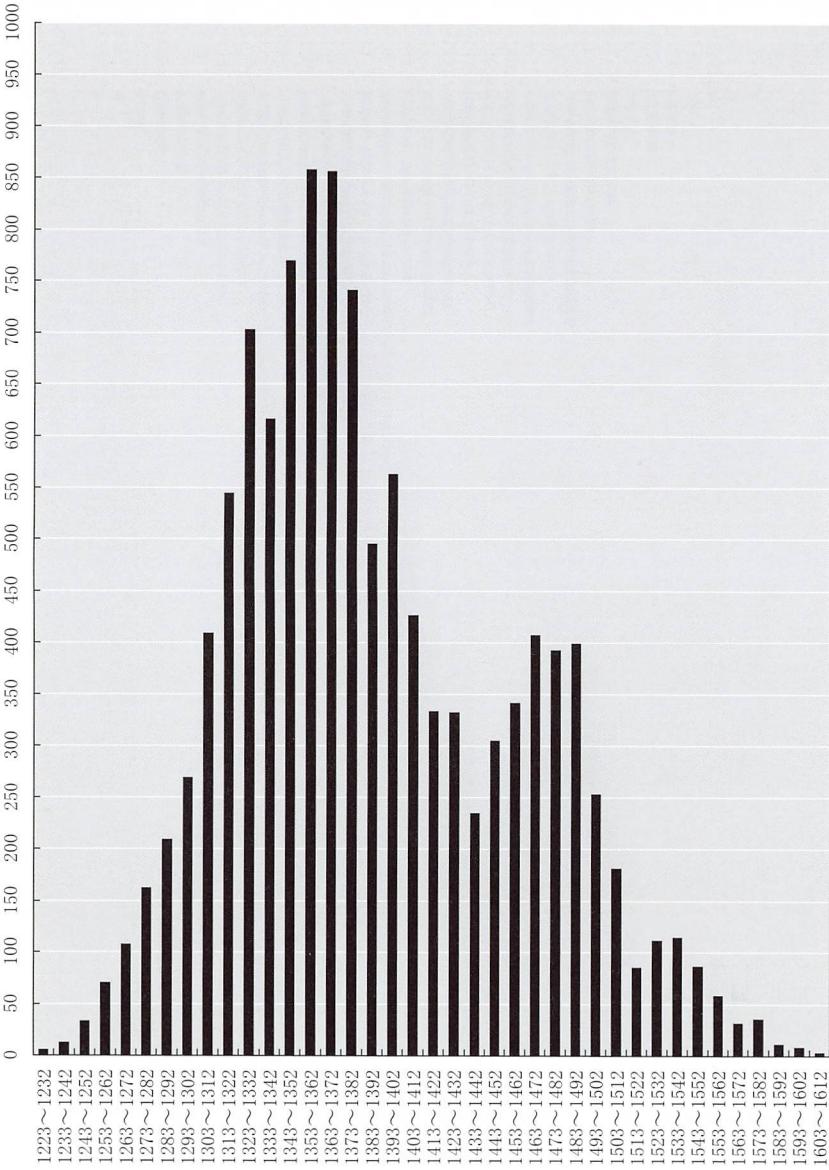


表2 埼玉県域の板碑造立の推移2（10年幅：3年～2年）

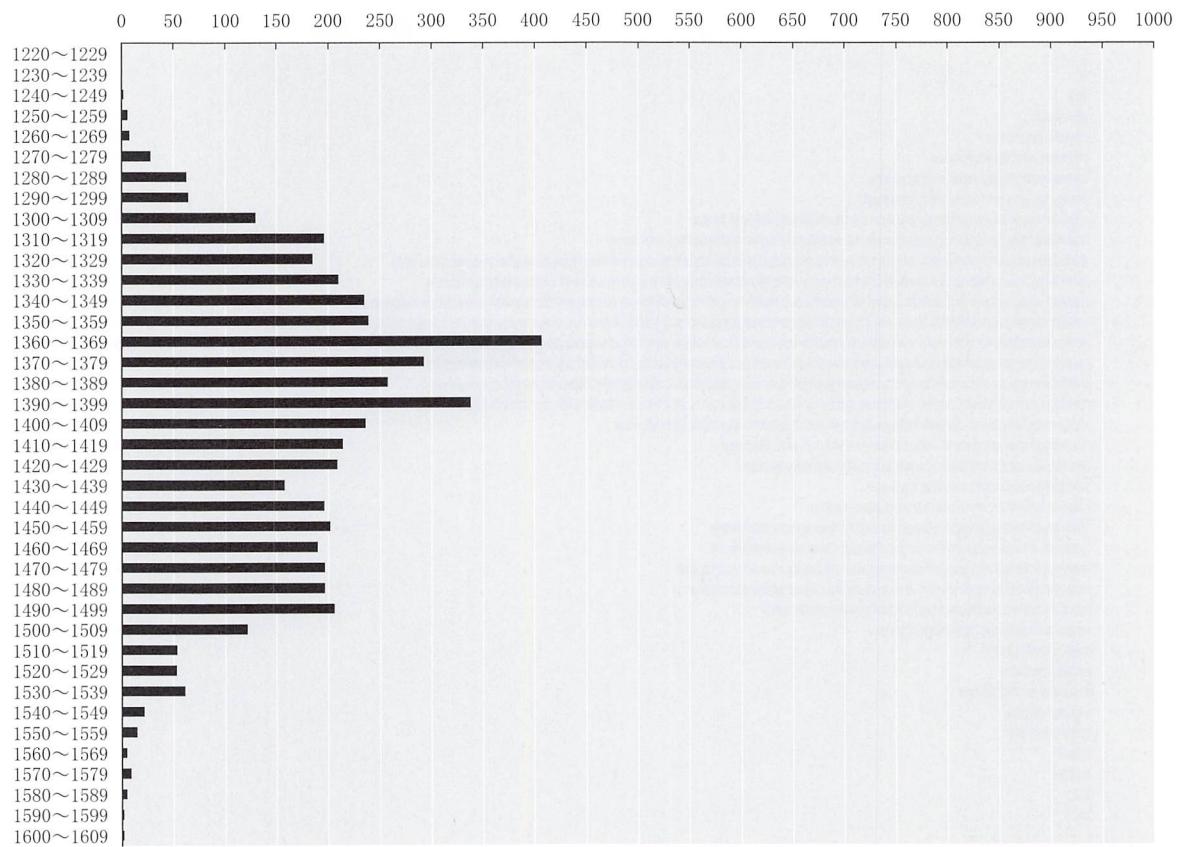


表3 東京都域の板碑造立の推移1（10年幅：0年～9年）

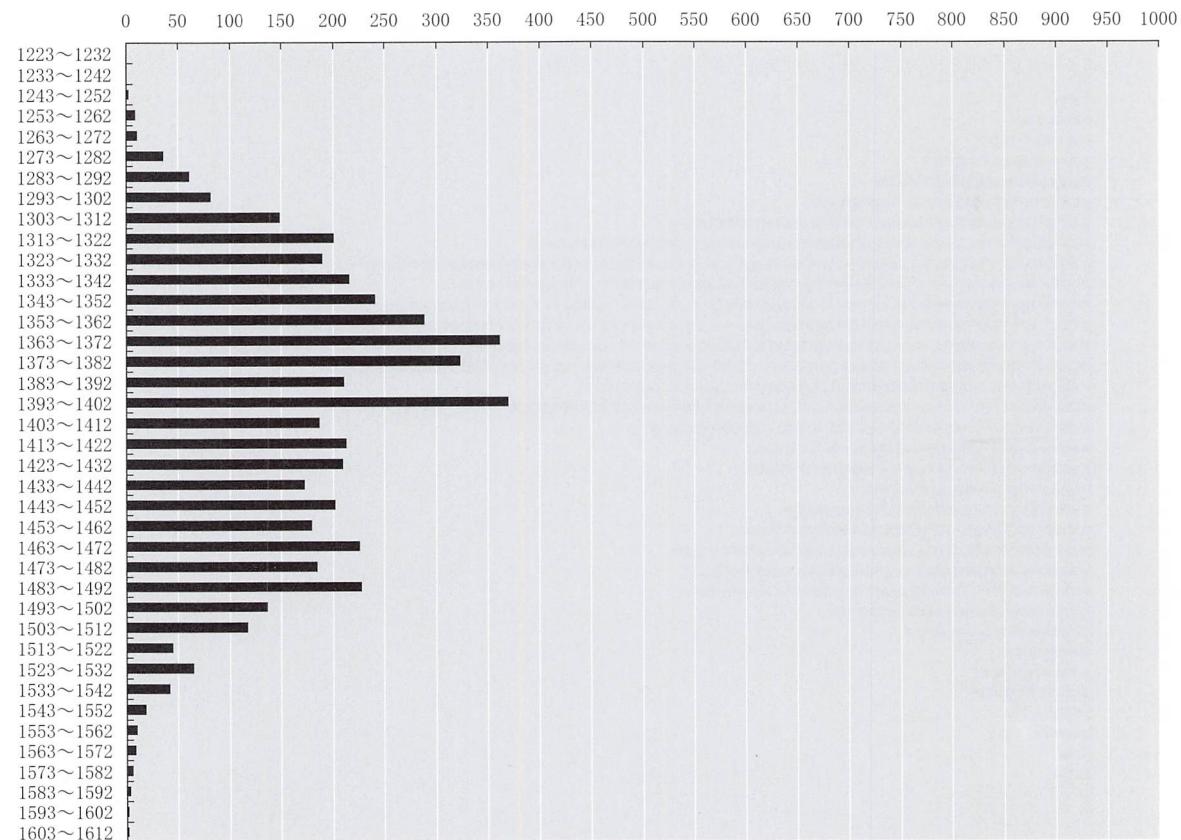


表4 東京都域の板碑造立の推移2（10年幅：3年～2年）

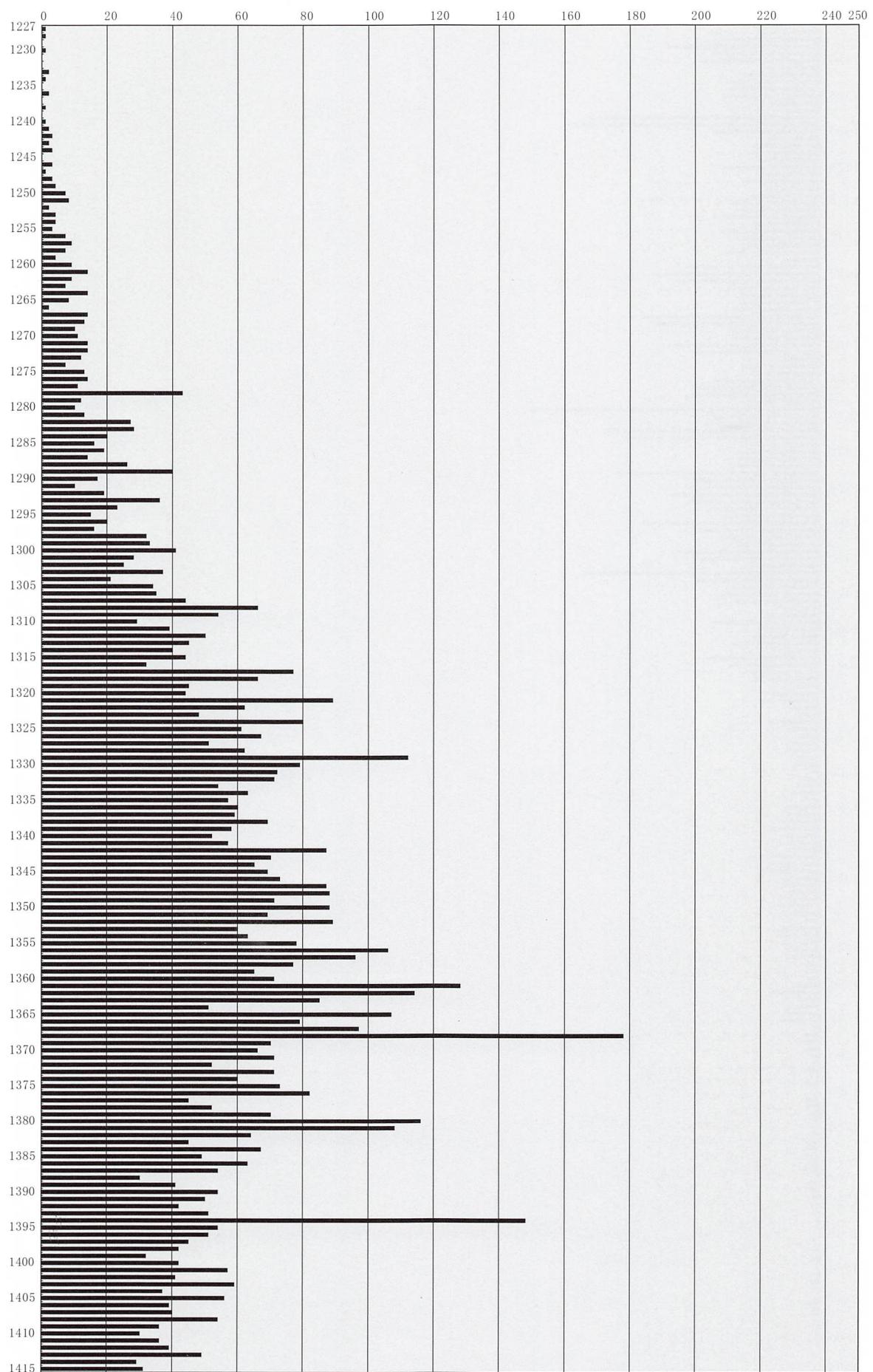


表 5 - 1 埼玉県域の板碑造立の推移（1年幅）

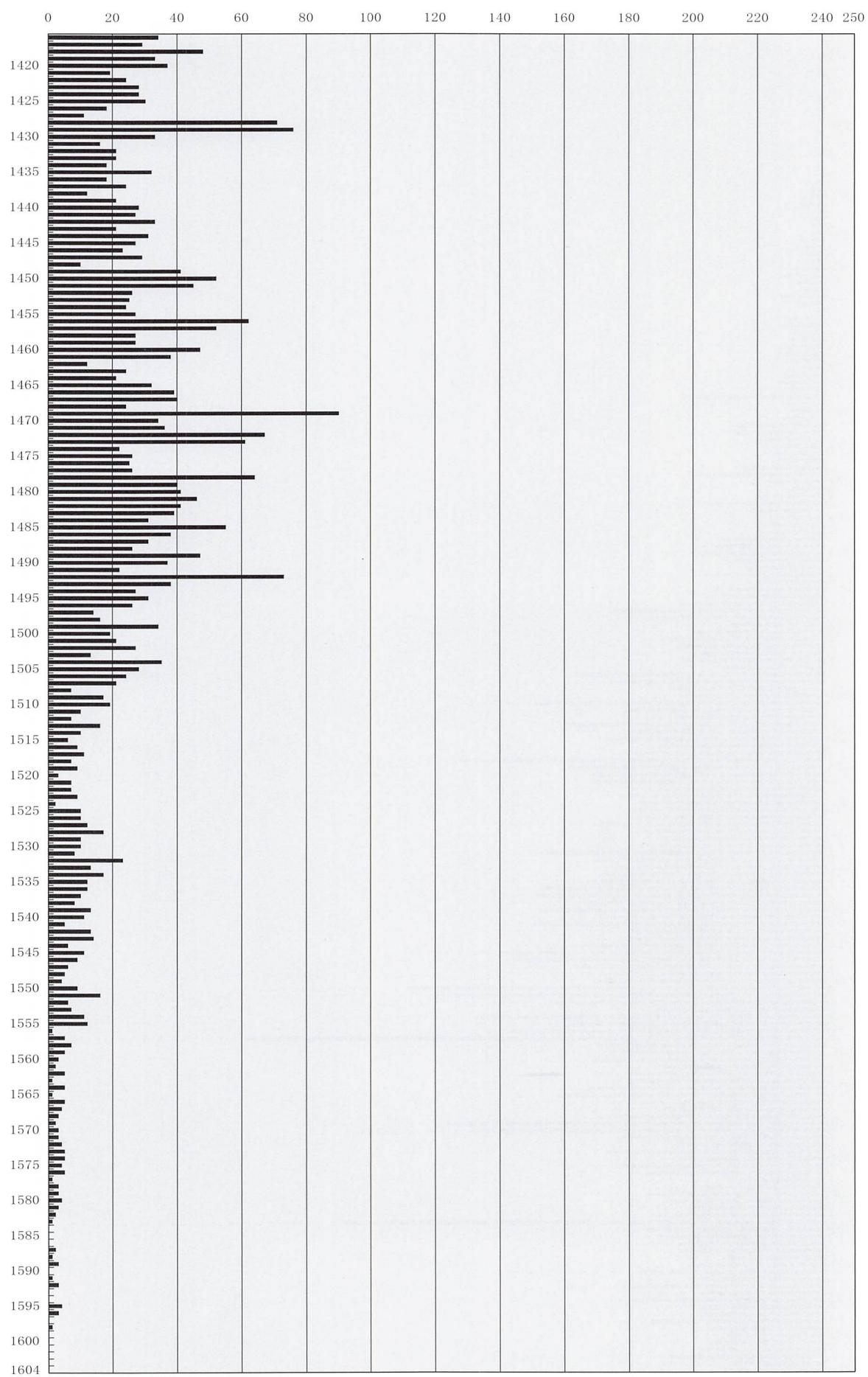


表 5-2 埼玉県域の板碑造立の推移（1年幅）

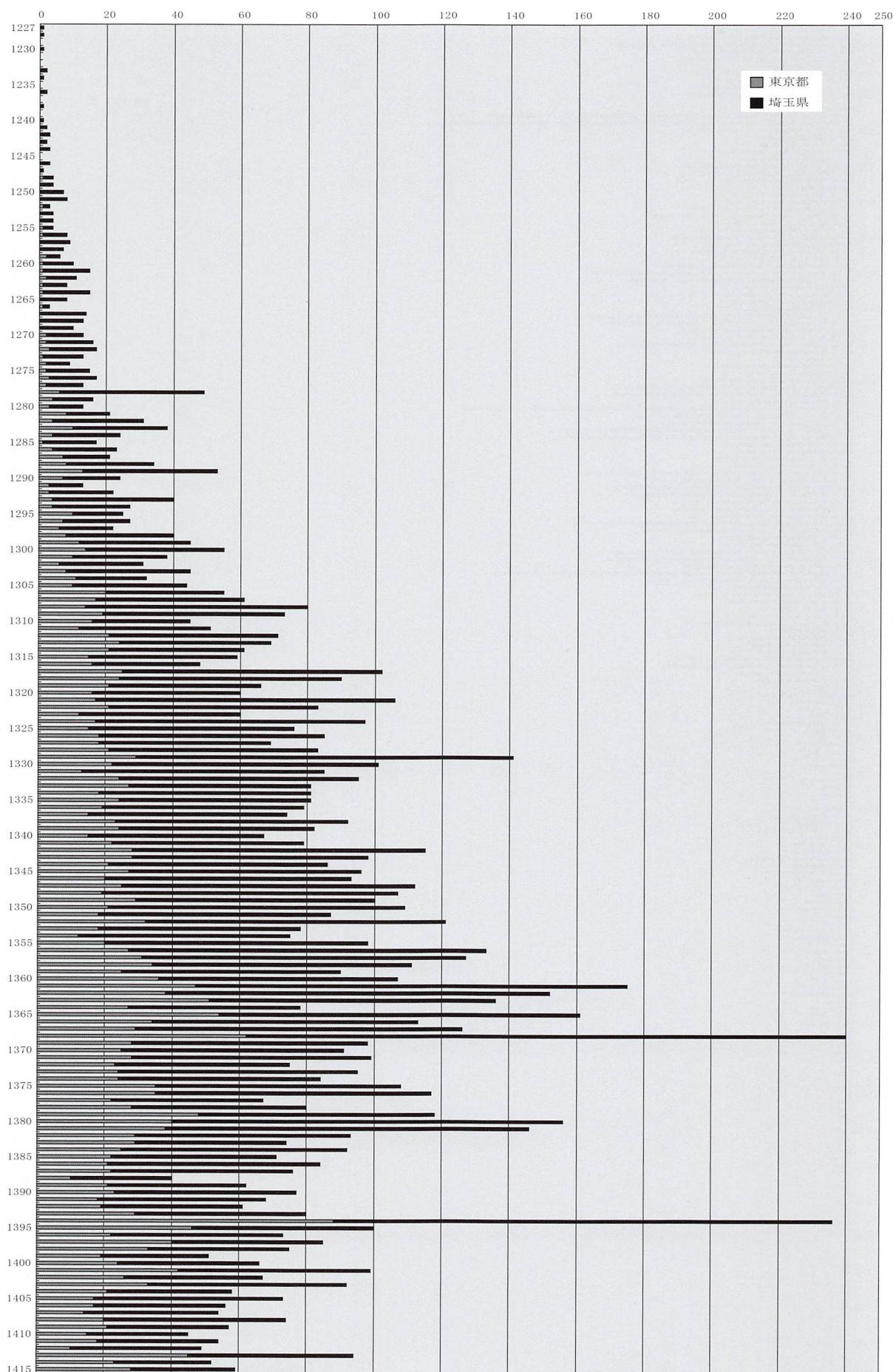


表 6-1 武藏国（神奈川・茨城・千葉県域分を除く）の板碑造立の推移（1年幅）

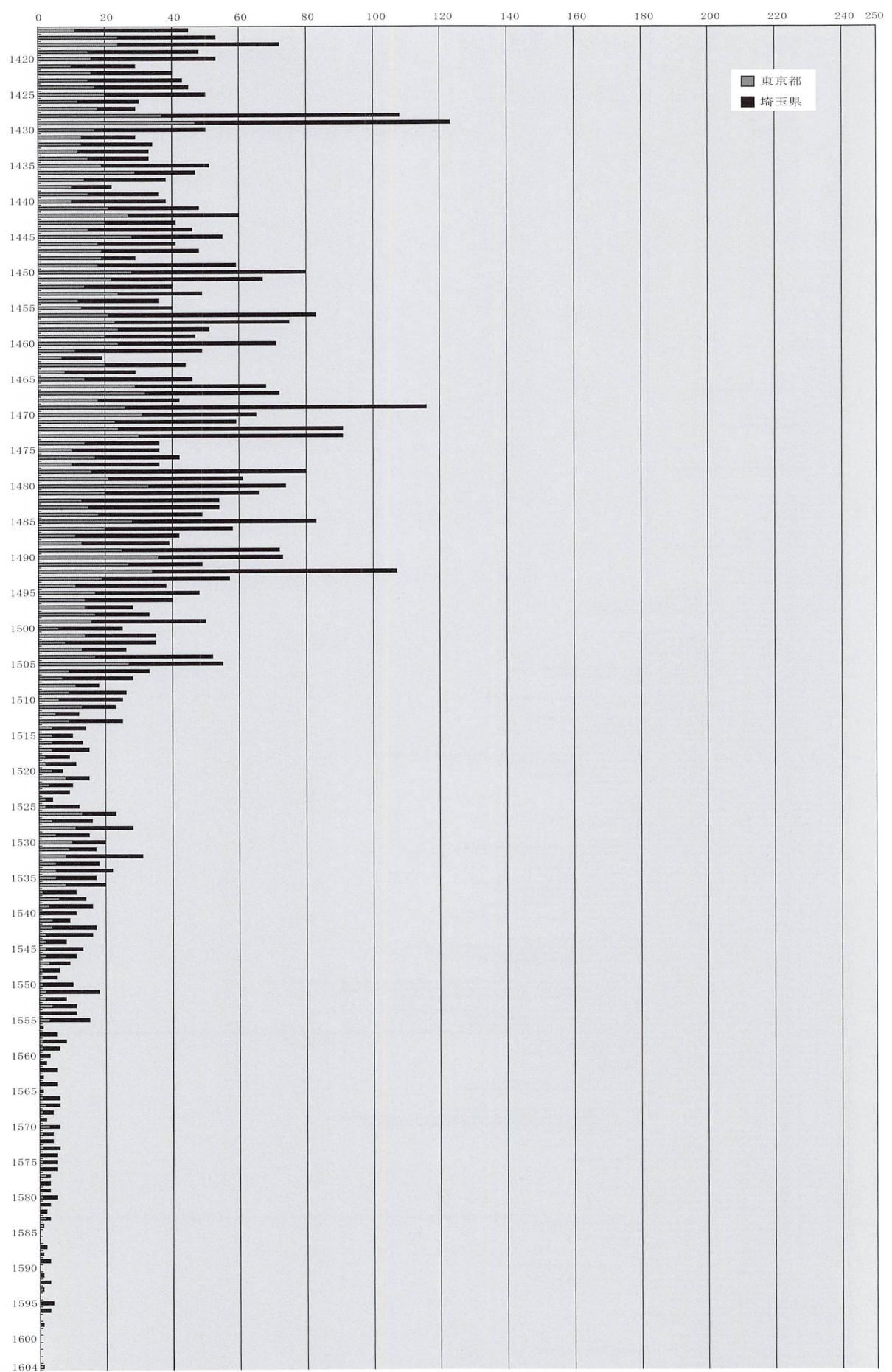


表 6-2 武藏国（神奈川・茨城・千葉県域分を除く）の板碑造立の推移（1年幅）

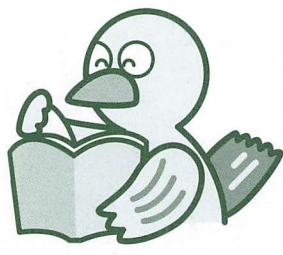
埼玉県立史跡の博物館紀要 第 5 号

平成23年2月25日 発行

発行 埼玉県立さきたま史跡の博物館
〒361-0025 埼玉県行田市大字埼玉4834
TEL048-559-1111

埼玉県立嵐山史跡の博物館
〒355-0221 埼玉県比企郡嵐山町大字菅谷757
TEL0493-62-5652

印刷 朝日印刷工業株式会社
〒371-0846 群馬県前橋市元総社町67



埼玉県のマスコット
コバトン